ブラジル観察学

中隅哲郎

無明舎出版

ブラジル観察学◎目次

まえがき　7

Ⅰ　動物フィールドノート　10

微妙な生態系バランス　14
むずかしいトリの和名　17
全責任もつエマのオス　20
風変りなトゥユユの求愛　23
〝怪鳥の叫び〟正体はムツン　26
南米にはいない〝狼〟と〝狐〟　29
〝ハラキリ〟戦法でカピバラ退治　33
〝超感覚〟所有のピラニア　36
牛の病気で絶滅危機のヌマジカ　39
〝専守防衛〟法開発のチドリ　42
高度の技術駆使の托卵鳥　46
吸血魚カンジルーの虚実　49
食べ方わからぬブラジルの淡水魚　52
冷凍に耐性のある〝熱帯魚〟　55
干魃で生態系一変のパンタナール　59
深刻な新世界ザルの受難

欧米の貴婦人は動物の天敵　62
種の絶滅はほとんど人災　65
幻の怪獣の正体はオオナマケモノ　68
世界に放散、古代哺乳類　72

Ⅱ　酒と食を考える　76

宿命的下級酒のピンガ　76
日本人に合わぬ一気飲み　79
ピンガ禍、インジオに蔓延　83
風土により違う酒文化　86
名前が混乱しているジャカランダ　89
含蓄に富む植物名の雅語　92
根強く生きているゴマ文化　95
原風景にはないココ椰子　98
奴隷の逃亡は食事も原因　102
伝統作物でない〝シュシュ〟　105
マンジョカの完全利用開発　108
神聖な創造伝説〝処女懐胎〟　109
インジオが拡めたバナナ栽培　112
すぐれた香辛料の唐辛子　115
有用植物利用、見直す時期　119
万能の天然殺虫剤はない　122

猛烈に痛いハリアリの毒　125
インジオの裸は塩分保持　128

Ⅲ　文化と神話と歴史から　132

ブラジルになかった？　梅毒　132
〝きせる〟の起源はブラジル　135
分娩間隔永い未開民族　138
セルトンの人口圧は特殊環境　142
長寿で変化〟性と生殖〟観　145
〝幼形成熟〟顕著な東洋人　148
馬術に驚威的才能、グワイクルー族　151
生き残る辺境のキロンボ　154
辞書に不可欠、インジオ語　158
インジオ発明のハンモック　161
禁令で変えられぬ食習慣　164
東洋的なジュルパリ神話　167
急速な崩壊インジオ文化　170
未整備なブラジルの観光資源　174
ポルトガル、香料貿易独占　177
〝珍書〟から見た香料通商史　180
「点と線」戦略でルート確保　183
強運のポ王室、ブラジルで金発見　186

悪の温床だった王立会社　189
海外拠点失ったポルトガルの悲哀　193
イエズス会布教、場所により様々　196
〝珍書〟ブラジル経済実態調査　199
広軌だった初期のブラジル鉄道　202
ファド本家にこだわるブラジル　206
中国式恐怖政治とれぬブラジル　209
盗んだ方が勝ち〝種子戦争〟　212

Ⅳ　移民社会の日系人　216

日本移民と相性悪いゴム　216
役立った〝アマゾン大百科〟　219
排他性強かった日系社会　222
むずかしい血縁集団離れ　225
まだ果たされぬ一世の責務　229
ブラジル移民と満州移民の違い　232
現実感覚に欠ける信念派　235
発生して当然の〝臣聯事件〟　238
勝つことが自己の存在証明　241
認識派は不倶戴天の仇敵　244
〝疑獄〟に残る信念派の怨念　248
両派の尖鋭分子は同じ性格　251

魅力ある純粋信仰と〝天誅〟　２４５
根強い風潮アジア再移住　２５１
〝えげつなさ〟残る移民社会　２６０
無駄ない野生動物の世界　２６４

V　伝統と包容力の間で　２６８

ブラジル赴任を渋った澤田大使　２６８
つきに恵まれていた大使　２７１
植物標本喜ばれた昭和天皇　２７４
戦後に生きた友好促進策　２７７
名文、石射大使のリオ描写　２８０
大使の拒否で下船の移民　２８３
なかなかわからぬ事件の真相　２８７
伝統文化に固執の客家人　２９０
原理、原則に欠ける日本人　２９３
〝父祖の地〟ではない新大陸　２９６
杞憂だった日本人不同化論　２９９
あり得る日系社会の消滅　３０３
世界に冠たる差別国日本　３０６
氏神の守備範囲は日本だけ　３０９
包容力の大きいブラジル　３１３
解決策ないインジオ問題　３１６

文化で異なる裸への評価　３１９
サッカーは自己存在の確認　３２２
歴史の皮肉、日系人の同化　３２５
あとがき　３２９

まえがき

つい先ごろまで、山野を歩き回るのが楽しかった。三五年前にブラジルに移住してから、ずいぶん各地を歩いている。ドサ回りにかけては、日本人ではトップクラスかも知れぬ。

生薬の研究が専門だから、フィールドに出なければ仕事にならないが、永年やっていると、生薬以外のほかの分野もわかってくる。同じフィールドである動植物に詳しくなるのは当然としても、地域の生態系の特徴や、そのもとになる気候風土との関連性もだんだん見えてくる。また、そこに住む人間の生活ぶりや文化を通じて、歴史とのかかわり合いも読めるようになる。

これは筆者のように、好奇心の強い人間にとっては大変興味があり、魅力のあることなのだ。アマゾン河の支流や中央高原のサバンナ地帯を舟や車で幾日もかけて旅行する辛さも気にならないし、野宿も

いとわなかった。それが、である。このごろフィールドに出掛けるのが以前はど楽しくなくなってきた。何となく気が進まない。

むろん、年をとって肉体的に衰えてきたことも、一つの理由にはなっている。が、それだけでもない。筆者はまだ六十前だから往年の元気は望めないにしても、身体が利かぬということはない。

そんなことを言ったら大先輩の橋本梧郎先生（在伯・植物学者）に怒られてしまう。先生は八十を過ぎて、なおかくしゃくとして活動されておられる。筆者の場合、身体的な問題よりも、これ以上フィールドをやっても、大したことは出来ない、ということが、直観的にわかってきたからなのだ。

やるべき仕事の無限の多さに比較して、自分のやった仕事量のなんと微々たるものかに気がついたのである。実際これはまるで、大海の水をバケツで汲み出しているようなものなのだ。

まあ、一人の人間が一生にやれる仕事はこんなものだろうと、諦めもし、納得もしている。それならこれ以上、バケツで一杯や二杯、注ぎ足しても足さなくても、同じことではないか。それより、今までの調査をまとめ、記録に残すことの方が大切だと思い至った。

生薬の調査はフィールドだけで終わるものではない。あらゆる文献を参照して、原植物の分類、種の同定をはっきりさせ、分布を調べ薬効、使用法からインジオの伝承に至るまで、わかるものはすべて記録しておかねば価値がない。

例えば筆者が今、死ぬとすると、記録を残していない筆者の研究は無になってしまう。厖大なフィールド・ノートは残っているにして

も、これはメモ帳なのだから他人にはわからない。

となれば、後進の研究者は、筆者の研究を参考に出来ないということになる。これは許されないことなのだ。研究者は研究の内容を記録にして残すことが絶対の義務なのである。もちろん筆者も作業に着手している。出来、不出来は別にして、何年かかってもこれだけはやり遂げる覚悟。

さて五〇冊を超すフィールド・ノート（むかし日本では野帳といった）を改めて繰ってみると、生薬に関するメモは半分で、残りは生薬とは関係のない、雑学のメモである。分野はさまざま。

これが存外おもしろくて捨てがたい。それならいっそのこと、フィールド・ノートの雑学をネタに書いてみようと思い立ったのが本書である。

本書は、ブラジルは夜話というか、炉辺談話というか、いろり端談義というか、とにかく酒杯を片手に、少々行儀の悪いポーズで語る「おはなし」である。日系社会についても書こうと思っている。これはこれまで筆者が意識的に避けてきた分野である。反響が予測出来るだけにわずらわしかったのだ。

しかし、酒杯片手の放談なら、日系社会の批判が出てきてもこれはやむを得ない。なにしろ酔っているのだから、ご勘弁願うよりはかはない。

（本書はブラジルの邦字新聞サンパウロ新聞に「やぶにらみブラジル展望」の題で９４年２月から９５年５月まで連載したものを『ブラジル観察学』と改題編集して一冊に編んだものです。）

ブラジル概略図（地名は著者が本文中で使用している表記によります）

I　動物フィールドノート

微妙な生態系バランス

動物のはなしからいこう。アマゾナスとパラーの州境を流れるニャムンダ河口で、ワニが異常繁殖し、ニャムンダ町の住民が悲鳴を上げ

ている。

アマゾン河北岸にある人口二万ほどの、ひなびた田舎町。かつてインカの征服者ピサロの弟、オレリャーナがアマゾン下りをしていて、裸の女戦士と遭遇、女戦士の余りの強さに、ほうほうの態で逃げ出したという、歴史的に名高い場所である。

アマゾンという名称がこのインジオの女戦士をギリシャ神話の女戦士のアマゾナスに見立ててつけられたことはよく知られている。

このニャムンダ河河口周辺に、現在二百万匹のワニが生息している。住民一人当たり百匹の勘定だから相当なもの。河べりの住民は、高床式の小屋をつくって住んでいるが、ワニは小屋の真下まで来て餌を狙う。危なくて仕方がない。

ブラジルにいるアリゲーター科カイマン属のワニは、もともとそれほど凶暴ではない。しかし、異常繁殖で競合が激しくなり、餌が不足してくると、何でも襲う。住民は自衛のためのワニ狩りにのりだした。野生動物捕獲禁止令に触れるのだがそんな法令にかまってはおれない。ワニ如きに貴重な銃弾を使うのはもったいないから、むかしながらの銛で仕とめるやり方だ。

ところで、ニャムンダ河口のワニの異常発生がどんなメカニズムで起きたのか、正式の発表がないので、よくわからぬ。が、生態系がアンバランスになり、本来外敵に喰われるべき卵が孵化した結果であることはたしか。

ワニの数が自然にコントロールされるのは、孵化以前の卵の段階での淘汰が大きいからである。

ワニは通常、河べりの乾いた砂に、わずかばかりの窪みをつくり三十～四十卵を産み、その上に草や木の葉を雑にかぶせておく。もちろんトリと違って、は虫類は卵を抱かず、自然の熱で孵化する。

は虫類のほとんどは卵を産みっ放しで世話をしないが、アリゲーター科のワニのメスに限っては、巣からほど遠からぬ場所で、卵を見守っているのがふつう。

とくにアマゾンやパンタナールに多い、メガネカイマンのメスは母性本能が発達していて、昼も夜も、照っても降ってもほとんど動かず、じっと卵を見守り続ける。『ジャカレチンガ（メガネカイマン）は、目で卵をかえす』と言われるのはこのことだ。

それなら、卵はすべて無事に孵化するかというと、そうはいかない。ワニのおっ母さんには気の毒だが、彼女の献身的な努力にもかかわらず、卵のほとんどは外敵によって喰べられてしまう。

外敵は各種のタカ、黒コンドル、カワウソ、オポッサム（袋ネズミ）、トカゲ、ヘビなどである。

カイマンの母親が、いくらしっかり見張りをしていても、悲しいかな、陸上での動作はにぶい。

敵の襲撃を知って駆け寄った時は、既にあとの祭り、タカなどは卵をつかんで悠々と舞い上がっている。メガネカイマンの卵は食べてうまいため、動物だけでなく、かつてはインジオにも食用にされた。残酷のようだが、生態系のバランスを保つためには、これで良いのだ。産んだ卵が全部かえったら、ニャムンダの例のように、たちまちワニの異常繁殖が起きてしまう。

ブラジルにいるワニはすべてアリゲーター科カイマン属で、例外はない。一応三属五種に分けるのが通説。一番大きなのは、マラジョー島などアマゾン下流にいる黒カイマンで、全長四～五メートル、最大六メートルに達する。

体がでかいだけに凶暴で、人間も襲うが、数はごく少なく、絶滅に瀕している。マカパ市の大要塞の中にある展示室に黒カイマンの見事な剥製があったが、今はどうなっているか。ワニは凶暴な面がまえに似ず、動作やしぐさがどことなく間が抜けている。大口を開けたまま、何時間でもじっとしていたり（本当は口中の日光消毒）、捕えた魚を呑みこみもせず、長い間咥えていたりする。

成長したワニを襲う外敵はあまりいないが、アナコンダ（スクリー）とジャガー（オンサ）にはやられる。ジャガーの襲撃方法は、後からワニの背中に飛び乗り、鋭い手鉤のような爪をワニの目に力一杯打ち込むのだ。ワニは激しく身をよじり強大な尻尾を振ってジャガーを叩こうとするが、ワニの尻尾は左右に振れても、上下には振れないから、ジャガーを振り落とすことができない。

パンタナールにピシャインというところがある。ワニの名所でもあるが、何千とも知れぬここのワニは九〇パーセント方、尻尾の先端が欠けている。ピラニアにやられるのだ。

ここは乾季に、河から切り離された堀が出来、多くの魚が取りのこされる。魚を目当てにコウノトリやサギの大群も集まるし、多くのワニも寄ってくる。日毎に干上がる水の中で最後までしぶとく残るのがピラニア。ワニの尻尾の柔らかい先端を喰い千切ってしまう。

むずかしいトリの和名

南米の動物について何か書こうとする場合、一番困るのは、動物の和名、つまり日本語の名称がなかったり、適当でなかったりすることである。

哺乳類はまあ良い。分類がほとんど出来ており、和名も定着している。南米の特産科である、カピバラやパッカもそのままの名前が使われている。ただパッカをパカと表記するのは気に人らぬ。

は虫類もまずまずだ。なんと言っても数が少ない。反対に、いけないのは鳥と魚。魚、それも淡水魚になると完全にお手上げ、方法がない。ブラジルには三千を超える淡水魚がいるが、日本との共通種などはコイやニジマスのような移入種を除けば、ただの一種もない。

日本の日本人に、ブラジルの淡水魚で名前を知っているものをあげてください、と質問して、五つ答えてくれたら大したもの。それでも、たいてい一つは答えられる。ピラニアである。

ピラニア以外にピラルク、アロアナ、ドラード、ツクナレ、タンバキなどと答えられたら、これはもう大変な南米通といってよい。熱帯魚の愛好者は日本にも多いが、魚の名前は学名を用いる。

蘭の世界と同じである。両方とも学名以外に正確に表現する方法がないからだ。

そこへいくと、鳥の場合、八〇パーセントぐらいは、和名がついている。魚と違ってトリは観察できるし、形や鳴き声、習性、生態を見

れば、何科のトリぐらいはすぐ見当がつく。南米のトリの八〇パーセントに日本名がついているということは、便利と言えば便利だが、これがけっこうややこしい。次に五つの例をあげるが、このうち一つでもブラジル名を当てることが出来たら立派なもの。

①ズグロハゲコウ（頭黒禿鶴）②アカアシノガンモドキ（赤脚野雁擬）③アカハシリュウキュウガモ（赤嘴琉球鴨）④ノバリケン（野蕃鴨）⑤キバラオオタイランチョウ（黄腹大太蘭鳥）。

どうです？　いやご心配なく。こんなのわからなくて当たり前なのだ。参考までに答えを書いておくと、①トゥユユまたはジャブルー②セリエマ③マレッカ・カボクロ④パット・ド・マット⑤ベンチビーである。

ベンチビーは、ブラジルではどこにでもいるトリで、山野にもいるが都市にも多い。サンパウロ市のビル街にだっている。『ベン・チ・ビー』（みーつけた）とカン高くさけぶから、この名がついた。ベンチビーに、お前さんの日本名はキバラオオタイランチョウというのだよ、と教えたら怒りだすかも知れない。その点、間違いなく激昂するのは『サバンナの貴婦人』こと、セリエマだ。

「なに、あたしの名前がアカアシノガンモドキですって、冗談じゃないわよ、そんなバケモノみたいな名前。それにモドキとは失礼にも程があるじゃない。あたしゃこれでも二千五百万年前から続いている由緒正しい、南米唯一の地上性肉食鳥なんですからね」

まことにごもっとも。それにしてもトリの和名はむずかしい。この前パンタナールのロッジで、日本から来た中学生と一緒になったこと

がある。日本の探鳥会にも入っており、野鳥に関する知識はなかなかのもの。半日はど少年と付き合い、夕方ロッジに帰りかけたら、草原の中の水溜まりに、クチバシが長くて曲がったかなり大きなトリがつがいで餌をあさっていた。

「あ、あれは何ですか……」

「あれか、あれはクリカカといってね、トキの仲間なんだよ」

「えっ、トキ……！」びっくりした声を出した少年は、じっと双眼鏡に目を当てていたが、

「ちがうね、トキじゃないよ。色も違うし、冠毛もない。それにトキがこんなところにいるわけがない」バカに断定的な言い方だった。

「キミの言うのは日本の佐渡などにいて、絶滅しかけている、ニッポニア・ニッポン（日本のトキの学名）のことだろ。もちろんあれとは違うが、コウノトリ目、トキ科、トキ亜科のトリは、熱帯、亜熱帯を中心に二十八種もいるし、このパンタナールにも六種いるんだよ」

少年は黙ったが、納得した様子ではなかった。夕食後、少年は鳥の図鑑を持ってやってきた。

「ほら、ここに出てるけどトキは漢字で朱鷺と書くんだよね。鴾とも鴇とも書く場合もあるけど、これはすべてのトキの羽根の色のことなんだよ。橙がかった桃色のことをトキ色と言うんだ。だからトキ色でない鳥をトキというのはやっぱりおかしいよ」

少年の主張は正論である。日本にはトキは一種類しかいない。それがトキ色した朱鷺だった。ところが世界にはトキ色でない同類のトリが沢山いる。Ｔｈｒｅｓｋｉｃｒｎｉｔｈｄａｅ科のトリだ。日本の

分類学者はこの科をトキ科と命名してしまった。トキ科が正式にできた以上、これに従わないわけにはいかない。かくてトキ色でないトキが誕生する。ブラジルのカオジロブロンズトキなど、言葉の矛盾の見本。

全責任もつエマのオス

パンタナールの草原でエマ（レア、またはアメリカダチョウ）の交尾を観察した。こういうものは見ようとして見られるものではない。なにしろ相手は野生動物。人間さまの見せものとして交尾するわけではないから、こうした決定的瞬間に出会えることは珍しい。むしろ僥倖といってよいかも知れぬ。残念ながら写真はとれなかった。四〇メートルぐらいの距離だったから、写して写せぬことはないだろうが、望遠レンズのついた本格的なカメラならともかく、筆者の持つカメラではとても無理。

過去の永い間の経験と失敗から、動物の生態写真を撮ろうなどという、大それた考えはとうの昔に放棄している。その代りじっくり観察した。エマは一夫多妻のハレムを形成することで知られている。恋の季節になると、オス同士、ハレムの覇権をめぐって決闘が行われる。とは言ってもこの決闘、どちらかが傷つき、斃れるというような深刻なものではない。

オス同志、羽根を拡げ、全身の羽毛を逆立てて睨み合い、一、二度はぶつかり合いもするが、やがて一方が逃げておしまいになる。壮絶

な戦いを期待しているとがっかりする。

かくてハレムは成立、一羽のオスが五、六羽のメスに君臨、交尾を行う。もちろん交尾に先立っては、求愛ディスプレーが展開される。トリの求愛行動には派手なのが多い。よく知られているのは、ツルやフラミンゴの集団求愛ダンス、クジャクの開羽、ゴクラクチョウの踊りなのだが、そのほかに、美しい鳴き声でメスを誘引するのもあるし、互いの嘴をくわえ合うという、濃厚なのもある。

エマの求愛は、あの長い首を前方に、高く低く波うたせる、波うち運動で、独特のもの。オスが波うちをはじめると、メスの一羽がこれに呼応して首振りをはじめる。そして、お互いに首振りの求愛ディスプレーをしている間に性的に興奮し、交尾に入る。交尾そのものは、ニワトリ式にメスがしゃがみ、オスが後から乗る方法で、とくに変わったことはない。交尾時間は五秒くらい。

この間、他のメスは周囲に立って見ているだけ、つられて興奮し首を振りはじめるということもない。やはり、ちゃんと順番があるらしい。二、三日経つと、すべてのメスとの交尾がいきわたる。

しばらくすると、オスは草原に僅かな窪みをつくって座りこむ。メスはそれぞれオスの周囲に二、三卵を産んでゆく。オスはこの卵を長い首と嘴を使って器用に自分の腹の下に収める。

エマの場合、メスの役割は交尾して有精卵をオスの傍に産むだけ。あとの抱卵、孵化、育雛はすべてオス一匹がやり遂げる。孵化に四十二日、育雛に四、五カ月かかるからこれはたいへんな重労働だ。それではその間、メスは何をしているのだろうか。これがなんとはかのオ

スと浮気をしているのだ。しかも、すべてのメスが集団で、である。そして第二、第三のオスに別々なテリトリー（ナワ張り）をつくらせて、抱卵、育雛をさせているのだ。

この事実を知った時は丸太ん棒で頭をぶん殴られたくらいのショックを受けた。そうなのだ。この方法こそ、飛べないトリであるエマが採用した最適の、種の保存戦略だったのである。

エマは抱卵期間も長く、孵化してからも自立して一応外敵から身を守れるようになるまで、六カ月もかかる。この間、常に外敵に狙われているわけだ。一方、防禦力はきわめて弱い。飛べないトリである上に、鋭い嘴、爪という武器がない。成鳥はすばらしいスピードで走るが、ヒナの間はそうでもない。こういう弱点をもったエマが子孫を残していくためには、リスクの分散をはかる必要がある。オス一匹ずつがテリトリーをつくるのは、一カ所外敵に襲われて全滅しても、ほかでカバー出来るからである。

オスに抱卵、育離させるのは、身体の小さなメスでは体力的にもたないのと、いくらかでも防禦力でオスが優るからである。かくて、エマのメスは集団でオスのテリトリーに赴き、交尾して卵を産む習性を身につける。

ハレムといえば、イスラムや中国の男子禁制の後宮を連想する。しかしこの言葉はれっきとした生物学用語としても用いられており、一匹のオスと、多数のメスからなる永続的な集団をいう。この定義からすると、エマの社会はハレムではない。むしろ形態としては乱交の一

形式といった方が当っている。それにしてもエマのオスにはなりたくない。たった数日、五、六羽のメスと交尾、ハレムの主らしく振る舞っても、それから半年以上、全責任を負わされて保父の役を果たさねばならないのだから、たまったものではない。

これだけ努力しても、タカや山犬、タテガミオオカミ、イタチなどに襲われ、筆者が知っている例では一六羽かえったヒナが、最終的にはたった三羽しか残らなかった。

風変りなトゥユユの求愛

仲の良い夫婦をオシドリ夫婦という。漢字で書けば鴛鴦だ。鴛がオスで鴦がメス。ほんとに仲が良いのかどうか知らぬが、とにかく相手が死なぬ限り、同じカップルで過ごすのは事実。

トリの世界では、割合この形態は多い。ブラジルでよく知られているのは、土をこねてカマド状の巣をつくるジョン・デ・バーロ（カマドドリ）や巨大鳥のトゥユユ（例のズグロハゲコウ）だろう。コウノトリの仲間は、どの種類でも一夫一婦が原則で、しかもヒナを大切に育てる。こうした習性から（赤ん坊をコウノトリが運んでくる）という伝説がヨーロッパで出来たのだ。

南米のトゥユユも、同じつがいが生涯連れ添い、しかも繰り返し同じ巣を使用する。これがほんとのマイホームで、長い間には風雨でこわれもするが、トゥユユの夫婦は丹念にこれを補修して使う。まあ、しかし、つがいで生涯連れ添うのは事実としても、人間の感覚で愛と

か道徳など当てはめない方がよい。

動物の行動は、一にかかって子孫を残すためのものであり、愛や論理や道徳は関係ない。安易な擬人化や感情移入は禁物である。トゥユユの場合も、オスとメスが協力して育雛に当たらないと、子孫が残せないからなのだ。

トゥユユのヒナは極端な晩成性、つまり非常に長期間、巣に留まらないと自立できない。人間の赤ん坊と同じことで、孵化したばかりは目も開かず、何から何まで親が世話をしないと生きていけないのである。トゥユユのヒナは孵化してから巣立つまでに、なんと六カ月もかかる。これはトリの仲間ではもっとも長い。一子から四子、平均二子だが、このヒナ、やたらに大食いなのだ。

もちろん親の方も大食いで、魚、貝、カニ、トカゲ、カエル、ヘビ、それにワニの子まで、手当たり次第何でも食べる。腐肉も遠慮しない。親は自分が大食いの上に、大食いのヒナに餌をやらねばならないのだから大変。のどぶくろに溜めた餌を、ヒナの口に吐き出してやるのだが、ヒナの方は際限もなく欲しがる。餌ばかりでなく、水も補給してやらねばならず、忙しいことこの上ない。

とてもメス一匹で世話できるものではないから、どうしてもオスとメスが共同で子育てをすることになる。幸いトゥユユは身体が大きく、高い木の上に巣をつくれば、他の動物に襲われることはまずない。安心して子育てができる。

外敵に襲われる心配の少ないトゥユユは、アメリカトキコウ、ベニヘラサギ、アオサギ、ウなどと違い、コロニー（集団営巣）をつくら

ず、つがいだけの独立した巣をつくる。
巣は直径一メートル以上ある大きなもの。枯れ枝を集めてつくられており、卵を産む産座には枯れ草が厚く敷かれている。おもしろいことにこの巣の真下にオキナインコの群れが営巣することがある。オキナインコは身体が小さく、卵やヒナを自力で外敵から守ることが出来ない。そこで、トゥユユに守ってもらうのである。お返しに敵が近付いたら、やかましく騒ぎ立てて、敵の接近をトゥユユに知らせること。
ところでコウノトリの求愛行動は一風変っていて、どうしてこういう行動をとるのか、人間にはわかりにくい。あの長大にして強力な嘴を、カスタネットを鳴らすようにカチカチ打合わせる。それが興奮してくると、首をうしろにのけぞらし、天を仰いでカスタネットを打ち鳴らす。オスもメスも同じ動作をするのだ。
ずいぶんおかしな求愛方法だが、コウノトリにとっては、これこそ自分たちが独自に開発し、定着させた、最高のやりかたであり、人間にとやかく言われる筋合いはない。
トゥユユをはじめとするコウノトリの仲間は、大きさではオスがやや大きいものの、雌雄同形同色で、オスが特別きれいな体色をしているわけでも、特別な飾りをもっているわけでもない。だから色の美しさでメスの気をひくわけにはいかないのだ。
また、美しい声でメスをうっとりと魅了させることも出来ない。コウノトリの仲間は、声を出す器官である、鳴管の膜をふるわす筋肉が未発達で高い声が出せない。せいぜい「グー」とか「ギャー」とかの

単純な低音で、およそ恋の語らいには不向きなのである。
そこで、やむを得ず、唯一自慢の嘴を打ち鳴らす方法を案出した。しかし、エマだって、長い首を利用した独自の求愛方法を開発している。苦肉の策だろうと、珍妙の方法だろうと、配偶相手に通用すればそれで良いのである。
トゥユユの交尾は高い巣の上で行われる。ほかのトリのように、メスがしゃがむことはせず、突っ立ったメスの肩にオスが折り曲げた脚をひっかけ、ぶら下がるような形で交尾する、危なっかしいが、両方とも羽を拡げてバランスを保っており、案外、安定しているらしい。

〝怪鳥の叫び〟正体はムツン

日本の野鳥で食べてうまいのはキジ、ヤマドリ、ウズラなどキジ目キジ科のトリである。ただ、こういうジビエ（猟鳥）は調理にコツがある。殺したらすぐ内臓を取り出し、肉の中の血を絞りとっておく。これをやらないと臭い。こうして二、三日熟成させると、食べごろになる。キジ目キジ科のトリは南米にはいない。いや、これには例外があってキジ科、アメリカウズラ亜科のトリが、二種だけアマゾン以北に棲んでいる。ブラジル語でウルーというトリだ。
この例外を除けば、ブラジルにキジ科はいない。その代り南米にはシギダチョウ目シギダチョウ科のトリが九属五十種もいて、旧世界におけるキジ科と同じ生態的地位（ニッチェ）を占めている。

地上性であること、飛ぶのが余りうまくないこと、食べてうまいこと、など共通点が多い。

こういう例は生物界では珍しくない。北半球のカラスとトンビは南米におらず、その代わりウルブー（黒コンドル）とカラカラ（タカの一種）が同じニッチェを占めている。

何故こういう現象が起きるのかは、生物学上の大問題で、とても当方の及ぶところではない。とにかく、南米にはキジ科の代りにシギダチョウ科という、南米特産科のトリがいるのである。

シギダチョウ科のトリと言われてもピンと来ないだろうが、ペルジース、イニャンブー、コドルノ、ジャオなどのことだと言えば、ブラジルの田舎に住んだことのある日本人なら（ああ、あれか、あれはうまいんだ）とすぐわかると思う。

いずれも明るい土色に茶色の縞の入る地味な色で、これは卵も同じ。一種の保護色なのである。

飛べはするが不器用でお世辞にもはめられるものではない。サバンナのトリだから開けた草原を好む。アマゾン型の森林にはいない。夕方、地上を歩いて虫などを採餌する習性をもっている。日中はひっそりと草むらなどに隠れており、人間が探してもなかなか見付からない。

ベルジース狩りには犬を使う。草原に犬を放し、人間は散弾銃をもって犬のあとをついて行く。

慣れた猟犬はペルジースを見付けても、急に襲いはしない。ポインター種の犬なら立ち止まって尻尾を上げてポイントし、人間に知らせ

る。

人間が銃を構えてから犬に合図すると、犬は猛然と走り出す。ベルジースは飛び上がって逃げるのだが、身体が重いから力一杯はばたかないと上がれない。ばたばたとすごい羽音をたてる。

このトリは奇妙なことに、一〇メートルくらいの高さまで垂直に昇り、そこで一旦動きをとめ、改めて水平飛行に移るおかしなくせがある。銃を構えた人間は、水平飛行に移る直前の一瞬動きの止まったところを狙って射つ。距離は近いし、散弾銃なら射ち損じることはまずない。インジオは子供でも弓矢でかんたんに仕とめる。落ちたペルジースは、犬が駆け寄って拾ってくる。

シギダチョウ科のトリは、ブラジルでも数が激減している。捕獲禁止になっていても、そこにそのトリがいれば住民は獲ってしまう。ペルジースに限らないが、食べてうまいということは、種の保存上からみると、大変なマイナス要素だ。

ペルジースの仲間にコドルノがいる。肉もうまいが卵の方が有名。『オーボ・デ・コドルノ』の名前で市販されている。これは飼育しているもの。日本人は『ウズラの卵』と称するが、ウズラとコドルノとでは別種どころか、別科、別目でまったく違う。

現在ブラジルで市販されているのは、北半球から持ち込んで飼育しているウズラの卵。コドルノは数が激減している上、改良種がないから飼育にもウズラのように多く卵は産まない。

キジ目キジ科のトリはいないが、キジ目ホウカンチョウ科のトリは南米特産である。ムツンやジャクーがそれだ。このトリの特徴は、気

管が長くしかもとぐろを巻いていること。
このためトランペットの共鳴効果と同じで、ものすごく高く、大きい音を出すことが出来る。音の出せないトゥユユのようなコウノトリとはまるで反対だ。
とくにムツン（カンムリホウカンチョウ）の声は、途方もなくカン高い。アマゾンや海岸山脈の
森林を歩いていて、突然こいつに「ギャーッ」とやられると、腰が抜けそうになる。
まさに「怪鳥の叫び声」で、怪鳥の正体はムツンだったかと納得する。ほかにこんな途方もない叫び声をあげるトリはいない。おまけに図体がでかいから、飛び立つ時の羽音がまたすごい。
ホウカンチョウもジャクーも食べてうまいから、むかしからよく獲られた。大きいから食べでがある。しかし、手羽の先だけは食べないし、犬にも食べさせない。手羽の先にはある種の麻薬成分があり、これを食べると、一時的に精神異常を起こすことが知られている。

南米にはいない〝狼〟と〝狐〟

一度や二度ではわからないが、パンタナールのようなところに腰を落ち着けて、じっくり観察すると、いろいろな動物の生態がわかってくる。すると、世間で一般に信じこまれている動物の行動や習性と、実際の生態とが違う場合のあることに気がつく。

例えば嘴のばかでかいトカーノ（巨嘴鳥）は南米熱帯を代表するトリで、果物や木の実を食べる平和なトリということになっている。ところが、トカーノは肉食鳥でもあり、小鳥の巣を襲い、あの大きな嘴でヒナや卵を食べてしまうのだ。ベンチビーもトカーノの被害に遭う。滅多に見られぬが、ベンチビーが自分よりはるかに大きいトカーノの尾羽に喰いついて、追い回しているのを見ることがある。ヒナか卵を喰われ、怒り心頭に発したベンチビーがトカーノを攻撃している姿なのである。ベンチビーはすごく気の強いトリなのだ。

また、サルの餌は木の実や果実、若葉、新芽、花など、植物性のものと思われている。これもあながちそうとばかりは限らない。トリのヒナを食べるのは見たことはないが、卵はいくらでも盗んで食べる。ホエザルのオスが千切ったイグアナの長い尻尾を齧っているのを見たこともある。トカゲの尻尾はもともと切れやすいようになっているから、尻尾を千切られたイグアナが死ぬわけではないが、サルもけっこう、いろいろなことをやるもの。

土地の住民の動物観察は、たしかに詳しいのだが、なにぶん無学文盲、科学的知識に欠けるから一〇〇パーセント信用するわけにはとてもいかない。土着の住民はワニとトカゲの中間的な形態を持つカイマントカゲを毒があるとひどくおそれる。これは歯がベアリング状をして、噛む力が強いからしい。

しかし、この歯は常食にしている巻貝を噛みつぶし、しかも殻を口の外に吐き出すために開発された、特殊な構造なので、毒を必要とする食性など持っていない。

タテガミオオカミといわれるローボ・グワラーも、誤解されやすい動物である。戸籍的に言うとイヌ科、タテガミオオカミ属で、ほんとのオオカミ属とは違い、どちらかというとキツネ属に近い動物である。脚が異常に長く、ものすごいスピードで走る。家畜の仔やニワトリを襲うというので嫌われるのだが、この動物は夜行性のため、習性に不明なところが多い。

小動物を襲うことのあるのは事実なのだが、どうも誇張されているきらいがある。射殺したグワラーの胃の内容物を調べたら、ほとんどがナス科のフルッタ・デ・ローボ（オオカミの果物）だったとの報告もある。とにかくこの動物はオオカミの名称をもつためにひどく損をしている。

ほんとのオオカミ（狼）はユーラシア大陸から、メキシコ以北の北アメリカのもの。アメリカ大陸のは、カニス・オシデンタリスという種で、アメリカ、カナダに棲息している。

この狼、中南米にはいないはずなのに、ごく最近の雑誌で、ある写真家が次のような文章を書いているのを見てすっかり首をかしげてしまった。

「……アンデスの岩峰は残雪におおわれていた。アルゼンチン北部を進むと、月の谷と呼ばれる不気味な大峡谷の撮影に挑んだ。撮影中、狼が現れて肝を冷やしたが、峡谷をうろついていた一匹の犬が私になついてくれたおかげで襲われずに済んだ……」

アンデスに狼がいるとは初耳で、どうやらこれはピューマの間違いかと思う。ピューマならアンデスにもパタゴニアにも棲息している。

ピューマは、ジャガーのように性質が荒くないから、ピューマの方から人間を襲うことはまずない。それに、よほど飢えていても、人間を襲う危険を冒すより、犬の方を狙うものなのだ。

こうした間違いというか、事実の誤認は、翻訳者もおかす。ブラジルを含めたラテンアメリカの民話の翻訳に、キツネがよく登場する。実はこれがまったくの誤りなのだ。

ブラジルのイヌ科の動物は、タテガミオオカミを含めて四属六種である。キツネはイヌ科キツネ属（ブルペス属）だが、このキツネ属は南米には棲息していない。

ところが、はなはだややこしいことに、南米産イヌ科のうちのアザライヌ属の一種がキツネにそっくりの形をしているのだ。顔はキツネ的に尖っており、耳が大きく、尾も太く垂れている。

そして、ブラジルではこの動物をラポーザ・ド・カンポ（草原キツネ）と称しており、日本名でも、俗に南米ギツネと呼ばれているのだ。翻訳者が混乱するのも無理からぬところである。

だが、いくらキツネの名称がつけられていても、キツネ属とは縁は遠く、交配も繁殖も不可能なのだから、キツネの名を冠するのは不当。やはりこれは混乱と誤解を避けるためにも、別な名称、例えばアザライヌで統一した方がよい。

〃ハラキリ〃戦法でカピバラ退治

ブラジルの内陸部には多くの河がある。住民は河の本、支流の岸に住むのを常とした。河は水量が多いから道路のない時代には唯一の交通路だったし、また、魚という重要な食糧源を得るためにも、河から近い方が便利なのだ。この河べりの住民にとって、もっともタチの悪い害獣はカピバラで、被害を受けることでは、インジオの時代も今も同じである。とにかく、マンジョカ、米、トウモロコシ、砂糖キビ、サツマイモ、ヤマイモなどの栽培植物が片っ端から食害される。

カピバラは世界最大のげっ歯類、大きな個体では体長が一メートル、体高六〇センチ、最大体重七〇キロに達する。こんなのが十～二十頭で襲うのだから、たまったものではない。一晩で壊滅的大損害を蒙ることも珍しくない。おもしろいことに、この被害はどういうわけか、月夜のそれも満月を中心とした晩に多いことが知られている。月がカピバラの生活リズムにどういう影響を及ぼすのか、そのメカニズムは不明だが、とにかく満月の夜にカピバラの食欲は最大限に増進する。

丹精して育てた作物を一夜にして台なしにするカピバラを住民が憎んだのも無理はない。しかもこの害獣、始末の悪いことに、ものすごく警戒心が強い。常に見張りを立てていて、少しでも人間の気配を感じると「キイーッ」と、カン高い警戒音を発する。それを聞いた全個体は一斉に水に飛び込んでしまう。

一旦水に入られたら、まず矢でも鉄砲でも及ぶところではない。水中に完全に身を沈め、水草の間から僅かに鼻先だけを出しているカピバラを、陸上の人間が見つけるのは不可能。

それでも危険と察すれば、カピバラは得意の潜水泳法で、長距離を移動して逃げてしまう。なにしろ、前足の四指と後足の三指には水かきがついているのだ。

被害を蒙る河べりの住民は、いまいましいカピバラに対抗するため、いろいろな報復手段を考える。以下はその一つの方法で、しかも極めつきの残酷なやり方。住民は通常、畑を柵で囲うがカピバラは押し破ったり、飛び越えたりして侵入する。そこで、はじめからカピバラが入りやすいように、柵を低くした『入口』を数カ所つくっておくのである。入口は横木を何本か渡してつくるのだが、この一番上の横木に、カミソリのように磨き上げた鋭利な山刀を埋めこんでおく。

カピバラはもともと身体が重く、跳躍は得意でない。柵内に入る時も横木に腹をこすりながらやっと乗り越える程度。こうしてあわれカピバラは、鋭利な山刀で存分に腹を切り裂かれてしまう。

この『ハラキリ戦法』はかなり有効で、多くのカピバラが犠牲になった。だがカピバラもしぶとい。腹を切られても柵の内側で死ぬのはほとんどなく、もう一度横木を越え、またまた腹を切られ、ハラワタを引きずりながらも水中に逃げこみ、そこで絶命するのがふつう。半水生動物の面目躍如。

カピバラはおそらくその半水生生活が原因しているのだろうが、「腰抜け病」にかかることが知られている。一名「尻萎え病」とも言う。脊髄神経が冒され、立つことも歩くことも出来ない致命的な病気。

この病気は、トリパノゾマ・エキヌンという原虫が、水生昆虫を介

してカピバラの血液に入ることによって感染するもの。人間が感染するシャーガス病（トリパノゾム病）と類似の病気。

水と大いに関係があり、雨季が例年より永く続く年は、カピバラの被害が大きく、個体数の激減することが観察されている。この病気、困ったことに吸血昆虫を媒介して牛馬にも感染する。牛は比較的抵抗力があるが、馬は弱い。

さて、カピバラの肉だが、インジオの時代から食用に供されてきた。現在、ブラジルの一部のレストランでも料理され、公然と客に供されている。このカピバラは飼育されたもので、飼育技術は今では確立されている。ところが、カピバラの肉ほど、うまい、まずいの評価が分かれるのも珍しいのだ。「パッカにつぐすばらしい肉」と評価のある一方で「こんなまずい肉はない。味もそうだがあの臭さは我慢できない」との酷評もある。

カピバラの肉をシュラスコ（焼肉）にして出している、レストランの親父は「やり方があるわな……」と答えた。親父のノウハウを披露してしまおう。

カピバラをうまく食べるコツは一にかかって屠殺後、それこそ間髪を入れずに開腹し、腹腔内の内容物、つまりハラワタを取り去ることなんだそうだ。少しでも時間が経つとハラワタの悪臭が肉成獣のオスは、ハラワタを取り去っても多少臭みが残るから、この場合は熱湯でさっと湯通しすればよいらしい。インジオのやり方なんだそうだ。インジオにとって野生動物の調理の方法など、とっくに経験済みのこと。

〝超感覚〟所有のピラニア

ピラニアという猛魚について、今さら多言の要はあるまい。ピラニアはアマゾンをはじめ、ブラジルの河にはどこにでもいる。ブラジル以外のオリノコ河水系にだっている。ただ、水系によって棲息するピラニアの種はそれぞれに違う。また、ピラニアが凶暴であることは共通しているにしても、すべてのピラニアがその地域のドミナント（優勢）な魚というわけでもない。

ところが、パンタナールに圧倒的に多いピラニアはＳｅｒｒａｓａｌｍｕｓ　ｂｒａｎｄｉｉという黄色ピラニアで、これはたしかにパンタナールのあらゆる魚の中で、最大の勢力を誇るドミナントな種である。

こういう例は他の地域ではちょっと見られない。

どうしてパンタナールのピラニアがドミナントな種になったかについては、ワニ皮をとるため、ワニを密殺しすぎた結果という説がある。だがどんなものだろう。たしかにそれも原因の一つにはなるだろうが、生態系のバランスはもっと総合的に決まるもの。

この十年間でパンタナールへの交通や宿泊設備が飛躍的によくなり、多くの釣り人が押し掛けて、ドラード、パクー、ピンタードのような、大型魚を獲りまくったことも大きく影響しているのも事実。パンタナールの黄色ピラニアは、他のピラニアとはいくつかの点で異なっている。まず、他のピラニアは下アゴがいちじるしく突出して、

極端な受け口なのに対し、パンタナールのはそれほど下アゴが出ていない。

その代わり鋸歯の植わったアゴの幅が広く強大に出来ており、噛む力も強く、しかも大量に噛みとれるようになっている。体型も他のピラニアが概して身がうすいのに対して、パンタナールのは身が厚く、ズングリ型。更に決定的に違うのが習性で、他のピラニアはすべて昼行性で夜は動かないが、黄色ピラニアは昼も夜も活発に動いて餌をあさる。

もちろん餌の豊富なパンタナールの環境がそれを可能にしているわけだが、こうした旺盛な生活能力を身につけたからこそ、黄色ピラニアは種の繁栄に成功したのである。

ピラニアのうようよしているパンタナールの河で泳ぐことは、常識からすれば自殺行為に見えるかも知れぬ。だが、実際はそうではなく、現地の人間は平気で泳ぐ。筆者の行くホテルでこれまで人身事故の起こったためしがない。

「でも、本当に溺れてバタバタもがいたら、たちまち襲われるよ……」

これは現地に住む老人の警告である。これを聞いた時は、溺れているのと、泳いでいるのと、どうしてピラニアに見分けられるかと、頭から信用しなかった。ところがその後、ピラニアの観察を続けるうちに、考えを変えざるを得なくなった。

ピラニアが血の匂いに敏感なことはよく知られている。海のサメも同様で、サメは一億分の一の血でも嗅ぎ分け、反応するらしい。これ

は五感の一つ、嗅覚だから納得できるのだが、ピラニアにはこの通常の感覚以外に、第六感ともいえる、超感覚があるとしか考えられないのである。そう考えないとピラニアの行動は理解しがたい。

例えば、ピラニアのいる河を牛群が渡る場合、五体健全の牛が襲われることはない。病気の牛や怪我をした牛は、まず間違いなく襲われる。血が出ていようといまいと関係ない。この場合、ピラニアはいささかの狂いもなく正確、迅速に、弱っている牛を選び、容赦なく攻撃する。

魚を襲う場合も同様である。ふつう元気な大魚にピラニアが攻撃をしかけることはない。むしろピラニアの方が食われる立場なのだ。だが、大魚が釣りばりにかかり、水中や水面を暴れはじめると様相は一変し、たちまちピラニアの猛攻が開始される。一匹や二匹ではない。だからパンタナールの釣りは時間の勝負、もたもたしていたら、頭と背骨しか残らなくなる。

どうやらピラニアには傷ついた動物、苦しんでいる動物、恐怖心にとらわれた動物が発する悲鳴というか、救急シグナルというか、ある種の波動を瞬時に察知する超感覚があって、波動を知覚すると同時に攻撃に転じる習性を持っているらしい。

そう考えると恐怖の念にさらされた、溺れかけた人間が襲われることもわかるのだが、これはすべて仮説、証明されたわけではない。まあ、やはりパンタナールでは泳がぬ方が無難のようだ。

サメやピラニアとは違うが、カラス、コンドル、トビ、カラカラなどの肉食鳥、それも腐肉をあさるトリやある種の腐肉食獣も、弱って

いる動物を正確に見分ける超感覚を身につけている。

怪我をして動けない動物のすぐ近くに舞い降りて、様子をうかがっている黒コンドルやカラカラの不気味な姿は気持ちのよいものではない。しかし、これも弱者の淘汰という大自然の法則からすれば理にかなったこと。彼らは忠実に役割を果たしているに過ぎない。

牛の病気で絶滅危機のヌマジカ

シカの仲間は世界に多い。むしろあまり所帯が大きすぎて、分類に困るほどだ。なにしろ、ヘラジカ、トナカイ、アラシカなどの大物から、キョン、ブーズー、マメジカなどの小物まで、すべて哺乳網偶蹄目シカ科なのである。

これだけ種が多いと、中にはいろいろ変わった習性をもつのも出てくるが、パンタナールにいるヌマジカ（沼鹿）は棲息地に湿原を選択するのだから、これまた変わっている。

シカ科の動物は、林縁、つまり森林と草原の境界を好み、状況に応じてどちらにも適応できるタイプが多い。ところがヌマジカは河べりの回廊林や潅木林が湿原に接続する場所を棲息地にしている。採餌行動はほとんど湿原で、イネ科の草や灌木の若芽、若葉を好んで食べる。当然、浅い水中を歩くことになるのだが、水深三〇センチぐらいまでの深さなら、すばらしいスピードで湿原を疾走することができる。

このヌマジカ（パンタナール大鹿ともいう）は湿原に適応して、独

自の形質を獲得したシカなのだ。体高一一〇～一二〇センチ、体重一〇〇キロ～一五〇キロ、南米の鹿の中では一番大きい。とくにオスはよく分枝した角を持つから、貫禄は充分。湿原を好むシカは世界でも余り類がないが、このシカは、湿原に適応できるよう、永い時間をかけて独特の蹄を開発した。

シカは偶蹄目だから蹄は二つに分かれていて、しかも比較的小さいのがふつう。その方が起伏の激しい山地や岩場に向いているし、草原を疾駆するのに便利だからだ。

ところがヌマジカの蹄は七～八センチと大きい。その上、二つに分かれた蹄をつなぐ膜のようなものがついている。膜といっても、泳ぐために有利な水カキとは違う。これは湿地に脚がめり込むのを防ぐもの。浅い水深の湿原を走れる秘密武器なのだ。

アマゾンを含めて、南米低地のシカの天敵はオンサ（ジャガー）だった。そのほかアナコンダにもやられるし、仔鹿はワニやワシ、タカにも狙われるが、これは交通事故みたいなもので、そう多くない。かつてパンタナールにはオンサが多かった。ファウナが豊かで、カピバラ、ペッカリー、シカのような手ごろな餌が豊富なのと、食物連鎖の頂点にあるオンサを襲う他の動物がいないからである。

パンタナールのオンサの受難は十九世紀のはじめ、放牧の牛を入れた時からはじまる。人間たちは牛群を守るため、見つけ次第オンサを射殺した。ひとつには高価に売れるオンサの毛皮が目当てでもあったのだ。この時代、オンサは年、数千頭の単位で殺されていた。

話が脱線しかけたのでヌマジカに戻すと、実はヌマジカの独特の蹄

と開発と湿原への生活適応はオンサの襲撃を避けるためだったのである。その証拠にこのヌマジカ、現在でも人間の姿を見たぐらいで、あわてて逃げたりしない。つがいか、一頭の子鹿を連れ、悠然と人間を眺めている。

『オンサだって近付けないのに、人間なんざ問題になるもんか』と完全にタカをくくっている。

実際、湿原のヌマジカをオンサは襲えない。走るスピードが全然違うからどうにもならないのだ。

しかし、ヌマジカの誤算はオンサより人間がはるかにこわい存在とは知らなかったことである。

カヌーのうまいパヤグア族のインジオは悠々と構えるヌマジカに近付き、弓矢でいともかんたんに仕留めた。銃が入ってからはもちろん、言うまでもない。

現在、ヌマジカは絶滅に瀕している。肉はうまいし、皮も使える。角も立派な装飾品になるということで多くの個体が人間に殺された。だが、ヌマジカは人間の鉄砲だけで種の保存が脅かされたわけではない。実はヌマジカは、人間がパンタナールに放牧した、大量の牛群に被害を蒙ったのである。と言っても、湿原に入れない牛とヌマジカが、直接に餌をめぐって競合、抗争したわけではない。牛が持ち込んだ病気にやられたのである。

この病気をブルセラ病（ブルセローズ）という。牛、山羊、豚などの家畜伝染病で、ブルセラ病の細菌が体内に入ることによって発症する。本来は熱病なのだが、子宮や胎盤が病菌に侵されるため流産が主

な徴候となる。ウシは流産、早産、死産で、決してまともに産まれない。メス豚が罹病すれば、卵巣が侵されて排卵出来なくなる。オス豚の場合は精巣が侵され、造精能力も交尾能力もなくなるから、いずれにしても子孫は残せない。ヌマジカにはウシからこの病気が伝染した。伝染しても親が死ぬわけではない。が、繁殖能力がないのだから何年か経つと個体数は目に見えて減ってくる。

人間の保護を受けられる家畜と違って、これは野生動物には致命的である。かくてパンタナールのヌマジカは、種の保存が可能か否かの瀬戸際にまで追い込まれてしまった。

〝専守防衛〟法開発のチドリ

トリの事典や解説書を読むと、チドリ目チドリ科のトリには擬傷行動をするものがあると書いてある。こういうものは自分で観察しないとおもしろくない。パンタナールでずっとチャンスを待っていた。この科のトリはチドリ、シギ、ケリなどだが、趾の後指が欠けていて、ものをつかむことが出来ないから木の枝や岩角などには止まれないのだ。

ケリの仲間はブラジルにもいて、ケロケロと呼ばれる。うるさくケーロケーロと鳴くトリである。

草地性のトリで、ゴルフ場や野原にもよくいる。ケロケロは翼の肩のところに長さ三センチもある剣のような牙というか爪のような武器を

持っている。こういう武器をもっているせいか、おそろしく気が強く、孵化期、育雛期には他の動物はもちろん人間にまで向かってくることがある。

地上で産卵、孵化するため、外敵に狙われやすいが、敵が卵やヒナに近付くと巣とはまったく違う方向に走り出し、注意を自分に向けて敵を巣から引き離す。

この時、自分があたかも傷ついたように擬傷行動をするとも言われるが、ブラジルのケロケロではまだお目にかかったことがない。その代わりチドリでは擬傷行動を観察することが出来た。

水の増減によって生活のサイクルが営まれるパンタナールでは、乾季に出来る河の中の中洲がハサミアジサシ、オオハシカモメ、チドリなどの営巣地となる。

ハサミアジサシとオオハシカモメは完全な集団営巣で、少なければ何十羽、多ければ何百羽の単位で集団をつくる。おかしなことにハサミアジサシとカモメは別々の行動をとるのに、営巣だけは同じところである。

さてチドリだが、チドリはつがいの雌雄が単独でアジサシやカモメの巣と同じ場所に営巣する。

これは卵やヒナを狙うカラカラや黒コンドルをアジサシやカモメが群をなして迎撃し、追い払ってくれるのを利用しているのだ。いわば弱者の知恵なのである。巣といっても、アジサシ、カモメ、チドリの巣は、砂を少々掘って浅い窪みをつくり、一～三卵を産むだけ。日中は抱きもしない。日中の温度が三十八度にもなるこの地方では、陽のあ

る間は抱卵の必要がない。チドリ目のトリに共通していることだが、卵もヒナも完全な保護色で、砂ときわめてまぎらわしい色をしている。このトリは早成性で、孵化した途端に歩くことが出来るし、親を見習って餌をついばむこともできる。

とくにチドリのヒナは歩くどころか素晴らしいスピードで滑るように走ることが出来る。脚を互い違いに動かして走るのにはきまっているのだが、見ている人間にはあたかも氷上をスケートで滑るとしか感じられない速さなのである。

だが、このチドリのヒナ、いくら早成性でも孵化した直後から飛べるわけではない。もっともそんなトリがいたらバケモノだが……。いくら滑るように走ると言っても、なにぶん四センチぐらいの身体なのだから、そう長くは走れない。

カラカラや黒コンドルの襲撃はアジサシやカモメが追い払ってくれるが、地上にはヘビやオポッサムなどの敵も狙っている。そこでチドリは専守防衛の〝武器〟を開発する。

一種の擬態なのだが、砂の上にピタリと身を伏せて死んだ真似をするのだ。なにしろ身体が小さい上に、砂と同じ保護色なのだからなかなか見つからない。

また仮に見つけても人間が指でちょいちょいと突っついたくらいではぴくりともしない。完全に死んだ真似を装っているのだ。それにこのヒナ、無臭で匂いがしない。

これはヒナの防衛法だが、チドリの親も襲撃者の目をヒナから外らすため、いろいろ手のこんだ擬態をする。その方法はチドリの種に

よって多少違っている。あるチドリは地上を羽根を拡げ、バサバサ音を立てながら走り、立ち止まっていかにも羽根が折れて飛べないような格好をする。派手な動きだから襲撃者はついヒナから目を外らし、親の方へ走ってくる。しかし、本当に傷ついているわけではないから、敵が近づけばパッと飛び立って逃げてしまう。

擬傷しないチドリもいる。これはもっぱら走るのが専門。襲撃者の目前を右に左に走り回り、注意を自分に惹きつけてヒナを守っている。このチドリも自分の身が危なくなるとパッと飛び立つ。

鮮やかなものだ。まったく種の保存にかけては、あらゆる動物が自分に適した方法を開発し、本能として身につけている。人間のように学習したり、考えたりするのではなく、遺伝子の中に既に適応能力が組み込まれているのだ。

それにしてもチドリのヒナはかわいい。スズメ目の小鳥はすべて晩成性で、生まれたばかりは丸裸で目も見えず、お世辞にもかわいいとは言いかねるが、自立できる早成性のヒナで一番小さいのがチドリだろう。見ていて飽きないかわいさだ。

高度の技術駆使の托卵鳥

南米大陸はかなり特殊な地域だから、渡りをする鳥は別としても、そこに定着する野生動物で、他の地域、とくにユーラシア大陸と共通している種はほとんどない。

日本でありふれたカラスもスズメもブラジルにはいない。もちろんスズメ目の鳥は沢山いる。なにしろ世界のトリ八千六百種のうち約五千五百種がスズメ目なのだ。しかし、スズメ目ハタオドリ科のいわゆるスズメは棲息していない。と言ったら「チコチコがいるじゃないか」と反論された。

たしかに似てはいる。旧世界におけるスズメのニッチェ（生態的地位）をここではチコチコが占めていることも事実だ。でもチコチコとスズメの類縁関係は遠い。

この混同、日本人だけでなく、ヨーロッパ人もやる。最初ブラジルに来たポルトガル人もチコチコのことをパルダル（ポルトガル語でスズメのこと）と言った。正しくはチコチコはスズメ目ホオジロ科のトリである。分布はメキシコからパタゴニア迄の中南米。チコチコのインジオ名は何だろうと調べたら、チコチコそのものがツピー・グワラニー語だった。ほんとうは〝チック・チック〟で、鳴き声からきた擬音が名称になったもの。これは大変かわいらしくて良い。

ついでに述べておくと、実はハタオドリ科のスズメ、ブラジルにいないと言ったが、ごく少数はいるので分類にちゃんと記載されている。「ハテ面妖な……」と参考書に当たったら、十九世紀以降に人間が持ち込んだものだった。こういうことをやるから生態系がややこしくなる。

他の例では猪がある。サンタ・カタリーナ州に野生の猪がいるというのだ。旧世界の猪がブラジルにいるはずがない。「ペッカリーだろ

う」と言ったら、いや二〇〇キロ以上ある猪だと写真を見せてくれた。猪に間違いなかった。

話を聞いたら、豚と交配してイノブタをつくるため、持ち込んだのが逃げたものだった。純粋の猪はもういないが、イノブタの野生化したのは今でもいるとのこと。もっとも普通の豚でも森の中へ逃げると容易に先祖返りをして野生化し、凶暴になる。こういう豚ならブラジル各地にいる。

話が脱線しかけた。チコチコに戻る。ブラジルにはシュピンという托卵鳥がいて、チコチコ（だけではないが、ほとんどチコチコ）の巣に卵を産み、チコチコに育てさせることが広く知られている。托卵鳥というのは営巣、抱卵、育雛の重労働一切を他のトリに任せ、自分は交尾と産卵だけという横着なトリ。横着と言ったが、これは人間から見た言い方で、このトリはこういう方法でしか繁殖が出来ないのだ。世界には約八十種の托卵鳥がいて、そのうち五十種がホトトギス科。日本の托卵鳥はホトトギス、カッコウ、ジュウイチ、ツツドリの四種で、すべてホトトギス科のトリ。ブラジルには七～八種いるが、ムクドリモドキ科のシュピンが有名。このトリ、和名を香雨烏というが、名前の由来は不明。

ブラジル名のシュピンは当然ながらツピー・グワラニー語で、意味はそのものずばり托卵鳥のこと。チコチコにヒナを育てさせるシュピンは真黒で艶があり、全長二〇センチのチコチコの四倍の大きさがある。産卵期になるとシュピンの雌は隙をみてチコチコの巣に入り、まずチコチコの卵を一つ放り出し、ついで他の卵に小さな孔を開けて傷

をつける。それから自分の卵を一つだけ産む。
産卵に要する時間は僅か三秒。驚威の早わざだ。
卵はチコチコの卵より、僅かに大きめだが、模様も形もそっくり。シュピンも合計四〜五卵産むのだが、一つの巣には一個しか産まない。チコチコの卵は全部孔を開けられているから孵化せず、シュピンのヒナだけがかえって、仮親を独占出来る仕組みになっている。
だが、この方法、必ずしもうまく行くとは限らない。チコチコの親が腐った卵を嫌って巣を見捨てることがあるからだ。その代り、無事に孵化したシュピンは完全にチコチコの仮親を独占出来る。
たいていの托卵鳥は巣立まで面倒を見てもらうが、シュピンは巣立って自力で飛べるようになってもチコチコに餌をねだる。真赤な大きな口を開けてピイピイ鳴くとチコチコは餌をその口に入れてやる。口を開けてピイピイ鳴くことがチコチコの給餌行動を触発するらしく、仮親は給餌をやめることが出来ない。

見ているとおかしいやら、身につまされるやらだが、シュピンは非常に高度の技術を駆使して種の保存をはかっている。とにかくこのトリは自分では子供を育てられない妙なトリなのだ。どうしてそうなのかのメカニズムはわかっていない。
シュピンとチコチコの関係はよく知られており、女にたかるヒモのこともシュピンという。またリオから南の地方では〝女教師の亭主〟ともいう。〝髪結いの亭主〟と同じ謂だが、ブラジルでは女教師の亭主はのらくらで働かぬものらしい。

吸血魚カンジルーの虚実

もう二十年以上前になるが、筆者は「アマゾン学のすすめ」という文を連載したことがある。アマゾン在住時代の体験や見聞を書いたもの。この連載、単行本にはしていない。本にしろとすすめられもしたが、しなくて良かった。

今にして読み返すと、書いていること自体間違っているわけではないが、なんとも浅薄皮相の観察と未熟な知識、洞察の甘さ、まったくどれをとっても「盲、蛇に怖じず」「夜郎自大」の類いで、汗顔、赤面の至り。中には明らかな誤りもあり、気になって仕方がない。害魚カンジルーの記述などその例だが、この機会に訂正というか、きちんとしたものを書いておくことにする。

ツピー語でカンジルーと称する魚はサンフランシスコ河にもいるから、アマゾン河だけとは限らないのだが、十種類以上はいると思われる。

戸籍的にはナマズ目トリコミクテリ科の魚。カンジルーの仲間には体長三〇センチにもなる大きなのもいるが、問題なのはこんな大きなカンジルーではなく、体長がせいぜい四～五センチ、最大でも七センチにしかならないＶａｎｄｅｌｌｉａ属のカンジルー。中でもアマゾン河口の汽水域に棲むくａｎｄｅｌｌｉａｃｉｒｒｈｏｓａという種類がこわい。

どうこわいかと言うと、水浴している人間、というか動物の九穴に

侵入してくるのである。九穴といっても通常襲われるのは尿道と膣腔。といえば「ははあ、女性の敵か」と思うかも知れぬが男もやられる。ペニスの先端から尿道に飛びこむのだ。

このカンジルー、なにしろ細い。直径が四ミリはどの円筒形で、頭が極端に小さい。おまけに背ビレ、腹ビレ、尻ビレがまとまって身体の後端についていて、小さな穴にもぐり込める体型になっている。更にこの魚、ナマズ目としてはまったく珍しいのだが、口の上顎部に手鉤のような、内側に曲った長い五本の歯があり、これで動物の胎内を喰い破っていく。

カンジルーに飛び込まれた人間は、男性でも女性でも例外なく悲鳴を上げて、魚を引き出そうとするが、いくら引っ張ってもカンジルーは抜け出ない。この魚はエラの両脇に釣りばりの戻しのような棘が五本ずつついていて、前方には進めるが、うしろに引っ張ると棘が尿道なり、膣腔の外壁に逆立ってとてもではないが抜けるものではない。無理に引っ張れば大裂傷を負う。

こういう話はとかく大げさになりがちだが、本当なのである。筆者がいたのはアマゾンの木材工場だから貯木池がある。この池に入って作業員が丸太を台車で揚げるのは日常的作業。

ある日、作業員の一人が突然悲鳴をあげてパンツの前を押えた。筆者には何が起こったのかわからないのだが、作業員の仲間は「あっ、カンジルーだ」と瞬時に覚った。そしてペニスを握って悲鳴をあげている友人を医務室に担ぎこみ、洗面器に満たしたアルコールに、カンジルーの後半身が飛び出したペニスを漬けた。不謹慎なはなしだが、

滑稽な情景で、思わず笑い出したくなったが、本人はそれどころではあるまい。この時はアルコールによる酩酊作戦が効を奏して、ぐったりとなったカンジルーを無事引き出すことが出来たが、実際にこういう事故は発生するのである。

これは男の例だが、むろん身体の解剖学的構造からして、女性の方が被害が多い。尿の匂いに敏感に反応することが知られており、水中で放尿するとカンジルーに襲われる危険率が高くなる。

よく河岸から放尿しているとカンジルーが小便を伝ってペニスに飛び込むと言われるが、これはウソ。カンジルーにそんな能力はない。

しかし、万物を創造した神様もずいぶん奇妙な生きものをつくったもの。同じ動物を襲う淡水魚でも、ピラニアはあの鋭い鋸歯で豪快に肉を喰い千切るのだが、この小さなカンジルーは動物の胎内に入って傷つけ、血だけ吸う、いやらしい吸血魚なのである。

このカンジルーのいる地方の女性は、インジオであれ、カボクロであれ、生理中は河に入らないし、やむを得ない場合はプロテクターをつける。

このプロテクターで有名なのが、マラジョー島のインジオがつくった土器製のタンガ（三角褌）。

個人の体型に合わせて隙間が出ないよう、きっちりつくられた、オーダーメイドの精緻なもの。

さて、これが問題なのだが、この土器製の三角褌、カンジルー除けとする説と、そうではなくてお祭りの儀式用に使われるものだという説があって、学者の間でも意見が分かれているのである。

お祭り用とする学者は、マラジョー島地方に吸血カンジルーが多いのは事実としても、女性がプロテクターをつけてまで腰以上の深い水に入る必然性はないではないかと主張するのだ。

それはともかく、アルコールを持たないインジオがどうやって尿道や膣内のカンジルーをとり出したか。これは筆者の領域だが、猛烈に酸っぱいジニパッポの未熟巣の絞り汁を注入するのである。

食べ方わからぬブラジルの淡水魚

日本人が魚食民族であることは世界によく知られている。たしかに年間一人当り七〇キロを消費するのだから、世界一の魚食民族であることは間違いない。続いて韓国、香港、ノルウェイ、スペインの順になる。ただ、これには例外があって、北海のアイスランド、グリーンランド、南太平洋のミクロネシア、ポリネシアの島国などでは、日本より一人当りの消費量は大きい。

そこへいくと南米諸国は一般に肉食で、魚はあまり食べないと言われている。とくに内陸国のボリビアやパラグァイは統計上、ほとんど魚は食べないことになる。

この統計はＦＡＯ（国連食糧農業機関）の数字なのだが、ブラジルはアルゼンチンより少ない消費になっている。実際はどんなものだろう。統計の数字は海水魚に限られ、淡水魚は入っていないのではあるまいか。

淡水魚消費の数字は出しにくいのはたしかだが、ブラジルの内陸部

ではつい最近まで、海の魚といえば塩イワシぐらいで、鮮魚は淡水魚に限られていた。

現在は輸送手段や冷凍技術が進歩したから、海の魚も多少は流通しているが、淡水魚が主であることに変りない。ブラジル全体から見れば、海水魚と淡水魚の消費比率は半々というところだ。

なにしろブラジルにはアマゾン河、ラプラタ河（パラナ河、パラグァイ河）、サンフランシスコ河水系の河があり、その他にも河がある。いずれも流れがゆるやかで、水量多く、しかも富栄養水だから魚の種類と数はものすごい。

ブラジルの淡水魚の種類は約一千五百種、これは地中海の魚の種類より多い。南米の淡水魚は時代的に古いのが特徴で、レピドシレン科の肺魚などは、古生代デボン紀（三億五千万年前）の古代魚なのである。また巨魚で有名なピラルクも中世代白亜紀（一億二千万年前）から出現している。

現在のサンパウロ州ではもうダメだが、つい三十年前までは内陸部でいくらでも魚が獲れた。他の州などでは今でも結構獲れている。おそらく百年前までのブラジルのイクチファウナ（魚類相）は、何千年だか何万年に亘って、極相（クライマックス）を続けていたに違いない。つまり、種と数が最高にふえた状態のまま、長期間安定していたということである。

日本人はブラジルの淡水魚に対してある種の偏見を持っている。かく言う筆者も日本人だから、永年、内陸奥地を歩いて淡水魚を食べていながら、なんとなく違和感があって好きになれなかった。

違和感があるのは、日本にはない魚ばかりで、その魚の特質も、どうやって食べたらよいのかの調理法もさっぱりわからないからである。

これが日本の海水魚ならカツオはたたき、ブリなら刺身か照焼、サンマは塩焼き、アジは干物、タラは鍋というように、調理法が決まっているから自信をもってつくることが出来る。ところが、ツクナレ、タンバキ、ドラード、パクー、ピラムターバ、ピンタード、スルビンがうまいと言われても、どうやって料理するのか見当もつかないのでは話にならぬ。魚の食べ方はその土地の典型的な食文化だから、体得するまでに時間がかかる。

ブラジルの淡水魚を食材とした日本料理もなかなか出来ない。その証拠に日本語新聞に案内がよく出る料理講習会で「ドラードのうまい食べ方」とか「ピンタード料理のいろいろ」などというのを見たことがない。

筆者もこのごろ、いくつかの淡水魚について食べ方がわかるようになった。卓絶してうまいと思ったのは、ドラードの頭の味噌漬を焼いたもの。上品な食べ方は出来ないが、これを食べていると至福感にひたれる。ただ材料がうんと新鮮でないといけないから、サンパウロでは無理。

戦前、内陸部に入った日本移民はナマズでカマボコをつくった。有鱗魚でもつくれぬことはないが、バクー、タンバキ、ドラードなどはうまい魚ではあっても脂が多くどうも具合が悪い。

その点ナマズは脂が少ない上に白身でやわらかく、小骨もないから

カマポコの材料としては都合が良かった。カマボコの生命であるアシの出かたも悪くはなかった。

アマゾンのベレン付近の日本人はピラムクーバで、サンパウロ州奥地の日本人はピンタードやスルビンでつくった。どちらも原料魚が豊富だったから大いに利用した。

実はナマズでカマボコをつくることは、日本では既に室町時代から行われていた。しかもこの時代は、カマボコの材料としてナマズがもっとも上等だったのだそうだ。室町時代のナマズのカマボコがどんな味だったか、もちろん知る由もないが、私見を言うならばブラジルのナマズでつくったカマボコの方がうまいはずである。なにしろブラジルはナマズ王国で、ナマズ目だけでも六百種を超える。この中でピンタードなどは、衆目の一致するうまいナマズの代表なのだ。

冷凍に耐性のある〝熱帯魚〟

パンタナールで知り合った釣りの家族がいる。ミナスのベロオリゾンテ市で大きな家電製造の店を持っている一家で、イタリア系ブラジル人。毎年トラックにフリーザーと発電機を積み込んで来て、二個のフリーザーを一杯にするまで釣って帰る。魚の種類はドラード、パクー、ピンタード、ピラプタンガなど、ペイシ・ノブレ（高級魚）と言われる魚で、雑魚は入れない。

大声で快活な初老の主人と以下のような話をした。
「そんなに沢山持ち帰ってどうするんだね」
「親戚、友人に分けてやるんだよ。めいめいフリーザーにしまっておくけどなが持ちするよ」
「フリーザーでどのくらい保つんだろう」
「一年は大丈夫だな。うちで今食べている魚は去年ここで釣ったヤツだからね。ひょっとすると二年ぐらい保つかも知れない」
これにはいささか驚いた。日本の冷凍マグロ並みではないか。日本ではマイナス六十度という冷凍技術が開発されたおかげで、マグロ船の魚倉や陸上の冷凍倉庫で二年も保存しておくことが出来るようになった。しかし、家庭用のホーム・フリーザーではいくら性能がよくてもマイナス二十度が限界、とても二年も保つとは思えない。
「そんなに置いたら品質が悪くなり、解凍したらバサバサになるんじゃないの」
「そんなことはないよ。ただきちんと前処理をしておかないといけないけどね。それに一度解凍したのを再凍結したのはダメだし、おかしなことに海の魚はそんなに保たない。だからうちでは海の魚は食わないんだ」
この人は釣り好きだけあって、釣った魚の処理も実にうるさい。まず魚を暴れさせない。棍棒で一撃を喰らわせ、気絶したところで細身のナイフを延髄に刺して即殺する。
同時に頭の付け根の脊髄を切って血抜きをする。それから腹を開け、内臓を取り去り、エラもきれいに取って水洗いし、用意のビニー

ル袋に入れ、口をしぼってすぐフリーザーに入れる。

なるはどこのやり方だと、魚は死後硬直がはじまる前に冷凍されてしまう。細胞が生きているままで凍ることになるから鮮度の点では抜群で、たいへん理にかなった処理のしかたである。

ものはためしと、当方もこのやり方を忠実に守り、ドラードとピンタードをサンパウロに持ち帰った。ただ、ベロのおじさんと違って、当方はフリーザーのまま運ぶのではなく、アイスボックスに冷凍魚を入れ、氷を詰めて運ぶというハンディがある。

飛行機で持ち帰るのだが、パンタナールのホテルからサンパウロの自宅まで十二時間かかる。だからアイスボックスを開けた時はカチカチに凍っているわけではなく、半分くらいとけかかっている。これを再びフリーザーに入れて凍らす。温度はマイナス十八度。半年後にとり出し、これもベロのおじさんの指示通り、冷蔵庫の下段に入れて解凍した。

結果はたしかに元の鮮魚に戻り、味もパンタナールで食べるのと変りなかった。半年以上はためしたことはないが、六カ月までなら、この方法で充分鮮度が保て、品質も劣化しないことが一応証明された。だが、ホーム・フリーザーで半年も冷凍魚の品質が変らないというのは常識では考えられないことなのである。マイナス二十度とマイナス六十度の差は、それこそ絶対的な違いなのだ。

永い間このナゾがわからなかったが、水産食品の専門家で日本の水産庁の研究所におられる鈴木たね子農学博士の書いた本を読んだら、おおよそのことがわかってきた。

もちろん鈴木先生がブラジルのドラードやピンタードに直接言及しているわけではないが、魚には耐凍性の強い魚と弱い魚があり、北洋の冷たい海にいる魚は耐凍性が弱いのだそうだ。その代表はスケトウダラで、今でこそ冷凍すり身の技術が開発され、大いに利用されているが、そのまま冷凍すると肉のタンパク質が冷凍変性を起こし、解凍するとスポンジ状になってしまう。だからかつては、スケトウの身はガラと称して肥料用にしかならなかった。逆に高温の水に棲む〝熱帯魚〟は肉のタンパク質が安定していて、冷凍してもタンパク質が劣化しない特性があるとのこと。

ははあ、〝熱帯魚〟がキーワードだったかと納得した。ブラジルの淡水魚は移入種を除けばすべて熱帯魚。例えばパンタナールなどは内陸の低地で、ブラジルの中でも有数な酷暑地。当然水温も高く、水の浅いところでは水と言うより湯に近い。こういう高温の水に棲む魚は世界でもっとも耐凍性が強く、品質も安定しているのだろう。しかし過信は禁物、冷凍魚はそういつ迄もおいておくものではない。魚を即死させるのは旨味を保つために必要だし、死後硬直前にすべての処理をして冷凍するのは、長期保存に不可欠。ベロのおじさんのやり方は正解である。

旱魃で生態系一変のパンタナール

まる十年パンタナールに通っている。むろん年によっていろいろな変化があったが、今年（一九九四年）のパンタナールほど乾燥のひど

い状態を見たことがない。

とにかく今年は雨が少なかった。一月一日に行った時などは、なんと車でバランキンニョのホテルにいけた。雨季のさかりの一月に、陸路車で入れること自体、異常なのである。

パンタナールの自然のサイクルを理解するキーワードは水である。水こそが豊かなファウナ（動物相）、フローラ（植物相）を形成する根源なのだ。雨季に充分な降水があってはじめて万物の生命が順調に始動をはじめる。例年なら、雨季の水位は乾季にくらべ二メートルは ど上がる。河とつ

ながったバイア（湾）と称される入江も出来るし、乾季に陸地となっていた平原も水が拡がり、浅いが広大な冠水域が出現する。冠水域の草、木の葉、木の実、小動物、昆虫の死骸などが有機分解してプランクトンが発生する。プランクトンを餌にする小魚が爆発的にふえ、次にはその小魚を食べる魚も増える。あとは食物連鎖の法則で魚、鳥、は虫類、哺乳類もそれぞれに増えて行く。

陸上の生物だって同じこと。とにかく雨が降って順調に植物が繁茂することで、動物の生命が維持され、生の営みが形づくられるのだ。では水を中心とする自然のサイクルが、今年のように雨が降らず、変調をきたすとどういうことになるのか。まず冠水域が出来ないから、魚が産卵に集まることも増えることもない。小魚がいなければ、大きな魚も生きてはいけない。つまり水にすべてを依存しているパンタナールで雨季に雨が降らないということは、生態系が一変することなのだ。鳥だって営巣できない。

アメリカトキコウとベニヘラサギの大群が乾季につくる大コロニーはパンタナールを代表する大景観なのだが、今年は遂に営巣しなかった。冠水域が干上がり、餌の小魚が採れないから子育てが不可能なのだ。よく観察していると、親鳥が沢山集まり、何度か集団営巣を試みはするのだが、どうしてもつくれない。時期に制限があるから、先に延ばすわけにはいかないのだ。こうして今年はよほど条件の良いところ以外、大規模な集団営巣は見られなかった。

大きな魚に与えた影響もたいへんなもの。大きく移動するドラードなどは上流に上ってくることが出来ない。今年のパンタナールで釣れる魚はほとんどがピラニアという仕儀になった。

ワニやアナコンダ（スクリー）も受難者。本支流の河べりに棲んでいるのは大丈夫だが、バイア（入江）を棲みかとしていたワニやアナコンダはひどい目に遭った。

このは虫類たち、魚ではないから、水が干上がっても陸上移動出来ないわけではない。しかし、地面が濡れているならともかく、カラカラに乾いて地割れしている地表を長距離移動するのは大のニガ手。まず途中でドライアップし、黒コンドルの餌になるのが関の山。

トランスパンタネイラ（パンタナール縦断道路）は両側の土を掘り、土盛りしてつくられたもの。

このため道路の両サイドが堀になり、ここに魚がふえ、ワニが寄り、水鳥の大群が集まって一大偉観を呈するようになった。

だが、これも今年のように水がなくなれば、すべて無になる。翼を持った鳥は飛び去るが、ワニにその方法はない。堀のワニが次の雨季

まで生き残れる可能性はほとんどあるまい。

異変は動物だけに起きるのではなく、植物もおかしくなる。今年パンタナール紫イペーは二度咲きした。最初は七月終りから八月はじめにかけてで、これは例年並み。

イペーは桜と同じで花がまず咲く。花が落ちると実がつき、葉も出てくる。それが今年の紫イペーは花が落ちても葉を出さず枯れた状態を続け、九月はじめにもう一度満開の花を咲かせた。

二度も花見が出来て結構と言われればそんなものだが、これは植物にとっては大変な負担。どうして二度咲きするのか、そのメカニズムはわからぬが、最初の開花で結果したサヤが点々ある中に、二度目の花を咲かせている紫イペーの姿はやはりおかしい。

筆者には初めての経験だが、パンクナールの今年の干魃は二十年ぶりといわれている。おそらく過去においてもこうした現象は何十年かの周期で起きたに違いない。

しかし、こうした自然の災害が何十年に一度起きたぐらいで、生物の種が絶滅に追い込まれることはない。植物は堪えに堪え、動物は多くの犠牲を残しながらも生きられる環境を求めてひっそり生きつづけ、次のチャンスを狙っている。

次の雨季に順調な降雨があれば今年のマイナスをカバーする、種の保存戦略がとられることはたしかである。個々の生物がどのような方法を講じるのか、来年のパンタナールはたのしみだ。

深刻な新世界ザルの受難

さきごろブラジルではじめてのレッド・データ・ブックが出た。（へえー、よく出たな）という感じで、ちょっとした驚きである。レッド・データ・ブック（リブロ。ベルメーリョ）というのは、絶滅に瀕している動植物の種を解説した資料集。

ＩＵＣＮ（国際自然保護連合）がＷＷＦ（世界自然保護基金）の協力を得て、一九六六年から各国別につくられているもの。ブラジルでは学者がいくら調査しても、資料の公開は政治の圧力を受けるからむずかしかろうと予測していたのだが……。今回刊行されたのは、動物のうちの哺乳類だけに限られているから、全体からすれば一部にすぎないが、さすがにきっちり調べてある。

ただ、調査文献のリストを見ると、ブラジル人学者が調べたものより、圧倒的に外国人学者が調べたものの方が多い。この分野、アマゾンやパンタナールという、世界に冠たるフィールドを持ちながら、やはりブラジルの研究は遅れている。

今回とりあげられた哺乳類は五十八種類。それぞれ種の説明、分布と習性、個体数、生物学、生態学的地位、絶滅化の要因、保護対策、保護地域、調査資料という順で要領よくまとめられている。

意外だったのは五十六種類の哺乳類のうち、半数近い二十六種がサルであること。サルの受難がこれほど深刻だとは知らなかった。新世界ザルは、亜種や地方種に細かく分けると百種を超すが、通常の種の

段階なら四十五種程度である。すべて広鼻猿撃、オマキザル上科に属している。例外はない。樹から降りない樹上性で、これが新世界ザルの特徴となっている。

旧世界の狭鼻猿類にはオナガザル上科と類人猿が属するヒトニザル上科がある。ヒト（ホモ・サピエンス）もヒトニザル上科に所属しているからなんとなく旧世界ザルの方が進化していると思いやすいし、実際そういうことも言われてきた。

しかし、そうとばかりは言えないので、もともと広鼻猿類と狭鼻猿類は別な系統。既に三千万年前からお互いが隔離され、それぞれ別個に進化の道を辿ってきたのだ。

たしかに新世界ザルにはゴリラ、オランウータン、チンパンジーのような身体の大きな類人猿はいない。これは当然のことで、樹上性のサルとして進化したのだから、身体が大きかったり、垂かったりではかえって困る。身体は小さくても、知能ではチンパンジーに匹敵するといわれる、フサオマキザルのようなのもいる。このサル、ペニスが釘のような形をしているので、ブラジルではマカコ・プレーゴ（クギザル）という。

このサルの知能は高く、道具を使えるサルとして知られている。多くの学者の観察記録があるが、宮城教育大の伊沢紘生教授もオマキザルの生態を観察、知能の高さを確認した記録を発表している。

新世界ザルはすべてオマキザル上科に属しているが、これが三科に分かれている。まず、ウーリーモンキーやフサオマキザル、クモザル、

ホエザル、ウアカリ、サキなどが属するのがオマキザル科。タマリンやマーモセットなど、小型のキヌザルが属するマーモセット科、それにオマキザル科とマーモセット科をつなぐ、中間のカリミコ科がある。この科はゲルディモンキーという風変わりなサルがただ一種だけ。

さて、レッド・データ・ブックに記載されている二十六種のブラジルのサルは、マーモセット科十種、オマキザル科十五種、それにゲルディモンキー一種である。

どうしてこんなに数多くのサルの種が種の存続を脅かされるのかについてはいろいろな原因がある。一番大きいのは開発が進み、山伐り、山焼きで棲息場所を追われることである。

とくにマーモセット科のサルは非常にデリケートで、新たな環境に適応する能力をほとんど持たないから、従来の棲息領域の森を追われると確実に数が減る。

一方、オマキザル科の大型のサルが激減したのは、実は人間に食べられたのが主な原因。幸か不幸か、ウーリーモンキー、ホエザル、クモザル、オマキザルは食べてうまい上、身体が大きいから食べでがある。野生動物で一番うまいのはパッカで、これは万人が認めるが、二番目はサルか鹿で意見が半々に分かれるのだ。とにかくサルは昔からうまい食べ物として食用にされた。

一九八五～八六年の一年間にアマゾン上流ジュタイ河のゴム採取人が一人で二百頭のウーリーモンキーを殺したし、やはりアマゾン上流で三人の猟師が二年間に二百頭のウーリーモンキー、百頭のクモザル、

八十頭のホエザルを仕とめた。

ブラジル最大のサルは海岸山脈の高地にいる、ウーリーモンキーの仲間で、一五キロに達するモノカルボエイロというサルだが、身体が大きくて食べでがあるところから徹底的に狩られ食べられた。現在では各地の国立、州立公園、生物保護地域すべてを合わせて五百頭ぐらいしかいない。

欧米の貴婦人は動物の天敵

恐竜の絶滅とか、古代大哺乳類の滅亡には地球規模での気候異変と、それに伴う食糧不足が決定的要因をなしている。生物の種は万古不変というわけにはいかないので、環境に適応出来なければ滅びてしまう。

しかし、現世の生物の種がどんどん減っていくのは天候異変のような天災ではなく、人間による人為的破壊の結果だから明らかに人災である。

かつて中南米のファウナ（動物相）は文明人が侵入してくるまで、極相（クライマックス）を続けていた。極相というのは、種類も数も最高にふえたまま、長期間安定していることである。

むろん、ネイティブ（土着）のインジオは食用に動物を獲っていた。だが、インジオが弓矢で自家用に獲る動物の数などは知れており、生態系になんらの変化も及ぼさない。むしろインジオの狩りは、動物の増えすぎを防ぐ、自然淘汰の方向に働いたと言ってよい。ということ

はとりも直さず、インジオそのものも大きな生態系に組込まれ、安定していたということになる。

新大陸の自然破壊は文明人の侵入と共にはじまる。まことに皮肉なことだが、熱帯低地のインジオなどは、他のいかなる動物よりも早い時期に文明人に蹴散らされ、追い払われ、絶滅の途を辿った。ブラジルは土地が広大で奥地があったから、辛うじて一部のインジオが残れたので、キューバ、ドミニカのようなカリブ海の島では、文明人侵入後、二、三十年でインジオは滅んでいる。

ところで、ブラジルは一九六九年に野生動物捕獲禁止令が出た。ずいぶん遅い禁止である。ブラジルの場合、禁止令が出たからと言って、次の日から禁猟になるということはない。

この法律が一般に浸透し、おおっぴらに店頭で毛皮や皮革の取引きが行われなくなるのが、やっと一九七五年ぐらいからである。この時代筆者はアマゾンにいて、舟で奥地を歩いていたが、どこでも野生動物の皮を売っていた。ジャガーだろうが大ヤマネコだろうが、大カワウソだろうが、欲しければ何百頭の毛皮でも買うことが出来た。手許に一九六七年のブラジル野生動物捕獲頭数の資料があるので紹介する。百頭以下の数字は省略するが、どうか腰を抜かさないでいただきたい。

大カワウソ四千、カピバラ十万二千、山ネコ五万一千、ジャガー（ピューマを含む）八万五千、ペッカリー（二種）六十九万、鹿三十五万六千、ワニ七十五万七千、トカゲ百二十八万四千、計三百三十二万九千頭。

この数字はＩＢＧＥ（ブラジル地理統計院）発表の公式資料。輸出や国内販売など、いわゆる営業用にする動物だけであり、現地の住民が食用にするサル、パッカ、クチア、アンタ、ナマケモノ、ハナグマ、タツーなどは統計に含まれていない。

以上はたった一年の数字だが、一九五八年から六七年までの十年間には営業用だけで、三千万頭の野生動物が殺された。ジャガーだけでも八十万頭、ペッカリーは五百五十万頭である。

この当時、野生動物の捕獲規制がなかったとはいえ、よくぞこれだけの動物を殺したものだとあきれる一方、逆によくぞこれだけの野生動物がいたものだと感心もする。やはりブラジルのファウナは豊かなのだ。この時の大量殺戮は、野生動物捕獲禁止をあらかじめ見越して、世界中の商人が大量の買い注文を入れたからであるが、ブラジルは今世紀のはじめにも、野生動物の大量殺戮を行っている。この時の被害者は白サギやアメリカダチョウ（エマ）やショウジョウトキ、ベニヘラサギ、オウム、インコやキヌバネドリのような鳥である。一九〇一年から五年まで、エマの羽根が毎年三トン、計十五トン輸出された。

一羽からほんの四、五本しかとれない白サギの飾り羽根が同期で六〇〇キロ、その他オウム、インコなどの羽根が八五〇キロである。何百万羽か殺さないとこの数字にはならない。

この羽根、何にするかといえば、欧米貴婦人の帽子の飾りや、羽根扇子にするのである。

もっとびっくりしたのは、この当時クモザル、クギザル、ウーリー

モンキーなど大型オマキザル科のサルの尻尾だけが輸出されていること。樹上性である新世界ザルの尾はまさに第五の肢で、よく発達している。とくにオマキザル科のサルの尾は、前肢、後肢より太くて長い。しかもこの尾の
毛は毛足が長くて、細くて柔らかく、絹状の光沢がある。
これに欧米の貴婦人が目をつけた。何に使うかわかったら大したもの。これはレガロという防寒用の筒状の手套（ロシア語でマフという）に用いるのだ。尾は太くて長いから、ていねいに切り開けば立派な毛皮がとれる。なるほど考えたもので、そのアイデアには感心するが、どうも欧米の貴婦人というのは新世界の動物には〝天敵〟的存在で、恨み骨髄に徹しているに違いない。

種の絶滅はほとんど人災

新世界のネコ科の動物のうち、一番大型なのはジャガー（オンサ）である。ジャガーの先祖を辿っていけば、大哺乳類時代の剣歯獣サーベルタイガーにつながっていく。
ただ、このサーベルタイガー、出身は新大陸ではなく旧大陸。ベーリング懸け橋を渡って新大陸にやって来た。これからジャガー、ピューマー、大ヤマネコのような、ネコ科動物が出現していく。
一方、旧大陸ではサーベルタイガーからトラ、ライオン、ヒョウなどが出てくる。

興味のあることに、ヒョウに黒ヒョウという変種があるが、ジャガーにもオンサ・プレッタといぅ黒いジャガーのいること。遠目には黒一色だが近づくと桜花紋が全身に入っているのがよくわかる。ジャガーはかつてはアメリカのアリゾナ、ニュー・メキシコ、テキサス辺りから南緯四十五度のアルゼンチンまで、広い範囲に棲息していたのだが、アメリカでは十九世紀中にはぼ絶滅した。

ジャガーの名前は一見英語のように聞こえるが、なにこれはジャグアルといぅれっきとしたツピー・グヮラニー語。学名で言えばパンテーラ・オンサで、トラやライオンと同属。だから交配可能で仔も生まれるが、このＦＩ（一代雑種）に生殖能力はない。

レッド，データ，ブックで知ったことだが、新世界のジャガーも、亜種の段階で細かく分けていくと八種になるそうだ。しかし、棲息環境や餌の差にもとづく僅かな差違で、本質的な違いではない。ブラジルでは東北ブラジルの乾燥地帯を除き、どこにでもいた。今ではアマゾン、パンクナールと、東部の海岸山脈に少々いるだけ。

パンタナールは餌がペッカリー、カピバラ、アンタ、シカ、ハナグマと豊富だったから数も多かった。だが文明人が放牧の牛を持ち込み、牛の防衛のために片っ端から殺したので、今では推定一千～一千五百頭に減ってしまった。今でも放牧の牛がジャガーやピューマにやられると、牧場主は牧童を動員して徹底的に追跡、殺す。法律ではもちろん禁じられているが、ここまで警察の手は及ばない。それに大牧場主は地方の名士で、多くの場合地方の政治家が兼ねている。どうにもならない。

アマゾンにはまだかなりのジャガーがいるが、推定基礎の数字がないからよくわからぬ。二万頭ぐらいが良い線かも知れぬ。二十年前、たった一年で八万頭殺した事実がユメのようだ。

私見ではアマゾン河の北岸にはまだかなりいると思う。マカパ市とオイアポッケ市（仏領ギアナとの国境）を結ぶ道路に昼間休息しているジャガーを何回も見かけた。

また、サンタレンの対岸、プラインニャとモンテ・アレグレをつなぐ道路でもよく出会った。

ジャガーは夜、車のライトで照らすと目がものすごい燐光を放つ。牛でも光るがあんなものではない。ほんとうにギラリと青白い燐光を発するのだ。

動物の種が絶滅に瀕するのは今年のパンタナールの干魃のように天災の場合もないではないが、これはむしろ例外。ほとんどは人災によって滅びるのである。人間による野生動物の種の絶滅方法には二つのやり方がある。一つは環境破壊で、これは種を選ばず、すべてを鏖殺にするやり方。

陸上の場合は山伐り、山焼き、川の場合は水銀、農薬、その他による水質汚染である。

もう一つは人間が動物について勝手に基準を設け、これに合わせて動物を選択しながら殺していくやり方だ。

毛皮が使える、羽根が飾りになる、食べてうまい、薬になる、脂がとれる、家畜が襲われる、農作物が荒らされる、病気をもっている、等々の基準。まったく動物には迷惑な分け方だ。

毛皮をとる動物の常連はジャガー、大ヤマネコ、大カワウソ、カワウソ、鹿で、皮革はペッカリー、カピバラ、アンタ（アメリカバク）だろう。アンタの革は堅いから鞍や馬具に賞用された。

カピバラの革で長靴をつくると水がなかなか浸みこまず、具合がよかった。山ネコとイララ（イタチの仲間）はハンドバッグやピストルのケース、変わったところではタテガミオオカミと大アリクイの尻っ尾のハタキ。

食べてうまいのも損をする。サル、パッカは既に述べたが、完全に球形になるタツー・ボーラもひどい目にあった。だいたいこのアルマジロ、棲む場所がよくない。よりにもよってセルトンの乾燥地帯を選んだのだ。ブラジルで最も貧しい地方で、しかも有数の干魃地域。乾燥に喘ぐ住民は鵜の目、鷹の目でタツー・ボーラを探し出し、腹に収めてしまった。

動物自体の食性が影響して滅びることもある。ナマケモノは餌にしているセクロピアの木を伐られると生きていけないし、アマゾンのウアカリ猿もサマウーマ（パンヤ科）ともう二種類ほどの植物の葉しか食べないから、この木がなくなると絶滅の危機になる。

幻の怪獣の正体はオオナマケモノ

ジュルパリというのはインジオの神様で、太陽神を意味している。ほかにブラジルの伝説や民話に登場する妖怪というか、超常現象を起

こす怪物にはボート、イアラ、カイポーラ、ボイウーナ、サシ・ペレレ、マッピングワリなどがある。

男を誘惑する黒髪の人魚イアラ、美男子に化けて娘をたぶらかし、妊娠させるボート（イルカのこと）、大蛇の化身で悪魔の使いのボイウーナ、いたずら者のサシ・ペレレ、動物の守護神で森の精のカイポーラというようにみんなユニークなキャラクターだ。

この中でさっぱりおもしろくないのが、マッピングワリという怪物。容貌についていろいろ言われているが、総合するとゴリラか立ち上がったクマに似ている。

体長は一・八メートル、全身まっ黒い毛に覆われ、手足は太い。大きな一つ目で口は下端が裂けてヘソ迄達している。前肢にも後肢にも極端に内に曲がった巨大な鉤爪をもっている。

棲息場所はアマゾンの原始林、ものすごく力が強く、鉤爪で枝をひっかけ、枝をへし折って木の葉を喰べる。昼行性で夜は活動しないが、人間には恐るべき敵で、鉤爪を打ち込まれ、巨大な口で喰べられてしまう。ただし、喰べるのは頭だけでそれ以外は捨てる。この怪物、やっつけようにも長大な毛の下が鎧のように堅固な皮で保護されているから、矢でも槍でも刃が立たない。唯一の弱点はヘソでここを槍でさされると死ぬか、死なないまでも逃げ出す。

マッピングワリは別に何かに化けるわけでも化かすわけでもない、ただのそのそ森を歩いて、人間を見れば捕まえて頭だけ喰べるというだけの怪物で、芸もなければ可愛気もない。

実はこのマッピングワリの正体は、今から八千年前に絶滅した巨大

哺乳類、地上性ナマケモノのメガテリウムかミロドンであることがわかっている。少し解説してみよう。

現生の哺乳類、貧歯目にはナマケモノ、アリクイ、アルマジロの三科がある。いずれも南米の特産だ。貧歯目は異節目ともいうが、これらの動物の先祖型の大型動物が五千万年前の暁新世中期から南米に出現し、いくつもの種類に分化していた。サイズはさまざまだが概して大きく、メガテリウムなどはゾウほどもある巨大な哺乳類だった。餌はすべて植物性で、太い尾と後肢で体を支えて立ち上がり、鉤爪で木の枝を手繰り寄せて木の葉を食べるのである。

図体がでかいから動作が鈍かった。それに今でもそうだが、ナマケモノの仲間は脳が小さく、知能は余り発達していない。こんな鈍重な大型草食獣が五千万年も生存し得たのは、これを襲う肉食獣がいなかったからである。この巨大な異節目の哺乳類、現世代にもっとも近い更新世末期（二万年～八千年前）までにすべて絶滅する。

さて、この年代に注意していただきたい。今から二万年前から八千年前と言えば、すでにモンゴロイドが氷河期のベーリング海を渡って、新大陸の各地に拡散していた時期である。

したがって、人間と地上性大ナマケモノ、あるいは大アルマジロのグリプトドンは、ある期間この地上で共存していたのである。その証拠はいくらでも見つかっている。

各地の岩絵にもこれら動物が描かれているし、化石も多い。またインジオが落し穴を掘り、そこにグリプトドンを落し、焼いて食べた跡も発見されている。パタゴニアではメガテリウムかミロドンと思われ

る動物の皮さえ見つかっている。これらの巨大異節目動物が何故急に絶滅したかについては二つの説がある。気候変化説と人間による過剰捕獲説である。筆者はこの時期南米の人口が増えているところから、過剰捕獲が原因と類推する。

現生のアルマジロの中には一度に八頭も生む種類がいるが、大アルマジロ（六〇キロになる）は一～二頭しか生まない。グリブトドンもせいぜい二頭が限度だし、大ナマケモノのミロドンはまず一頭だ。繁殖率が悪い上に動作が鈍く容易に捕えられるとなれば人間には狙われる。しかも悪いことに食べてうまいという食味があるのだから、どんどん狩られたに違いない。

地上性の大ナマケモノについては、パタゴニアやアマゾンにはまだ生き残っているという説がある。どこまで信用して良いかわからぬが、マッピングワリを見たというアマゾンの住民もけっこういるし、学者でも生存可能説を唱える人もいる。

現存するかどうかは極めて疑問だが、比較的最近まで最後の生き残りがいたということは事実だろう。ただこのマッピングワリ、人間をとって喰うような物騒なシロモノではない。

もともと草食性なのだから人間を食べるわけがない。逆に人間がマッピングワリを食糧にしていたのである。やはりこの世には人間以上の怪物は存在しない。

世界に放散、古代哺乳類

はなしとしてはおもしろいが、地上性の大ナマケモノがアマゾンの原始林に生存している可能性は皆無とは言えぬにしても、まずむずかしかろう。

一七八九年、アルゼンチンのルハン河畔の土手から見つかった大ナマケモノ、メガテリウムの化石は象はどの大きさがあった。時のスペイン王カルロス四世は送られてきたメガテリウムの化石にいたく感心、是非ともこの動物を生け捕れとの命令を発する。

だが、いかにスペイン王の威令をもってしても無理なものは無理。何年にも及ぶ捜索も効を奏せず、むなしく引き揚げざるを得なかった。

大ナマケモノと較べれば、むしろ大ペッカリーの方が可能性は高い、というかこの方は一九七五年、実際にブラジル国境に近いパラグァイのグランチャコ地方で生け捕られ、飼われたことがあるのだ。これだって生物学上の大発見なのだが、研究者以外にはあまり話題にならなかった。ペッカリーでは巨大な大ナマケモノほどの迫力がなく、どうも魅力に欠けるのである。

ペッカリーは新世界特産の哺乳類、旧世界の猪に外見が似ているが、ほんとうは猪より反芻類に近いペッカリー科タヤスー属の動物。クビワペッカリーとクチジロペッカリーの二種がおり、ブラジルでは前者をカイテトゥ、後者をケイシャーダ、またはタジャスーという。

偶蹄目の哺乳類しては原始的な動物で、発生の記録は四千万年前の漸新世に遡ることができる。現存のペッカリーは、かつて食用と皮革用に大量に殺されたが、繁殖力が旺盛で今のところ絶滅の心配はない。ところで、グランチャコで発見され、生け捕られたペッカリーは現存の二種とは異なる古いタイプで、タヤスー属ではなく、カタゴヌス属のペッカリーなのである。

カタゴヌス属のペッカリーは一万年前には滅びたとされる動物で、アルゼンチンの第四紀更新世の地層から、いくつもの化石が出土している。大ペッカリーと言っても、現存の種とくらべれば大きいという程度。一万年前と言えば、化石年代なら昨日のことだが、それにしても一万年前に滅んだとされる生物が生きてあらわれるというのは大変なことなのである。

ブラジルでは古生物学の研究がさかんではない。もちろん研究者はいるのだが、ブラジルではまず日の当たらぬ学問分野。なによりゼニにならぬ。ブラジルという国全体の性向がそうなのだが、すぐ金儲けにつながる実学は重視しても、基礎学問分野をコツコツ地味に研究する辛棒強さに欠けている。南米の古生物学はアルゼンチンが一番進んでいる。これはパタゴニアなど、南米の端で古生物の化石が大量に発見されるからでもある。だがそのアルゼンチンもアメリカの研究にはるかに及ばない。

また脱線だが、学者による専門的な研究は別にして、一般の人も知的好奇心を常に持っていると視野が開けてたのしくなる。「なんで」「どうして」という、素朴な疑問を持てば良いのだ。

例えば動物で言うと、ブラジルではバク（アンタ）がかなりいる。長い鼻が動く奇獣。奇蹄目バク科で、中南米に三種いる。ではバクは中南米の特産科かというと、これが違う。アジアのマレー、スマトラ、ボルネオにも一種いるのである。マレーバクは身体のうしろ半分が灰色という特徴はあるが、体型も習性も中南米のと同じ。だいいち、分類上から言っても、まざれもなくタピルス属なのだ。

もう一つ言う。アラブ遊牧民におなじみの家畜ラクダは偶蹄目ラクダ科ラクダ属である。南米アンデスのリャマ、アルパカ、グワナコ、ビクーニャはラクダ科ラマ属でどちらも先祖は同じなのだ。

バクは中南米とアジア、ラクダはアンデスとアジア、アフリカ。なんで同じ先祖を共有するのに新世界と旧世界に別れてしまったのだろうか。こういう、小学生でも感じる素朴な疑問が出ればしめたもの。あとは調べればよい。

実は、バクもラクダもその祖先型は、五千万年ぐらい前の新生代第三紀に北米大陸で出現した哺乳類なのである。ただ、このころの南米は北米とつながっていない島大陸だったから、大型の哺乳類が海を渡って南米に移動することが出来なかった。

北米、南米がパナマ地峡でつながるのは約三百万年前で、この橋のおかげで、動物は自由に移動、放散できるようになる。北米原産のバクもラクダもここを通って南米大陸に入ってきた。

北米大陸とアジアはベーリング地峡でむすばれ、氷河期にはかんたんに往き来が出来た。バクもラクダもこうして旧大陸に移動する。ところが肝腎の本家である北米では、二万～一万一千年前の更新世末期

にこれらの哺乳類が絶滅してしまったのだ。種明かしすればこんなところだが、哺乳類の進化の歴史もけっこう壮大である。

Ⅱ　酒と食を考える

宿命的下級酒のピンガ

動物の話ばかりではあきがくる。ここらでひとまず方向転換しよう。

『黒地に白ヌキの頭蓋骨とぶっ違いの大腿骨』とくれば、言わずと知れた骸骨旗、おなじみ海賊のシンボルで、愛称はジョリー・ロジャー（陽気なロジャー）だ。

「降伏せよ、降伏せざるものの運命かくのごとし」という意味の骸骨旗は、これ自身たくまざるユーモアがあるが、骸骨旗、帆船、財宝、ラム酒と並べると、十七、十八世紀の海賊のロマンがうかび上がる。海賊の宝探しを主題とした海洋冒険文学の古典は、なんと言ってもスティーブンソンの『宝島』だろう。一八八三年に発表された小説は、歴史的事実とは違うものの、十八世紀前半のイギリス社会や、船乗りたちの現実を踏まえて書いている。

ところで『宝島』にはラム酒の記述がやたらに出てくる。海賊のことを書けば、ラム酒が登場するのはあたり前かも知れぬが、こんなに沢山出てくるのも珍しい。

なにしろ、のっけから「ベンボー提督亭」へ老海賊があらわれ、

死人の箱にゃ十五人　えんやこらさ

おまけにラムも一瓶さ

残りは酒と悪魔が片付けた。えんやこらさ

おまけにラムも一瓶さ

と濁み声で唄い、ジミー・ホーキンズ少年に「ラム酒を一杯よこせ！」と怒鳴るところからはじまるのだから念が入っている。

この調子で、小説『宝島』にはひんぱんにラム酒が出てくるのだが、よく注意して読むと、ラムを飲むのは海賊などの船乗りだけに限られ、ジェントリー（郷紳）の身分であるトレローニさんや医者のリヴシー先生は、決してラムを飲まない。この人達の飲むのは上等のビールやワインである。

ということは、この時代のラム酒は、安かろう、悪かろうの見本みたいな粗悪品で、とても上流階層の飲みものになるようなシロモノではなかったということになる。

現在のラム酒には「バカルデ」「バッカニア」「ハバナ」「オールド・ジャマイカ」のような銘品もある。が、ラムには労働者用の下級酒というイメージがつきまとってはなれない。

ラムはブラジルではルンという。いろいろなブランドもあるが、なに、種を明かせばピンガの仲間なのだ。ブラジルのカシャッサ、つまりピンガも奄美の黒糖からつくる焼酎も分類からすれば、すべてラム酒。ラムもピンガも本質的な差異はない。ただ、ラムが砂糖キビの絞

り汁を清澄にして発酵させるのに対して、ピンガは濁ったまま発酵させるという違いがあり、ラムよりピンガのはうがややヘビーなのが特徴。

さて、ブラジルのピンガを含め、ラム酒が下級品のイメージを持つのはかつてのラム酒が、廃物利用のカストリ焼酎だったからである。つまり砂糖キビの絞り汁から砂糖をまずとるが、その残りの廃蜜を発酵、蒸留してつくったのだ。これはむかしの日本の安焼酎も同じで、清酒を絞ったあとの酒粕からとる、カストリ焼酎や、清酒づくりに失敗した腐造酒を蒸留した焼酎が出回ったのによく似ている。

カストリ焼酎が、「三方の酒」（土方、馬方、船方）なら、カストリのラム酒も奴隷や船乗り用の安酒である。どちらも飲み過ぎるとひどく悪酔いする。むろんこれは過去のこと。

カストリ焼酎など、もはや日本では探してもないが、ブラジルでは東北部に行くと、家内産業でこれをつくっているところがたまにある。こういうピンガは間違っても飲んではいけない。

さて、このピンガという言葉なのだが、これはサンパウロ州の日系人にとくに好んで使われる言葉で、ブラジル全体からすれば一般的な呼称ではない。むろんピンガでも適用するが、カシャッサとかカニンニャの方がずっと普遍的。異称の多い酒で、細かく数えると百を超す名前があるそうだ。

アグアルデンテやジェリビッタも使用頻度は高いし、東北ブラジルではメール（蜜）と呼ぶことも多い。メールはカストリの場合が多いから要注意。

どんな名前で呼ぼうと中味に変わりはないが、やはり本式には「アグァルデンテ・デ・カンナ・デ・アスーカル」がほんとうで、ラベルにはすべてそう印刷されている。

ラムやピンガが登場するのは、蒸留器であるアランビッケが一般に普及する十六世紀の終りから十七世紀のはじめにかけてである。最初のころは、スペイン領でもポルトガル領でも「カシャッサ」とか「カシャザ」と称していたらしい。ポルトガル領ブラジルでは、カシャッサの名前が今日まで残ったのに対し、スペイン領ではその後、イギリスの船乗りが使ったラムが定着する。語源は騒動を意味するランバリョンだそうだから、悪酔いする酒だったことはたしかだろう。

因みに、アランビッケはオランダ人によって江戸時代日本に入った。日本ではこれを蘭曳という。

日本人に合わぬ一気飲み

ピンガに異称の多いことは既に述べた。カシャッサが正統派だが、ジェリビッタもよく知られている。ただし、この方は廃蜜からつくられた粗悪品である。これは主として奴隷用の安酒。

イギリスもそうだが、かつてポルトガルは、ポルトガル→アンゴラ→ブラジルの三角貿易をやった。商品は砂糖やジェリビッタと奴隷。

まずブラジルから砂糖とジェリビッタを積んでポルトガルに持ち帰る。砂糖を下ろし、ジェリビッタをアフリカのアンゴラに運びこれを売る。アンゴラから奴隷を積んでブラジルに向かう、という順序であ

る。

だから十八世紀の中ごろからブラジルに入った奴隷の中には、既にアンゴラでジェリビックの名前も味も知っているものがいた。こんな酒が良かろうはずがない。

詩人のグレゴリオ・デ・マットスはジェリビッタの質の悪さを皮肉って、次のような詩をつくっている。

AGUARDENTE E JERIBITA
FILHA DE CANINHA TORTA
QUEM A VIDA QUIZER SEMDESDITA
E CONSTANTE TOMAR JERIBITA

こういう韻を踏んだ四行詩を日本語にするのはむずかしいのだが、一応訳しておく。

生命の水ならジェリビッタ
根性曲りのカンナの娘
辛い暮らしを脱れたきゃ
続けてお飲みよジェリビッタ

（註・カンナ＝砂糖キビ）

ブラジルに移住した戦前の日本移民もよくピンガを飲んだ。さすがに粗悪なカストリのジェリビッタではなく、砂糖キビの搾り汁から直接つくるピンガである。ビンで買う人もいたが、樽で買い蛇口をつけることもよくやった。

ビールやウイスキーはまだそれほど出回っていなかったし、それに

高かったから、とても毎日飲むというわけにはいかない。

ピンガの利点はなにより安いことである。世界にはずいぶんいろいろな種類の酒があり、品質も価格もさまざまだろうが、おそらくピンガは安い方ではトップクラスに違いない。それに手っ取り早く酔える。

ブラジルの田舎町のバールで、ブラジル人労働者のピンガの飲み方を観察すると、小さなコップに入れたピンガをちょっとだけ床に垂らし（これは神様の分）、あとは一息にツーと飲み干す。三秒とかからない。

その代わり一回には一杯しか飲まず、金を払ってさっさと出ていく。アメリカのカウボーイがバーボンの安ウイスキーを呷るのと同じ。飲むというより口の中に放り込むといった方がよい。

実はこの飲み方、日本人には向いていない、というか、日本には明治になるまで四十度を超すような強い酒はなかったし、またこういう飲み方はしなかった。

日本酒のアルコール度数は十五度前後、これをチビチビ時間をかけながら飲むのが、日本人の体質に合っている。だからウイスキーや焼酎でも、水割りやお湯割りにして十五度程度にして飲むのが好きなのだ。

たかが酒の飲み方などとバカにしてはいけない。酒文化というのは、どこでもその土地の歴史と風土に培われ、育てられた独特の文化であり、料理文化とも密接に結びついている。

日本の酒は、むかしから多くの人が集まって、宴会で飲むのが基本

である。そしてそこには常に神がいた。いろいろな祭り、祝いの行事など、いうなれば酒は「神と共にたのしむもの」なのである。

神をよろこぼせ、笑わせるために、酒盛りは当然賑やかにやらねばならない。かくて飲めば酔い、酔えば唄い、踊るという宴会形式が定着する。だから、昔の日本の農村の宴会はしばしば猥雑になった。

なにしろ、神をよろこぼせ、農作物の豊穣を願うには男女交歓のしぐさが必要だからである。まあ、宴会の源流は岩戸にかくれた天照大神に出てもらうため、神々が集いアメノウズメノミコトがストリップをやったところからきているのだからやむを得ない。

日本にいる外国人には、花見で日本人が酔い騒ぐ風景など、奇異としか感じないだろうが、あれは満開の桜に豊作、ひいてはすべての仕事の稔りの願望を託しているのだ。

話が脱線した。ピンガに戻る。ブラジルの戦前の日本移民は、ピンガを日本酒を飲むようにチビリチビリやった。だが、アルコールの含有量が四二～四六パーセントと高いから、急速に酔いが回る。

ピンガで身体をこわした日本人はずいぶん多い。それにどういうわけか、ピンガという酒は、アルコール依存症、つまりアル中になりやすい酒なのである。『移民の父』と言われた上塚周平も完全なアル中だった。

しかし、ピンガの一番の被害者はブラジルのインジオだろう。筆者はインジオ滅亡の一因はピンガにあると思う。インジオはピンガに対する耐性が極端に弱く、すぐアル中になる。

どうやらこれは、インジオがモンゴロイドであることと関係のあるら

しいことが、最近の研究でわかってきた。

ピンガ禍、インジオに蔓延

インジオはピンガに耐性がないと言ったが、酒に無縁だったわけではなく、自分達の伝統的な酒は持っていた。この酒をブラジルのインジオはカウインと言った。原料はマンジョカ（キャサバ）、サツマイモ、トウモロコシなどである。アンデスのインカ系インジオは、トウモロコシやジャガイモからつくる酒をチッチャと言い、今でもこの言葉は使われている。パラグァイ河沿岸のインジオもチッチャを使う。インカ系インジオの影響を受けているのだ。

カウインの原料のうち断然量の多いのはマンジョカである。しかし、酒にしたのは主食にする毒マンジョカ（ビターキャサバ）ではなく、毒のないアイピン種（スイートキャサバ）の方。

製法は原料のイモをゆでて柔らかくし、これを噛んで吐き出して容器に溜め、唾液のアミラーゼ酵素でイモのデンプンを糖化し、発酵させるやり方。世界のどこでも初期の段階で行われた口嚼酒。

噛んでいる間に多少はのみ込むだろうから、青酸配糖体を含有する毒マンジョカは使えない。それに甘味種のアイピンを使った方がよく糖化させやすく、多少ともアルコール度数の高い酒が得られるのだ。世界のどこでも同じだが、原料を噛んで口嚼酒をつくるのは未婚の処女の役目だった。

日本でも古事記にある、木花咲爺比売が米を噛んで酒を醸したの

が、日本酒のはじめとなる。唾液のアミラーゼは未婚の処女でなくても誰でも持っている。だが口嚼を未婚の処女に受け持たせたのは、時の古今や人種を超越した、男性の普遍的な美的感覚だったと思われる。清純な乙女の醸した酒なら、天与の美禄と珍重もしょうが、シワ深き老婆がくちゃくちゃやった酒は（むむむ……）となるのは自然の摂理、なんともやむを得ない。

ま、それはともかく、こうして発酵させてつくる酒がカウインである。分類からいえば醸造酒なのだが、日本酒のように麹を、ビールのように麦芽を用いるわけではなく、唾液のアミラーゼだけでデンプンを糖化、発酵させた酒だから、アルコールの含有量はうんと低い。

筆者は何度かカウインを飲んだが、恐らくアルコール含有率は三〜四パーセント程度かと思われた。これを酔っ払うほど飲むのは、アルコールに耐性を持つ文明人にはちょっと無理。アルコールを分解する速度のほうが早いのだから、そうかんたんに酔えるものではない。

ただ、カウインを蒸留したカシリなら、アルコール濃度が高いから酔いもするが、これは文明人が蒸留器のアランビッケを持ち込んでからのもの。一般に普及したわけではなかった。

もちろん、インジオは他の原料からも酒をつくった。ブドウがないからワインはつくれないが、甘い果実が豊富だったから、天然の酵母で果実酒ができた。カカオ、ジェニパッポ、マンガベイラの果汁は固有の酵母ですぐに発酵がはじまる。

このほか、蜂蜜からもつくったし、ブリチー、ミリチー、バカバ、パタウア、ツクマン、ババスーなど、ヤシ科植物の花序からでる糖液

を発酵させる樹液酒、いわゆるヤシ酒も利用していた。
ブラジルはフローラ（植物相）が豊かだからけっこう果実酒、樹液酒も種類は多い。ところが天然の酵母のよる発酵だから、いずれもアルコール分は四パーセントを超えない低濃度酒なのである。
これでもアルコールに弱いインジオはけっこう酔っ払った。この程度の酔っ払いなら大した問題は起きないのだが、ここへジェリビックのような、粗悪な、しかしアルコール度数がやたらに高いピンガが流入したからたまらない。これでインジオの伝統的な社会構造がひっくり返ってしまった。
アル中は続出、人格の崩壊、勤労の放棄、規律の無視、酋長への不服従、道徳の乱れ、犯罪の多発が、あっという間に蔓延してしまった。
現在ブラジルではインジオにアルコール飲料を売るのを禁止している。さすがにブラジル政府もピンガ飲酒による、インジオ社会の荒廃にびっくりし、あわてて禁令を出すのだが、既に手遅れ。
禁断のピンガを知り、手っとり早く酔うことを覚えたインジオは二度と手間のかかるカウインづくりをすることはない。
先年、パラー州奥でカヤポー族の酋長が白人？　の未成年子女を強姦して問題になった。酔った挙句のことであるが、インジオのアルコール依存症は今や深刻な社会問題なのである。
ピンガがインジオ社会に与えた災厄は、現存の文明社会における麻薬よりひどい。どうしてインジオにこれだけアルコール耐性がないかは、文化、社会的問題よりも、人種的、身体的な理由がありそうだ。現在有力なのは、インジオ

には生まれつき、アルデヒド脱水素酵素欠損症で、アルコールを速やかに分解する能力を持っていないという説である。

風土により違う酒文化

どうも酒の話になると熱が入って、なかなかやめられぬ。もう少しお付き合い願いたい。

ブラジルに移民した日本人は、醤油や味噌を現地でつくることによって、まがりなりにも日本食を食べることが出来た。そこは百姓移民の強味で、大豆など自分で栽培すればよいのである。

しかし、酒はそうはいかない。ワインと違い、日本酒はかんたんには出来ない。設備投資も大きいし、原料の米、水や温度管理などの条件もむずかしい。技術的にも相当の熟練とカンを要する。

となれば、百姓移民にはとても手が出せない。日本酒は昔から専門家の手になるもので、一般の人が家庭でつくれるようなものではないのだ。

ふだんはピンガを飲んでいる日本移民だが、日本酒に対する思い入れは相当なものだったから、それを当てこんで、日系の雑貨商が日本酒を輸入することもあった。

むろん高い酒につく。それでも郷愁にかられて移民が買い、貴重品扱いで友人、知己を集めて日本の酒を味わってみるわけだ。そしてそのあまりのまずさに一同「日本の酒はこんなにまずかったのか」とがっかりするのが通例だった。なに、日本酒がまずいわけではない。

船で赤道を越え、二カ月もかかってブラジルに着くまでに酒が劣化するのである。おまけに到着してから移民の口に入るまでにまた何カ月もかかるのだから、日本の日本酒とはまったく違うシロモノになる。

これは現在でも基本的には同じ。日本酒に限らず、ビール、ワインも同様だが、アルコール度数の低い醸造酒は、赤道を無事に越すことが出来ないと言われている。

現在はすべてコンテナーを使うが、保冷コンテナーは別として、船で運ぶと赤道付近ではコンテナー内の温度が五十度近くに上昇する。これでいっぺんに品質が落ちてしまう。もちろん飛行機なら問題はない。お土産に一升ビンを抱えてくる分には、品質の劣化はおきない。まあ、余計なお世話なのだが、飛行機で持ち込んだ日本酒でも、なるべく早く飲んでしまった方がよい。

それに、このごろはブラジル産の日本酒もかなりいける味になってきた。ブラジル生れの日本酒も歴史は相当古いのだが、風土が合わないのか、水が悪いのか、あるいは技術的な問題なのか、とにかくあまり出来の良いものでなかった。

「東麒麟」という、名前はなかなかのものだが悪酔いして頭にくるので「アタマ麒麟」の異称があったくらいだ。ところがこの五、六年ぐらいですっかり面目を一新、旨い酒になってきた。

生酒など、きりりと冷やして飲むと、ブラジルの気候に合って大変結構な味だし、最近出た吟醸酒は、麹の匂いがきつすぎると文句を言う人もいるが、やはり格段に旨い。

このごろサンパウロなどでは、日系以外のブラジル人もけっこう日

本酒を飲むようになってきた。見ているとすべてマス酒である。
メーカーの販売戦略で、もの珍しさと異国情緒を狙ったものだろうが、実際はマス酒など飲みにくくて仕方のないもので、小ぶりのコップに注いで飲む方がずっと良い。
まあ、それはどうでも良いのだが、ブラジル人が日本酒を飲むのを見ていると、飲むスピードの速いのに驚かされる。女でもぐいぐい飲む。あの飲み方は日本の女はやれない。酒文化が違う。
このごろは日本の女性も一人で酒場に行って酒を飲むのが増えてるそうだ。美空ひばりの「悲しい酒」のように、失恋だか想い出だか知らぬが、情緒的感慨に浸りたい時もあるのだろう。
こういう時に飲む酒はウイスキーやジンはだめ、ピンガなどはもってのほか。こうした場面にぴったりの酒は日本酒以外にない。それも飽くまでゆっくり、静かに飲む必要がある。
この場合、ピンガのぐい飲みでもやったら、しっとりした情感どころか目がぐるぐる回り出し、十分ぐらいでひっくり返ってしまう。やはり日本の風土には日本酒が合っているのだ。
演歌の世界も日本酒だ。そういえば、演歌でうたわれる女性は、どうして恋に破れると北国とか日本海に行きたがるのだろう。どうせあてのない旅をさすらうなら、明るい沖縄にでも行って泡盛でも景気よく飲めば良さそうなもの。
それよりいっそのことブラジルのカーニバルで汗を流して踊りまくり、豪快にカイピリンニャでも飲んだ方がストレス解消になるかもしれない。まあしかし、出来ないでしょうな。日本の風土では恋愛作法

も失恋作法も決まっていて、その枠からはみ出せない仕組みになっている。

「哀しみ本線日本海」のように、失恋すれば日本海に行き、雪とか波とかカモメを眺めなくてはいけない。そしてこの時に飲む酒は日本酒に決まっている。間違っても沖縄やハワイやブラジルに行ってはいけないし、ピンガを飲むのもご法度。

名前が混乱しているジャカランダ

サンパウロの日系婦人がつくっている会に「ジャカランダの会」というのがある。今もあるかどうかは知らぬ。が、以前はたしかにあった。どういう性格の会なのか、当方まったく知識なし。

ただ、新聞にジャカランダの会と出る度に（どのジャカランダなのだろう）と他人事ながら気にかかった。まあ、女性の会なのだから、おそらく青い花の咲くジャカランダとは思うのだが、なにしろこの名前を持つ植物は数が多い。細かく数えれば、五、六十種は超えるに違いない。しかし科は、マメ科パピリオ亜科とノウゼンカズラ科のいずれかである。

ジャカランダはツピー・グワラニー語だが、厄介なことに特定の植物を指す固有名詞ではない。

語義はイアーカンールーアンタンで、心材の堅い木の意味になる。

ジャカランダは五、六十種あると言ったが、通常知られているのは、歴史的にもよく知られた銘木と、青い花をつける、庭園樹、街路

樹で有名なジャカランダの二種。

銘木の方はマメ科パピリオ亜科ダルベルジア属。バイア州に産したジャカランダ・ダ・バイアは特に世界的に知られていた。英語名は言わずに知れたブラジリアン・ローズウッド。

紫檀、黒檀に優るとも劣らぬ最高級銘木、この木でつくられた家具、什器、楽器は好事家の垂涎の的だった。ことにこれでつくられたピアノは、音の響きの良さで演奏家に珍重されたもの。ただ、今はむかしの物語り。幻の銘木となってしまった。

バイアからエスピリト・サントの海岸山脈に多かったこの木は、徹底的に伐り出され、現在はほとんど蓄木は皆無。十九世紀の初頭まで、ジャカランダといえばその木と、その類縁種のことだった。他の地方名では、カビウーナ、ジャカランダ・カビウーナなどとも言う。

ところが十九世紀のはじめに南米を訪れ、オリノコ河やアマゾン河上流地方を調査した、ドイツの博物学者フンボルトが、現地名でカローバ・グワスーと呼ばれている青い花をつけるノウゼンカズラ科の高木にジャカランダ・アクテフォリアの学名をつけてしまった。ややこしいことをしたものである。現在までジャカランダの名前が混乱しているのは、フンボルト先生の命名に起因している。銘木の方のジャカランダを植物学者のフンボルトが知らぬはずはないのだが……。

とにかく、これで青い花をつける木もジャカランダと称する市民権を得てしまった。なによりこちらの方は学名にジャカランダがついているのだから強い。今では一般名もジャカランダで、世界に通用している。もっともフンボルト先生にも一理はあるので、この木の外側の

辺材は柔らかくてすぐ腐るが、心材は濃い褐色で堅く、旋盤細工にも使えるのだ。しかし、材としては銘木のジャカランダの足もとにも及ばない。

この、科の違う二つのジャカランダ、樹の姿が優雅であることは共通している。枝の張り具合といい、葉が二回羽状複葉になっているところといい、よく似ている。ただし、銘木の方は青花ではなく白い花。青い花のジャカランダは、外国でも珍しがられ、一八四五年にはじめてイギリスに植えられたのを皮切りに、世界の各地で植栽された。

この木は冬から早春にかけてすべて落葉し、裸になる。そしてブラジルなら十月、青葉に先立って一斉に花を咲かせる。桜も同じことだが、これが見事なのである。

イギリスのような寒い国では戸外の越冬が出来ないから無理だが、エジプト、小アジア、オーストラリア、マディラ島、アルゼンチン、南アフリカ、ハワイ、フロリダなどではよく咲く。

とくに見事なのは、南アフリカ共和国のモザンビークや隣国ローデシアのソールスベリーの町に植えられたジャカランダの街路樹で、これは本家のブラジルよりはるかに立派。そのため、世界ではジャカランダはアフリカ南部が原産、と思っている人が結構いる。

おもしろいことに、今や世界中で通用するジャカランダの名称なのに、本家のブラジルは街路樹や庭園樹として、人工的に植栽されている都会地以外、ジャカランダの名称は使われない。

つまり、山野に自生している青い花を咲かせるジャカランダ属の植物は、どんな種であれインジオを含めた土地の住民は、すべてカロー

バの名称を用いる。彼らにとってジャカランダはマメ科の銘木以外はないのである。

カローバもインジオ語で、カア（植物）ローバ（苦い）。樹皮が苦く、薬用として腎臓炎、膀胱炎などの非尿器疾患に良く、昔は梅毒、淋病などの性病にも用いた。葉はあらゆる皮膚病に良く、ジンマシンの特効薬でもある。とまあ、これは筆者の専門分野だから良くわかる。街路樹のジャカランダも使えぬことはないが効力が弱い。自生のヒネたカローバが一番良い。

含蓄に富む植物名の雅語

一世移民は激減しているのに日本語新聞の文芸欄を相変わらず賑わしているのが俳句や短歌である。それも結構うまい作品が載っている。こういう短詩型の文芸は、一世移民の手がるな趣味として合っているのかも知れぬ。

ただ、季語や動植物名その他固有名詞にブラジル語が混じる場合がかなりあるから、日本の日本人には意味のわからない作品が出てくるのはやむを得ない。イペー、ジャカランダ、クァレズマ、パイネイラあるいはパイナは知名度が高いのでそのまま使うか、カタカナでわかりにくいものは、火焔樹とか鳳凰樹とか猩々木とか漢字で雅語をつけることもある。

クァレズマは四旬節のこと。この時期にとくによく咲くノボタン科の花木はクァレズメイラがほんとうなのだが、これでは字余りで使い

にくい。この植物、日本名もあって紫紺野牡丹というがこれも長すぎる。さきごろサンパウロ新聞の俳句欄に出ていた

牛蹄花老はなんでも薬にし

の句には思わず唸った。正直言ってあまり出来の良い句とは思えぬが、これは一世移民でなければつくれぬ句。パッタ・ダ・バッカ（雌牛の蹄）の名前をもつマメ科ハカマカズラ属の樹をブラジルの俳句の世界で牛蹄花と言うとは知らなかった。ほんとうは葉が牛蹄状に分かれているのだから、牛蹄花より牛蹄木、牛蹄樹の方が正しいのだろうが、そこはうるさく言うまい。

ブラジルでは街路樹として植えられている木で、色はさまざまだが、かなり大きな見事な花をつける。この花、一見するとランに似ているので英語ではオーキッド・トリーという。

さて、ここから少々嫌味っぽい、衒学的な解説をする。このハカマカズラ属の植物は、世界の熱帯、亜熱帯にたいへん種の数が多く、二百種を超す。街路樹に植えられているのはブラジル原産でなく、東南アジア産。この木は地理的に近い中国にも入っているが、調べたら中国名で羊蹄甲の名前がついていた。おもしろい。牛蹄花と羊蹄甲、どちらがすぐれ、どちらが劣るというものではあるまい。人間の発想などはどこの国でもそう変わりはないのである。

この木の牛蹄、羊蹄状の葉はブラジルでは薬用、とくに糖尿病の特効薬として知られている。だから「老はなんでも薬に」するのである。折角そう信じているのに水を差すようで申し訳ないのだが、街路樹の牛蹄花は薬用にならない。

薬用になるのは同じハカマカズラ属でも、ブラジル原産の荒れ地などに自生している別の種。小灌木で、ひねこびており、鋭い棘がやたらについている悪木の方。葉は牛蹄状だが、うんと小さい。花は白のみ。もちろんこの木もパッタ・ダ・バッカという。これは効く。

この薬用になる方の牛蹄花と同じ場所にオジギソウも生えている。ネムリグサともいう。刺激によって複葉が閉じ、葉柄が下がるマメ科ミモザ亜科オジギソウ属の低灌木。ブラジル語でもドルメ・ドルメ、センシチーバ、ベルゴニャ、プドール（羞恥心）という。中国名は含羞章。

含羞草とは良い名前で、これも俳句に使えそうではないか。ブラジル原産。日本に入ったのは意外に古く、一八四二年、天保年間にオランダ船が持ち込んでいる。熱帯のブラジルでは多年草だが、日本では越冬できないから春播きの一年草となる。

ピンクの球状の可憐な花と恥ずかしそうに葉を閉じる性質が珍しがられ、どこの国でも乙女の羞いに見立てた名前をつけるのだが、ブラジルは上記のほかに、マリシア・ダス・ムリエーレスの名称があり、地域によってはこの方が多用されているのには驚いた。〝女の悪だくみ〟の意だから〝乙女の羞い〟とはまさに正反対。なんでこんな名前がついたのだろうといろいろ当たったら、これは花や葉の形状や特質ではなく、薬効からきていることがわかった。

この植物、薬用になる。精神安定、睡眠、血尿、解熱に良く、肝臓諸病、腸内ガスにも効能がある。外用して丹毒や皮膚の腫瘍にも良

い。ただこの薬草、毒性が非常に強く、極く微量を用いないと危険なのである。ちょっとでも量が多いと猛烈な下痢を起こし、それ以上だと死ぬことさえあるのだ。甚だ扱いのむずかしい生薬で、シロウト療法は絶対禁物。

ところがこの生薬には以上に述べた薬効のほかに、服用すると男性のペニスが勃起し、それが持続するという奇妙な現象が起きるのである。医学用語ではプリアピズムという。海綿体が充血するのだ。〝女の悪だくみ〟というのは、加齢によって性機能の衰えた男性をふるい立たせるため、生命の危険を承知で女性が男性に一服盛るところから由来している。

よたばなしではない。オジギソウの葉や根でプリアピズムの起きることは、薬理的にも証明されているのである。危険だからくれぐれもいたずら心を起こさぬこと。女性も男性もである。

根強く生きているゴマ文化

『ゴマの来た道』という本（小林貞作著、岩波新書）がある。アフリカ原産のゴマが、いつごろから、どのようなルートで世界に広まっていったかを解説した本で、たいへんおもしろかった。

これによると、ゴマという油料植物の栽培の歴史は非常に古く、既に紀元前三世紀には出現して利用されていた。ただし、新大陸のゴマの導入はもっと新しく、十六世紀以降に、アフリカの黒人奴隷によって持ち込まれたものだそうだ。この時ブラジルに持ち込まれたゴマの

野生種が現在もあって、これをセザムン・ブラジリエンシスという、と書いてある。（へえー、そんなゴマがあったかな……）と思って調べたら、これがちゃんとある。

ブラジル名をジェルジェリン・ド・ブラジルというから、まさにブラジル胡麻。リオから南バイアの海岸地方で栽培されたこともある。このゴマ、一時はブラジル原産ではないかとも言われたが、結局、黒人奴隷がアフリカから持ち込んだゴマであることが判明して、一件落着した。

現在でも野生種化したこのゴマは、アマゾン以外の各地に散らばっている。ところが、ふしぎなことにブラジルには現在ゴマの栽培がほとんどないのである。

むろん、中国、韓国、日本系のコロニアが自家用に消費する程度のゴマは、日系農家でつくられてはいる。しかし、量的には微々たるものだし、それに伝播したルートが違う。

東洋のゴマ文化は、原産地のアフリカから永い年月をかけて、地中海沿岸、オリエント、東アジアと拡がるうちに形成されたもの。現在のブラジルのゴマは日本人移民が持ち込んでいる。

これはこれで理解できるのだが、それでは黒人奴隷が持ち込んだ、アフリカ直来のゴマの方はどうなったのだろうか。実はこちらのゴマは、アフリカから持ち込まれたもう一つの油料植物である油ヤシ（オイル・パーム、デンデ椰子）との競合に負けたのである。ゴマも油ヤシも同じ油料植物であるが、収量に天地の差がある。

ゴマはあの小さな粒だが、油ヤシの果穂（果房）は長さ一メートル、径二〇センチ、重さ六〇キロで、この中に約一千個の果実がびっしり入っている。果実の中果皮は五〇パーセントの油分を含み、これを圧縮してパームオイルをとる。とにかく、この油ヤシは数多い世界の油料植物の中でも、単位面積当たりもっとも油がとれる植物なので、ゴマなどはまったく勝負にならない。

では、パームオイルの圧倒的優勢に押されて、ゴマの方は消えてしまったのだろうか。しかし、食文化というのは根強いものであるから、アフリカで培われたゴマ文化が、ブラジルに来たからと言って、そうかんたんに消えるはずはあるまい。そう思って、いろいろ探したら、これが見つかった。こういう理詰めの推理で、目指すものを見つけた時は（やっぱりあったか……）と、ばかにうれしくなる。マラニョン州の名物料理〝アロース・ダ・クシャ〟がそれである。この料理、カレーのようにどろどろしたものを、ご飯と混ぜて食べるのだが、まっ黒なソースで見ためにはよくない。

しかし、食べるとうまい。つくり方を紹介してみよう。どんな味かの見当はつくと思う。

（材料＝五人分）

干しエビ半キロ、ゴマ小コップ一杯、マンジョカ粉コップ二杯、ビナグレイラ（アオイ科のローゼル）の若葉百枚、トマト、玉ネギ、黄色粒トウガラシ、コエントロ、塩、各適量。

（つくり方）

まずゴマをフライパンで煎る。煎ったゴマを干しエビのむき身、マ

ンジョカ粉、玉ネギ、トマト、トウガラシを加えて、粉々に搗き砕く。ビナグレイラもみじんに刻み、磨りつぶす。

深鍋にすべての材料を入れ、香辛料と水を加え噴きこぼれないように注意しながら、木杓子でかきまぜて煮る。出来たら白いご飯にかけ、カレーのように混ぜて食べるだけである。

ゴマの香り、エビのうまみ、ビナグレイラのさわやかな酸味が混然一体となった、うれしい味。

この料理はアフリカのギニア地方のもの。むかしはキビの粉を使ったが、今ではブラジル同様、マンジョカの粉を用いるのかも知れない。

ビナグレイラはキャーボ（オクラ）と同じ、ハイビスカスの仲間で、どちらもブラジルへはアフリカ黒人が持ち込んだもの。日本移民はこれの蕚を塩漬けにして梅漬けの代用にした。

日本移民がつくった、代用日本食中のけっ作で、梅干しや梅漬けが容易に入手できるようになった現在でも、愛好されている。梅とは違う別の風味を持っているからだ。

きれいな鮮紅色で、染色力も強いから食品染料になる。蕚はペクチンを含んでおり、ジャムにもなる。ところがこのアントシアンという色素は熱に弱く、光にも弱い。アルカリにあうと青くなる性質があって不安定なため、比較的用途は限られている。

原風景にはないココ椰子

青い海に白い砂、それに生い茂るココナツ林と言えば、バイアをは

じめとするおなじみ、ノルデステ（東北ブラジル）の海岸風景。実際、ココヤシの林とココヤシの未熟果の、やや甘味のある飲料水を売るココヤシ売りは、ノルデステの風物詩であり、これのないノルデステの海岸などおよそ考えられない。

「ブラジルを発見したペドロ・アルバレス・カブラルがバイアの海岸に到着した時に見たものは、まっ白な海岸の砂と、亭々と聳える緑のココヤシ林で、この白と緑が青い海と鮮やかなコントラストを見せていた……」

と書けば、ブラジルの原風景になりそうなものだが、残念ながら事実は違う。カブラルは一本のココヤシも見なかったはずである。ココヤシはブラジル原産ではなく、東南アジアのもの。ブラジルには一五五三年に、ポルトガル人がインドから持ち込んだ。島崎藤村の〝椰子の実〟は、黒潮に乗ってはるばる日本の海岸に漂着したのだが、海流の方向が違うから、東南アジアのヤシの実が、大西洋である南米東海岸のブラジルに漂着する可能性はまずない。

一五五三年と言えば、ずいぶん早い時期に移入されたもの。最初バイアの海岸で植栽されたから、ブラジルではこのヤシのことをココ・ダ・バイアという。以後、海岸地方の熱帯気候に適応、どんどんふえていく。ココヤシの成長限界は、南北ともに二十五度の緯度である。したがって、ブラジルの場合、パラナ州以南はだめだが、その他の地方ならすべて生育の適地となる。

ついでに言っておくと、三千種ある世界のヤシ科植物のうち、ココヤシ亜科は六百六十種を数える。このほとんどが中南米原産なのに、

ココヤシだけ旧大陸熱帯産という、変り種だ。

現在、栽培面積はブラジル全国で二〇万ヘクタール、ココナッツの生産は約七〇万トン。むろん多いのはバイアから北の、東北ブラジル海岸地方。用途は工業用油脂原料が主。海岸で観光客が飲むココナツ・ウォーターなど、量的に知れたもの。

ココナツの実は、成熟過程によって利用のしかたが違ってくる。飲用にするココナツ水は未熟果の胚乳液、ブラジル語でアグア・デ・ココ・ベルデと言う。一果に平均五〇〇ｃｃぐらいの液体が入っている。多少青臭いから嫌う人もいるが、慣れれば別にどうってことはない。しかし、飛びきりうまい飲料というわけでもない。飲み終ったあとの未熟果を割り、内側についている脂肪層を食べることもある。これもあまりうまいものではない。

成熟すると水はなくなり、脂肪層が厚く、固くなる。これを削って搾ったのがレイテ・デ・ココと呼ばれるココナツ・ミルクで、東北ブラジルではあらゆる食べものに調味料にする。

まあしかし、工業的な脂肪原料として重要なのは、脂肪層をはぎとり、乾燥させたコプラの方で、油、マーガリン、石けん、ロウソク、ダイナマイトなどの工業用途などに多用される。

コプラだけで石けんが出来るわけではないが、コプラを入れると泡立ちが良くなるのだ。ブラジルではコプラ入りの白い洗濯石けんをサボン・デ・ココという。日本人でも主婦なら誰れでも知っている。普通の石けんより高い。ブラジルでココヤシ油を食用油に用いることは

今はない。この油、温度が二十度以下になると白く固ってひどく使いにくい。それに、この地方には例のアブラヤシのデンデ油があるから、使いにくいココヤシ油などいらないのである。

ココヤシで賞用されるのは食品調味料としてのココナツミルク。そしてこの味がパームオイルのデンデ油と並んで、ノルデステ地方、とくにバイアの独特な味となる。

ただし、この味、どちらも日本人の味覚には合わない。パーム油は栄養価は高いのだが、一種とくべつな異臭がある。それにこの油、採取後、直ちに油を搾らないと酸価が上昇する性質を持っている。おそらく昔の奴隷は今よりもっと臭い油を使っていたに違いない。ココナツミルクも日本人にはダメ。バイア料理はシーフードが得意で、魚、エビ、カニ、貝などを多用する。ココナツミルクで煮て、各種のスパイスを加えるのだが、日本人十人のうち、九人までがうまいと言わない。

それでもシーフードは材料のうまさで、なんとか一度ぐらいは食べられるが、ご飯をココナツミルクと砂糖でどろどろに煮て、ニッケイの粉末をかけた〝アロース・デ・ココ〟はいけない。

見た目はお粥と変りないのだが、こういう食べものは日本人には生理的にあわないのだ。これはもともとアラブの食べもので、ココナツの代りに山羊の乳を使った。後にはポルトガル人の大好物にもなっている。米の飯に牛乳と砂糖をかけるという発想は日本の食文化にはない。しかし、これを好む日系人子弟も結構いるから、食文化は環境によって変るものと見える。

奴隷の逃亡は食事も原因

逃亡奴隷のかくれ里をキロンボという。アフリカの言葉だ。黒人奴隷の輸入がふえはじめた十七世紀には、逃亡奴隷も続出、各地でキロンボがつくられた。

ブラジルは広いし、地方総督の持つ軍隊もそう数が多いわけではない。また、逃亡奴隷の捕獲体制が後のように整備されていないから、一旦奥地に逃げられるとなかなか捕らえられない。

奴隷の逃亡は、むろん強制労働、虐待、拷問、人権無視に対する抵抗であり、自由を求めての闘争であることは間違いない。だが、それ以外にも食事への不満が大きく影響していた。

言うならば食いものの恨みである。実際、この当時、奴隷の食事は劣悪だった。もっともパトロン自身も、大したものを食べていたわけではない。

砂糖キビの栽培は、世界のどこでもモノカルチャー(単作栽培)で、はかの作物は一切つくらない。儲かる砂糖キビだけをつくるのだ。パトロンは黒人に自家菜園さえつくらせなかった。

菜園にかける労力と時間を惜しんだのである。これでは黒人はたまったものではない。それにアフリカ黒人は、もともと農耕民族なのである。かくて黒人奴隷の逃亡がはじまる。

十七世紀中ごろまで、ブラジルに入った奴隷は西アフリカ出身のスーダン系黒人だった。これが時代が下がると共に、ポルトガルの奴

隷商人は、イギリス、オランダの商人に押されて南下を余儀なくされ、アンゴラ、コンゴ、モザンビークなど、バンツー系黒人を手がけるようになる。

だから奴隷貿易の終り近く、サンパウロ州奥地のコーヒー農園に入った黒人は、そのほとんどがバンツー系である。

本来、スーダン系、バンツー系に優劣の差があるわけではない。ただ、スーダン系は地理的にイスラム文化圏に近いため、イスラム文化がかなり浸透していた。中には、例外的かも知れぬが、イスラム語の読める黒人もいたのである。それにスーダン系諸部族が居住した地域は、西アフリカ大陸第三の大河、ニジェル河流域に当っている。この河は現在のマリ国のガオ付近で大きく南東に湾曲して、ニジェル、ナイジェリアを貫通してギニア湾に注いでいる。

この湾曲部が雨季に氾濫し、広大な面積の内陸デルタを形成して、絶好の農耕適地となる。こうしてニジェル河流域の農耕文化が発生した。紀元前五千年〜四千年というから歴史は古い。

ついでにむずかしいことを喋ってしまうと、これを最初に発表したのは、アメリカの人類学者マードックで、マードックは「スーダン農業文化総合説」を唱え、ここに二十四の栽培植物のあったことを指摘している。また、日本の中尾佐助博士も、名著『栽培植物と農耕の起源』の中で、二十四の栽培植物のすべてを認めているわけではないが、マードックの説を全面的に支持している。

前置きが長すぎた。まあ、要は、ニジェル河流域のサバンナ農耕を身につけた、スーダン系黒人が、初期の東北ブラジルに入れられたと

いうことである。

この黒人奴隷が、どん欲なパトロンの支給する劣悪な食事に堪えられるわけがない。堪えられなければ逃げ出すより方法がない。十七世紀のキロンボ形成には、こうした背景がある。

各地のキロンボのうち、一六三〇年から一六九四年まで、六十年以上も続いたパルマレス黒人王国の存在は傑出している。規模も大きく、小屋の数千五百軒、住民は一万人を超えた。場所は現在のアラゴアス州とペルナンブコ州の州境付近。

この黒人王国で採用された農業体制は、もちろん、彼らの故郷で完成させたサバンナ農耕文化。

かなり高度の複合農業体制である。ここで黒人は、アフリカから持ち込んだゴマ、デンデ椰子、ココヤシのような油料作物、ササゲ、バンバラ豆、モロコシ、トウジンビエ、スイカ、ヒョウタン、キャーボを植えた。ヒョウタンは食用ではなく容器である。

ブラジルの食べものもインジオに教わって積極的にとり入れた。マンジョカ（キャサバ）、フェイジョン（菜豆）、ヤマイモはもちろん、東北ブラジルに多い、カジュー、カジャ、シリグェイラなど、付近に豊富にあった熱帯果樹も利用した。

キロンボのパルマレス王国でさかんに栽培され、滅亡後もここから全国的に拡がった果菜にキャーボがある。オクラ、ゴンボ、キンゴンボ、ガンボなど、いくつもの言葉があるが、すべてアフリカ語。場所と部族により、名称が違っているだけ。日本には第二次大戦後に入った新しい果菜だが、気の遠くなるほど古い歴史を持っている。碩学カ

マラ・カスクードによると、ピラミッドを築く以前のエジプトのファラオも食べていたのがそうだ。永らくアフリカ原産と思われていたが、最近の研究ではインド北部が原産らしい。しかし、ブラジルへはアフリカ黒人が持ち込んでいる。

伝統作物でない〝シュシュ〟

キャーボ（オクラ）のことを、英語でちょっと格好つけて、レディスフィンガーということがある。アメリカのキャーボの大きさは知らぬが、たしかに日本の市場に出ているものはせいぜい四、五センチどまりだから、レディスフィンガーの名称もうなづけぬことはない。

だが、ブラジルのはそうはいかない。それでもサンパウロの市場に出ているのは比較的小さいのだが、暑い内陸部の低地に行くと、ものすごく大きくなり、中には三〇センチを超すようなのがある。こうなると、同じレディスフィンガーでも、ガリバー巨人国の女性の指である。こういうバケモノみたいなキャーボは筋ばってうまくないと思うかも知れぬ。案に相違し、適期に採った未熟果は柔らかくてうまい。

料理というほどのことはないが、黒人が好んだキャーボの食べ方を二つほど紹介しよう。

一つはキボンボで、キャーボをパームオイル（デンデ油）で揚げ、これを圧しつぶし、マンジョカ粉をまぶして食べるかんたんなもの。

もう一つはキャバーダで、キャーボを適当な大きさに切って油でいため、エビ、魚、玉ネギ、ニンニク、コエントロで味つけする。これ

をマンジョカの粉か白ご飯でたべるのである。

キャーボのような、どろどろというか、べたべたしたものはブラジル人の好みに合わない、と思いがちだが、そうではないので、キャーボはどんな田舎町のマーケットにも売っている。これが日本式だと、さっと茹でて刻み、かき回してとろ味をつけるオクラ納豆や、酢のもの、サラダ、汁の実、天ぷらなどだが、なるほど同じ材料でも食文化の違いで、食べ方はまったく違ってくる。

さて栽培植物は人間の移動によって新しい土地に入ってくるのが原則。ブラジルに入ったアフリカの栽培植物も、ほとんど黒人奴隷と共にもたらされたもの。

逆に、人間の往き来がないと、地理的に近いところでも、栽培植物が伝わらないことがある。中米、あるいは西インド諸島原産のウリ科植物、シュシュがその例。

このウリ、おもしろいことにチャヨテとかチョチョとか原産地の呼称が、そのまま世界のどこでも使用されている。ブラジルのシュシュもチョチョからの転用だ。

ただ、これには例外もあって、日本だけはハヤトウリ（隼人瓜）の名前を使う。一九一六年、矢神という人がアメリカから種子を導入して試作したものを、薩摩の島津隼彦が栽培し、更に広めた。

薩摩隼人と島津隼彦の両方をひっかけた命名でうまい名称だとは思うが、ちょっと出来すぎの感じがしないでもない。このシュシュ、筆者はインジオ時代には既にブラジルに入っていると思っていた。ところがいくら探しても、シュシュのツピー語が出てこないのである。

ふしぎに思ってよくよく調べたら、ブラジルに入ったのはやっと二百年前、しかも文明人が持ち込んだものだった。ツピー語が見つからないのも当然で、ブラジルのインジオはシュシュを知らなかったのである。シュシュの新芽や若葉はつるごと食べられる。これをカンブキーラという。カア（植物）アンビキーラ（新芽）で、これはれっきとしたツピー・グワラニー語。

もともとブラジルにない、シュシュの新芽にカンブキーラの名前を当てるのはおかしい。が、実はカンブキーラは、インジオ語でジリムンという、カボチャの新芽を指す言葉だったのだ。

カボチャの系統と原産地の関係はむずかしいが、ブラジルにむかしからあって、インジオが利用していたのはペポカボチャの系統。うまいカボチャではない。その代りこのカボチャ、新芽や若葉がたべられる。かつてはインジオも利用したし、移住者も黒人も食べた。

カンブキーラで食べられるのは野生に近いペポカボチャである。ところが二十世紀も半ばになると、他系統のうまいカボチャが栽培されるようになる。この方の新芽は食べられない。

今でもリオ・グランデ・ド・ノルテ州のようにカボチャのカンブキーラを食べる地方はあるが、だんだん少なくなり、代りにシュシュのカンブキーラが利用される。

これはうまい。おひたしでよし、油いためでよし、卵とじでよしで、大変結構な味。それにシュシュのカンブキーラは降圧作用が強く、高血圧の人々には理想的な食べ物。実の方も降圧効果はあるが、カンブキーラには及ばない。

このシュシュ、日本移民は漬け物に利用した。ウリの仲間なのだから漬け物にはなる。とくに、まだ大きくならない、小さなシュシュを味噌漬にしたのはいける。これを見たブラジル人は、日本人はシュシュを生で食べるとカン違いした。シュシュの生は青臭いから、通常生では食べない。しかし、ブラジルの大植物学者ピオ・コレイアも真に受け、著書でこの話を紹介している。

マンジョカの完全利用開発

ブラジルは年間一千百万トンもの米（籾換算）を生産している。アジアの米生産国を除けば文句なく一位、ブラジル人はこれで結構米食いなのだ。だが、インジオ時代からの伝統的主食、マンジョカの年産二千五百万トンには到底及ばない。やはりなんと言っても、ブラジルはマンジョカ王国である。

マンジョカ、マニオク、マニホット、タピオカ、キャサバなどと呼ばれ、日本ではイモノキなどと称されることもあるこの植物は、トウダイグサ科の低灌木。塊根がちょうどダリアの根のようについている。

中南米のインジオが古来賞用した食糧で、青酸配糖体を有する有毒マンジョカと、無毒マンジョカの二系統がある。主食にするのは有毒の方で、無毒の甘味種は酒（カウイン）づくりや、おやつにするもの。有毒種の方が収量も食味も断然すぐれている。なにしろ一ヘクタール

当り平均一〇トンの収穫がある。ただ栄養的には問題があり、デンプンを二〇～三〇パーセント含むが、タンパク質やビタミンはほとんど含有していない。それにマンジョカには貯蔵が利かないという重大な欠点がある。もともとイモ類はトウモロコシのような穀類と比較すると、貯蔵性の悪いのが一般的だが、

神聖な創造伝説〝処女懐胎〟

マンジョカの原産地は従来、ブラジル北部と言われていたのだが、最近の民族植物学の研究結果では、中米か南米北部で、ブラジルは第二の分化の中心地であることがほぼ明らかになった。

マンジョカの創造伝説はブラジルでは各地にある。おもしろいことに、いずれも〝処女懐胎〟伝説であることは共通している。筆者が大いに気に入っている、アマゾン、サンタレン地方の伝説を紹介しよう。

「ある部族の酋長の娘に、気だてもやさしく、評判の美人がいた。父親にとっては自慢の娘だったのだが、いつの間にか娘のお腹が大きくなってきたのには驚いた。

誇りと威信をひどく傷つけられた酋長は、娘にいたずら者の男は誰かと厳しく責め、果ては折檻まで加えて問い詰めた。しかし、身に覚えのない娘はなんにも答えることができなかった。

怒った父親は、見せしめのため娘を殺さねばならぬと考え、明日処刑することにきめる。

ところがその夜、異相の白人が酋長の夢枕に立ち（娘を殺してはいけない。娘は純潔であり、いかなる男とも交渉はない。娘の懐妊は〝処女懐胎〟なのだ）と告げる。

夢枕のおかげで死を免れた娘は、月みちて女児を産む。色が抜けるように白く、それは可愛い子だった。赤ん坊はマニと名付けられた。

マニはすぐに歩くようになり、話すことも出来たが、一年たった時、病気も苦しみもしないのに突然息をひきとってしまった。嘆き悲しんだ母親はマニの遺骸を家の前の庭に埋葬し、手厚くとむらった。するとマニの墓から今までみたこともない植物が芽を出し、どんどん大きくなって、しまいには根の土が裂け、真っ白いマニの身体のようなものが見えるようになった。

人々がおそるおそる引き出してみると、それはイモだった。試みに食べてみたら結構な食べもので、ここで人々ははじめて、マニが自分の生命とひきかえに食糧をつくってくれたことを悟る。

それからこの植物は広く栽培されるようになり、人々にとってはなくてほならぬ食べものになったが、マニのオカ（身体）だということで、マニオカ、マンジョカと名付けられるようになった」蛇足的説明をする。オカは通常は家のことだが身体の意味もある。この場合は身体が適当だろう。

また、異相の白人、色の白いマニはすべてマンジョカのこと。一年で死ぬのはマンジョカの最低収穫期間をあらわしている。マンジョカの創造伝説に〝処女懐胎〟をもってきたのはまず妥当。マンジョカのように他に代替のきかない、絶対的な存在のものを創造するには、あり

きたりの男女の営みから誕生させたのでは有難味がうすれる。
やはりこういうものは神聖にして不可侵でなければならず、そのために〝処女懐胎〟が不可欠の条件になる。一種の信仰と言ってもよい。マンジョカの粉からとった澱粉がタピオカである。ティピ（底）オグ（取り出したもの）の意で、マンジョカの粉を水で晒して夾雑物や繊維質を除き、底に溜まった澱粉をとり出す製法をよく言いあらわしている。

タピオカはツピー語だが今や世界語として通用する。もっとも多少は混乱もしており、場所によってはマンジョカの粉をタピオカと言ったり、日本などでは植物としてのマンジョカをタピオカノキなどと言ったりする。タピオカ澱粉は非常に粒子が細かく、菓子原料、繊維用糊料、料理原料として賞用される。普通は完全に乾燥させて貯蔵するもの。

ブラジルではこの状態のタピオカをポルビーリョと称することがある。ポルトガル語で、本来細かい粉や澱粉を指す、一般的な言葉だが、ブラジルではタピオカのことを言う場合があるから注意が必要。タピオカを完全に乾燥させず、生乾きの状態の時に布袋に入れ、強く振ると直径三〜五ミリの球が出来る。これを加熱すると半透明の真珠状タピオカパールになる。

パールのまま乾燥させ貯蔵することもできる。使う時には湯で戻し、柔らかくすればよい。日本で食べたミツマメにこれが入っていたのにはびっくりした。

こういうパール状になる性質をもつ澱粉は、タピオカのはかにはサゴ椰子の澱粉があるだけ。どちらの澱粉も糊化しやすい性質を持っているからである。

インジオはタピオカから、病人食、哺乳食、餅、菓子、さらにはタピオカを発酵させた酒までつくった。この場合も口嚼は当然ながら処女の役目。

とにかく、インジオはマンジョカの性質を知り抜いて、何から何まで完全利用をはかった。毒抜きにややこしい手間をかけるところから、インジオは水晒しによる簡単な毒抜きを知らなかったと指摘される場合もあるがこれは当らない。毒から調味料をとるために、わざわざ手間をかけているのだ。この技術はアマゾンでは現在まで継承されている。

インジオが拡めたバナナ栽培

ブラジルの植物を調べるに当たって、インジオ語でなんと言うかが大切なキーポイント。生薬（薬草）の場合など、しばしば決定的要因になる。なにしろ名前だけで効能がわかってしまうのさえあるのだ。たとえばセラード地帯に自生する、有名な強壮強精薬にカツアバという植物がある。

これはカツ（すぐれた、強い）アバ（男性）のこと。説明の要はあるまい。

また、アマゾン下流に自生する、これも著名な強壮薬にムイラプ

アーマ（またはマラプアーマ）がある。ムイラ（植物、樹木）プアーマ（聳える、屹立する、立つ）で、これも解説不要だろう。

どうもこういう強壮薬にあこがれるのは、古今、東西、未開、文明を問わず男性の根源的な性なのかも知れぬ。

のっけから脱線も変だからまじめな話に戻る。ある栽培植物がその土地に昔からあったかどうかを知るためには、そこの言葉で何と言うかを調べるのが、フィールド調査の原則。ブラジルならツピー語でなんと言うかだ。そして該当する言葉があれば、原産地かどうかは別にしても、その植物がかなり以前からそこにあった証拠になる。更にその付近で野生種が見つかり、他の地域に野生種のない場合には、原産地の可能性も出てくる。

パイナップルはアナナスともいう。もともと南米のパラグァイとブラジルの境界辺りが原産。この果物、珍しいものだから、十六世紀の比較的早い時期に持ち出され、東南アジアに植えられた。

今ではハワイが大産地。このアナナス、十九世紀の後半、原産地がどこかで論争が起きたことがある。現在なら植物地理の研究が進んでいるからこんな論争の起きる余地はないが、当時は大まじめに論議されたものなのである。

ある学者はアナナスという言葉は、インドのサンスクリット語の〝アナルシュ〟に由来しているとの説を主張した。実はこの話、スイスの植物学者アルフォンズ・ド・カンドルが一八八三年に出版した『栽培植物の起源』に書いてある。

話はそれるが、この本は名著である。今から見れば明らかな誤りもあるのだが、当時としては驚威的な労作。日本語版は加茂儀一氏の訳で岩波文庫から出ている（全三巻）。ついでに言うと、似たような題名の本に中尾佐助博士の『栽培植物と農耕の起源』があり、これも歴史的に名高い。こちらは岩波新書で出ている。

カンドル先生は『栽培植物の起源』の中で、「ナナは、そのブラジル名であって、ポルトガル人はこれからアナナスという名を作った」と述べている。

筆者はパンタナールでいつもアナナスの野生種を見ているから、カンドル先生の言うことがよく分かるのだが、アナナスがツピー語オリジンとは知らなかった。

そこで調べたら、これがちゃんとある。パイナップルはツピー語で〝ナナ〟または〝アナナ〟というのだ。これにポルトガル人が複数形のSをつけて、アナナスという合成語をつくったのである。

たいへんおもしろい例である。ただ、気をつけなくてはならないのは、土語（インジオ語）があるからと言って、必ずしも新大陸原産とは限らぬものもあることだ。典型的なバナナ。

バナナは東南アジアが原産。新大陸にはコロンブス以降に入ったというのが定説である。東南アジア原産ということでは学者の意見は一致しているのだが、いつ新大陸に入ったかでは意見が分れている。十九世紀のはじめ、アマゾン上流を調査した博物学者のアレキサンダー・フォン・フンボルトは、どこのインジオ部落を訪れても、マンジョカとバナナの栽培があるのを見て、古い時代からインジオがバナ

ナを栽培していたと主張した。

また、大作『フローラ・ブラジリカ』を書いたフリードリヒ・フォン・マルチウスは、ツピー語でバナナのことをパコバと称することを指摘、古い栽培植物であると言っている。

たしかに大先達の言う通りなのだが、パコバはなにもバナナの固有名詞ではなく、クズウコン科とかショウガ科のように、葉の大きい植物を指す一般名なのである。

バナナがブラジルに入ったのは非常に早く、記録によると一五一九年で、中米経由ともアフリカのサントメからとも言われている。

興味深いことは、バナナはポルトガル系の植民者より、インジオ、それもとくにアマゾンのインジオに受けいれられ、インジオによって栽培が拡がっていくし、パコバの言葉も定着する。ブラジルの風土はバナナ栽培に適しているところが多いから、インジオには栽培が楽だった。

しかし、現在でもコロンブス以前の説が捨てられたわけではない。ポリネシア、ミクロネシア経由の太平洋ルートで伝播したという説は、説得力もあり、可能性も充分考えられるのである。

すぐれた香辛料の唐辛子

トウガラシのない韓国のキムチ、トウガラシのないタイや東南アジアの料理、トウガラシの入らないインドのカレー料理など、考えられ

るだろうか。だが、現実にはトウガラシを使ったすべての料理はコロンブス以降だから、まだそれほどの時間は経っていない。まずせいぜい二百年か二百五十年の歴史と言ったところだ。なにしろ未知の香辛料なのだから、新しく入ったと言っても、これを栽培し、自分の料理として使いこなすまでにはかなりの時間がかかる。

スイスの植物学者ド・カンドルは「確かさから言えば、その原始的故郷はブラジルである」と言っているが、はたしてそう断定出来るかどうか。野生種の多いのはたしかなのだが。

トウガラシはナス科のカプシクム属、温帯地方では越冬出来ないから一年草だが、原産地の熱帯アメリカでは、常緑の小灌木がふつう。種類は野生種だけに限れば三十種ほどで、それほど多いわけではない。しかし、栽培品種となれば厖大な数に達する。トウガラシは品種間の交雑が容易で、かんたんに新種がつくり出される。例えば韓国のキムチ用トウガラシは、レッド・クラスター種を母体としているが、韓国の風土に合わせて育成した特別な品種なのである。

色も香りもすばらしく、それでいて余り辛くない。その上、ベタイン、アデニンと言った旨味成分も微量に含むのだからおそれ入る。栽培種でもっともすぐれているのは韓国産かも知れぬ。

ただ、このトウガラシ、他国に持ち出しても、風土に合わなければ同じ品質にならない。韓国のトウガラシを日本に持って来ても、辛くなってキムチに使えなくなる。非常に風土に敏感な植物なのである。原産地またそれに近いブラジルでは、トウガラシはそこらに生えているもので、鳥が喰べ、そのフンから拡散もするから、わざわざ栽培す

ることはなかった。

こういうトウガラシは辛い。長さ一五ミリほどで上向きに実がつくマラゲッタの辛いことは定評があるし、丸く、黄色のピメンタ・デ・シェーロ（匂いトウガラシ）匂いも辛さも猛烈。匂いトウガラシは黒人が比較的好む種類で、料理としてはソースや汁ものに多用される。匂いのきついのも弱いのもあるが、どういうわけか、きつい方をムラタ（混血娘）、弱い方をビウーバ（後家）と称する。ブラジルのは野生種が多く、とびきり辛かったり、匂いの強い方がふつう。そういえばマラゲッタの隠喩は、燃える女、淫乱な女、錯乱、かき乱すなどである。

トウガラシのツピー語は、一般名がキイア、キイヤで、マラゲッタのように辛いキダチトウガラシをクマリ、コマリと言うらしい。ただこの区別あまり確信が持てない。

日本の長崎では今でもトウガラシのことをコショウと呼ぶ。胡椒と区別するためにアカゴショウとも言うが、トウガラシなる言葉はまず使わない。これは江戸時代、中国船と交渉の深かった長崎の役人が、（唐枯らし）に通じる言葉を嫌ったからだと言われる。なんだか語呂合わせのつくりばなしにも聞こえるが、案外そんなところなのかも知れぬ。

韓国はコチュで漢字なら苦椒の字を当てるのだそうだ。豆味噌、餅米、麦芽などと合わせて熟成したコチュジャン（トウガラシ味噌）は韓国料理には欠かせない、ベーシックな薬味。

韓国料理とトウガラシは不可分だが、おもしろいことに宮廷料理に

はほとんどトウガラシは使われていない。これはトウガラシの渡来以前に宮廷料理が完成されていたことを示している。

中国名はもちろん蕃椒。ミクロネシアのポナペ島ではカランガラン。植物名であると共に〝辛い〟という意味なのだそうだ。なんとなく感覚的に理解できる。

一番ぴったりくるのはスワヒリ語のピリピリで、これはそのものずばり。うまい命名だ。黒コショウはピリピリ・マンガと言うのだそうだ。

逆に芸のないのがスペイン語。おそらくインジオ語だと思うのだが、どの種類もすべてアヒ。

もっとも余り辛いので「アヒー！」とつけたのならはなしはわかるのだが……。

現在トウガラシは世界でもっとも大量に消費される香辛料である。短期間にこれだけ世界に普及したのは、栽培のしやすさ、価格の安さにあったに違いないが、それだけでなく、栄養的にもすぐれていることも見逃せない要素。多量のビタミンAとCを持っている。

また辛味成分のカプサイシンは唾液の分泌を高め、食欲を増進させる。更にカプサイシンは体内で吸収されると副腎髄質に働き、アドレナリンを主成分とするホルモンの分泌を促す作用がある。

それに血管を拡大し、血液の環境を活発にする作用もあるから、〝燃える女（男）〟も、まんざら根拠のない話とは言えないのである。

有用植物利用、見直す時期

ブラジルのインジオが利用した繊維植物にはどんなものがあるだろうと調べたことがあるが、そのあまりの多さに途中で放り出し、最終的なリストアップがまだ終っていない。

なにしろアオイ科、シナノキ科、アナナス科、リュゼツラン科、イラクサ科、サトイモ科、セクロピア科、ショウガ科、ヤシ科、バショウ科、クズウコン科、バンレイシ科、パンヤ科などと科だけでも多いのに、その下の属や種、亜種、変種になると厖大な数になってしまう。

それぞれ特徴のある独特の繊維だが、筆者の私見を言えばこの中でアナナス科（パイナップル科）のカラグワタンの繊維は布にした場合、一番優雅で高級感がある。

もっともインジオが用いたすべての繊維を知っているわけではないから、余り大きなことは言えないのだが、実際に出来た布を見たり触ったりした感じでいくとそうなる。カラグワタンはパイナップルの仲間で、果物のパイナップルと同属近縁種。ただ、熟すと黄色で丸い果実が穂状につくところが違う。葉は細くて長い剣状、葉の縁には鉤のように曲った鋭いトゲがびっしり生えている。

カラグワタンの言葉はカラグワ（繊維）アタン（強靭な）という、グワラニー系の言葉。パラグァイではずいぶん昔から繊維植物として利用されていたし、ブラジルでも南部三州やマット・グロッソ、サンパウロ州では使われていた。ブラジルではバナナ・ド・

マットと呼ばれることもあるが、繊維の方はスペイン語で〝ピーニャ〟と言い、現在フィリピンで栽培されている。

実は十八世紀の終り、スペイン統治下のフィリピンに、スペイン領パラグァイから持ち込まれたのがピーニャ産業のことはじめ。既にフィリピンでは古い伝統産業の一つになっている。

ピーニャは繊維のダイヤモンドとも呼ばれ、これから最高級の服地がつくられる。軽くて、しなやかで、光沢が美しく、風合いがよく、しかも上品なのだから女性の服地として愛好されるのも無理はない。たしか日本企業のカネボウも手がけており、この服地を〝鳳梨布〟と命名している。このネーミングはすばらしい。鳳梨とはパイナップルの漢名だが、鳳梨布にするといかにも高級感が出てくるし、中国系の多いフィリピンではうける名称。女性はこの布地で深いスリットの入ったチャイナドレスをつくりたくなる。

原植物のカラグワタンは筆者のよく行くパンタナールの灌木林にたくさん自生している。悪草中の悪草で、これが一面に行手を塞いでいるとうんざりする。とにかく猫の爪より細く鋭い、曲ったトゲが無数に生えているのだから衣服にはひっかかる、肌は傷つくでロクなことにはならない。

しかし、果実が熟した時の馥郁たる芳香は魅惑的だ。パイナップルの香りなのだが、もうすこし強い。甘酸っぱくて、なかなかセクシーな匂い。昆虫もこの匂いに惹き寄せられ、ブンブン飛び回っている。もちろん食べられるが、かなり酸味がきつい。

話は飛躍するが、女性が妊娠してつわりになると嗜好が変わり、

酸っぱいものが食べたくなる。

この時食べるのは、古い時代の日本では梅干しと相場がきまっていた。ブラジル南部やパラグァイではカラグゥタンの実がそうなので、つわりの女性に異常に好まれる。独身女性が食べると（ははあ……さては）とカン繰られるので、独身女性は意識して敬遠する。

民族植物学（エスノボタニー）の立場からすると大変おもしろい現象で、アマゾンのある地方ではパッション・フルーツ（マラクジャ、クダモノトケイ）が好まれる。これは身ぶるいするはど酸っぱいから、なるほどつわりの女性が好むのも納得できる。

カラグゥタンだが、マットグロッソのボロロ族インジオは、完熟果を煮てジャムのようなものをつくる。これは薬で、咳止めやアフタ（鵝口瘡）、ノドの痛みなど、粘膜炎症の特効薬。回虫駆除薬としても効果がある。つまり、この梅肉エキスならぬカラグゥタン・エキスにはタンパク分解酵素であるブロメリンが含まれており、服用すると腸の中で回虫を溶かしてしまうのだ。

これはパパイアのパパインでも同じことだが、カラグゥタンは酸味が強く、エキスにすると、梅肉エキス同様保存が利くという利点がある。インジオの生活の知恵も大したもの。

ところでカラグゥタンの繊維植物としての利用、ブラジルでは出来ないものだろうか。シロウト考えには成長が早く、栽培で量産は可能なのだからやれそうなものだが、企業化が行われないところを見ると、やはりどこかにネックがあるのかも知れない。

フィールドを歩いていると、繊維植物に限らず、ずいぶんいろいろ

な有用植物に出会うが、もう一度植物資源の有効利用を見直す時期にきているのではあるまいか。

万能の天然殺虫剤はない

アマゾン河口のように海水が混じるところでは、汽水（海水と淡水が混じる水）を好む生物が棲息する。トゥルーとツピー語で呼ばれるフナクイムシもその一つ。フナクイムシの和名がついているが、本当は斧足綱フナクイムシ科の二枚貝。

しかし貝とはいうものの、これは実に異様な格好をしている。たしかに先端に二枚に分かれた貝殻はついているのだが、身体の中身がこの殻に入っているわけではない。

この生物、二〇センチもある細長い、ゼラチン質の軟体部を常に露出している裸の貝で、一見すると白い小蛇か回虫に似ているから決して気持のよい生物とは言えぬ。

先端の小さな貝殻は身体を入れるものではなく、殻の頭頂がヤスリ状になっており、これで木材をこすって体内にとり込み、先に進む。この貝は木造船を含めて水中の木材を食べるために、わざわざ身体の構造をこういう形にしたのである。ベニア板にするビローラという丸太を汽水域で水上貯木すると、短時日で見事に穴だらけにされ大被害を蒙ることがある。比重の重い固い木材なら、そうかんたんには食害されないが、それでも永い間にはやられる。

だからこの地方の住民が河べりに高床式の住宅をつくる場合、水の

中に打ち込む柱はトゥルーの食害を受けない、マタマタ（サガリバナ科）のような材木を使用する。

まったくロクデナシのフナクイムシだが、一つだけ取り柄があるのは食用になること。もともと二枚貝の仲間なのだから食べられて不思議はないが、頭の殻をちぎり、レモンを絞りかけてすすりこむと結構いける。酢醤油をかけるとトコロテンに似てくる。

今はどうか知らぬが、昔は「トゥルー、トゥルー」と呼び声を出して売り歩くトゥルー売りがいた。この地方の住民は肺結核の特効薬及び強壮、強精に絶大な効果があると信じている。食事の前にトゥルーを二匹すすりこむのだ。トゥルーの食害を受けない木材は数がごく限られているが、その一つにアンジローバという木がある。ニャンジローバとも言うが、ツピー語で〝苦い油〟の意味。その名のようにこの木の実から苦い油がとれる。

この油、殺虫作用があって、とくに回虫、蟯虫、条虫のような体内の寄生虫を殺す作用をもっている。アンジローバはセンダン科の植物だが、センダン科やクスノキ科の植物は殺虫成分をもっているため、虫による食害を受けないのが普通。

筆者は永年ブラジルの薬草を研究している。アマゾンの原始林やパンタナールの草地、灌木林を歩いていて、何がこわいかと言えば、血を吸ったり、刺したりする虫に襲われることなのである。これに較べれば猛獣、毒蛇などものの数ではない。まず蚊を筆頭にブヨ、アブ、サシバエ、ハチ、アリ、ダニ、ノミ、シラミなど、どれも厄介なシロモノだ。筆者は防虫効果があると言われる薬草、薬木を

片っ端からためしてみた。うまく行けば研究と実益の一石二鳥が狙える。

ところがどうも満足のいく結果が出てこないのである。市販の防虫スプレー程度には効くのだが、人間を襲う虫のすべてに対して決定的に効く（これだ！）というものが見つからない。

その代り、ダニには効く薬はみつけた。余り公表したくないのだが、これこそ、アンジローバ・オイルなのである。これは良く効く。おそらく殺ダニ効果では一番だと思う。ノミ、シラミ除けにも良い。蚊やブヨに対してはかなりの効果はあるものの、とても完全に防げるというにはほど遠い。

残念ながら、アリはどのアリにも効かないし、ハチにも効果はない。

ダニは世界でもっとも数の多い虫で、発表されているもので三万種、未発見のものも加えると推定十万種と言われる。アマゾンの微細なダニであるムクインは、陰毛の毛根深くもぐり込むことと、気が狂いそうになるほど痒いことで有名だが、人間にたかるダニはどれもタチが悪い。

ダニの吸血は最初は痛くも痒くもなく、吸血されていることに気付かないほど。ところが、ほんのちょっとくわれただけで、まず半年は瘢痕が消えない。皮膚の弱い人なら一年以上残ってしまう。

それにこのダニという奴はヘソの中とか、男性なら睾丸の陰嚢などのやわらかい部分を狙う困った害虫なのだ。

さて、ダニがアンジローバ油に弱いのは、ダニのように皮膚を這い回る虫は皮膚にまんべんなく塗った油を避けることが出来ないから、

アンジローバの殺虫成分にやられてしまうのだ。これはノミやシラミでも同じこと。そこへいくと、アリは人間の皮膚に接触した瞬間に唆んだり、刺したりするから、殺虫、防虫作用の働く暇がない。蚊やブヨは皮膚に止まるとき、一秒か二秒時間がかかる。この時、皮膚に塗られた殺虫、防虫成分を感知すれば忌避して逃げるし、感じなければ止まって刺すというメカニズムらしい。

猛烈に痛いハリアリの毒

ダニも厄介だが人間を襲うアリも困ったもの。世界のアリの種類は七千五百種、未記録の種を加えると倍の一万五千種ほどになるらしい。このうち人間を含め動物を襲うアリは五、六十種で、全体からみればほんの僅かな数。

ところがこの僅かな種類がすごいのだ。すべて尻に毒針をもっている。ブラジルで言えば、生きている動物ならなんでも喰い尽す軍隊アリ、世界最大二七ミリの体長で、最強の毒をもつトカンディラ、アリ植物と共生している数種、足首から下を専門に襲うラバペー（足洗いの意）などだ。

どれもいわゆるハリアリで、毒針とそれにつながる毒腺をもっているところはハチと同じ。しかし、ハリアリの毒針はミツバチの針のように、一回の攻撃で抜けてしまうことはなく、同じ針で何回でも攻撃できる。ハリアリのもう一つの特徴は、走るスピードがやたら早いこと。アッという間に身体に駆け上って攻撃する。まずサウーバ（ハキ

リアリ）の三倍の速さで走れるが、獲物をしとめるにはこのくらいのスピードがないと逃げられるのだろう。

トカンディラは群をつくらないが、軍隊アリやその他のハリアリが大群で猛スピードで襲ってくるのはほんとにこわい。毒針のないアリも時として攻撃してくることがあるが、これは自衛上の行動。サウーバの大群が積極的に人間を襲うことはない。

ただ、サウーバにあの巨大なアゴで咬みつかれると、余りの痛さに飛び上がる。腹部が千切れるほど引っ張ってもアゴの方はがっちり咬みついて離れない。

アマゾンのインジオが男子の成人式で、トカンディラの入った手袋に若者の手を入れさせ、激痛に堪える儀式を行うことはよく知られている。一人前の戦士になるためであり、また結婚の有資格者となるためでもある。おもしろいし、絵にもなるから、今でも時折り、テレビで紹介されることがある。言っていることはウソではないから、別にケチをつける気はないが、この儀式にはもう少し大切な目的があるのを忘れてはいけない。

それは、この儀式がトカンディラの蟻毒に対する第一回目の免疫注射であることだ。免疫注射にしてはばかに荒っぽいやり方だが、実はトカンディラに刺されても、死に至ることはまずないのである。その代り、悪心、吐気、浮腫、動悸亢進、などの病状があらわれ、二十四時間苦しむ。だからトカンディラは別名〝二十四時間のアリ〟とも言われる。

最初に刺された時こそこのように苦しむが、二度目に刺されても最

初の半分の苦しみしかない。
三度目は二度目の半分、四度目は刺されても何ともなくなる。つまりトカンディラの蟻毒は、免疫効果が非常に顕著なので、一度大変な苦しみを味わえば、一生抗毒免疫が効くというわけ。インジオの長老や呪術師はこの辺のところを充分に心得て、毒アリに刺させるのである。

トカンディラは身体が大きく、毒性が強いから刺されれば大変だが、実際はそれはどこわくない。
数が少ないのだ。このアリ、原始的なアリで、コロニーをつくらない。せいぜい百匹ぐらいしかいないから、大群に襲われる心配がない。

そこへいくと、アリ植物と共生しているアリはかなり危険。アリ植物にはいろいろな形態があるが、一般に植物の幹や枝、葉柄などが中空になっていて、ここにアリが棲んでいる。アリは植物の滲出液や花の蜜などを食用にし、植物は花粉の運搬や他の害虫の駆除をしてもらう共生関係。

ブラジルにはいくつかのアリ植物があり、それぞれ共生しているアリの種類が違う。有名なアリ植物はヤツデのような大きな葉を持つ、セクロピア科のインバウーバと、タデ科のタシーだろう。

インバウーバと共生するアリはそれほどどうもうではないが、タデ科のタシーはいけない。タシーの名前そのものがツピー語でアリのことだから、木の方は〝アリの木〟　の意味になる。アマゾンの植物だが、同属異種はパンタナールにもあって、この木を〝パウ・ノバット〟という。初心者、未経験者の木である。これはどちらもすごい。赤

い穂状の花がきれいで目立つため、知らないものがついうっかりこの木に近寄って花や葉に触ったりする。そうするとアリが文字通り頭上から降ってくるのだ。

体長六、七ミリの赤みがかったアリで、ふつうのアリよりはるかに細いが凶暴そのもの。素速く皮膚の露出部に達し、毒針をうち込む。しびれるような疼痛で、刺された周辺も赤い丘疹が出来てやけつくように痛む。だが、こんな観察をするのは後のことで、このアリに襲われたら、一秒でも早く現場から逃げること。このアリ、潰すと強い不快な匂いがする。その地方の人間はよく知っているから近寄らないが、未経験者は知らずに触ってひどい目に遭う。それでパウ・ノバットの名がついた。筆者も最初はノバットだった。

インジオの裸は塩分保持

今でもそうなのだが、アマゾンの奥地へ行って、インジオの血の濃いカボクロの家で食事を馳走になると、塩味がまったくないとしか思えぬ味付けではとはと閉口することがある。

むろん当方は常に塩を持参している。食卓塩の小ビンも持っている。だが、折角つくってくれたその家の主婦の手前、出された料理にパッパッと塩を振りかけるのはいかにも非礼、やってはならない。ブラジル内陸部のインジオが塩をほとんど摂らないことは昔から知られた事実。

植物学者で一八一七年から二〇年までブラジル奥地を歩いたマルチウスは、アマゾンのジュプラ河に住むインジオの話を次のように伝えている。

「あんたがた白人の肉は塩っぽくてうまくないね。だから次に森に迷った白人を殺した時は食べなかったよ……」かなりショッキングな報告だが、どことなくユーモラスでもある。

栄養学の常識から言うと、塩、つまり塩化ナトリウムは人間には絶対の必需物で、塩を摂取しなければ生命の維持が出来ない。塩の形でなくても良いのだが、とにかくナトリウムは動物の体液の浸透圧維持、生活細胞の透過保持、体液の貯蔵、排出に不可欠なのである。

人間一日の塩の必要量は一二～一三グラム、高温の環境なら更に多くの塩分が必要になる。アマゾンのような高温多湿の場所では、当然多くの塩の摂取が必要のはず。しかし、現実にインジオはほとんど塩を摂らない。というより、明らかに塩を嫌った。おそらくアマゾンのインジオは世界でもっとも塩化ナトリウム摂取量の少ない、稀有の人種である。塩が入手できないわけではない。海岸部のインジオとも交易可能だったし、それにアマゾンにはものすごい量の岩塩の埋蔵地もあるのだ。

これはいったいどういうことなのか。いろいろな学者がいろいろな説を唱えているが、納得できる答えはまだ出ていない。とにかくインジオはカナダのイヌイット（エスキモー）のように、動物の血や内臓や骨を食べることはしないし、魚も生では食べない。

その代り、かどうか、ヤシの花苞を焼き、その灰を嘗めることが、

古くから観察されている。パシウーバ、パタウア、バカバ、アクリなどの椰子である。

これらのヤシはすべて実が房になる。花苞も大きい。十個ほどの花苞を焼けば、五、六キロの灰をとるのは容易。しかし、果たしてこれが塩というかナトリウムを多量に含んでいるかどうか、成分分析をしてみないとなんとも言えない。まあ、すべての植物にナトリウムがあり、とくに淡海水の潮間帯泥地のマングローブやアカザ科、キツネノマゴ科、アカネ科のある植物は「塩性植物」と呼ばれ、塩化ナトリウムを多量に含んでいるから、ヤシの花苞も可能性はあるのだが。

筆者の考えでは、どうやらインジオは一つのものから、必要な塩分を得るのではなく、いくつもの原料から総合的に、生命を維持するに足るミネラル分を補給していたと思われる。

実はインジオはジオファギー、つまり土食者でもあったのだ。土食と言ってもどの土でも食べるわけではない。カルシウム、鉄、塩化ナトリウムなどミネラル分に富んだ土を選んで食べるのである。それにしても、インジオの塩分摂取量はおそらくギリギリの量で、文明人の一日の必要量の二〇～三〇パーセント程度しか摂っていないと推測される。

その代り、インジオの身体は一旦とり入れた塩分をなかなか排出しないようになっている。まず汗腺が少なく、あまり汗をかかない。また、汗をかくような激しい肉体労働はなるべく避ける。

通常、熱帯降雨林地帯の暑い気候で汗をかくと、一リットルで三グラムの塩分を失う。黒人など汗腺の多い人種はもっとナトリウムを排

出する。こういう環境で塩分を補給しないと倒れてしまう。

だからインジオは日中の暑い盛りに肉体労働をすることを極力避けて、本能的に塩化ナトリウムのロスを防いでいるのだ。ポルトガル人入植者がインジオを奴隷にし、いかに苛酷な刑罰を加え、鞭をふるっても、どうしても黒人のような労働者になれなかったのは、ここに原因があったのではなかろうか。怠け者ではなく、本質的に労働者に向いていない身体構造なのである。

以上は筆者の仮説。ただ証明はむずかしい。一つだけ証明らしきものを挙げると、南米低地のインジオは、男女共に裸の生活が原則だったことである。

これは衣服をまとわぬことによって、塩化ナトリウムの流出を防いでいるのだ。文明人は気がつかないが、衣服を着てびっしょりかく汗には塩分が多い。そのまま乾かせば塩の結晶ができる。

しかし、裸でかく汗はナトリウムが少ない。インジオの汗は、ほとんど塩辛くないはずだ。インジオの裸にはやはりそれだけの理由があるのだ。

Ⅲ　文化と神話と歴史から

ブラジルになかった？　梅毒

コロンブス一行が新大陸から持ち帰り、全世界に拡めたものに梅毒がある。コロンブスのサンタ・マリア号と行動を共にしたピンタ号の船長、マルチン・アロンソ・ピンソンが一四九三年、帰国直後死亡したのは梅毒が原因だと言われる。ただし確証はない。

梅毒伝来について書かれた最初の書物は、リスボンの医師ルイ・ディアス・デ・イスラが一五二〇年に書いた『蛇病に関する論述』だろう。まだ梅毒（シフィリス）の言葉が一般化していなかったから、蛇病（マル・デ・セルペンテ）の言葉を使っている。これは梅毒第三期の病状で、皮膚に蛇のくねるような潰瘍疹が出るからだ。

イスラ医師の記述から類推すると、無事スペインに帰還した船員のほとんどが、梅毒の罹患者だったと考えられる。コロンブス一行が帰還した時、カスチーリヤ、アラゴンの両王はバルセロナに滞在していた。そのためコロンブス一行は報告のため、バルセロナを訪れたが、これでこの町がヨーロッパで一番はじめに梅毒に汚染されることになった。

それからの伝播は驚異的でまたたく間に全世界に拡がる。日本には一五四三年、鉄砲と共に、ポルトガルの船員が持って来たとも言われるが、実際はそれよりずっと早く、一五一三年ごろ、倭寇が持ち込んだとの説もある。コロンブスが持ち帰ってから僅か二十年である。

梅毒の起源は従来いろいろあって、旧大陸に昔からあったという説も根強かった。現在では西インド諸島の地方病であることが証明されている。この証明に一役買った学者に東京帝大教授の土肥慶蔵博士がいる。この先生は梅毒学の専門家で一九二六年『世界黴毒史』の著書を刊行、この中で、一五〇〇年以前の日本に梅毒のなかったことを証明している。

ところで、リスボン生れのイエズス会士ルイス・フロイスといえば、十六世紀の後半三十四年間を日本で過ごし、いろいろな報告書を残した大の日本通。日本語も達者だった。このフロイスが書いたものに『日本覚書』というのがある。日本とヨーロッパの文化の差、風習の違いを六一一条にわたって記述している。

これはかけ値なしにおもしろい。中には誤りもあるのだが、よくぞこれだけ観察したものだと感心する。（松田毅一、Ｅ・ヨリッセンの日本語訳及び解説で『日本覚書』の題名で中公新書から出ている）。この六一一条の中の一つに以下の文書がある。

「われらにおいては横痃にかかるなど、きたならしく、恥ずかしいことである。日本では男も女もそれをありふれたこととして、少しも恥とはしない」原文のポルトガル語を見ていないので、はっきりとは言えないが、よこねはおそらく梅毒の第一期に出てくる、梅毒性横痃

のことだろう。とすると十五世紀中に存在しなかった梅毒が、十六世紀後半には広く日本中に伝播していたということになる。驚異的速度だ。

ではブラジルには梅毒はなかったのだろうか。これも難問だ。実はインジオの用いた薬草には、梅毒の薬、つまり駆梅剤がたくさんある。ざっと数えただけでも、五、六十種は挙げられる。

それならブラジルにも昔から梅毒はあったのではないか、ということになるのだが、ことはそうかんたんではない。梅毒はスピロヘータ菌の一種、トリポネマ・パリドムの感染によって起こる病気である。ところがヒトに寄生するトリポネマにはほかに二種あってどちらも梅毒によく似た病状を発現する。ただ、梅毒ほどひどくはならないのが普通。

一つは、熱帯フランベジアとかボウバという病気で、もともとはアフリカの風土病。黒人奴隷を入れた時にこの病気も一緒に入っている。もう一つは、ピンタとかカラテスとか、あるいは森林梅毒と言われるもので、これはブラジルのアマゾン地方固有の病気であることがはっきりしている。

ほんものの梅毒、つまりトリポネマ・パリドムの感染経路は、ほとんどが性行為によるものだが、あとの二つは吸血昆虫が媒介するもので、性行為とは関係ない。

ということから、ブラジルにもとからあったのは、おなじスピロヘータでもトリポネマ・カラテウムの森林梅毒の方で、多くの薬草は森林梅毒の治療薬だったのではないかとの説が出てくる。

植民地初期の時代からブラジルのインジオにも多くの梅毒罹患者がいたのは事実だが、ポルトガルからの植民者によって感染させられた可能性は充分考えられる。

西インド諸島から南米北部経由でブラジルに入ったという、伝播ルートも考えられなくもないが、可能性としてはポルトガル経由の方が強い。インジオはウイルスに耐性がなく、文明人の持ち込んだ風邪でもバタバタ死んだが、梅毒でもよく死んだ。もとからある病気なら、もう少し耐性がありそうなものだし、治療法もあると思うが、抵抗力はまったくなかった。

〝きせる〟の起源はブラジル

タバコは新大陸の原産だけあって、野良生えはブラジル中どこにでもある。サンパウロ市内の空地や庭でもいくらでも見ることが出来る。

原産はボリビア南部とアルゼンチン北部のアンデス山脈の東側というのが今では定説となっているが、既に五世紀ごろには現在の北米を含めた新大陸に広く普及する。

世界への普及はコロンブスがヨーロッパに持ち帰ってからで、梅毒ほどではないが、タバコもあっという間に世界中に拡がっていく。日本には一五四三年の鉄砲伝来と共に種子島にポルトガル人が持ち込んだとされるが、異説も多い。とにかく天正年間（一五七三～一五九二）

には喫煙の習慣が出来ていた。もっともこの時代は南蛮船から製品としての煙草を買うだけだったのだが、次の慶長年間（一五九六～一六一五）には種子も持ち込まれ、各地で栽培されることになった。

ニコチアナ・タバクムというのが植物としてのタバコの学名だが、大体ナス科植物は強く、熱帯でも温帯でも適応できる性質をもっているから、各地で栽培が成功した。

新大陸のインジオはタバコを一種霊力のある薬として用いる場合が多かった。太陽崇拝のマヤ族は火や煙を神聖視し、タバコの煙で体の内の病気を追い出す習俗を持っていた。

ブラジルのインジオはマヤやアステカ族ほどではないが、やはりタバコの霊力を信じていた。また、煙を身体に染みこませ、ヒゼンの特効薬やシラミ、ダニ除けにもした。

この方法は現在でも有効である。なにしろニコチンの殺虫効果は大したものだから、虫除けとしてはもってこいである。衣服をタバコの煙で焚いてもそれ以上の効果は得られるが臭くてやりきれない。新大陸のインジオのタバコの喫い方は、北米がパイプと葉巻、中米は噛みタバコ、南米は嗅ぎタバコ（これをラペーという）と言われている。

しかし、熟成した葉タバコをきっちり巻いて葉巻で吸う、喫煙方法はどこのインジオもやっていたし、ブラジルのインジオはこのほかに、パイプで吸うことも一般に行われていた。

ブラジルのインジオが使ったパイプのボウル（火皿）はジェキチバの実というか、種子をとり去った長さ四、五センチ、直径二センチはどの縦長の殻なので、ブラジル全国、どこでもこれを用いた。サガリ

バナ科の大木の実なのだが、ブラジル・ナッツやサプカイア・ナッツと同科の植物だけあって殻が実に堅く、とてもタバコの火ぐらいで焼けるようなシロモノではない。

この木はブラジル全土に分布していたから木の実も容易に入手できる。殻をボウル（火皿）にし、下部に穴を開けて、竹軸を差し込んでパイプにするのである。

アメリカ・インディアンの用いた、トウモロコシの芯を圧縮して、くり抜いてつくるコーン・パイプとちょっと共通しているが、耐久力が違う。その後、世界の各地でいろいろなパイプがつくられているが、木の実の殻でつくったパイプは他にはない。

じっはブラジルのインジオが用いた、このジェキチバのパイプが日本の〝きせる〟の原型になる。

筆者がよたを飛ばしているのではなく、これはほんとうのこと。ものの本にもそう書いてある。

「日本きせるの原型は文献と絵画によれば、フロリダの方面の土製で雁首が大きく曲ったもの、ブラジルの木の実のボウルに籐の軸を使ったものなのである。日本では金属で模倣し、羅宇キセルができても、この二つが並行して製造されていたが、次第にフロリダ型が減り、ブラジル型が改造されて日本のきせるになっていった」

これは小学館の『万有百科事典』からの抜粋だが、これにも間違いがある。日本ではポルトガル人が持ち込んだ、ブラジルのジェキチバ製パイプを真似て、竹の節で火皿をつくり、それに竹軸を差し込んだ竹パイプを〝きせる〟とよんだのである。

火皿はやがて竹の節からシンチュウ製の小さな雁首になっていく。これはそれまでの荒い揉みタバコから、細かい刻みタバコを使用するようになったためだ。

まあ、いずれにしても、ブラジル・インジオのジェキチバ製パイプが日本の〝きせる〟の原型になったことは間違いない。通常なら思いもよらぬこと。大航海時代のポルトガルは、けっこう世界的規模で新世界との交流、仲介を行っており、日本にもいろいろな影響を与えているのは興味深い。

ところで、タバコのツピー語だが、これはさすがに原産地に近いだけあって、全国どこでも『ペチン』で統一されているし用法も多様。例えばパイプはペチンバウ、タバコを喫うことをペチンブー、喫煙者はペチンブアーラ、タバコの粉や嗅ぎタバコはペチンクイといった具合だ。ただ、インジオは文字がないから、ペチンなのかピチンなのか或いは別の発音なのか正確にはわかっていない。

分娩間隔永い未開民族

ヒト（ホモ・サピエンス）の歴史は四百万年ぐらいまで遡ることが出来る。この間、人口はほとんど静止状態でふえなかった。人口が倍になるのに十万年もかかっている。

人口が急にふえ出すのは、一万年はど前からはじまった。農耕、牧畜といった、革命的な食糧確保の方法が開発されてからのことであ

る。狩猟、採集を生活の手段としている段階では、食糧となる鳥や獣、あるいは魚貝類がコンスタントにとれる範囲内でしか人間は養えない。人間の数と食糧である鳥獣魚貝、木の実や果物のバランスがとれていなければならないのだ。

こういう状況では人口はふえない。ふえないのは、たくさん生まれても食糧不足で自然に淘汰されるのか、はじめから生存可能な数しか生まないかのどちらかである。

これは大変興味のある問題なのだが、最近の研究では大方の予想を裏切り、未開の狩猟民族の女性は数多くの子供を生まないことがわかってきた。

アフリカのカラハリ砂漠に住む、狩猟採集民族のクン族（ブッシュマン）の女性は平均するとたったの二・一人しか生まないし、アマゾン地方のインジオは三・六人が平均である。

未開民族の女性は、とにかく分娩間隔が永く、四年間隔が普通。これはゴリラやチンパンジーなど、人間に近い霊長類と同じである。かつての日本の農村やブラジルの人口供給源の東北地方に比べたらたいへんな違いである。インジオは早婚である。女性は十五ぐらいで結婚する。早婚なら子供がじゃんじゃん出来そうなものだが実際には分娩間隔が永いからそうはならない。何故そんなに永いのか、学者の間でも論議があった。ふつうに男女の性交渉があって、四年間隔の分娩は永すぎる。〝子殺し〟の間引きで調節するという説もあったし、堕胎薬を用いるとも言われた。また避妊薬になる薬草を服用するという説

もある。

以下余談。筆者はブラジル生薬の研究者である。飲むだけで避妊できるという、重宝な薬草がほんとうにあるなら、これを探し出せば一躍大金持ちになれ、永年の貧乏と訣別できるわけだ。

ずいぶん探した。そして遂に見つけた。カヤツリグサ科シペルス属のある種の植物の根である。

だが残念ながらモノにはならなかった。避妊の作用機能が不明なのである。実はインジオの避妊薬と言われるものは、ほかにもいくつかあるのだが、分析しても何も出てこないのだ。かくて財閥のユメはうたかたの泡と消えてしまった。

インジオに話を戻すと、インジオは避妊薬を使うよりもっと確実な避妊方法を実行していたのである。それは母親が生まれた子供にいつ迄も授乳するという簡単な方法。

インジオに限らず、未開民族にあっては一般に授乳期間が永い。生乳や粉ミルクなどあるわけないし、母乳に代わる高栄養食などはない。アマゾンのような高温多湿の環境で、風土病も多く、衛生条件の悪いところでは、授乳して母親の免疫物質を子供に伝えることがどうしても必要になってくる。文明人の子供と違って各種の予防接種を受けられないのだから、永く授乳することが、いわば種の保存のための基本戦略となる。だからインジオの母親はひんぱんに授乳した。

インジオは背中に子供を負うのではなく、前に抱く。そのための帯というか、袋みたいなものを開発したから、母親が両手を離しても授乳できる。カラハリのクン族などはこの方法で歩きながらでも授乳す

るのである。

人間の女性の乳房は、他の動物と比較して非常に大きく、かつ可動的なのが特徴である。おまけにインジオは裸だから、腹帯で支えられた赤ん坊が吸いつくにはまことに都合がよい。インジオ女性は自分の子供以外にパッカやカピバラの仔にも乳をやった。仔連れのパッカを捕った場合、親の方は殺して食べてしまうのだが、仔は子持ちの母親が自分の乳で離乳期まで育てるのだ。

母乳は、すべての条件の悪い未開社会では大切なもので、長期間授乳しないと子供は育たない。

これだけ手をかけても死亡率は高いから、インジオ社会の人口は静止状態か微増にとどまることになるわけだ。ではインジオ女性のようにひんぱんに授乳を続けているとどうなるか、じつはここが一番大事なところなのだが、吸乳刺激のために、脳の中枢神経が発するはずの卵胞刺激ホルモンが抑制されてしまう。卵胞刺激ホルモンが出なければ卵胞ホルモンが分泌しない。そのため排卵が起こらず、結果として次の妊娠がおきないことになる。

これが未開女性の分娩間隔の永さの秘密である。今では定説として認められているが、これまでなかなかわからなかった。人類学的調査だけではわからないのは当然で、進化生物学の研究が進み、人間を含めた動物の性と生殖のしくみが解明されるようになってはじめてわかったことである。

セルトンの人口圧は特殊環境

アマゾンのインジオの分娩間隔が永い理由がわかると、逆にノルデステ（東北ブラジル）の乾燥地方であるセルトンのすさまじい人口圧力と、爆発的な繁殖力についても納得のいく説明がつく。

セルトンの住民に避妊知識がなく、避妊方法も普及していなかったのはもちろんだが、これはアマゾンの住民だって同じことだから、特別な理由にはならない。セルトン住民が高い繁殖力を示すのは、やはりこの地方特有な要因があるからなのである。ここの住民の多くは家族単位の小作農（貧農）で、地主の牛や山羊の世話をしながら、僅かばかりの可耕地にトウモロコシ、マンジョカ、フェイジョン（菜豆）、カボチャ、サツマイモなど、雑作をつくって自給している。

こういう生活形態だと、主婦も農作業の重要な労働力となり、赤ん坊の授乳や育児だけに専念するわけにはいかない。それに未開のアマゾンと違って、ここでは最初から牛や山羊を飼っており、その乳が利用出来るから、あえて母乳に頼ることもなかったのである。

したがって、母乳による授乳期間が二、三カ月とたいへん短い。その結果分娩間隔も短縮され、じきに排卵がはじまり次の妊娠につながっていく。

筆者の観察したところでは、大体一年に一人の割合で生んでいるのだが、何年かおきに子供の間隔が穴の開いたように離れていることがある。この理由はあとで説明する。

とにかく、このようにして一ダースぐらいはあたり前、中には十五人、十七人という驚異的な出産数もあらわれてくる。ただ、現在では避妊知識もかなり普及したから、以前にくらべれば少なくはなっている。しかし、セルトンの爆発的な繁殖力はこれだけでは説明できない。こういう生活なら世界の多くのところでいくらでも見られる。

実はセルトンは天国と地獄が交錯する特異な地方であり、そしてまさにそれが理由で人口増が起きるという、世界でも珍しい地域なのだ。セルトンは定期的にきびしい旱魃（セッカ）に見舞われ、多くの餓死者、病死者、逃散者を出す悲惨な地域である。ブラジルにはほんとうの砂漠はないが、砂漠にもっとも近いのがこのセルトン乾燥地帯。

通常この地方は三月から四月にかけて降雨がある。この時期に赤道低圧帯が南下してセルトンに到達するからである。ところがこの低圧帯、年によっては北半球に居すわり、赤道をこえて南下しないことがある。こういう年は間違いなくセッカになる。三月、四月に雨が降らなければ次の雨季

まで間違っても雨は降らない。旱魃は一年で終わることが多いが、時には二年、三年とつづくこともある。これまで最大のセッカは一八七七年から三年つづいた大旱魃で、セルトン総人口の五〇パーセントに当たる五〇万人が死んだ。この時セアラー州の首府フォルタレーザ市の人口は十二万四千人から六万八千人に減っている。

旱魃時のセルトンは悲惨である。人間を含めたあらゆる動物が痩せ細る。シケシケのような有棘サボテンまで喰い尽くされ、万策つきる

と退避行がはじまる。周辺の町に難民として流れ込むのだ。

この現象をレチラーダという。女性もこの時だけは妊娠しない。なにしろ痩せて、体脂肪が体重の二〇パーセント以下に落ちてしまうから卵胞ホルモンが働かず、排卵が起きない。先に述べた、順番に並んだ数多い子供の序列に欠落が生ずるのはこの時の不妊が原因なのである。

こんな地獄みたいなセルトンに無理して住まなくても、広いブラジル、どこでもあるじゃないかと思うかも知れぬ。だがこれは現地を知らない人の言うこと。雨の順調にあった場合のセルトンは天国なのだ。荒涼とした枯れ大地が一斉に緑を取り戻す。またたく間である。動物と違って逃げることの出来ない植物は、ひたすら堪えに堪え、雨のくるのを待っている。その代り一雨くれば直ちに芽を出し、花を咲かせ、実をつけて子孫を残す能力を身につけているのだ。

セルトンの住民だって同じこと。一旦降雨があって作物が順調に出来、牛や山羊が肥ってくると、旱魃時期のマイナスをカバーするため、猛烈な生殖力を発揮する。種の保存をかけた生き残り戦略で、いうならば生物学的要求の噴出なのである。

こうした環境に代々住んでいるセルトン人は、当然ながら環境に適応した体型、体質になってくる。筋肉質で、むだなゼイ肉や脂肪は一切持たず、辛い労働に堪える強靭でしなやかな体力をもっている。おそらく女性は体脂肪がぎりぎりでも、妊娠、出産できる遺伝子を獲得しているに違いない。セルトン人は体型、体格だけでなく、表情も動作もそして考え方も画一的である。

セルトンの人口圧のすさまじさは、フォルタレーザの下町の雑踏に身を委ねると実感できる。

長寿で変化〝性と生殖〟観

一九九三年における日本人の平均寿命は男が七十六歳、女が八十二歳、ともに世界最高である。

この数字は平均で、中には若死にする人も当然いるのだから、実際は八十代後半から九十代の老人もたくさんいることになる。なんとも驚異的な数字である。日本人だってついこの間まで、人生五十年という時代があったのだ。昭和十五年といえば一九四〇年だが、この時の女性の平均寿命は四十九・六歳だった。

この時代の〝女の一生〟をかんたんに言うと、生理がはじまるのが十四・七歳、二十・八歳で結婚して、長子出生が二十二・二歳。それから十年、平均五・二人の子供を産む。末子が小学校に入った時にはもう四十二歳になっている。

このころの閉経は四十四・五歳だが、四つ違いの夫は既に死んでいる。そして末子が中学二年の時、四十九・六歳で一生を終えるのだ。なんともあわただしい人生ではある。

この統計は平均寿命だから、実際には乳幼児死亡を除外した寿命はもう少し永く、むろん、七十、八十迄生きる人だっていたわけだが、基本的にはこれが平均だった。現在、日本が長寿になったのは、医療技術が進歩したこと、社会福祉制度が完備したこと、病気や健康に対

する知識が広く一般に普及したことなどがあげられる。まあ、日本が経済大国になったことも無縁ではあるまい。そこへいくとブラジルの平均寿命は男六十二、女六十七歳で、世界の平均値をいっている。逆に寿命が短いのは、中米、アフリカ、中央アジア、インドなど概して貧しい国。

一番短命なのはエチオピアの男四十二、女四十五歳で、これは昭和十五年の日本より悪い。もっともブラジルだって、アマゾンや東北ブラジルに限定すると平均寿命は五十を切ってしまう。

チンパンジーは結構永生きで四十年ぐらい生きるが、人類の先祖である原人の時代、平均寿命は二十歳ぐらいでなかったかと推測されている。平均二十歳で死ぬのであれば、現在の人類のように十四、五歳で思春期に達するのでは間に合わない。だからこの当時は四～五歳で思春期に達し、すぐに生殖力をもったと考えられる。

人間以外の動物はすべて本能に従って行動する。動物の行動は人間からみて、どんなにおかしかろうと、不可解だろうと、必ず意味のあるもので、それは究極的には種の保存という一点に結びついている。オス、メスの配偶形態が一夫一婦型であろうと一夫多妻のハーレム型であろうと、乱婚型であろうと、それはその種が永年かけて開発した、子孫を残すための最良の方法なのである。

それに、人間以外の動物は生殖のためにしかセックス、つまり交尾をしない。だから動物、とくに野生動物は種の保存の役目を終え、生殖能力がなくなると、速やかに死ぬ。

動物の社会では、老齢になって生殖能力を失った個体が、のうのう

といつまでも永生きすることはない。これが自然の掟というか、本来の姿なのだろう。

筆者がよく行くパンタナールのホテルに放し飼いの牛群がいて、その中に虎斑の雌牛がいた。虎斑はほかにいなかったし、よく目立つから個体識別がかんたんである。この虎斑のメスはよく仔を生んだ。十年で四～五頭生んだと思う。だが寄る年波には勝てず、最後の仔を生んで一年ほどで見る見る衰えていった。やがて、もう永くはあるまいと誰の目にもわかるようになったある日、彼女は静かに群れを離れ、ふだんは行ったこともない低地の泥沼に自らはまり込んだ。

どうやら死に場所を探しているらしいのだが、人間としてはみすみす見殺しには出来ない。何人かの手で苦労して泥沼から引き出してやる。ところがしばらくするとまた泥沼に行くのである。

これを二度ほどくり返し、三度目に泥沼に行った時には人間の方が諦めた。それは婆さん牛が（あたしゃ、お役目済んだからね、もういかしてもらいますよ。余計なお世話はしないでおくれ）とでも言うような、まことに悟り切った穏やかな顔をしていたからである。それから二日目、彼女は望み通り死んだ。正直言うと、動物をこういうふうに擬人化し、人間の感情で推し測るのは危険。

動物は本能の命ずるままに行動しているので、人間のような自らの意志はないのである。

それにしてもこの五十年、長寿のおかげで人間の性と生殖の観念は一変してしまった。もはやセックスは子孫を残すためという、かつての古典的な常識や観念は通用しない。日本の女性などは平均三十歳で

第二子を生み終え、もう生まないのだ。
三十歳から八十歳までの性をどう考えるか。従来の性論理や性の価値観や社会的規範が変化するのはやむを得ない。それが性の解放とか性革命につながるんだろうが、まったく永生きするということはいろいろな問題が起きる要因になっている。

〝幼形成熟〟顕著な東洋人

ブラジルに在住している日本人なら日常的に体験していることだが、どうも我々東洋人は腕が短い。中には長い人もいるかも知れぬが、平均して同身長の西欧系、アフリカ系にくらべ短いのはたしか。だから既製服が合わない。ワイシャツなど袖口の部分だけ確実に長い。まったく不便きわまりないが、日本に住む外国人は逆に袖の短いワイシャツで苦労するのだから、ま、おあいこか。
ブラジルのバスや電車には吊り革がないから腕の短い日本人には具合が悪い。外国の乗りものについてよくは知らぬが、吊り革は日本の発明であろうか。ああいう発想は日本的だと思う。
モンゴロイドとコーカソイドあるいはネグロイドとでは体型がいちじるしく異なる。残念ながらモンゴロイドは余り〝カッコ〟がよくない。怒られるかも知れぬがリオのコパカバーナの海岸に行って、ブラジル女性と日本女性の裸をくらべてみればいやでも納得する。
とにかく若いブラジル女性は脚は長くてまっすぐで、腰は高く、出っ張るところ、引っこむところのメリハリがはっきりしている。顔

も総じて彫りが深く、セックスアピール満点だ。

もっとも美の基準は文化によって違うから、日本女性はペチャパイ、垂れ尻、ガニ股（０脚）が美人なんだと言われればそれまでだが、じつはそうとも考えていないらしい。

最近の日本のテレビや雑誌の広告、宣伝にやたらと外国人、それも西欧人が登場する。理由はプロポーションにすぐれ、いわゆる〝ルックス〟が良いからだそうだ。ということは、日本人だって胴長、短足、ペチャパイ、垂れ尻が決して良いとは思っていないことになるではないか。

以下まじめな話。生物学用語にネオテニーという言葉がある。幼形成熟とも幼態成熟とも訳される。これは動物の個体発生が一定段階で止まってしまい、生殖巣だけが成熟して繁殖する現象。

例えばメキシコサンショウウオは、ふつうの両生類が示すような変態を起こさず、幼生形を保ったままで成熟する。これがネオテニーである。ところが、サンショウウオのような下等な動物ではなく、万物の霊長であるヒトも実はネオテニーなんだという説があらわれ、それが受け入れられるようになったのだから世の中はおもしろい。説明しよう。

ヒトにもっとも近い動物は類人猿のチンパンジーである。チンパンジーもヒトも胎児の間はどっちがどっちかわからぬほどよく似ている。しかし、一旦生まれると両者の違いは日を追って顕著になってくる。チンパンジーは全身に体毛が生え、手足が伸びる。身体が大きくなる割には頭が小さい。一方ヒトの方は体毛も生えず頭は大きく、身

体つきも胎児と余り変わらない。それでも、時が経てば生殖器だけは成熟し、幼形を保ったままで生殖が可能になるというわけである。

ヒトはどんな人種でもネオテニーなのだが、とくにモンゴロイドに幼形化が顔著で、胸も尻もコーカソイド、ネグロイドのようには発達せず、肌もすべすべして幼児の皮膚のよう。

実際、日本女性は外国人の目にはやたら若く見られる。サンパウロの地下鉄などで、十五、六歳の少女にしかみえない、あどけない顔をした日系女性が赤ん坊を抱いていて、「クリアンサ（子供）がクリアンサ（子供）を抱いている」とブラジル人がびっくりする。なに、ほんとうは十五、六ではなく、二十五、六なのだ。

この差はいったいどこからくるのか。動物行動学者の竹内久美子さんはおもしろいことを言っている。この差は米づくりで忙しかった東洋人と、放牧でヒマだった西洋人の違いなのだそうだ。

ヒマがあれば考えることはセックスである。かくて西欧人はセックスアピールを追求して、あのようにカッコの良い、セクシーな体型を獲得したという説である。

一見、珍説、奇論に聞こえる。むろん反論も多いが、案外これが正鵠を得ているのではないかと筆者は思っている。ネオテニーではないが、動物、とくに鳥の飾り羽根や派手な色は、すべてセックスアピールの産物なのだ。ブラジルの若い男女の愛情表現はなんとも激しい。路上だろうと電車の中だろうと、人目かまわぬ濃厚なラブシーンで、どうも目のやり場に困ってしまう。

目のやり場がなくて困るのは当方がヤボでカッコの悪い東洋人だか

らで、伝統的にこういう濃厚なラブシーンを公開しているブラジルではあたり前のこと。なるほどこれでは尻も胸も大きくなるはず。恋愛風土は文化だから東洋人の一世は絶対にこういう真似は出来ないが、その子弟たちは平気で同じようなラブシーンを展開している。風土への適応のすばやさは見上げたものだ。

そのうちプロポーション抜群、セックスアピール満点という日系女性が出現するかも知れぬ。ただカッコ良い体型の遺伝子が残るには四、五代経たないと無理だろうが。

馬術に驚威的才能、グワイクルー族

南米インジオの今日までの歴史は、いずれにしても悲劇でしかないのだが、インジオを仔細に観察すると、部族によって社会の文明度と文化がそれぞれに違っている。

アンデスのインカ系は例外として、全体的に見ると、やはり文明度の進んでいたのは現在のパラグァイ、アルゼンチン北東部、ブラジル南西部のラプラク河流域にいたインジオで、それぞれがその土地の自然環境に適応してユニークな生活をしていた。

この中で一番の変りものは、南マット・グロッソのパラグァイ河近くにいたグワイクルー族かも知れぬ。グワイクルーは他にはみられぬいくつかの特徴を持っている。

まず好戦的なこと。そして敵の捕虜を非情にも殺してしまうこと。

インジオには珍しく衣服を着用すること。複雑な紋様の刺青を顔面にすること。馬術に非常に長けていることなどだ。とくに馬に乗るのはうまかった。「鞍上人なく鞍下馬なし」という表現がある。騎者と乗馬が一体となってみえるほど、巧みに乗りこなす様を言うのだが、この言葉はグワイクルーのためにあるようなもの。

実際このインジオは馬の体側に貼りついて、向こう側からみれば人間が見えない乗り方が出来た。

そういうグワイクルーの戦士を措いたジーン・バチスタ・ドブレーの有名な絵が残っている。

グワイクルーの男は鞍もあぶみも手綱も用いず、まったくの裸馬に軽々と乗り、自由自在に馬を繰るのである。このインジオは馬を飼い馴らすのに投げ縄も囲いも必要としない。こんなものなくても馬は逃げないのだ。というと、いかにもグワイクルーがはるか昔から馬を飼い、人馬一体の生活をしてきたかに聞えるが、もともと南米には馬はいなかった。

いや、正確に言うと、現在の馬の原種とみられるエクウスは北アメリカが原産で、パナマ地峡の懸け橋を渡って南アメリカにも移動していた。しかし、今から五、六十万年前に絶滅し、新大陸にはいなくなった。インジオの歴史はるか以前のことである。

実はブラジルにポルトガルから馬が入ったのは一五三五年で、リスボンからマラニオンに百十三頭の馬が運ばれた記録がある。が、ブラジル南部に入ったのは別ルート。現在のペルー、ボリビアからスペイ

ン人の手で、アンダルース種の馬が入っている。
この馬はブラジル南部、アルゼンチン東北部、パラグァイ地方の風土によく適応し、繁殖する。
戦馬にもよく、長時間の旅行にもよく堪えた。
グワイクルーと馬の出会いはスペイン人がサンタ・カタリーナからパラグァイ河に面したマット・グロッソに持っていった時にはじまる。およそ一六五〇年ごろと思われる。一旦馬と出会ったグワイクルーは馬に関して驚威的な能力を発揮する。なにしろ馬の心、気持ちまでわかるのである。
それまで馬など見たこともないグワイクルーが、どうしてこのような才能を持っているのか、その由来は不明である。
ただ、動物との付き合い方について、ある種のカンと独特の方法をもっていたことはたしかで、馬と同時に入ってくる犬も飼うのだが、これも通常とは一風変わった飼い方だった。
つまり、仔犬の時はいろいろ面倒をみて育てるのだが、成犬になると全く放置し、餌も一切与えない。腹が減ってどうにもならぬ犬達は自分で獲物を狩らざるを得ない。そして獲物を狩り立てる時は、人間に協力する形で狩りをする方が成果があがり、報酬も多いことを学習する。犬に餌を与えないのは一種のスパルタ教育なのだ。
ところでグワイクルーは男も女も衣服を着用した。文明人の服を模倣したもので、男は大カワウソやジャガーの毛皮で上衣（ジボン）やマントをつくったし、女は文明人の女性を真似て、木綿で装飾の多いワンピースをつくった。もう一つの特徴は図形や紋様のデザインにす

ぐれていたことである。顔に様々な図形を刺青したり、種々の紋様のヤキゴテをつくって放牧の牛に捺印した。

グワイクルーと、近くのパンタナールにいるパヤグワ族はサンパウロのバンディランテスがもっとも接触を嫌ったインジオで、とくにグワイクルーは好戦的な上、馬術がうまいから、バンディランテス側の被害は大きかった。ポルトガル国王、ドン・ジョン五世は、一七三四年、ポルトガル人に従わないグワイクルー、パヤグワの二つのインジオを討伐する〝ゲーラ・デ・ジュスタ〟（正義の戦い）を軍言する。この討伐でパヤグワは全滅する。現在パヤグワはまったく残っていない。

グワイクルーはしぶとく生き延びたが、十九世紀のはじめに猛威を振った黄熱病で潰滅的打撃を蒙る。

現在グワイクルーの後裔として、カデュヴェウ族約千人がポルト・ムルチンニョに残っている。

レヴィ・ストロースが調査したことで知られる。

生き残る辺境のキロンボ

ブラジルは多くの移民を受け入れて出来た国だから、各民族が集中している居住区域があちこちにある。例えばサンパウロ市ならリベルダーデ界隈は東洋人、ビシーガ地区はイタリア人、ブラスはアラブ人という具合だ。また、近代移民の移住に際して同国人がまとまって入国したケースが多かったため、各地に各民族の集団移住地ができ、そ

れがまたブラジルの特徴にもなっている。

ただし、十九世紀半ばからはじまった外国移民の入植先は、気候の涼しい南部三州やサンパウロ、ミナス、エスピリト・サント、リオの東南各州にほとんど限られていた。

アマゾンや東北ブラジル地方へは、日本移民以外のヨーロッパ移民は意識して避けている。ヨーロッパは寒いから、熱帯気候への適応がむずかしいと判断したのだ。この判断は正しい。

これらはブラジル政府公認の移住であり、移住地だから、各国移民の歴史や移住地の消長、変遷は記録にも残っているし現地に行って調べることも出来る。

しかし、ブラジルにはこうした、いわば政府公認の集団地のはかに、逃亡奴隷のかくれ里であるキロンボやバイアのカヌードスのように、メシアを奉じた共産集落もあった。不法集落である。

これらはいずれも政府軍によって滅ぼされたが、現在でも土地の不法占拠者が集まってつくった集落とか、金掘りのガリンペイロが自然発生的につくった町はいくらでもある。

こういう集落は国、州の行政とは無関係に発生する。だが、いつ迄も放っておくわけにもいかないから、後には正式に町として認め、各種の役所や公共設備をつくるようになるのが普通。

こうした新興の町はほとんど無警察状態で、治安が非常に悪い。まず一般の旅行客や観光客が近寄れるところではない。それに旅行客が泊れるちゃんとしたホテルもない。

風変わりでユニークな辺境の町を一つ紹介しよう。ここは僻地だ

が、とくに危険ということもない。場所はマット・グロッソ州の西端、ボリビア国境に近い、グワポレー河（アマゾン河に注ぐ）に面した小さな町。町はビラ・ベラ・デ・サンチッシマ・トリンダーデという長ったらしい名前。

（以下ビラ・ベラと略称）長いこと忘れられた辺境の地だが、ユニークというのはここの住民のほとんどが黒人だからである。

黒人はアフリカ系の旧奴隷である。近代移民と違い、黒人だけが集団で入植し、植民地をつくることなどあり得ない。しかし、現実にこのひなびた町に行くと黒人ばかりである。暑いところだから小さい子供は素っ裸で歩いている。まるでアフリカのどこかの田舎に行ったような錯覚を起こす。

実はこの〝地の涯〟の町ビラ・ベラは歴史的に由緒ある町で、一七五〇年から一八二〇年までの七十年間、この小集落はまざれもなくマット・グロッソ州の首府として存在し、スペインとの国境紛争問題やイエズス会抗争問題では、ポルトガル帝国の重要な戦略拠点としての役割を果たしたところなのである。

なんでこんなところに首府をおいたかというと、一七四五年、この地方で金が発見されたからである。この当時ポルトガル王室の首相として絶大な権力を握り、辣腕をふるったポンバル侯爵がこの情報を見逃すはずがない。

ポンバル侯は一七四八年、ドン・ジョン五世の詔勅で、首府をビラ・ベラとする「マット・グロッソ／クヤバ直轄領」を設け、初代長官に

アントニオ・ロリン・デ・モウラを任命した。

現在の感覚ではわからないが、この当時は、この地方が金やイエズス会の活動をめぐるスペイン／ポルトガルの紛争地域で、一七六二年四月にはスペイン軍がビラ・ベラに攻め込み、両軍で百八十人の死者を出す戦争も起きている。そのためポルトガルはビラ・ベラからグワポレ河を下った、現在のロンドニア州コスタ・マルケスの近くにプリンシペ・ダ・ベイラの大要塞を構築する。工事は一七七六年にはじまり八三年に完成する。

この要塞建設の労務者や金掘り人夫として多くの黒人奴隷が集められたのだ。皮肉なことにこの要塞、完成した時点で無用の長物になってしまった。肝腎のグワポレー産の金が枯渇して出なくなってしまったのだ。

金が出る地だから、スペインにもポルトガルにもこの辺境が大切なので金が出なくては何も価値もない土地である。要塞は見捨てられ、ポルトガル人はクヤバに逆移動してしまった。

この時、黒人は見捨てられたのである。むろん逃げ出してキロンボをつくる黒人も多かったのだが、ともかくこれで、この地方は白人の一人もいない黒人王国になってしまった。

ブラジル中のキロンボというキロンボはブラジル軍によってすべて討伐されたが、ビラ・ベラという黒人の町は形を変えて現在まで生き残ったキロンボと言ってよく、たいへん興味のある町。

辞書に不可欠、インジオ語

今年（一九九五年）の日本ブラジル修好百周年記念事業の一つとしてポ和辞典がつくられることになっている。五万語というから、そう大作ではないが、大いに期待している。

実はブラジルの場合、ポ和辞典と言っても、旧宗王国のポルトガルとはまったく事情が異なるから、いわゆるポルトガル語だけでは駄目なのだ。もちろんポルトガル語が主体となるのは当然なのだが、これにインジオ語、それもとくにツピー・グワラニー語が入った、ブラジル語辞典でないと役に立たない。なにしろブラジルは、地名、動、植物名のほとんどがインジオ語なのである。新世界の動、植物は、旧世界にはない固有種が多いから、ヨーロッパ系の言葉では代用できないのだ。

インジオ語の地名、動、植物名を全部外すというなら話は別だが、まさかそんな乱暴なことはできまい。地名事典や動、植物事典ではないから、詳しく説明する必要はないにしても、常識的なことは書かねばなるまい。例えば地名で、ピンダモンニャガーバとかイタクワケセツーバとかの舌を噛みそうな名前は省略して一向に差し支えないが、パラナ、パラー。アラゴアス、クリチーバ、クヤバ、マセイオなどの州名や首府名は載せないとおかしくなる。

魚も、ピラルク、アロワナ、ツクナレ、タンバキ、パクー、スルビン、ピランボイア、ピラニアなどを一律に「ブラジルの淡水魚」だけで片

付けるわけにもいくまい。多少は説明しないとかえっておかしい。哺乳類はどれでも和名がついているから楽だが、鳥類、は虫類はかなりむずかしいし、魚類や昆虫類は更に厄介。それに植物も難物だ。いずれにしてもブラジル語辞典をつくるのは苦労の多い作業となるのは間違いない。

日本のカトリック系大学や外語大学には、日本語に堪能なポルトガル人の教師がポルトガル語を教えているのに、ブラジル、日本語辞典の中級版がいまだに出来ない。この理由の一つはインジオ語にあるのではないかと思っている。

それにブラジルは広いから、場所によって言葉が違う。蚊のブラジル語はペルニロンゴで、これはポルトガル語。使用範囲はミナス以南。アマゾンではカラパナンでなければ通用しないし、東北地方はムリソカが主流。どちらもインジオ語。サンパウロの日本人は魚のスズキ（鱸）はロバーロだと思っている。まあ、スズキ目スズキ科の魚なんだから、それでも良いのだが、厳密に言えばロバーロはポルトガルの沿岸でとれるスズキ科の魚。ブラジルのは属も種も違う。インジオ名はカモリン、カムリンで、バイア以北はこの言葉を用いる。

植物の固有名詞も新しいインジオ語が次々とつくられ、それがブラジル語として定着するケースがあるから要注意。以前テレビの連続ドラマに「カナンガ・ド・ジャポン」というのがあった。筆者はテレビ・ドラマをみないから内容は知らぬ。が、カナンガ・ド・ジャポンなる言葉を知っている人が何人いるんだろうと気になった。

これは日本名をバンウコン（蕃鬱金）という、ショウガ科の植物なの

だ。インド原産で、ウコン（ターメリック）の仲間。日本の原産でもないのに何で「日本のカナンガ」となったかわからぬ。カナンガはツピー語でニクズク科の高木の名称。この木の実は芳香成分があり、香辛料として使える。カア（植物）ナンガ（魂、精神）で、元気の振い立つ植物の意。だから「カナンガ・ド・ジャポン」は、インジオ語と、ポルトガル語の合成語。

ついでに触れておくと、ブラジルには「バンウコン」のほかにほんもののウコン（ターメリック）もある。これをマット・グロッソのタピラペ族インジオの居住地で見つけた時は驚いた。東南アジア原産のウコンがマット・グロッソのインジオの居住区にあるはずがないではないか。だがまざれもなくウコンだった。そしてツピー語でマンガラタイアの名前がついていたのには二度びっくりした。

マア（食べられる）カラー（塊根）クィア（辛い、ピリッとした）でまさしくウコンの特徴を言いあらわしている。ブラジルではヤマイモをカラーと言うが、これはツピー語なのである。

さて、ウコンの原種がブラジルにもあるということになれば、これは大変な発見。逸る心を抑えて慎重に調べたら、残念ながら移入種だった。十八世紀の終りから十九世紀にかけて、東南アジアの香辛料がいくつか持ち込まれた。胡椒もそうだが、ウコンもその一つ。

ブラジルでは割合よく出来るのだが、他の香辛料と比較すると値段が安く、経済商品にならなかった。放置され、野生化したのをインジオが着色料や食用に利用したのだ。

インジオによって拡まったバナナ栽培と共通しているが、もちろん

ウコンはマイナーな存在。それにしても特徴をあらわす言葉を直ちにつくり出すのだから立派なもの。

インジオ発明のハンモック

南米の低地インジオが開発した最大の食用植物はマンジョカ(キャサバ)だが、ブラジルのツピー系インジオがつくった道具のうちで、最高の傑作はハンモックだろう。ブラジル語ではＲｅｄｅで、網、ネットの意味だ。アウレリオの辞書をひくとやっと一五番目にハンモックのレーデが出てくる。レーデと書いたが、日本人がレーデと発音しても絶対に通用しない。

通用させようと思ったら、ヘジまたはヘッジといった方がよい。よく日本の日本人が使う、危険分散の意味の「リスク・ヘッジ」のヘッジを出来るだけ、日本人的発音で言えば間違いなく通じる。

ふしぎなことに、動、植物や食べもの、道具のほとんどにインジオ語が使われているにも拘らず、インジオが発明した最大の道具のハンモックにインジオ語が使われていない。

むろん言葉そのものはある。〝イニ〟と言うのだ。ところがこのイニ、いつの間にか言葉がすたれ、インジオでさえヘッジを使うようになってしまった。もっともこの現象は文明人と接触しているインジオだけに限られてはいる。

ハンモックという道具は使い慣れると、これほど便利なものはな

い。だいいち持ち運びがかんたんだし、ベッドのようにスペースをとらないから、一つの部屋にたくさんの人間が寝られる。上下二段に吊ることも出来る。ベッドの代りになるのはまあ、当然だが、ソファにも揺り椅子にもなる。

とり外して折畳めば座布団代りのクッションにもなる。長い竹竿に両端を縛って担げばカゴ（駕籠）にもなるし、病人や死人を運ぶ担架にもなる。実際、インジオはこういう使い方もしている。

その上、ハンモックは床からかなり離れているから、地上を這う毒虫の被害を避けることも出来る。また揺らすと風がおきて涼しいし、通気性があるからベッドに寝るよりはるかに快適。

とまあ、これがハンモックの効用。こういう便利なシロモノだから、アマゾンでは金持ちも貧乏人もハンモックを好む。ベレンやマナウスのような都会地の高級アパートでも、部屋のあちこちにハンモックを吊るフック（鉤）が壁にはめ込まれている。

アマゾンでも中流以上の階層は、ちゃんとベッドを持っている。しかし、ベッドは調度品として、部屋の体裁を飾るだけで実際に寝るのはハンモックという人間も多い。アマゾンは暑い上に湿度がやたらに高いから、日本流にいうと不快指数が高い。ベッドになど寝ていたら背中が暑くてやり切れないし、汗かきの人ならシーツにべったり汗がつき、気持ちが悪くて仕方がない。もっとも現在はアマゾンでも都会地はクーラーがあるから、多少は事情も変っている。

おもしろいことに、同じハンモックを使う東北ブラジルでは、金持ちはハンモックを就寝用には使わない。乾燥地帯で湿度は低く、ベッ

ドの使用が出来るからである。貧乏人は家が狭いし、ベッドは高価なので、ハンモックを使用せざるを得ない。

現在、ハンモックをつくっているのはセアラー州が多いが、つくり方はツピー系インジオのハンモック製法をそのまま踏襲しており、基本的に改良したところはない。ということは、インジオのつくったハンモックがいかに完成度が高かったかの証明でもある。たかがハンモックと言っても、永年にわたって人間の全体重を支えるのだからいい加減なつくり方は出来ない。フィオ・ドゥプラという、二本の丈夫なタテ糸を中心にヨコ糸を織って行くのだが、ヨコ糸の入らない両端のタテ糸を綱に束ね、それを更に編みこんで、ひとつの取手に纏める技術がむずかしい。

かつてハンモックづくりはインジオ女性の仕事だった。何十年も持たすのだから、原料の選択や織り方にノウハウがあり、それぞれ女性が出来映えを競った。原料は木綿、アガーベ、クロアタなどの麻類、椰子の繊維などだが、やはり肌ざわりから言って木綿が好まれた。インジオのつくったハンモックにも網目のうんと粗い、軽くて携帯に便利なのがあるが、これはもっぱら、狩りの野営用。目の粗い網のようなハンモックは、網目が肌に喰いこんで、ちっとも快適ではない。

東北ブラジルやアマゾンから、サンパウロなどに出稼ぎにくる労働者のハンモックに対するサウダーデ（郷愁）は相当なもの。なにしろ生まれた時からのつき合いなのだから無理もない。

ハンモックに寝た最初の文明人は、カブラルの船隊に乗っていたポルトガル人書記のペーロ・バス・デ・カミーニャ。一五〇〇年四月二

十七日、上陸し、インジオの小屋ではじめてハンモックに寝た。「継ぎ目のない一枚の布でつくられていて、両端が柱にくくりつけられている」と書いてはいるが、肝心の寝心地が良かったかどうかについては一言も触れていない。多分、翌日は背中が痛かったにちがいない。

禁令で変えられぬ食習慣

一九二〇年代のアマゾンの写真に、河岸にずらりと並べられたマナティ（ペイシボイ）が映っている。この時代までマナティはほんとうに沢山いたのだが、乱獲で激減してしまった。

肉はうまく、脂も上質、その上身体が大きいとくれば人間の格好の標的になる。それにこのマナティ、息をするため、時折り水面に鼻先を出すから見つけやすく、銛でかんたんに仕留められてしまう。一産一仔の哺乳類だから乱獲すれば数の減るのは当然。

現在マナウスのＩＮＰＡ（国立アマゾン研究所）でマナティの飼育研究を行っているが、水棲哺乳類の人工繁殖はなかなか条件がむずかしいらしく、まだ思うような成果があがっていない。絶滅は容易だが、繁殖は困難という見本的な例。ペイシボイ（牛魚）の名前は、口と鼻面が、牛に似ているので、最初に見たポルトガル人がつけたものだが、余り感心した命名ではない。ツピー語でグァラグァという。これも今では死語になった。言葉を使おうにも肝心の動物がいないのだからどうにもならない。

一九七〇年と記憶しているが、ブラジルでもワシントン条約に先立って野生動物捕獲禁止令が出る。さすがのブラジル政府もあまりの乱獲のひどさと外国からの非難に対処せざるを得なかったのだ。ところが野生動物を捕獲して生活している人間も多数いるわけだから、禁止令が出たからと言って、直ちに実効があらわれはしない。走っている機関車を止めるようなもので、徐々にスピードを落としていかねばならない。ブラジルでは禁止令が行きわたるまで、約二十年かかった。

最初はジャガーやカワウソ、鹿の毛皮やワニ、トカゲの皮革が取締りの対象になった。これはブラジル領アマゾンでは比較的短期間に規制が行きわたったが、パンタナールでは大幅に遅れる。

なにしろパンタナールはボリビア、パラグァイと国境を接している。規制のないパラグァイに持ち込めば堂々と商売が出来るのだから、ブラジルはお手上げなのだ。現在でも密輸がなくなったわけではないが、量的には問題にならない。ワシントン条約が発効して稀少動、植物の輸出入が禁止されたことと、世界的に自粛の風潮が高まったからである。今どきジャガーの毛皮コートなど着て歩いたら、グリンピースのような環境保護団体から袋叩きにされかねない。

稀少動、植物の輸出規制は、時間はかかったが実効をあげている。しかし、国内あるいは地域内の住民が日常の食用にしていた動物の捕獲禁止はなかなか守れない。食生活は文化と密接にかかわりがあり、一朝一夕には変えられないのだ。永年にわたってパッカ、鹿、猿、カメなどを食べ、うまさも知り、調理法も確立している食材を一片の法

律で禁止するのは無理なのだ。まあしかし、禁止令でアマゾンの住民が一番困ったのは、カメが食べられなくなったことかも知れない。

アマゾンの亀は種類も数も豊富。最大甲長九〇センチに達するタルタルーガ・グランデをはじめ、トラカジャ、ムスアン、ピチウ、マタマタ、アペレマそれに陸ガメのジャブチと実に多彩。こうしたカメの肉や卵はアマゾン住民の日常的な食糧だったのである。

ベレンの名物カメ料理に〝カスキンニャ・デ・ムスアン〟というのがあった。あったと過去形で言わねばならぬところがつらい。ムスアンは小さいが味が良い。小間切れにして油で妙め、マンジョカでつくったファロファの粉を混ぜ、ムスアンの甲羅に入れて出す。

もともとインジオの食べ方で、インジオは甲羅を鍋代りに、小間切れの肉を煮込んだ。甲羅を直接火にかけると腹甲に近い部分のゼラチン質が溶けて味が良くなる。

もちろんレストランではこんな手間のかかることはしない。あらかじめ用意したムスアンの甲羅に入れるだけ。レモンを絞りこんで食べるのだが、ビールのつまみにはうってつけ。

似たような食べものに〝カスキンニャ・デ・カランゲージョ〟があり、これはこの地方の泥ガニの身を同様に調理し、カニの甲羅に入れて出す。こっちは禁制品ではない。

この間ベレンで、このカニを食べながら「ムスアンはないんだよね」と半ばあきらめてウェイターに聞いたら「いや、あるよ」とあっさり言う。そしてニヤリと笑って曰く「もっともムスアンの甲羅には入れないけれど」つまりカスキンニャ（甲羅）に入れないのだから

〝カスキンニャ・デ・ムスアン〟ではないという理屈なのである。やがて皿に盛られたムスアンが出てきた。

「じゃあ、この料理はなんて言うんだい」と聞いたら、ウェイター氏はすまして答えた「ペチスコ・マラジョアーラ（マラジョーの珍味）さ」。因みにムスアンの主産地はマラジョー島の浸水草原なのである。「白馬は馬に非ず」式の詭弁だが、いやご立派なもの。つくづく感心する。

東洋的なジュルパリ神話

よくそこらで見かける観葉植物に、大きな葉に白い斑の入った〝コミーゴ・ニンゲン・ポーデ〟というサトイモ科の植物がある。〝あたしにゃ誰れも勝てないよ〟という意味だからずいぶん変った名前。

もっともこの名は最近のもので、アマゾンのインジオはアニンガと言った。たいへんな毒草で、葉や茎の液汁、根茎の乳液は猛毒、粘膜を刺激するのが特徴。ほんの少量、舌につけただけで猛烈な痛みが走り、舌がまひして口が利けなくなる。

だからアメリカではこの植物をダム・プランツ（唖の植物）とかダム・ケーン（唖の茎）とかいう。もともとサトイモ科の植物にはしゅう酸カルシウムがあって、この針晶が粘膜を刺激することが知られているが、熱帯アメリカに三十種ほどあるディエッフェンバキア属はとくに毒性が強い。

ツピー語のアニンガは、慄然とする、肌に栗を生ずるということ。アニンガにはしゅう酸カルシウムのほか、毒性サポニンがあって、これがしばしば致命毒となる。

なにしろインジオの太陽神ジュルパリの禁忌を犯した女性はアニンガの液汁を飲んで自殺しなければいけないのだから、毒性が強いのは当然といえば当然なのだが、しゅう酸カルシウムの針晶に口や喉、胃の粘膜が焼かれるのは叶わない。

ところでアマゾンのいくつかのインジオに共通しているジュルパリ神話は、インジオの価値感や道徳律をよくあらわしていてなかなか興味深い。それにどことなく、東洋的でもある。地域によって細部は違っているが、大筋は変りない。

むかしむかし、インジオの社会は母系社会で、女性がすべてを取りしきっており、男は女の言うがままに動かされ、奴隷のような地位に甘んじていた。この様子を見た天の神、ツパンは歯がゆくてならない。

(なんだ、これでは陽と陰が逆になっているではないか。自然の摂理に反するものだ。本来の姿に戻さねばならないが、それには男の絶対者を誕生させることだ)と考えたツパンは、自分の娘セウシを地上に派遣する。美しいセウシは魔法の果物を食べて妊娠、太陽の子ジュルパリを生む。

セウシの立場はキリストを生んだ聖母マリアと同じで処女懐胎。こういう聖なる絶対神を創造する時は、ありふれた男女の営みから生まれるのでは有難味がうすれる。処女懐胎に限る。

生まれたジュルパリは最初から超能力をもっていて、夜はどこかへ隠れて決して姿を現さない。

これはジュルパリが太陽だからで、夜の世界にいるわけがない。

やがて十五年が経ち、たくましい若者に成長した若者は皆の前に姿をあらわし、月の世界から持ち帰った魔法の石を示し、「月の世界（太陰、女の世界）も征服した。今度は太陽（男の世界）主導でやって行く」と宣言、ジュルパリが支配者に就任、直ちにジュルパリの掟八ヵ条を布告する。

①女は思春期に達するまで純潔を尊ぶべし。

②女は売春してはならず、唯一人夫に貞節をつくすべし。

③女が出産したら男は月が満ち、月が欠ける間（二十八日）一切の仕事をしてはならず、食物も最低限とする。これは男のエネルギーを生まれた子に与えるためである。

④弱い酋長は速やかに勇敢なる酋長にとって代えられねばならぬ。

⑤酋長は養える力があれば何人の女を持っても差し支えない。

⑥子供の産めぬ酋長の女は見捨てられ、うとんじられて当然である。

⑦男は自分の両手の労働で生活していかねばならない。

⑧女は決してジュルパリを見てはならない。何故なら女というものは、淫乱で自制心がない、好奇心が強い、秘密を守れず、すぐ人にしゃべってしまう、という女特有の三つの欠点のいずれか、あるいは全部持っているからである。

筆者が女の悪口を勝手に捏造して書いていると思われては迷惑だか

ら、出典をあげておくが、これは一九〇九年にフレデリコ・コスタ神父が書いた『Ｃａｒｔａ　Ｐａｓｔｒａｌ』からの引用なのである。

十六世紀にはじめてアマゾンのインジオとコンタクトしたイエズス会の宣教師は、ジュルパリの地位と性格がわからず、これはキリスト教におけるデーモンかサタン（悪魔）と同じようなものだと考えた。やっとジュルパリの性格がわかってきたのは二十世紀に入ってからである。

ジュルパリの祭りは男だけのもの。女の立ち入りは一切禁止。祭典を見ても音楽を聞いてもいけない。このタブーに触れた女はアニンガの毒を飲んで死なねばならない。ジュルパリの母親のセウシさえ、アニャンガ（人を誑かすお化け）にだまされ、聖域に入ったため雷に打たれて死んでしまうのである。

タブーを犯した女をアニンガの毒液で殺すのはこれを用いると口がまひしてしゃべれないから、あの世に行ってもジュルパリの秘事をばらされる心配がないのだ。今は昔の物語。もうこんなことはない。

急速な崩壊インジオ文化

筆者はブラジルの生薬が専門だから、これまでにもずいぶん各地を歩いた。インジオの集落やインジオの血の濃いカボクロ（文盲の土着民）の家も訪ねている。薬草についての貴重な知識が得られることを期待してのことである。

この期待、大抵の場合裏切られる。かつては豊富な知識をもっていたのだろうが、現在はインジオもカボクロもこちらが期待するほどの薬草知識は持っていない。

まったく知らないわけではむろんないが、文明人と日常的に交渉のあるインジオほど知識が貧弱で、余り役には立たない。それだったらむしろ、町の汚いマーケットに屋台を並べて売っている薬草屋の方がよほどよく知っている。ベレン市の河岸、ベル・オ・ペーゾにずらりと並んでいる薬草の屋台は壮観で、規模から言えばブラジル一だろうが、なにあれほど規模は大きくなくても、どこの町のマーケットにも薬草屋は必ずあるものなのだ。この連中、薬学を勉強したわけではないから一〇〇パーセント信用することは出来ないにしても詳しいことは確か。

インジオの薬草知識が急速に衰えたのは、インジオ社会に文明社会の薬が持ち込まれたからである。インジオ保護局の係官は末接触のインジオとはじめて交渉をもつ際、薬局で購入した薬を渡す。これがまた劇的に効く。化学薬品に対する耐性などまったくないのだから、少量でもストレートに効いてしまう。インジオと友好関係を保つには都合のよい方法だが、これをやると、彼らの伝統的な生薬や生薬の知識はいともかんたんに忘れられてしまう。

インジオ社会といっても、インジオの成員すべてが薬草の知識を持っているわけではない。パジェという呪術師が薬草の専門家であり、また医者を兼ねているのが普通。

パジェは自分の専門知識を一子相伝的に代々伝える。ところが文明

社会の薬などが入りこむと、インジオ社会の薬草を用いた医療システムが根本から崩れてしまうのだ。一旦崩れたら最後、文字を持たぬ民の悲しさ、永年かかって積み上げた貴重な生薬知識を復元するすべがない。

南米のインジオに中国における漢方のような医学、薬学体系があったと考えているわけではない。

それでも各地の呪術師には、試行錯誤を重ねた末に確立した専門知識があったはずである。その証拠にアマゾンには矢毒のクラーレのように、非常に高度の植物知識と調合技術を要する毒薬が存在している。

クラーレまたはコラーレはツピー語で矢毒のこと。カリブ系インジオはウィラリの言葉を使う。

フジウツギ科とツヅラフジ科の植物の樹皮の水製エキスからつくるものだが、製法が複雑で、とてもシロウトのインジオの手におえるものではない。これは専門職のパジェだけが扱うもの。

クラーレは猛毒で、吹矢や矢でこの毒を射込まれた動物は四肢の筋肉が麻痺して倒れる。まひはただちに全身及び最後は呼吸まひで死に至る。クラーレの作用で骨格筋が動かなくなるのだ。

さて、ここが大切なところなのだが、毒で獣や魚をしとめても、その獲物を食べた人間まで毒にあたって死んだのではなんにもならない。だから矢毒と一口に言うが、矢毒を完成するのは大変むずかしいのである。クラーレが評価されるのは、クラーレで斃した獲物を食べても大丈夫だからである。クラーレの毒はまことに都合よく出来ていて、消化器官からは吸収されず、速やかに排泄されてしまう。もっと

も人間だって毒矢を射込まれれば筋肉まひで直ちに死ぬ。

アマゾンのインジオがよく使う魚毒植物のチンボー（マメ科、東南アジアのデリス根の同類生薬）も、魚はまひさせるがその魚を食べた人間には異常がないという性質を持っている。

これは主成分のロテノンが昆虫や変温動物には強い作用を及ぼすが、温血動物には効かないからで、クラーレとは次元が違う。インジオによるクラーレの発明はまさにノーベル賞クラスの業績。薬理学の実験には今でも欠かせない。

ブラジルを含めた、南米低地のインジオも決して資質においてマヤ、アステカ、インカなどのインジオに劣っていたわけではない。だが環境があまりにも違いすぎた。とくにブラジルのインジオは自然に恵まれていた。

インカのように高地に住むインジオは寒いから低地のインジオのように裸でいるわけにはいかない。リャマ、アルパカなどを飼い、その毛を紡いで衣服をつくらねばならないし、住居も寒さに堪えるしっかりした家が必要となる。また、食糧も耕作をしなければ手に入らない。

しかし、結果において恵まれすぎた低地のインジオは急速に滅亡化の道を辿っている。保護地域内に住んでいるインジオの自殺やアルコール依存症、つまりアル中もふえている。残念ながらインジオ固有の文化は風前の燈火なのが現状。

未整備なブラジルの観光資源

ブラジルの景観といえば、イグアスーの滝やリオの景色、ココヤシと白砂の東北ブラジル海岸、マナウスの水の出会いなどがすぐに思い浮かぶ。だが、よく知られたところ以外にもすぐれたところはたくさんある。例えばピアウイ州からマラニオン州の海岸にかけて形成されている大デルタなどは、地理学に興味を持っている人だけでなくても、一見の価値に値する壮大なもの。

両州の州境を流れるパルナイーバ河が吐き出す土砂が、北上する南赤道海流によって北に押し上げられ、海岸部に大砂洲を形成するのである。既に出来上がったものではなく、現在さかんに砂洲形成が進行中であるところが魅力となっている。

ただ残念ながら、交通の便が悪い上に宿泊設備もないから、かんたんには行けぬ。ヒマと体力のある若者ならリュックサックを背負って野営覚悟で行けば良いが、一般の人はそうもいかぬ。

アマゾン河口北岸で起きる海嘯現象であるポロロカは、アマゾン河の巨大な水量、その水を北に押し流す赤道海流、それを止める強い逆風、潮汐、地形などが複雑にからみ合って起きる大逆流現象。津波と言われることもあるが、水面全体が持ち上がり、それが押し寄せてくるのだから、むしろ高潮現象と言った方がよい。

海嘯そのものは世界にいくつも例があるが、アマゾン河口の規模は世界一だ。これも現地に行く方法がない。テレビの撮影なら金をかけ

て小型機や舟をチャーターすればよいが観光客はそうはいもともとこの付近は、まれに人家が点在するだけの広漠の僻地。一番近いマカパ（アマパ州の首府）の住民だって、実際にポロロカを見た人はほとんどいないのである。

また、ブラジル高原の楯状地の外縁部にはシャッパーダ（卓状地）があちこちにある。シャッパーダ・デ・ギマランエスとか、シャッパーダ・デ・ディアマンチーナである。ここの軟層部が水の浸蝕でけずられて急崖になったり、滝をつくったり、洞窟が出来たり、地下湖をつくったりする。

当然先史時代のインジオの居住跡もあるが、観光客の行ける場所はごく限られている。

どうもブラジルの場合、観光素材はすごいのに、それを活かすインフラがさっぱり未整備なのだ。

それに滝でも崖でも防護柵を施して安全対策を講じているところなどはないから要注意。

ブラジルの場合、国立公園だろうが州立公園だろうが、人身事故のリスクは観光客の個人負担。

足を滑らせて崖から落ちれば、本人の不運でおしまい。

イタイプー・ダムがつくられたため現在では消失したが、パラナ州のグワイラにセッテ・ケーダスの大滝があった。イグアスーよりこちらがよいという人も多かった。

グワイラの町の前の河幅二キロのパラナ河の本流が、僅か幅六〇メートルの峡谷に放り込まれる。

イグアスー式の直下型ではなく、六十度ぐらいの角度で奔流が階段状に駆けおりるのである。

ここに三つだったか、吊り橋がかかっているのだが、これはこわかった。橋は揺れるし、下を見れば岩を噛んで狂奔する流れで足がすくむ。こわいのは当たり前。しかし、もっとこわいのは、補修も保全もいい加減な、吊り橋そのものに信頼がもてないことである。（大丈夫かいな）という不安なのだが、果たせるかな悲劇は起こった。吊り橋のワイヤーが切れ、十数名が落下して命を失った。どうせ水没する滝にかかる橋だからと、補修、保全を怠ったのが原因である。

鍾乳洞をはじめとする洞窟も、ブラジルには規模の大きいものが多い。だが、これもごく限られた洞穴以外は調査もまだ進んでいないし、一般に開放されていない。

まあしかし、これは一般に開放されないから良いので、現在の平均的ブラジル人のマナーと文化レベルでは、鍾乳洞の石筍をハンマーで叩いて壊し、持ち出すようなアクシデントが絶えないと思う。ずいぶん以前から禁止になっていたはずの化石や硅化木の国外持出しも、つい最近まで一向に実効がなく、おびただしい数の貴重品が海外に持ち出された。

また、ブラジルでは珍しい海洋島で、火山島でもあるフェルナンド・デ・ノロニャ島には、新生代第三紀の化石貝や造礁サンゴである六放サンゴが数多くあるが、最近まで規制はなく、観光客の持ち帰るのに任せていた。ただ現在は禁止。

ピアウイ州のサン・ライムンド・ノナットの岩絵群は、古代インジ

オの遺跡として世界的に貴重な存在。人類学者のニェデ・ギドン女史の努力で保護され、学術研究もなされているが、これだってギドンさんがいなければどうなったかわかったものではない。

ブラジルだけではないが、旧植民地はやはり金儲けの収奪が主流。歴史、文化遺産を大切にし、学術研究を重視する風潮はまだしばらくは出てこないのかも知れない。

ポルトガル、香料貿易独占

サンパウロ市にあるイビラプエーラ公園内の州議会前の大池を背景に、ペドロ・アルバレス・カブラルの記念碑がある。最近つくられたものだが、記念碑としてはなかなかの出来映え。

カラベル船の帆や波を型どった中に立ったカブラルが両手を拡げ、ブラジルの発見を祝福している構図。デザインが斬新で、珍しくセンスがよい。

カブラルの名前はブラジルなら小学生でも知っている。むろん、ブラジルを発見した人物なのだから当然と言えば当然。しかしカブラルの場合は同じ大航海時代の活躍者の一人ではあっても、残念ながら舞台で大向うの観客を唸らせるような看板役者ではない。

つまり、はじめて新大陸に到達したコロンブス、アフリカ回りでインド航路を発見したバスコ・ダ・ガマ、コロンブスの考えを修正して、アメリカが新大陸であることを証明したアメリコ・ベスプッチ、あるいははじめて世界一周をしたマゼランなどの超一流どころとくらべる

と、一流は一流でもかなり落ちる。まず一流の下というところか。

ポルトガルの貴族であるカブラルの名声がそれほど高くないのは、彼が航海したのがブラジルを発見した時のたった一回しかないためでもある。コロンブスは四回大西洋を渡ったし、ガマも三回インドに行っている。カブラルだって何度も航海して名声を高めたかったのだろうが、第一回目の航海でインドのカレクー（カリカット）を占領することが出来なかったため、ポルトガル国王ドン・マヌエルの気に入られず、再度航海するチャンスを与えられなかったのである。

それでもカブラルの場合はブラジルの発見者として青史に名を残し、ブラジルをポルトガル領土とした大功労者として公認されたのだから、充分むくわれている。

その点、気の毒なのはスペインの航海家ビセンテ・ヤネス・ピンゾンで、この人はカブラルがブラジルを発見する三カ月前にブラジルを発見しているが、結局その栄誉は彼のものとはならなかった。ピンゾンはコロンブスがアメリカ大陸に到達した一四九二年の第一回航海にもカラベル船「ニーニャ」の船長として参加した大ベテラン。ただ第一回の航海後、コロンブスと仲違いをして別れてしまう。

そして一四九九年十二月に独自で四隻のカラベル船を率いてパロス港を出港、新大陸に向い、一五〇〇年一月二十六日、現在のペルナンブコ州サント・アゴスチンニョ岬に到達する。ピンゾンはブラジルを発見したものの、上陸はしなかった。一四九四年のローマ法王調停によるトルデシーリャス条約で、この土地を発見してもスペインの領土とならぬことを知っていたからだ。結局、ピンゾンはブラジルに上陸

しないまま大陸沿いに北上し、アマゾン河とオイアポッケ河（ブラジルと仏領ギアナの国境を流れる河）を発見したのち、カリブ海に出てしまう。現在ピンゾンの名前の残っているのはオイアポッケ河の仏領ギアナ側の呼称「ビセンテ・ピンゾン河」だけである。

コロンブスのアメリカ発見が余りに有名になったため、目立たなくなってしまったが、大航海時代の幕開けとなった十五世紀末におけるポルトガル、スペインの競争は、実はポルトガルの勝ちだった。一四九八年五月、バスコ・ダ・ガマの率いる四隻の艦隊がアフリカ大陸を回り、インド洋を横切ってインド南部のカリカットに到達する。このアフリカ回りのインド航路の開発こそ、ポルトガルがエンリッケ航海王子時代から七十年もかけて努力した執念の成果だったのである。

これによってポルトガルはインド航路を確立し、以後、イスラム商人を排除し、海上輸送を制覇、約百年間、アジアの香料貿易を独占する。十六世紀はポルトガルの世紀となった。

そこへいくと、コロンブスは悲劇的である。コロンブスの悲劇は西回りで到達したカリブ海の島をアジアと思いこんだこと。コロンブスは四回も新大陸に航海しながら、遂にこの地がアジアでないことに気付かなかった。

新大陸で大量の銀が発見されたのはコロンブスの死後で、彼自身は悲運の生涯を終える。なにしろ目的としたアジアの香料がまったく得られなかったのだからやむを得ない。

カブラルによるブラジル発見もアフリカ回りのインド航路を辿りながら、風のため南に流され過ぎた偶然の結果である。しかし、ポルト

ガルにとってブラジル発見の報は痛し痒しだった。ほんとうはブラジルどころではないのである。

実際この当時のポルトガルは、アジアとの香料貿易が確立出来るか否かの大切な瀬戸際で、新発見のブラジルなどにかかわる余裕などなかった。なにしろ当時のポルトガルの人口は百二十万そこそこ、アジアに船と人間をさいたらブラジルへは向けられない。だから発見後三十年ほど、ブラジルは放置されていたのである。

〝珍書〟から見た香料通商史

パラー州の日系移住地トメアスーが胡椒の大産地であったことはよく知られている。大産地であった、と過去形にするのはいささか問題で、今でも栽培はされている。が、残念ながらかつての勢いはもうない。

トメアスーの胡椒は一九三三年、第十三回南拓移民の監督、臼井牧之助がマレー半島の胡椒の苗二十本をシンガポールで入手し、トメアスーに持ち込んだもの。

もっとも胡椒は南拓（南米拓殖会社）がはじめから計画していた栽培植物の一つだったから、既にブラジルにあった在来種での試験栽培は行われていた。この品種、はるか昔の十七世紀にバイア、マラニオン、パラーに持ち込まれ、野生化していたもの。収量も結果率も低く、経済商品にはならなかった。爆発的な胡椒ブームが訪れたのは第二次大戦後で、一九五二年に四六五トン、一九五六年一二〇〇トン、一九

六八年には最高の五七〇〇トンを産出する。相場も戦前の十倍にハネ上がる。東南アジアの主産地が戦争の影響で激減したからだ。

かくて黒いダイヤの胡椒景気はトメアスーを中心に沸きに沸く。なにしろ一トンの胡椒でトラックが二台買え、手のひらにのせた胡椒の粒で労働者を一日雇えたのだそうだ。こうなると中世の胡椒商人がピンセットで一粒一粒数えた時代と似てくる。だがこのブーム、いつ迄も永続きはしなかった。アジアの生産が回復してきたことと、胴枯れ病、根腐れ病の蔓延によるダブルパンチで、一九七〇年代になると生産は下降の一途、一九八〇年代は一〇〇〇トン台になってしまった。

とは言え、一時はインドネシア、インド、サラワクにつぎ、セイロンを抜いて世界四位、アジア以外では文句なく一位を占めたトメアスーの胡椒は、歴史的に特筆すべき快挙だったのである。

もともと胡椒はインドのマラバル地方が原産だが、交易の歴史は非常に古く、既に紀元前五、六世紀から中国には入っており、一部はヨーロッパにも達していた。ヨーロッパでかなり大量に使用されるようになるのは紀元前一世紀ぐらいから。ペルシャ経由でインドの胡椒がローマに入ってくるようになる。用途は辛味があって、殺菌、防腐作用にすぐれているところから、料理全般やソースのスパイスとして賞用された。薬用としては食欲増進や消化促進、マラリアのような高熱の解熱剤、痛みどめ、また、強壮、催淫剤にも用いられる。

さて、手許におもしろい本がある。山田憲太郎著『香料の歴史』。筆者が持っているのは復刻版紀伊国屋新書だが、昭和三十九年七月に書いた著者の「まえがき」が載っているから、最初の本もそんなに古い

ものではない。著者の紹介が書いていないから、どんな経歴の学者か知らぬが、こと香料の通商史にかけては専門家中の専門家。「まえがき」の最後にこう書いている。

「私は三十年来、香料の歴史をあとづけ、近十年はどスパイスの歴史に専念している。本書はそのアウトラインである。多くの人びとにわかってもらうよう、平易にそして簡明にと心がけたが、私の拙い筆はあるいは十分でないかも知れない。しかしこれだけは断言できる。スパイス（香辛料）の歴史として、本書のように広く東西の関連から記述したものは他に類書を見出さない。唯一の本であるとともに珍書であろう」

本人が自信をもって、本書の類書はなく、珍書だと断言しているわけだが、一読するとなるほどこれは珍書であり、奇書であることがわかってくる。

著者によると、香料には①インセンス（焚香料）②コスメチックス（化粧料）③スパイス（香辛料）の三種があるのだそうだ。しかしこの本でとりあげているのはスパイスが中心で、それも胡椒、肉桂、丁字、肉豆ク（にくづく）に限られる。

この熱帯アジア産の四種のスパイスで、東西の通商史、ひいては大航海時代を主にした世界史を書いているのだから驚き入る。ことわっておくが、この本、資料価値は高く、学術的な内容である。

だが、なんともマニアックな本で、おそらくこういう本は誰にも書けまい。だからこそ珍書であり、奇書なのだろうが、おかげで香辛料のヨーロッパ交易を制した十六世紀のポルトガルの必死の努力がよく

わかる。

本書は別にブラジルの植民について触れているわけではないが、「スパイスに終始したポルトガル」という章を読むと、いかにしてポルトガルが海外政策を進めていったかの基本がわかるし、それがわかるとブラジルに対する植民政策も（ああ、そうだったのか）と納得できる。

とにかく、ポルトガルがどのような方法でアジアに進出し、イスラム勢力を排除してスパイス貿易を独占したか、また十七世紀以降、どうして没落していったかを眺めてみよう。資料はすべて天下の珍書『香料の歴史』からとる。

「点と線」戦略でルート確保

バスコ・ダ・ガマが四隻の船隊でアフリカ大陸を回り、インドのカリカットに到着したのが一四九八年五月、それから十三年後の一五一一年八月、マラッカの占領をもってポルトガルのアジア進出の目的は一応達成される。

マラッカはマレー半島南部の西岸とスマトラ島東岸にはさまれたマラッカ海峡に位置しており、インドネシアのモルッカ諸島に産する丁字、ニクズクの集散地で、香料貿易の死命を制する要衝の地である。これでポルトガルのリスボン港はイタリアのベニスに代り、アジア貿易の独占港としての地位を確立する。もちろんアフリカ回りのルートだ。イスラム時代はペルシャ湾及び紅海経由のルートだった。

しかし、アフリカ回りのルート確立と一口に言っても、これは並大抵のことではない。アラビア半島はイスラムの本家だし、ペルシャや東アフリカはもちろん、インドや東南アジアの沿岸部もすべてイスラムの勢力圏でポルトガルはいわば敵地の中を航海しなければならないのである。

ポルトガルは一五一〇年、インドのゴアを占領、ここに総督府をおく。初代総督はダルブケルケだが、彼はそれ以前、一五〇七年にペルシャ湾内の戦略拠点ホルムスと紅海の入口アデンを占領する。更にダルブケルケは一五〇八年、インド／エジプトのイスラム連合艦隊と会戦、これを破り、東アフリカのグワルダフィ岬沖合にあるソコトラ島を占領、要塞をつくる。これがポルトガルが独自に考案した「点と線」戦略、つまり点の要塞と要塞を船が線で結ぶ防衛戦略なのである。

海洋王国のポルトガルはエンリッケ航海王子の時代から、遠洋航海に堪える大型の帆船をつくっていたが、十六世紀はじめにはナウと呼ばれる五〇〇～八〇〇トンの大船がつくれるようになっていた。そこへいくとイスラムの船は沿岸航行用で小さく、海戦ともなればポルトガル船には到底かなわなかった。

ホルムスやソコトラ島に要塞を築いたのは、むろん海上の通商支配権を確保するためだが、それだけではない。イスラムの船がペルシャ湾や紅海を通ってスパイスを運ぶのを妨害する目的がある。実際ポルトガル船は何度もイスラム船を襲い積荷を強奪している。

常識から考えると、こんな敵地の中に要塞をつくって大丈夫かなと思うのだが、これも海から船が要塞を守るのだ。もちろん要塞自体も

堅固につくられていて、ゴアやマラッカなどは後には要塞都市の観を呈していたらしい。要塞内の住民は、外に出ないのが原則。本土に入って植民地をつくるつもりはないのだから、それで良いのだ。これは初期のブラジルでもそうだった。

ポルトガル人の居住地は海岸に限られ、内陸に入ることは禁じられていた。敵襲があれば直ちに船で海上に逃げられる体制をとっていたのである。

ポルトガルがこれほど大がかりな海上通商保護体制をとったのは、香料貿易がそれだけ儲かるからである。ヨーロッパにおけるスパイスの需要は十四、五世紀に北海漁業がさかんになり、タラやサケの塩干製品が大量につくられるようになって急速に伸びる。

魚以外には塩漬け肉にも利用された。なにしろ殺菌、防腐作用が強い上、臭みを消すのにも好適だったから、十六世紀にはとくに北ヨーロッパではなくてほならぬ必需品になっていた。

他の用途としては食品賦香料として多用されたし、薬用としては食欲増進のほか、コレラやペストの予防薬になるとも信じられていた。また媚薬としても効果があるとされていた。丁字やニクズクに催淫作用があると言われるのは、芳香成分にオイゲノールを含むからである。オイゲノールを純粋に分離したものからワニリンがつくられる。例のバニラの甘い、淫蕩な？　香りである。

十六世紀のはじめ、すでにセイロン肉桂は下火でヨーロッパにはほとんど入っていなかった。胡椒、丁字、ニクズクのうち、胡椒はインドのマラバルのほか、いくつもの産地があるが、丁字、ニクズクはア

ジアの最東南部のモルッカ諸島にしかなかった。当然価格は高い。

ところで、この当時スパイスの生産量と消費量はどのくらいだったのだろうか。『香料の歴史』の著者山田憲太郎は次のように推定している。

生産量は胡椒が年間九〇〇〇トン、丁字一三〇〇トン、ニクズク（メースを含む）一四一〇トン、計一万一七一〇トン。これに対し消費は南アジアと中国が八三五五トンで断然多く、ヨーロッパは三三五五トン。

しかしヨーロッパの需要の全量をポルトガルが扱ったわけではなく、七〇パーセントが最高で、残りは以前と同じイスラム・ルートである。だからポルトガルの独占と言っても、世界の消費量の二〇パーセントのシェアに過ぎなかった。だが、それでも儲けは大きかった。

強運のポ王室、ブラジルで金発見

筆者はかねがね、小国ポルトガルが歴史的に抱えていた弱点は人口問題だと思っている。なにしろ人口が大台の一千万台にのったのが一九九〇年で、カブラルがブラジルを発見したころは百二十万人しかいないのだ。現在のブラジルの日系人人口より少ない。一五二七年にこの国はじめての国勢調査が行われ、百四十万人の数字が出ている。

海外の占領地、植民地に赴く官吏、兵士、商人、船乗りが現地女性と雑婚して、ポルトガル系混血をふやしていく伝統的方法は、人口過少国家ポルトガルにははじめから課せられた宿命なのである。香料貿

易中継の要衝地マラッカは要塞都市に占領後の百年後に当る一六一〇年にポルトガル兵士二百名、官吏三百名が居住していた。このほかに七千四百人のポルトガル系混血人がいて、ポルトガル語を話し、ポルトガルの勢力保持に大きな役割りを果たしている。

この混血人口政策でなんとか必要人員を確保し、主導権を握っていたポルトガルの香料貿易も十六世紀後半に入ると、次第にかげりが出て独占体制が崩れてゆく。理由はいくつかあるのだが、煎じつめれば小国ポルトガルの国力が限度にきたということだろう。十六世紀から十八世紀の貿易はどこの国でもそうだが、海軍力を背景に行われた。海賊や私掠船の横行した時代だ。

スペイン、ポルトガルの場合は、貿易と軍事力のほかに、カトリックの布教が一体となっていたわけだが、布教が多少とも成功したのは中国や極東の日本においてであり、イスラムやヒンズー勢力の強いインドや東南アジアではさっぱり実効がなかった。また肝腎の海軍力も、遠くモルッカ諸島にまで拡がった通商圏のすべてをカバーするのは不可能だった。リスボンからアフリカ大陸回りでインド、マラッカ、モルッカ諸島へ行く距離は地球を半周するよりもっと遠い。

交易範囲が拡がれば拡がるほど船舶が必要となってくるが、ポルトガルにこれ以上の船はなかった。十六世紀の後半はマカオや日本にも船を回していたし、ブラジルにもいくらかの船を割かねばならない。それに海難事故も多かったのである。

スペインもそうだが、ポルトガルは王室そのものがいつまでも商人をやめなかった後進国である。

つまり、すべてが王室の独占貿易なのである。十六世紀前半には貿易のはかにイスラム船を襲って掠奪した積荷も王室の収入になっていた。

そのくせ出先の官吏や兵士には何の分け前もなく、この連中はきわめて安い報酬で働かされたのである。出先の不満は当然不正、腐敗、汚職となってあらわれる。一つの出先だけでなく、各拠点で不正が行われるから、ポルトガル王室の収入は激減してしまう。

それに混血政策の欠陥も出てくる。ポルトガル系混血人は三世、四世の代になると、ポルトガル王室に対する忠誠心や使命感が薄れ、王室の利益よりも自分たちの利益を追求するようになるのだ。

かくてポルトガルの香料貿易は年を追って先細りになり、十七世紀に入るとイスラムや新興のオランダ、イギリス勢に圧倒され、次々に戦略拠点がオランダ、イギリスに落とされ、一六四一年、マラッカの要塞もオランダのものとなる。そして遂に十七世紀半ばにはポルトガルはアジアの香料貿易から全面撤退、ブラジル開発に向かわざるを得なくなる。ただ、全面撤退と言っても中国のマカオとインドのゴアは死守し、現代まで持ちこたえた。

十六世紀の前半、香料貿易で信じられぬほど儲けた金を王室、貴族が浪費せず、船や要塞の増強や出先役人、軍人の待遇改善に向けていれば、もう少し長く保っただろうとの指摘もある。たしかにそうすればいくらかの延命効果はあっただろう。

だが、これもしょせん時間の問題。オランダ、イギリスの両東イン

ド会社のような、システムで動く株式会社に、封建国家のポルトガル王室が立ち打ち出来るはずがない。

それにしてもポルトガル王室は世界でも類いまれな強運の王室である。十六世紀はポルトガルの世紀と言われるほど香料貿易で大儲けしたし、それが落ち目で、ブラジル開発に本腰を入れると今度は金鉱が発見される。ミナスの金鉱発見は一六九五年で、ゴールドラッシュは続く。ただし十八世紀後半の産出は激減している。この間密輸が半分以上を占める。

これでまたポルトガルの王室と貴族は我が世の春を謳歌する。この時、四十三年在位したドン・ジョン五世は、史上もっとも富める王と言われた。とは言え、壮大な建築物以外、生産的なことには使われず、大半はイギリスに流れ、産業革命の資金になってしまった。しかし、このお陰でイギリスとの友好関係が出来、ナポレオンの侵入でポルトガル王室と貴族がブラジルに逃げ出す時、イギリス軍艦に護衛してもらうことが出来たのだから金を介しての因縁は深い。

悪の温床だった王立会社

オランダとイギリスの東インド会社は、アジア貿易に成功しただけではなく、後には植民地経営にまで乗り出して富の収奪に大きな役割りを果たしたため、ひときわ目立つ存在だったが、他のヨーロッパ諸国も同様の国策会社をもっていた。

ポルトガルももちろんつくった。ブラジル関係だけで言うと、ブラ

ジル総合貿易会社（一六四九年）マラニオン貿易会社（一六八二年）、グランパラー／マラニオン総合貿易会社（一七五五年）、ブラジル捕鯨会社（一七五六年）、ペルナンブコ／パライバ総合貿易会社などである。

しかし、どれもうまく行かず、一七八〇年ごろにはすべて消滅してしまう。何故うまくいかないかというと、会社側がすさまじい不正と収奪をやるからなのだ。

会社と言っても、ポルトガル王室の会社なのだから、現地の会社の責任者は王室が派遣した役人なのだが、これがひどい。どの歴史書にもコンパニア（会社）の不正、腐敗は記載されている。

例えば一六八二年につくられたマラニオン貿易会杜は、年間五百人の黒人奴隷を十年間にわたって、独占輸入する権利を持っていたし、奴隷に限らず、食糧、雑貨、衣料品の輸入や、砂糖、カカオ、タバコ、皮革の独占輸出権を持っていた。

とにかく会社以外のルートではいかなる輸出入も出来ない仕組みになっている。もともと密貿易を防止するために設立された会社なのだから、独占そのものは、まあやむを得ない。

だが、こういうシステムの下では当然ながら会社の責任者の専横、利権あさり、不正、汚職が横行する。目方や数量のごまかしは日常茶飯事、腐った食糧でも極端な高値で売りつけ、買うものはべらぼうに安かった。この当時、ブラジルから輸出するものは、砂糖、ピンガ、カカオ、タバコ、皮革ぐらいしかないが、会社はまず「いらない」と買付けない。そう言われても植民者の方はそれしか出せる品物はな

い。

すったもんだの揚げ句、会社側は市価の一〇パーセント程度で買付けるのだ。実に狡猾な方法で、植民者たちの恨みは極限に達していた。このあまりの非道さに堪忍袋の緒を切らし、立ち上がったのが一六八四年の〝ベッキモンの反乱〟である。首謀者はサンルイスの市会議員になったこともある、砂糖キビ農園主で、名望家のマノエル・ベックマン。母親がポルトガル人で、父親はドイツ人だった。本当は〝ベックマンの反乱〟なのだが、ポルトガル式発音で、〝ベッキモン〟になった。

王室会社のやり方に怒ったベックマンは、家の子、郎党を率い、実力で駐マラニオン軍司令官を罷免、マラニオン長官を逮捕、イエズス会宣教師を追放、マラニオン貿易会社の消滅を宣言する。

これはまた、本国に絶対服従のこの時代に思い切ったことをしたものである。これでベックマンがかなわぬ迄も反乱を貫き、反抗の姿勢を崩さなければ立派なのだが、自分の弟トマスをポルトガルに赴かせ、反乱の経緯を説明、国王に容認を求めた。甘い。

トマスは捕らえられ、マラニオンに送り返され、島流しにされる。ベックマンほか三名はポルトガル軍に捕らえられ、斬首刑に処せられた。

この時代、理由が何であれ、ポルトガル王室の政策に逆らった人間を王室政府が許すはずがない。

危険人物として処刑されるのは自明の理。まあしかし、ベックマンの行動はブラジル独立運動の最初の萠芽と見ることもできるから、その

意味では大いに評価してよい。

ベックマンがイエズス会士を追放したのはわけがある。一六八一年、イエズス会の強力な働きかけによって、ローマ法王庁が「インジオを奴隷にしてはならない」とのお触れを出したからなのだ。

当時の砂糖キビ農園は主として、インジオの奴隷労働で成り立っていた。もちろん黒人奴隷も入ってきてはいるが、ブラジルに本格的に黒人が入るのは十八世紀で、十七世紀まではそれほどの数は入っていない。それに黒人奴隷の輸入独占権は会社が握っており、支配人が私腹を肥すため暴利を貪るから、高くて手が出せない。いきおいインジオ労働力に頼ることになる。そのインジオを使用してはならないとなれば、これは農園にとっては大きな死活問題なのである。

既に述べたように、王立会社は一七五〇年代にもつくられる。ポルトガルの独裁宰相、ポンバル侯爵が、植民地の収奪を強化するために設立したもの。しかし永続きはしなかった。

出先きの役人の不正、腐敗が相変らずの上、この時代になると奴隷の密輸が多くなり、ポルトガル海軍の力では密輸を取締まることが不可能になっていたのである。

政治家、役人の不正、腐敗と、なんとか法の規制から逃れ、自分だけはうまいことをしようとする植民者の構図は、きのう、今日のものではなく、由緒正しきブラジルの伝統。これがそうかんたんに変るわけがない。

海外拠点失ったポルトガルの悲哀

筆者にポルトガル人の知人がいる。もう八十に近い年で、ポルトガル領アンゴラに三十年、ブラジルに二十年住んでいる、と言えば、事情通なら（ははあ、なるほど）とわかるかも知れぬ。

そう、この人はアンゴラ独立で追い出され、本国にも帰れず、ブラジルに逃げてきた人。ブラジルにはアフリカから再移住した、こうしたポルトガル人が五万人もいる。大変な辛酸をなめた人たちだ。説明しよう。

ギネアビサウ、モザンビーク、アンゴラなど、アフリカにおけるポルトガル植民地は一九四七年から七五年にかけて次々に独立する。独立は黒人の権利であり、当然の成り行き。彼らはそれを自らの血を流してかちとったのだ。

それは良い。が、この土地にはネイティブ（土着）の黒人のほか、約七十万人のポルトガル系白人がいた。ブラジルではポルトガル系白人などという言葉は使わないが、アフリカではそう言うのである。このポルトガル人がすべて追い出された。動産、不動産はもちろん、あらゆる一切の権利を剥奪され、追放された。アンゴラやモザンビークで生まれ、この地を母国としているポルトガル系もたくさんいたが、そういう事情は顧慮されず、全員に退去命令が下った。ずっと抑圧されていた黒人のアンチ白人の感情が一気に噴出したのである。

「たいへんだったんだね……」筆者がこの話題を出したら老人の顔

が曇った。「すべてを失ったよ。何もかもすべて……。何百人も殺されてなぁ、地獄だったね。ほんとうに大鎌で首をちょん切るんだよ……」

老人は絶句し、目頭を押えた。不用意で軽率な話題を出したことを後悔したが、後の祭り。とうとう老人を泣かせてしまった。心に受けた傷は、二十年経ってもまだ癒えていない。

このアフリカ植民地の独立とポルトガル人の引き揚げ問題は、ポルトガル現代史の大事件なのである。一九七五年と言えばほんの昨日のこと。資料にはこと欠かないはずなのに、この事件に関してポルトガルで公刊された本はただの一冊もない。触れてはならぬタブーなのである。

実は約四十年間続いたサラザール独裁体制の崩壊と、一九七四年四月二十五日の左翼若手将校による無血革命とアフリカ植民地までの六、七年は、ポルトガルの激動と混乱の時代であり、今となっては考えられない失政が発生した。その最たるものが、植民地独立に際して在住ポルトガル人の生命、財産の保護や権益保持に何らの処置も講じなかったことである。わかりやすく言えば、ポルトガルは一方的に植民地を放棄した形になったのだ。

今となってはポルトガル政府も、植民地同胞を見殺しにした結果になった無能ぶりをはっきり認識している。しかし、余りにも最近のことであるため、この問題を表立てると、いろいろ差障りが出てくるのだ。いわばポルトガルの〝恥部〟で、今はまだ見せられないというこ

とだろう。　とにかく相つぐ植民地の独立で、ポルトガルへの引き揚げ者は兵士十万を入れて七十万人に達した。このため、伝統的な人口過少国ポルトガルは、一転して人口過剰に悩むという奇現象を呈する。

このほか、既述の老人のように直接ブラジルに再移住した人が五万人だが、そんなものでは間に合わない。それにもともとポルトガルは海外植民地のおかげで、国内経済のつじつまを合わせてきた国。海外移民の送金に頼る比重が大きいのである。

なにしろ本国の面積がたったの九万二〇〇〇平方キロ、ブラジルの小州サンタ・カタリーナ州よりもっと小さい。資源も大してない農業国で、自慢できるのはポートワインとカナダのニューファンドランド沖で獲れるタラを塩干した産物ぐらいのもの。だからこそブラジルに独立されてからは、ゴア、マカオ、チモールのアジアの拠点、アンゴラ、モザンビーク、ギネアビサウ、カーボベルデのアフリカの植民地を守ることに必死の努力を傾けたのである。

植民地からの引き揚げ者を抱えたポルトガルは困った。狭い国土にこれだけの人間を受け入れる余裕はとてもない。そこでポルトガルはフランスを主とする、ヨーロッパ域内への出稼ぎを人口対策及び経済対策として打ち出す。

現在、ヨーロッパ域内への出稼ぎは六十万人に達し、本国送金額も巨額なもの。一見するとこれでめでたしみたいなものだが、ことはそう簡単なものではない。やはり問題は発生する。

出稼ぎはほとんど肉体労働だから青年男子が主力となる。ところが

青年男子の流出によって、今度はポルトガル本国の労働力が不足するようになってしまった。更に結婚適齢期の女性の配偶者が少なくなり、婚姻率、出生率が低下し過疎現象が起きてきたのである。人口が多くてもだめ、少なくてもだめ、まったく余裕のない小国というのが、ポルトガルの現実の姿なのだ。

イエズス会布教、場所により様々

十六世紀の大航海時代、ポルトガル、スペインの海外進出は、利益を求めての貿易が主たる目的だったが、同時にカトリックの布教も貿易と不可分だった。この先兵となったのがイエズス会士である。イエズス会（ジェズイット会）というカトリックの伝導団体は、一五三四年、イグナチウス・ロヨラによって創立され、一五四〇年、ローマ法王に承認された。一五四九年、日本に到着したフランシスコ・ザビエルもイエズス会創立者の一人である。

この会は、宗教改革によるプロテスタント勢力拡大に対抗する、カトリック側のカウンター・リフォーメーション（巻き返し改革）として登場した伝導団体。だからつくられたばかりのイエズス会は理念と使命感に燃えていた。

もともとこの会は堕落したカトリックを救済するのが目的だったから、倫理感が非常に強いのが特徴。それにヨーロッパ以外の〝新世界〟に布教対象の場を求めたのもユニークだった。

とは言え、肝腎のインドや東南アジアでの布教には失敗する。ゴア

でもマラッカでもイスラムの影響が強く、カトリックが受け入れられないのである。むしろ成功したのは極東の日本で、南蛮文化と共にカトリックの布教はかなり浸透する。

日本での布教が成功したのは、イエズス会自身が認める通り、日本人の資質の高さにあったことはもちろんだが、それだけでもない。

マカオに拠点をおいたポルトガルの対日貿易は大変うま味のある商売で、日本から得た銀で中国の絹、陶器、金、銅、麝香などを買い、それで更にインドのキャラコ（木綿）を買い付けて大儲けしていたことも理由の一つになっている。

この儲けの一部がイエズス会に還元され、日本における布教活動を支える金になったのだ。この当時でもゼニがなければ布教活動は思うにまかせない。

そこへいくと、新大陸におけるイエズス会の布教活動は余りおもしろいものではなかった。布教の対象が文化程度の低い、文明も未発達なインジオではさっぱり張り合いがない。イエズス会は敵があると俄然振い立つ性格を持っている。

日本には仏教という既成宗教があり、とくに禅宗などは手強い存在と見たから余計に闘志を燃やしたのだろう。実際ルイス・フロイスなどは日蓮宗の僧、朝山日乗と織田信長の前で論争を交わし　新大陸のインジオ教化は、イエズス会側からすればまるで無人の野を行くようなもので、一方的な教化になってしまう。現実にイエズス会はインジオに対しては高圧的態度で臨んだ。

同じイエズス会でもスペインとポルトガルでは国内事情が微妙に違

う。スペインでは神権と王権の並立がたてまえだから、ローマ法王庁の「インジオ奴隷化禁止」を一応遵守する形をとる。

その点ポルトガルは王権の方が断然強く、カトリックは王室に従属する形になってしまったのだ。

イエズス会はこれに抵抗し、度々法王庁に訴えるが、王権の優位は遂に動かなかった。

だからブラジルでは、イエズス会の力では無法なバンディランテスによるインジオ狩りも止められなかったし、インジオの奴隷化も結局は傍観せざるを得なかった。またスペイン領でたくさんつくられた教化集落（レドゥソン）、ポルトガル領ブラジルには一つもない。

ブラジル、アルゼンチン、パラグァイ三国にまたがる。いわゆるミッソンエス地方にかつて三十の教化集落があり、十五万のインジオが共同生活をしていたことはよく知られている。このほかにも南マット・グロッソやパラナのグワイラにもあった。すべてスペイン領だったところである。

この教化集落の歴史については以前、別に書いたことがあるので省略するが、スペイン系イエズス会もどえらいことをやったもの。なにしろ四千人から五千人のインジオを一カ所に集め、教会と広場を中心にシンメトリック（左右対称）の建物をつくって、インジオを住まわせ、労働させた。

ミッソンエス地方の教化集落は、一七六〇年、イエズス会士が追放されるまで、百五十年も続いたのだから驚く。トマス・モアの「ユートピア」が曲りなりにも実現したのである。

だが、その一方で伝統的なグワラニー族の固有文化も崩壊してしまう。とにかくイエズス会は強引なのだ。パンツの着用を命ずるのはまあ良いとしても、夜中の十二時に鳴らす鐘を合図に夫婦の交りをしろとか、体位は正常位に限るとかまで規制するのだから、おせっかいそのもの。

この遺跡、現在もブラジル、アルゼンチン、パラグァイに僅かな数だが残っており、修復作業もある程度なされている。いずれも石造りの壮大な建物。「グワラニー共和国」の面影は充分偲べるから、一見の価値あり。

〝珍書〟ブラジル経済実態調査

現在、ブラジルの公式統計資料はＩＢＧＥ（ブラジル地理統計院）が発表している。ほんとに信頼のおける数字かどうかは議論のあるところだが、他に比較する資料がないのだから、一応正しい数字とみなすより方法がない。お役所であるＩＢＧＥ、現在は予算がないから余り活動はしていないが、かつてはブラジルの自然地理、人文地理に関するユニークな本を刊行していた。

金がなくて自分では出版できない学者や研究者の調査や報告書をＩＢＧＥが本にしたのもかなりある。つまらない本もあるし、なかにはびっくりするほど価値の高い本もある。珍書のたぐいもある。そういう本の一つに『むかしの統計シリーズ』というタイトルで一九八六年に出版された本がある。四分冊でワンセットになっている。実はこの

本、薄い統計集一冊を除けば、一九〇七年から九年にかけて出版された、ブラジル経済実態調査の復刻版なのだ。

ブラジルの農業生産とか、輸出入の数字が政府発表として公式に出てくるのは一九二〇年の国勢調査からで、それ以前はきわめていい加減なもの。

政府もブラジルの経済の実態を把握するための統計づくりの必要性を感じてはいたのだが、当時のブラジル政府は、まあ今もそうなのだが、民間にあまり信用されていなかった。

だから政府が直接調査を行うと、税金取立てのための調査資料にすると勘繰られ、正確な情報がつかめず、かえって混乱するおそれがあったのである。

このため、一九〇五年、ロドリゲス・アルベス大統領時代に、「産業、交通、公共事業省」という役所が、民間団体の「ブラジル工業センター」に調査を依頼した。工業センターはこれを受け、専門家を集めて各州に派遣、詳細な実態調査を行った。当時としては空前の大事業である。

その結果を天然物採集産業、農業、交通業、工業に大別し、三分冊にまとめ上げたのだ。この本、無味乾燥な数字を並べた統計資料ではない。

なにしろ当代一流の学者が腕によりをかけて書いた、総計千八百ページ、重さ四・五キロの大冊で、ブラジルの歴史の記述だけでも二二九頁もあるのだ。原題は『Ｏ　Ｂｒａｓｉｌ，ｓｕａｓ　ｒｉｑｕｅｚａｓ　ｎａｔｕｒａｉｓ，ｓｕａｓ　ｉｎｄｕｓｔｒｉａｓ』純

粋な統計資料としては数字にもの足りなさが残るが、解説はすばらしくおもしろい。なによりその時代の背景がよくわかる。この本、出来た当時から内外の専門家には評価されたらしく、一九一〇年、フランス語版がパリで出版されている。

現在でもこの本の資料的価値はいささかも減じていない。まあ、資料価値があるからこそ、ＩＢＧＥが復刻版をつくったのだろうが、この復刻版ですら、今では入手がむずかしい。

この本、総論もよいが各論がよい。例えば天産物植物篇では、ゴム液抽出植物（何種類もある）、タンニン植物、繊維植物、樹脂、ワックス植物、油料植物、木材、染料植物、薬用植物に分け、その一つひとつを列挙して解説しているのだ。

動物も同じこと。どんな魚や野生動物がいて、どんな用途に用いられるかを、食用、毛皮、皮革、脂、ニカワ、羽根、ペット用などに分けて、分類、詳細に解説、輸出量の統計を出している。筆者が既述した、白サギやエマ（アメリカダチョウ）の羽根の輸出量はこの本から引用したもの。

鉄道の記述もすごい。一九〇七年までにつくられた全ブラジルの鉄道の歴史が、ゲージ（軌道幅）や勾配、曲り半径の数字入りで解説されている。

一八五四年のマウア鉄道以来、一九〇七年までに七十二の鉄道が出来ているのだが、びっくりするのはゲージのまちまちさ。六〇センチのトロッコのような鉄道から一六八センチの広軌まで、なんと十の

ゲージがある。多いのは一メートルの狭軌で、これがブラジル鉄道の主流となった。

ところで、こういう特殊な本は復刻版をつくっても大量に売れないことがわかっているから、ＩＢＧＥでもはじめから少部数しかつくらない。だからたちまち売り切れてしまう。

サンパウロ、リオのＩＢＧＥでは売り出して一カ月でなくなった。ミナスや南三州でも今や皆無。

逆に穴場なのは東北ブラジルの小州やアマゾンのアマパ、アクレ、ロライマのＩＢＧＥかも知れぬ。

ＩＢＧＥは政府の役所だから、各州の首府には必ず支所がある。ＩＢＧＥの刊行物は売れようと売れまいと、一定数は各支所に割当てられる。これを狙うのだ。筆者はピアウイ州テレジーナ市のＩＢＧＥで埃にまみれた本書を三セットも見つけた。もちろんすべて買った。

ただ、この本、内容はすばらしいのだが、惜しむらくは装丁があまりにも雑。ページを開くと糊がバリバリはがれ、ばらばらになってしまう。ＩＢＧＥ出版物の装丁の悪さはどうにもならぬ。装丁をやり直し、革製の豪華な本にすれば話は別。まあ、それくらいの価値はある本なのだ。

広軌だった初期のブラジル鉄道

こういう昔の資料を丹念に読んでいくと、思いがけぬ事実がわかっ

てたのしくなる。この実態調査の記述には鉄道の歴史もあるのだが、ブラジルが鉄道建設に強い意欲を示したのは、ずいぶん古い時期なのだ。

イギリスで蒸気機関車が実用化し、実際に工業都市のマンチェスターと外港のリバプールを結ぶ鉄道が開通したのは、一八三〇年九月十五日。これが世界の鉄道の事始めとなる。

それからたったの五年後の一八三五年十月三十一日、ブラジル帝国議会は法令一〇一号で、首府のリオからバイア、ミナス及びリオ・グランデ・ド・スールの三方向に向かう鉄道建設法案を決議した。

一八三五年と言えば、独立宣言から十三年、ドン・ペドロ一世がポルトガルに去って四年、ドン・ペドロ二世皇帝が僅か九歳で、摂政政治の時代である。だからこの法令の裁可は摂政のジオゴ・アントニオ・クレイジョ神父が署名している。

この法令の一部を引用すると次の通りだ。

（第一条）　帝国政府は首府リオ・デ・ジャネイロを起点とし、ミナス、バイア及びリオ・グランデ・ド・スール方面に向かう、三つの鉄道を建設するため、一社あるいはそれ以上の鉄道会社の設立を許可する。鉄道会社は四十年間の専用営業権を持ち、貨物または乗客の輸送に従事するものとする。

（第五条）　鉄道会社は以下の義務を履行するものとする。

（第一項）　貨物は一アローバ（一五キロ）当り二十レイスを超える運賃を徴収してはならず、乗客の運賃は一人当り九十レイスを超えてはならない。

（第二項）鉄道の建設は、政府が指定する町村を指示通りに通らなくてはならない。

（第三項）道会社は政府と契約した日から二年以内に着工し、着工後は一年間に最低五レグア（二五キロ）の工事を進捗させること。

（第四項）前項までのとりきめに違反し、政府との契約を履行しない場合は罰金をとり立て、処罰する。（以下略）

いや、なかなか具体的な法令である。こういう法案が一八三五年の時点で議会を通過したこと自体、大いなる驚きだ。一八三五年といえば、ヨーロッパではイギリスにつぐ、第二の鉄道ブラッセルーマリーズ（ベルギー）鉄道が開通した年なのである。

だが、法令は出たものの、この時ブラジル最初の鉄道建設は実現しなかった。肝腎の工事を請負う鉄道会社が一社も名乗りを上げなかったのだ。

初期のブラジルにおける鉄道建設は、外国企業を含む民間企業に鉄道会社をつくらせ、この会社に一切の工事を請負わせるやり方だった。政府は一レイスも出さないのである。

その代り、工事が完成すればその会社に何十年かの営業権を与えると共に、建設総額の何パーセントかの金利を国が会社に税金免除の形で払う方法で、いわば他人の褌で相撲をとる方式。

独立後日も浅く、金のないブラジル政府としては、こういう方法をとらざるを得ないのだが、鉄道会社が立候補してこないのではどうにもならない。遂にこの案はポシャってしまった。

その後改めて鉄道建設計画が出るのが十七年後の一八五三年、マウ

ア男爵が請負ったリオのマウア鉄道で、二年後の一八五四年四月三十日に一部が開通した。

この時開通したのはたったの一四、五キロで、駅はマウアとイニョメリン、それに仮設の停車場であるフラゴーゾを入れても三駅にすぎなかった。

しかし、マウア鉄道を皮切りに、以後ブラジルの鉄道は次々につくられていく。二番手はペルナンブコ州のレシフェ／サンフランシスコ鉄道で、三一・五キロ区間が一八五八年に開通、同年にはドン・ペドロ二世鉄道（リオ）の四八・二キロ区間も開通した。

バイア／サンフランシスコの三七・四キロ区間開通が一八六〇年、一八六七年には海岸山脈を登るサントス／ジュンジアイ鉄道が難工事の末、一三九キロ全線開通した。

さて、ここで大変奇異に感ずるのは、マウア鉄道からサントス／ジュンジアイ鉄道までの五本の鉄道の軌道幅（ゲージ）が、すべて広軌だったことである。

広軌というのは、ヨーロッパの鉄道や日本の新幹線、あるいは戦前日本人にはよく知られた満州鉄道（満鉄）が採用している、一四三五ミリの標準軌より更に幅が広いということである。

マウア鉄道を除く四つの鉄道のゲージはなんと一・六メートル、マウア鉄道にいたっては一・六八メートルでこれは現在にいたるまで軌道幅の最高記録となっている。

前にも触れたが、ブラジルの鉄道は十のゲージがあって、相互乗入

れが出来ず、貨物の積みかえ、乗客ののりかえなどで不便きわまりなかったが、のちには狭軌に統一されるようになる。

現在、ブラジルの鉄道ゲージは一メートルが多いが、これは日本の在来線の一〇六七ミリより狭い。どうもやることが極端だ。

ファド本家にこだわるブラジル

スペインとポルトガルは歴史的にも民族的にも、あるいは政治形態から比較しても、それほど有為な差のある国とは思えない。しかし、どこかが微妙に違うのだ。作家の檀一雄(故人)はポルトガルを愛し、一年四カ月、海辺の寒村サンタ・クルスに住んだことがある。現在ここには「檀一雄大通り」もあるし、「落日を拾ひに行かむ海の果」の記念碑も立っている。

この檀一雄が『美味放浪記』のポルトガル部の冒頭でこう述べている。「スペインからポルトガルに入って、一番不思議に感じられることは、ポルトガル人がおとなしいということだ」

檀はその例として、スペイン人は飛行機の中で唄をうたい、大騒ぎをするが、ポルトガル人はそうした騒ぎはしない。これはフラメンコとファドの違いではないかと解説している。

もう一人、ファドに触れた文章を紹介しよう。ポルトガルが好きで、一九九三年の「日本、ポルトガル友好四五〇周年祭」の実行委員会副委員長をつとめた高野悦子(岩波ホール総支配人)の文章。「演歌を思わせるポルトガル民謡ファドの流れる裏町で鰯の塩焼きの匂い

を嗅いだりすると、本当に郷愁が湧いてくる」

なるほど、ファドがポルトガルの国民歌謡として定着し、人気を博していることがよくわかる。

よくわかりはするのだが、やはり我々ブラジルに住む人間としては「しかしだね……」と、一言言わずにはいられない気持になることもたしか。

ずばり言ってファドのオリジンはブラジルなのである。更に厳密に言えば、ほんとうのオリジンはアフリカ、アンゴラ地方のバンツー系黒人に伝承されていた、ルンドゥという唄と踊り。これが十八世紀以降、黒人奴隷によってバイア州のサルバドルに持ち込まれた。

ファドは弦楽器の弾き語りで踊るものだが、踊り方はいろいろ。輪になった人たちの中でソロ・ダンスや男女二人のダンス、あるいは輪の人たちが同時に踊る場合もある。

踊り方は足を踏み鳴らし、腰を振り、指を鳴らす激しい踊り。非常に官能的で、明らかに男女交歓をあらわしている。こういう踊りはフラメンコもそうだが、踊り手も見物衆も興奮する。

ファドは十八世紀の後半には各地に拡がり、優劣を競うコンクールもあった。ブラジル・ファドは現在でもリオ州のサンジョン・ダ・バーラやカンポス地方には根強く残っている。タンバリンとビオラの伴奏で踊るのである。

さて、ブラジル・ファド全盛時代の一八〇八年、ナポレオンに追われたポルトガルのブラガンサ王室が、大挙してブラジルに逃げてくる。ここでポルトガル王室ははじめてファドと出会う。

一八二一年、ドン・ジョン六世は十三年のブラジル滞在を終え、長男のドン・ペドロを摂政王子として残し、ポルトガルに引き揚げる。ファドも一緒だ。ファドはよほどポルトガル人の好みに合ったとみえ、またたく間に国中に拡がる。

とは言え、ポルトガルに持ち込まれたファドも決して上品なものではなかった。流行らせたのがコインブラ大学の学生で、ファドを披露する場所は娼家街だったから、唄も踊りも淫蕩で、カトリック教会からしばしば非難されたほど。しかし、これがコインブラ・ファドの源流となる。

時代が少し下がり、一八四〇年に、ポルトガル・ファド中興の祖的存在のビミオゾ伯爵とその愛人セベラが登場し、ファドの品位向上にのり出す。これまでのファドを大幅に軌道修正し、良家の子女でも唄って踊れるものに仕立て直す。

これ以後、ポルトガル・ファドは、黒人リズムの激しい振りを抑え、踊りよりもむしろ唄に主体をおくカンソン・ナショナルに変身し、現在のファドにつながる。ファドには政治もの、宗教もの、諷刺もの、こっけいものなどがあるが、ブラジル・ファドと異なり、哀愁の響きを帯びているのが特徴。ただ、ギターによる弾き語りが基調であることは変りない。悲しいファドはポルトガルのナショナル感情のあらわれと言われ、そのリズムはポルトガルの国歌にも影響していると言われている。とまあ、これがアフリカのルンドゥからブラジル・ファドを経て、ポルトガルで完成されたポルトガル・ファドの流れ。今やファドはポルトガルの民謡、歌謡なのだから檀一雄や高野悦子がそう

書いて、何の不都合も誤りもない。

筆者が「しかしだね……」とやったのは、実はブラジルで書かれたファド解説のパロディ（もじり）。ブラジルのファド解説にはどの本でも「ファドは現在ではポルトガルのカンソン・ナショナルとして知られている。しかし、オリジンはブラジルなのだ」と書いてある。例外はない。

要するにブラジルは無念なのだ。まあ、読者諸賢もファドの話が出たら「しかしだね……」と講釈してやってほしい。

中国式恐怖政治とれぬブラジル

『カーザグランデ・イ・センザーラ』（大邸宅と奴隷小屋）をはじめ、多数の著書のある、社会学者で政治家のジルベルト・デ・フレイレが一九四六年、アメリカで出版した本に『ブラジル論及』がある。この本の改訂版は一九五九年に出され、日本語の訳書も出ている。日本語版の題名は『熱帯の新世界・ブラジル文化論の発見』（松本幹雄訳、新世界社）である。

フレイレの著書は個性的で、おもしろいことはおもしろいのだが、我田引水的な都合の良い解釈や強引なこじつけがあるから、この辺りを割引いて読む必要がある。

さて、この本の終章にブラジルが「熱帯中国といわれるのはなぜか」という項目がある。

（ほう、なぜだろう）と思わず身をのり出したくなるのだが、残念

ながら何回読んでもさっぱり回答がでていない。

「ブラジルには西洋的特徴と同時にこれと対照的な東洋的要素が常に存在した」とか、「ラテン的要素と共にこれと対照的なムーア的要素があった」とか、あるいは「一八八九年まで君主国家であった」ことが、中国とブラジルの共通点だなどと言われてもまったくピンとこない。

結局フレイレの言いたいのは、ブラジルも中国も深いヤンキー嫌い、つまりアンチ・アングロサクソンだということらしい。この本を書いた時代の中国は、間違いなく反米、親ソ一辺倒だったのだから、そう言えなくもないのだが、これでは回答になっていない。

よくわからぬフレイレの主張はさておき、本当に中国とブラジルが共通するところがあるのだろうか。たしかに国が大きいということでは共通している。大河があることも似ている。

しかし、それ以外の地理的、気候的な自然条件では共通点より相違点が目立ってしまう。人口も中南米でこそ断トツのブラジルだが、世界一の中国とは較べものにならない。文字通りケタが違う。

歴史も比較する方が無理。五千年の中国と新大陸の植民地であるブラジルの五百年ではまるで話にならない。文明、文化の質量がまったく違うのである。

それでも何か共通するところはないかと考えたら、社会を統治するシステムが似ていることに気がついた。つまり両方とも厳密な法治国家でなく、法解釈による解決より、コネや人脈が大きな役割りを果たす、人治主義国家であることだ。中国には「主人が高い地位につけば

鶏や犬も天に昇る」ということわざがあるが、ブラジルでも同じこと。基本的に一族主義が中心だから、権力を握れば特権階級となり、どうしても国家や公共の利益よりも一族の利益が優先してしまう。

この段階で利権、ポスト独占、汚職などあらゆる不正が横行する。役人は自分の親分が次の政変や選挙でどうひっくり返るかわからないから、任期中に目一杯、私腹を肥やすことに専念する。こうした体制の被害者はもちろん底辺の農民や労働者である。もっとも人民大衆の方だって国家や政府など信用もしていないから、自衛手段として、あの手この手で税金を払わない工面をする。

まあ、こういう共通点もあるのだが、正直言って、中国のような徹底した人命軽視や、個人いじめ、権力者崇拝の強制などはブラジルにはない異質なもの。その点中国はすごみがあり、慄然とさせられる。

先日、張戎（チャン・ユアン）女史のベストセラー『ワイルド・スワン』を読んだ。上下二冊のノンフィクションで、張戎の祖母、母、自分の女三代にわたる張家の歴史（一九二四年以降）を書いた本だが、率直に言って圧倒された。

まず上巻を読んだだけで、ブラジルの名物料理フェイジョアーダを腹一杯詰込んだような重苦しい気分になってしまう。一週間の消化期間を置いて下巻を読んだ。

張家三代の女とその周辺の歴史で、決して中国現代史をマクロにとらえたものではないが、観察記述がミクロで詳細を極めているだけに、より胸に迫ってくる。

結局、中国という国はこれから先は知らぬが、古代中国の夏、殷、

周の時代から毛沢東による共
産党支配まで、基本的には何も変わらない統治システムなのだ。
著書の父親は共産党の大幹部で、恵まれた身分なのだが、密告や個人のうらみで失脚し、みじめな境遇で死んでいく。どうも中国における集団の中の人間対立は、主義主張よりも、個人的な嫉妬、怨念、増悪である場合が多い。だから報復はしばしば陰惨、残酷となる。
ブラジルの統治方法もほめられたものではないが、中国式の執拗さ、残酷さとは無縁である。ブラジル式の適当で、なんでもありの寛容主義は厳格さや緊張感には欠けるが、それが居心地の良さの原因になっていることもたしか。案外これは多民族が一緒に暮らして行く上でのブラジル流の知恵なのかも知れない。

盗んだ方が勝ち〃種子戦争〃

一定地域の特産植物、有用植物の持ち出しを禁止する法令は今でも各国で採用している。貴重な原植物を乱伐、乱獲から守るためには必要な制度。が、他国に盗まれ、栽培されるのを防ぐという立場からは意味がない。
もう世界の有用植物など、学者によって調べつくされ、植物の特性や分布はわかっている。それに最近のようにバイオテクノロジーが発達し、遺伝子組み替え、胚培養などで、原植物よりすぐれた植物がつくれるような時代になっては、種の持ち出し禁止にこだわっても仕方がないのである。

むろん、かっては違った。植民地全盛時代の十六世紀から十九世紀末まで、ヨーロッパの各国は獲得した海外の植民地に香料、香辛料、染料、薬用植物を栽培し、価格維持のための専売制度をとる。原植物や苗、種子の管理はきびしく、持ち出しを厳重に取り締まって他国への移植を防いだ。

そこでこれらの植物をめぐって、各国とも秘術をつくしての種子や苗の盗み合いがはじまる。

持ち出し禁止のものを盗むのだから、「ドロボウ行為」には違いないのだが、個人の利益ではなく、国家のために盗むのだから、盗まれた国からはドロボウ呼ばわりされても自国では英雄扱いになる。一番激しかったのは丁字と肉豆クをめぐるイギリス、オランダの攻防戦で、実に三十年に及んだ。この香辛料はモルッカ諸島が原産だが、モルッカを領有したオランダは、丁字はアンボン島のみ、ニクズクはアンボン島とパンダ島のみに限って栽培、厳重な管理体制をとった。イギリスは一七八八年、マレー半島のペナンを占領して以来、同地での丁字、ニクズクの栽培を計画、何度もアンボン島よりの持ち出しをはかるが、オランダ側の防禦の壁は厚く、その度に発覚して成功しなかった。

しかし、遂に一八一九年、英人ラフレスにより盗み出しが成功、マレー半島に移植することが出来た。こういうことにかけてイギリスは執念深く、また手口も巧妙なのだがアマゾンのゴムも見事にイギリスにしてやられた。

一八七六年、英人ヘンリー・ウイッカムは蘭の収集家と称してアマ

ゾンに入り、タパジョス河下流で七万粒のエベア・ブラジリエンス（パラーゴム）の種子を集め、いくつかの包みに分け、包みの上には〝オーキッド〟のレッテルを貼りつけた。

ウイッカムが準備万全整えたところで、あらかじめ打ち合わせていたイギリス船がタパジョス河に入ってウイッカムを収容、ベレンの検問所では「ラン」の包みを提示、ゆうゆう引き揚げていった。やりてのウイッカムにとっては赤児の手をひねるようなもの。このイギリス船の名前が偶然なのだろうが「アマゾナス」だったため、あとでブラジル人が（バカにしている……）と地団駄踏んでくやしがったというおまけがついた。持ち出されたエベアの種子は最初ロンドンのキュー王立植物園で発芽、その後イギリスの東南アジア植民地に植えられたことは周知のとおり。

この時代、今のように情報が発達していなかったから、ブラジルは永い間、盗まれたことに気がつかなかった。ブラジルが事態の深刻さに気付いたのは一九〇六年、バイア州選出の下院議員ミゲール・カルモンがアジア旅行をした際の報告があってからである。すべては後の祭で対応策の講じようはない。プランテーション方式の東南アジアのゴム栽培に、点在する天然ゴム樹から採取するアマゾン方式が対抗できるはずがない。かくてアマゾンのゴム産業は急速に衰退する。

ブラジルの歴史書ではウイッカムによるゴム種子持ち出しを盗賊行為ときめつけ非難している。

当然の非難ではあるが、残念ながら負け犬の遠吠えでしかない。種子戦争は盗んだ方が勝ちなのだ。

ドロボウというなら、ジュート種子をアマゾンに持ち込んだ尾山良太、胡椒の臼井牧之助、茶種の岡本寅蔵だってそうなってしまうが、この人達はブラジルの大恩人。まあ立場が違えば盗人にも英雄にもなるのである。

ところで、ヘンリー・ウイッカムという人はかなりの凄腕で、ゴム種子を持ち出すときに、染料植物のウルクー（英名アナット）と、塩酸エメチンの原料となるイペカクアーニャ（吐根）もアマゾンから持ち出している。

どちらも東南アジアのイギリス植民地で栽培された。吐根はマレー半島のジョホール州で、一時栽培に成功、ジョホール吐根の名が出かけたところで病害にやられ、全滅してしまった。

これに反しアナットの方は順調で、現在では世界の消費のほとんどを東南アジア産のアナットがまかなっている。なにしろ栽培技術と品種改良が進められるから、品質的にはかなわないのである。

ブラジルのインジオの身体の彩色用やマンジョカの毒消し用に愛用していたウルクーは野生種であり、食紅としての染色力も東南アジア産の半分しかない。

Ⅳ　移民社会の日系人

日本移民と相性悪いゴム

別にエベア・ブラジリエンシスという、パラーゴムの樹に責任があるわけではないが、どうもこのゴムと日本移民は相性が悪い。歴史的にそういう結果が出てしまうのだからやむを得ない。

移民とゴムの最初のかかわり合いは明治の末から大正はじめにかけてである。ただ、この時の移民はブラジル移民ではなく、ペルー移民。ペルー移民はブラジルより九年早く、一八九九年に第一次七百九十人がペルーに到着している。

もちろん大半の移民はペルー領内に留まったのだが、一九一一年ごろ迄に推定約五百人の日本移民がアンデスを越えてペルー領アマゾンやボリビア領アマゾンで、ゴム液採取の労働に従事したのである。しかし、永くは続かなかった。一九一一年を境にアマゾンのゴムブームは急速に崩壊する。

ブームが去ってペルーに帰った日本移民もいたが、多くはボリビアのリベラルタに残留した。今でもここには日本人の子孫が多い。日本語を解する人は皆無に近かったが、最近の出稼ぎブームで日本語学校

が開校した。

また、アマゾン河を下ってブラジルに入った、いわゆる〝アマゾン下り〟の日本人もいたし、マモレー河、グワポレー河を遡ってマット・グロッソに入り、サンパウロに来たペルー移民もいた。

さらにこの時代、沖縄出身の八木宣貞などは、リベラルタ～グワヤラミリン間四五キロのゴム運搬を目的とした鉄道工事を請負っている。残念ながらこの工事はゴム・ブームの終焉で途中で中止となった。とまあ、これが日本移民とゴムの最初の出会いである。すべて失敗に終わった。なんと言っても肝腎のゴム・ブームが終わってしまったのだからどうにもならない。

次は第二次世界大戦後、アマゾン河の支流タパジョス河のフォードランジャに入植した七百八十五名の日本移民だが、話の順序として、フォードランジャの説明からはじめる。

イギリスによる東南アジアのゴム樹プランテーションの成功に刺激されたアメリカの自動車会社フォードは、エベアの原産地であるタパジョス河沿岸にゴムの大農場を造成する計画をたてる。

そして一九二七年、会社とパラー州政府との間に百万ヘクタールのコンセッション（無償譲渡契約）が結ばれ、フォードランジャ（フォードの領土）と名付けられた大農場が出現する。

ここに一九二九年から百六十万本のエベアの植林が開始されるが、アメリカ式に町づくりからはじめる大がかりなもので、本部事務所、住宅、病院、警察、ホテル、各種店舗など必要設備はすべてつくられ、農場内の道路も着々整備された。

最初はわからなかったが、そのうちフォード関係者は、この土地の立地条件が必ずしもゴム栽培に適していないことに気付く。なによりサンタレンの町から一八〇キロと遠い上、唯一の交通路であるタパジョス河の各支流が減水期になると一〇〇トン級の舟でさえ航行できなくなるのである。

困った会社側は一九四三年、領土のうち最も不便な奥地にある二八万ヘクタールの土地を切り放して州政府に返還、そして代替地としてサンタレンから四五キロのベルテーラに同面積の土地をもらった。こちらの方が立地条件が良かったため、会社側はフォードランジャよりベルテーラを主力にし、ここに二百四十万本の植林をする。フォードがこの二つの土地に投資した金額は当時の金で一千五百万ドルに達した。民間企業の投資としてはブラジル最大である。

ところが、これだけ巨額の投資をしたフォードのゴム園経営も第二次世界大戦が終了すると同時に、会社側は撤退を決定、一〇〇万ヘクタール、四百万本のゴム園とその付帯設備一切を僅か二十五万ドルで連邦政府に売却してしまう。労働力の不足が主因だが、日本の敗戦で東南アジア産ゴムの安定供給の見通しがついたためでもある。

フォードが投げ出して九年目、連邦政府に移管されていた両ゴム園に、一九五四年十二月と五五年四月の二回にわたり、日本移民百二十二家族七百八十五名が入植する。入植をあっせんしたのは日系人のつくったアマゾン経済開発会社だった。

だが、就労条件のくい違いに端を発する「上陸拒否事件」や環境不適応から精神異常をきたした移民による「殺人事件」などが発生、ブ

ラジル側の心証を害する。

担当のブラジル政府農務省は、戦後サンパウロで発生した、勝ち負けをめぐる日本移民の抗争事件を知っており、アマゾンのゴム園に日本移民は入れられないと判断、一九五五年四月「日本移民退耕令」を出し、最初の入植から数えてたった五カ月で日本移民全員を追い出してしまう。

日本移民史上まれに見る悲惨な事件で、退耕者は広大なアマゾンに経験もなく四散、筆舌に尽しがたい苦難の生活を強いられる。移民の受け入れや世話など、個人や民間の会社が出来るわけがないという、モデル・ケース的事件だった。

役立った〝アマゾン大百科〟

「ブラジルの動物図鑑、植物図鑑、それに昆虫図鑑が欲しいんですけど、どんな本がありますか。なるべく原色図鑑でカラー写真のたくさん入ったのがいいのですが……」などと日本から来た研究者や愛好家に聞かれることがある。「そんなものありませんよ」と答えると「えっ、ないんですか」とびっくりする。いくらびっくりされてもないものはない。あればとっくに当方が重宝して使っている。ないから苦労しているのだ。

生物の分野、ブラジルは宝庫でありながら図鑑や専門書の刊行が遅れている。これは別に出版社の責任ではない。このての本は売れる部数が少ないから、出版社としては採算がとれないのである。

それでも最近は良い図鑑類がぼちぼち刊行されるようになった。まだ植物だけだが、ハーリ・ロレンジの『アルボレ・ブラジレイラ』（ブラジルの樹木）などは出色もの。これならどこへ出しても恥ずかしくない。これからは教育のレベル・アップが徐々に進むから、専門書や図鑑類も期待して良いかも知れぬ。ブラジルの書籍は発行部数が少ないから、出版案内が出たら直ちに購入する方が間違いない。思い迷ってぐずぐずしていると品切れで手に入らなくなる。よく売れるベストセラーの小説ならともかく、専門書、学術書の再版はまずないので、うかうかしてはいられない。

筆者の手許にアマゾン在住時代買った『アマゾン大百科事典』全六冊というのがある。まっ赤な表紙の本で、一九六八年の発行。大百科（グランデ・エンシクロペディア）と銘がうたれているが、なに、六冊全部で千八百十五頁、一冊平均三百頁、百科事典としては大した分量ではない。

紙質も悪く、白黒の写真印刷も写りが悪い。しかし、この百科事典、筆者はどのくらい世話になったかわからぬ。大げさに事えば、この本との出会いが筆者の運命を決定したと言ってもよいほどなのである。内容は他の百科事典も同様で、一つひとつの項目の説明がそれほど詳しいわけではない。だが、とにかくアマゾンに関することなら何でも載っているのだ。動、植物をはじめ、地名、地理、地形、歴史、伝統、インジオ文化、とにかくなんでもござれなのである。

筆者はアマゾン時代、実によくフィールド・ワークを行ったが、旅に出る時はこの百科事典を忘れずに舟に持ち込んだ。アマゾンでの調

査は舟が不可欠。

この舟は会社の舟だが、乗組員四人のはかは筆者と案内人がいるだけ。舟の旅は便利なもので、夜はハンモックを吊って舟の中で寝る。どこかの町へ行ってホテルかペンソンに泊るというような余計な心配がいらない。

アマゾンのフィールド・ワークはこの時がはじめてだったが、この百科事典が役立った。例えば珍しい植物の名前や用途を案内人や土地のカボクロ（住民）に聞いてもなかなか頭に入るものではない。そこで名前だけを片っ端からノートし、百科事典で調べるのである。

このやり方は実に有効で、知識がどんどん身につく。なにしろ現物を実際に見ながら、百科事典の解説を読むのだから間違いない、時間はたっぷりあるし、見るもの聞くものすべて珍しい時代なのだから、スポンジが水を吸うようなものなのである。

例えばアマゾンには河辺に町が点在している。この町がいつごろ、どういう由来でつくられたのかも百科事典にちゃんと出ている。（これがグルパの町か。グルパはフランスのアマゾン侵入に備えた要塞として出発したんだな）というようにすぐわかる。

ガイドブックを片手に旅行しているようなものだが、むろんアマゾン大百科はそんな片々たる知識ではない。この本のお陰で筆者は基本的なアマゾンの知識を身につけることが出来た。

百科事典は専門書ではないから、一通りのことしか載ってはいないが、基礎知識としてはそれで良いので、詳しいことは別に専門書や学術書で当たればよいのである。

あれから二十五年の年月を経て、アマゾン大百科も大分くたびれた本になった。だがまだ健在で現役をつとめている。おそらくこの本との出会いがなかったら、アマゾン学や、ブラジル学への興味は湧かなかったに相違ない。

世の中に百科事典の数は多いが、ある限られた地域のことを調べようと思ったら、『ブリタニカ』のようなグローバルな視野に立つ百科事典ではかえって具合がわるい。アマゾンのことを調べるならブラジルの百科事典が詳しいし、『アマゾン大百科事典』なら更に一段と詳しくなる。

このアマゾン大百科、もう買おうと思っても買えるものではない。ベレンやマナウスの古本屋を探してもそれこそ絶対に見つからぬ。実は筆者はこの本を三セット買ったのだが、二セットは日本から来た人にやってしまったのだ。ブラジル語が読めないのだから、どうせ死蔵しているのだろうが、おしいことをした。

排他性強かった日系社会

ブラジルの日系社会について少し書こうと思ったのだが、これが存外むずかしい。日系社会がブラジルにある以上、この連載でとり上げても別段おかしくはない。だが何となく気が重い。

ブラジルの動物やら植物、自然、地理、歴史を書いているぶんには余りクレームをつけられることはない。しかし、自己の所属するエス

ニック・グループである日系社会について何か言えば、たちまち異論、反論が起きてくる。

なにしろ日系社会の成員の一人ひとりが発言の資格も意見も持っているのである。そして厄介なことに、どの意見が正しいかの基準がないことだ。日系社会に発生した事件や出来ごとなどの歴史を記述するとどうしても具体的な個人名が出てしまう。

その良い例は第二次世界大戦後発生した、勝ち負けをめぐる日系社会のテロ事件と、これに属する一連の問題である。日系社会の歴史上最大の事件の直接の当事者は多くが既に鬼籍に入っている。

とは言え、まだ残っている人もいるし、当事者の子弟はほとんど現存している。この事件は完全に風化し、枯れ切ったとはいえず、まだかなり生臭さが残っているから大変扱いにくい問題なのである。

かつて筆者は「コロニア悪党伝」というようなものを書きたいと思ったことがある。いや、今でも書きたいと思っている。だが、書けない。筆者のいう悪党は、犯罪者や極悪非道な人間のことではない。悪には強いという意味もあるし、中世語では領主に反発する一団を悪党ともいう。

つまり、非常に個性的で、既成の倫理や道徳にとらわれず、したいことをする、ボルテージの高い人間のことだ。日系社会にはこのユニークなキャラクターを持つ人間がかなりいた。生存者はともかく、故人なら書けそうなものだが、やはりいけない。どこかに差し障りが出てくるのだ。

今はほとんど見かけなくなったが、移民七十年祭ごろまでは「県人

会発展史」とか「〇〇植民地移民何年史」「コロニア紳士録」などのたぐいが盛んに出版されていた。

邦字新聞社がつくることもあるし、県人会やその他の団体がつくることもある。また個人が商売としてつくることもあった。「移民史」「発展史」と麗々しく銘をうっているが、つくる側にとっては本文より広告が主で、要するに広告代をとって個人の提灯記事を書くのである。

当然悪口は書けないから文書は紋切型になり、さっぱりおもしろくない。大ボラ吹きで酒が入れば大言壮語する輩は「雄弁にして、熱情ほとばしるところ懸河の弁を振い」となり、粗野で騒々しいだけの男も「氏は豪放磊落であり」に化け、小心翼々のケチ男も「細心にして緻密な性格」に変身する。まあ、これは広告代をもらう以上、やむを得ざる舞文曲筆なんだろうが、逆に言えば、かつての一世中心の閉鎖的な移民社会で、余計な波風を立てずに過ごす生活の知恵でもあったのだ。

戦前ブラジルに来た日本移民は、文化ショックの問題もあったし、自分達の伝統文化に対する誇りもあって、文字通り「同胞社会」だけで固まった。排他性は強い。

こういう狭い社会では相互監視がきびしいから余りおかしなことは出来ないし、日系社会の内部でいろいろな抗争が起こっても、それを外部にさらけ出すようなことはしなかった。

日系社会という共同体（コミュニティ）が成立するのは、日系社会

の成員が暗黙のうちに認める共同体幻想で統一されていたからで、日本が勝った、負けたで共同体幻想が分裂すれば、当然日系社会も分裂する。

終戦後発生したこの事件は、日本移民にとっては最大の不祥事件ではあったが、本質的には日系社会内部の問題であり、しかもこの犯罪は破廉恥犯ではなく確信犯であったところが特徴。

だが、日本移民の歴史も八十五年を超え、日系社会の成員が二世、三世、四世に移行するに従い、他民族グループとのインターマリッジ（通婚）がふえてくると、日系社会は質的に変容する。

コミュニティの中心部は、まだたしかに日本文化を色濃く残した社会であることはわかるのだが、中心から遠ざかるにつれだんだんボケて、マージナル（周辺部）の境界が完全に不明になる。

その証拠に、あらゆる犯罪に日系人も登場して誘拐、銀行強盗、サギ、贈・収賄、汚職、なんでもござれだ。もう〝ジャポネース・ガランチード〟（日本人は間違いない）などという古典的な呼文化は相互に介入する性質を持っている。日本文化だってブラジルで受容されるものはどんどん入ってくるが、ブラジル的な公私混合や不正を役得する考え方も、日系人一般に広まることになる。

これは一面で言えば日系人のブラジルへの文化あるいは行動的同化の完了ということにもなるのだが、とにかく変容はハイスピードだ。

むずかしい血縁集団離れ

アメリカで『Ｔｈｅ　Ｂｅｌｌ　Ｃｕｒｖｅ』という本が出て論議

を呼んでいる。社会学者のマーレイと心理学者ハースタインの共著で、黒人のＩＱ（知能指数）は白人に比べ平均一五ポイントも落ちることこの題名、日本語で何と訳すのか知らぬ。〝カーブの鐘〟では意味がとれないが、要するに統計数字をグラフにした曲線が何を暗示しているかというタイトルなのだ。

黒人の低いＩＱ曲線に白人の高いＩＱ曲線をダブらせ、黒人の劣位、白人の優位が一目でわかるグラフが出ている。当然猛烈な反論が起き、ブラジルでも熱い反対論が展開されている。

実はＩＱを用いる人種差別の方法は、一九一二年に出来た古典的差別で、一九六〇年代以降は、この古典的方法に、一見「科学的」な味つけを施しているに過ぎない。

しかし、アメリカ、イギリス、ドイツなどでは相変わらず、飽きもせずに次から次といろいろな人種差別論が出てくる。これにはつくづく感心する。

近代の人種差別論は、ゴビノーの「人種不平等論」にはじまり、チェンバレン、ラプージュと続き、二十世紀に入ると優生学、民族衛生学につながり、ヒットラーのユダヤ人大量虐殺、断種法実施にまでエスカレートする。人種差別論など、一々紹介してもはじまらぬ。どうせアーリア人種がもっとも優秀だということを、手をかえ品をかえ、証明しようとしているだけのこと。

だが、アングロサクソンとかゲルマン人には何ともこころ良い響きに聞こえる。この心地良さを味わうために、繰り返し繰り返し、人種差別論が登場してくるのだ。

幸いなことにブラジルでは人種差別論は起こらない。だいたいブラジルはヨーロッパ系が主流といっても、ドイツ系やごく少数のオランダ系を除けば非アーリアンなのである。だから非アーリアンのヨーロッパ人、とくにスペイン、ポルトガル人も排除しようとする、ゴビノー、ラプージュの人種差別論や、優生学論が根本的にブラジルに受け入れられるはずがない。ブラジルで人種差別を唱えると、たちまち自己矛盾に陥り、自らの首を締めることになってしまう。だからこそ、日本嫌いのミゲール・コウト父子も人種差別論ではなく、日本人不同化論で日本移民を排斥しようとしたのである。この不同化論も今日のように同化が進み、ブラジル語を母語とする日系人がほとんどとなり、非日系との通婚も珍しくなくなると、理論的根拠がなくなってしまう。

ブラジルに住んでいる一世を含めた日系人は自分では自覚していないだろうが、実は外国に移住した移民の中で、もっとも恵まれた存在なのである。

人種差別の強いアメリカで日本移民が苦労したことはよく知られているが、ニューカレドニアやフィリッピンの日本移民は、戦争で一家離散の悲惨な目に遭っている。

中南米だって、ペルーをはじめ、アルゼンチン、ボリビア、パラグァイ、ドミニカに日本移民が入ったが、農地を取得できない国、政情不安な国、治安の悪い国、文明落差のひどい国などが多く、ブラジルのようなわけにはいかないのだ。ブラジルも国が広いから、サンパウロ、パラナ州に入った日本移民と、アマゾンや東北ブラジルに入っ

た移民では条件が違う。だから一概には言えないのだが、総じて言えば恵まれていることはたしか。

山本七平によると、日本人社会は「サザエ」なのだそうだ。外部に対しては固い殻で防禦して何物も入れず、そして時々蓋を開けて必要なものを取入れる方式である。

なるほどうまいことを言う。海外の日系社会はどこでも例外なく「サザエ」だった。殻の中は共同体で、一種の擬似血縁集団であることが特徴。「サザエ」はエスニック・グループの自衛手段なのだが、ブラジルのように原理、原則がなく、従って異文化グループに対しても圧力をかけないところでは、ほんとうは「サザエ」のような固い殻は必要ないのである。

そこで二世、三世の代になると殻を飛び出してブラジル社会に同化する道を辿るのだが、この時にうまく殻を出ないと失敗する。なにしろ殻の中は日本的な擬似血縁集団なのである。

このことは日本産業組合や日系コロニア企業の栄枯盛衰とも大いに関連がある。組合をつくったのは一世だから、組合は利益を求める機能集団であると共に、日本のムラ的共同体の性格も併せ持っている。何よりも人の和が重んじられる。義理、人情も大切だ。

この一家意識がプラスに働き、機能集団としての実績も上り、組合は急成長する。やがてリーダーが死に代が替る。この時点でブラジル式の純機能集団に切替えれば良いのだが、どうしても血縁集団との縁が切れない。まあ、日系企業がほんとうのブラジル企業に変身するには、やはり時間が必要だ。

まだ果たされぬ一世の責務

最近少々あせり気味である。筆者は戦後移民の一世だから、一世の中では比較的若い方に属するのだが、一世に残された時間はもうほんの僅かしかない。タイムリミットは刻々と近づいている。

現在ブラジルの日系人人口は百二十万人か、百三十万人だが、そのうち一世は五万か六万人しか残っていまい。もう一世の時代は確実に過去のものになっている。

これは時の流れなんだからやむを得ないと了解している。了解はしているが、このままで良いのだろうか。後世のために残すと言えば大ゲサだが、なんだか一世としての責務をまだ果たしていないような気がしてならない。

筆者の専門分野である生薬（薬草）についてではない。これは現在整理しているから、多分間に合うと思う。そういう個人的なことではなく、もっと一般的なことで、何かやらねばならぬことが残っているのではないかとの想いである。例えば詳細なポ語辞典があれば、日系人のみならず、ブラジルの日本研究者にもどれだけ役に立つことか、はかり知れない。皆の望みである。

辞書のことは実際につくることになって、寄付金まで集め、作成のメドがついたはずなのに、どういうわけか中途で挫折してしまった。まことに残念至極である。

まあ、辞書などは一人や二人の力で出来るものではないから、諦め

もするが、日本語で書かれた出版物、図書の整理、分類、目録の作成ぐらいは出来そうなものだが、これも実際はやっていない。

やらないのは、誰かが音頭をとったり、きっかけを作ったりしないから、腰が上らないのだが、日系社会にはよく探すと意外に重要な資料が埋もれていることがある。

筆者もそういう「本」を一冊持っている。数奇な運命で、巡り巡って筆者の手に入った貴重な「本」である。題名は『獄中回顧録』著者は元臣道聯盟リンス支部長、吉井碧水（喜一郎）。

この「本」のことは八年程前にサンパウロ新聞に発表したことがあるから、記憶の良い読者は覚えているかも知れない。「本」とカッコをつけたのは、この本がこの世に一冊しかない、手書きの　部厚い日記帳に丹念に罫線をひき、万年筆で書きこんだ、全三四七頁の執念の大作。リンスで捕えられ、サンパウロの政治警察に移送され、アンシェッタ島の監獄に流された経緯や、自己の思想、信念を克明に記述したもの。

発生したテロの件数百件、殺された犠牲者二十三人、しかも日系社会を真っ二つに割った、ブラジルの日本移民史上最大の、勝ち負けをめぐる抗争事件、今では全容の解明はできている。

ところが、この事件がいったいどういう性格の事件であったかという、評価というか、歴史的な位置づけとなると、どうももう一つすっきりしない。

吉井碧水の『獄中回顧録』は勝ち組指導者の精神構造を知るためには超一流の資料。これから何か回答を引き出せないかと考えた。実に

晦渋な文章だから、何度も読むのは大変なのだが、この人の思想や精神構造は、五・一五事件や二・二六事件の決起将校とまったく同一、ぴたりと重なる。

そこまでは容易にわかるのだが、それが一体何を意味するのかが、わからなかった。永いこと放っておいたが、この貴重な資料を筆者が死蔵したままでは申し訳ないので最近また読み返し、やっと筆者なりの結論めいたものが出てきた。

断っておくが、『獄中回顧録』は筆者が死蔵していると言っても、コピーは三部ばかり研究者の手に渡っており、それなりに利用もされている。それにオリジナルの「本」も近く人文科学研究所に寄贈する。これで、やっとこの世に一冊というような貴重な「本」の呪縛からのがれられる。

書く前に予備知識として知ってもらいたいことは、この日本移民の勝ち負けをめぐる抗争事件は、たとえ舞台がブラジルであっても、純然たる日本及び日本人の問題であることだ。

この事件は日本人の日本的なコンテクスト（文脈）の中でしかわからない。従ってブラジル人の研究者がいくらこの問題を調査してもまず理解は不可能である。

次に、この事件に派生して起きた、帰国サギ、円売りサギとかの各種のサギ行為、犯罪を切り離さなくてはならないことだ。そうでないと、事件の本質が混乱して見えにくくなってしまう。

ただ、一連のサギ事件は、移民の心理を知悉し、その心理につけこんで騙したわけだが、この騙しのテクニックは見事なもので、それ自

体、一つの研究対象になる。また、この騙しの系譜は連綿と引き継がれ、現在の出稼ぎあっせんにも、時折り見られるのがおもしろい。

とにかく、非常に扱いにくい問題を扱うわけで、慎重を期し、具体的な人名は出さないつもり。

ま、書くことは貴重な「本」を入手したものの責務だと思っている。

ブラジル移民と満州移民の違い

日本でノド自慢がはやれば、すぐブラジルの日系社会にもそれがそっくり持ち込まれる。カラオケがはやれば直ちにカラオケが入ってくる。現在のように非日系化が進んだとは言え、やはり日系社会に与える日本文化の影響は根強い。今でさえそうなのだから、戦前、日系社会が〝サザエ〟であった時代、サザエの中味の文化、道徳、制度、常識などはすべて日本のものだった。当時の日系コロニアは、日本をそのまま映す鏡のようなものだった。

一九三一年から太平洋戦争のはじまる一九四一年の十年間は日本移民の最盛期だったから、日本文化は移民と共にリアルタイムで入ってきた。この時に日本の思想というか、ファシズムにつながる誇大妄想体系である皇国史観も持ち込まれる。吉井碧水の思想体系は皇国史観以外のなにものでもない。これから吉井の思想を分析するわけだが、その前に世界的経済恐慌のはじまった一九二九年から、戦争に突き進んでいく一九四一年までの日本を展望しておく。

昭和のはじめから敗戦までの歴史は、重光葵の本の題名ではないが

「昭和の動乱」時代なのである。一九二九年（昭和四年）十月二十四日、ニューヨーク株式取引所で大崩壊が起き、これが世界大恐慌の発端になる。もちろん日本も不況の波をモロにかぶった。

好、不況の景気の波はいつでもあることだが、この時の不況はまさに空前絶後、想像を絶する不況だった。昭和四年の失業者指数を一〇〇とすると、昭和七年には一六五にはね上がっている。これは全国に百万人の失業者がいることで、まさに失業地獄だった。欠食児童、娘の身売り、間引き（嬰児殺し）、一家心中、行き倒れ、ルンペン、売春、泥棒、強盗の多発が日常化した。

この時期、ブラジル向けの移民がふえるのは、こうした日本の社会環境が背景にあったからなのである。日本政府としては、なんとか一人でも多くブラジルに移民させ、人減らしをしたかった。

何故ブラジルかというと、アメリカは既に日本移民を締め出していたし、それまでブラジルと共に日本移民を受け入れていたペルーもアメリカに呼応して日本移民の受け入れを拒否（最終的には一九三六年）したからである。

もっとも、ブラジルのはかに満州移民という、大きな移民の流れもこの時期に登場してくる。ブラジル移民とは直接関係ないが、ついでに満州移民について解説しておく。

一九三一年（昭和六年）九月、柳条満事件をきっかけに満州事変が勃発、関東軍の独断専行で満州の主要都市を占領、一九三二年三月には日本の傀儡国家「満州国」が誕生する。

満州はいわば日本の植民地と同じだから、日本の内地から自由に渡

航することが出来た。そのため一九三〇年（昭和五年）に二十万人だった満州の日本人人口は、終戦時には百五十五万人に膨れ上がる。このうち、移民に相当する開拓民は二十七万人である。おもしろいことに一九三九年（昭和一四年）から、満州移民は満州開拓民、移民団は開拓団と呼称を変えている。

満州移民の第一号は一九三二年（昭和七年）十月、関東軍代表東宮鉄男大尉と、拓務省を代表する加藤寛治に率いられた「第一次武装移民」四百九十二名で、全員在郷軍人だった。この第一次移民が「弥栄村」、第二次移民が「千振村」を建設する。

満州移民が急成長するのは、一九三六年八月、広田弘毅内閣が、「七大国策一四項目」をきめた中に、六番目に満州移民事業の本格化を取り上げたからである。

同じ移民でもブラジル移民と満州移民では性格が異なる。満州のは何かことが起きれば武器を持って実行行使する武装移民。主務官庁は拓務省と関東軍で、外務省が主管するブラジル移民と違う。この二つの系列、お互いソリが合わず、ケンカばかりしていた。

百五十五万人の全満州の日本人のうち、一九四五年八月のソ連参戦から、日本に引き揚げるまでに十七万六千人の日本人が殺されたり、死んだりした。このうち七万八千五百人は開拓民だった。

（資料は桑島節郎著『満州武装移民』より）

溜息のでるような数字だが、ブラジルと違い、中国人農民の土地を強制的に取り上げて入植した

ことに対する中国人の怒りと憎しみが爆発したからである。この一事

を見ても、ブラジル移民がいかに恵まれていたかがわかるだろう。

さて吉井碧水だが、一九四〇年（昭和十五年）の渡伯で、戦前移民としてはもっとも新しい移民なのだが、ブラジルにくる前に既に満州を知っていた。福岡で新聞記者をしていた吉井は、派遣員で満州に赴いている。そして土肥原賢二（陸軍大将、在満州特務機関長、陸軍航空総監、極東国際軍事裁判で絞首刑）の知遇を得たと言われる。知遇を得たかどうかはわからぬが、新聞記者として何回か会ったことは事実だと思われる。

現実感覚に欠ける信念派

筆者の調べによると、吉井碧水は一風変った経歴で、正規の学校教育は小学校程度しか受けていない。福岡県嘉穂郡の出身で、父親が経営する寺子屋式の私塾で論語中心の教育を受けたと言われている。たしかに漢文の素養は大したもので、『獄中回顧録』にも幕末の志士的な、自作の漢詩をいくつも記載している。一番短い偶感を紹介しよう。

歴獄辛酸堅志愈　（ごくのしんさんをへてこころざしいよいよかたし）
皇威護争不逞従　（こういをまもってふていのともがらとあらそふ）
聖恩報皇臣責務　（せいおんにむくゆるこうしんのせきむ）
奮起而不惜身命　（ふるいたっておしまずしんめい）

旭光将耀世紀曙　（きょくこうまさにかがやくせいきのあけぼの）
神霊護微臣苦衷　（しんれいまもらんびしんのくちう）

なるほどこれは古色蒼然としている。実は吉井はブラジルに渡った時、既に年齢が五十に近かった。吉井は日本で新聞記者としてのキャリアがあったから、臣道聯盟の機関紙『天地』（三、四号しか出ていない）で論陣を張ったし、出獄後は一九五一年ごろ、信念派の中外新聞の編集顧問格になったこともある。だが、このころになってもいささかも揺がぬ吉井の尊皇思想と難解な文章は、信念派の間でも古いと敬遠され、次第に仲間外れにされるようになる。吉井は失意のうちにリンスに帰り、一九六二年ごろ死亡する。

信念派、つまり勝ち組にも敬遠されたというところが興味深いが、吉井碧水の書く文章は、信念派の平均的読者にはむずかし過ぎてよくわからなかったのかも知れない。しかし、筆者は『獄中回顧録』を何度も何度も読み返しているが、表現の難解さ、文章の晦渋さはあるにしても、尊皇思想に基づく論旨や主張は常に一貫していて、むしろわかりやすいと思うのだが。

吉井碧水の思想、信念が幕末動乱時代の維新の志士、及び昭和維新を叫んで決起した五・一五事件や二・二六事件の青年将校の思想、信念と同じ位置にあるのは間違いない。どちらも尊皇思想で貫かれている。この吉井自身に、ブラジルの臣道聯盟とはどんな団体で何を目的としていたのか。

また直接テロを敢行した特攻隊とはいかなるものなのか、臣道聯盟と特攻隊の関係はどうつながっているかを解説してもらおう。

「抑も臣道聯盟とはに就いては、本秘史の随所に釈然と記述してある。尚数言を追補せんに第二次世界大戦勃発当初統制機関も指導機関も失へる在伯同胞思想界に日本精神高揚運動を提唱したのが濫觴である。滅私盡忠の人、退役陸軍騎兵中佐、吉川順治氏の不撓不屈の逞しき道念に慕ひ寄る魂の結合した団体が即ち臣道聯盟である。

（中略）臣聯は終始精神運動であるから、毫も破壊的意図はない。「テロ団」などは非国民共が勝手に我々血族を売るために附した名称であった。凡そ臣道とは相反する呼称である。（中略）

然るに余りにも極悪なる好策を弄し、血族を苦しめる反逆者に対し純情なる青年層の血を湧し、茲に非国民打倒の叫びが爆発したのが特攻隊の由来である。陰険、謀略飽く事なき敗亡思想に膺懲の一撃を加えた非常手段であったのである。

（中略）彼等愛国純情なる青年達は一家一身を犠牲にして挺身決行したのであって、実に不惜身命の崇高な精神の発露であると私は確信する。

（中略）この天誅特攻隊の出現に因り、敗亡患者が慄然として日本精神打倒運動に一大頓座を来たし、周章狼狽大恐慌を招いた事は特筆すべき功績であった。讃へんかな其の精神、其の愛国心。

明治維新の先覚者吉田松陰先生の遺句に「斯くすれば斯くなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂」この意気、更に今次大戦に散華した神風特別攻撃隊の若鷲の辞世「日本桜の枝はりて、花は亜細亜に乱れ咲く、吾れも散ろうぞ桜花」この信念、これこそ特攻隊員の盡忠精神であると信ずる。

斯の様に臣道聯盟は意力を以て悪思想を排撃して伝統の日本精神を護持し皇国民の使命を果さんとする団結である。特攻隊は収拾し難き邦人社会の思想混乱の過渡期に其の根源をなす。若干の非国民に天誅を加え以て警世し日本精神を護持し皇室の尊厳を身を捨てて守ったのである。

茲に於て其の使命に共通する意力はあるも、臣道は皇国民永劫の実践躬行すべき大道であり、特攻隊は天誅的破邪の剣を揮って膺懲を加え一時の現象である」（後略）たったこれだけでも、読むといささかくたびれるが、全書のいたるところにこの主張、論旨、日本精神の発露が述べられている。碧水氏はおそらく同じ信念派でも最も純粋な人間の部類に入るのだろうが、ここがブラジルであるとの現実感覚が見事に欠落していた。

発生して当然の〝臣聯事件〟

吉井碧水に限らないのだが、信念派リーダー達には現実感覚というものがほとんどない。あるのは観念的な尊皇精神と、動機が純粋ならば人を殺しても許されるという、純粋信仰。

「日本の天皇は人為に依って制定された皇位ではない。皇統は連綿として建国以来継承され、悠久に天壌と倶に続くのである」「信は力なり、自ら信じ毅然として戦ふ者常に克く勝者なりとは昭和の聖訓、戦陣訓に柄乎として示された皇国民の金科玉条である」「近き将来に於て必ずや御綾威は東方より燦として煌くことであろう」などと言われ

ても、ただかしこまって聞くよりほかないのだが、日本でもない異国、異文化のブラジルにあって、何のためにこんなことを言わねばならないのかよくわからなかった。

ところが数年前に和光大学教授で社会心理学者岸田秀の論文「日本近代を精神分析する・精神分裂病としての日本近代」をなにげなく読んで、文字通り飛び上がらんばかりに驚いた。

別に岸田教授がブラジルで発生した臣道聯盟事件や特攻隊のテロについて触れているわけではない。むしろブラジルの事件などは知らないだろうと思われる。

しかし、岸田理論に従えば、外圧のきびしい戦中および終戦直後のブラジル日系社会で、臣聯のような組織が出来て尊皇思想を鼓吹するのも、特攻隊の若者が反対派をテロで斃すのも、当然予見されることで、別に異とするには当たらないのだ。

岸田教授は「集団心理は個人心理と同じ方法論で解明できる」との立場に立って、ユニークな理論を展開する人。そこで岸田秀の著作を片っ端から集めて読み、同時に日本の近代思想形成に造詣の深い、山本七平と司馬遼太郎の著書を参考にしてみた。

いや、なるほどよくわかる。疑問がすとんと一々腑に落ちるのだから大したもの。この興味のある岸田理論を紹介しなくてはならないのだが、厖大な著作や対談集が対象なのだから、そうかんたんにはいかない。それならいっそのこと岸田理論を援用して、ブラジルで起きた日本移民史上最大の抗争事件を解明した方がよい。以下この方法を採るが、それにしても岸田理論の大まかな枠組みを説明しておいた方が

理解しやすいので、まず、これからはじめる。

岸田は「日本国民は精神分裂病だ」とまず結論づけるのだ。分裂病になったのは、一八五三年、黒船のペリーが来航し、力づくでいやがる日本を無理やり開港させたから。司馬遼太郎はこれをアメリカに強姦された日本という。

日本にとっては堪えがたい屈辱なのだが、強大な東インド艦隊を率いるペリーの力の前にはどうすることも出来ず、身を任せてしまう。これで一つの人格が引き裂かれ、外的自己と内的自己に分裂する。外的自己とは現実に適応して、外国への屈従もやむなしとする生き方。内的自己はそういう外的自己は偽りの自己であり、これまでの日本の伝統を忠実に守ろうとする生き方である。

内的自己の生き方は、どうしても現実無視に傾くから生き方としては弱い。そこで自己のアイデンティティを保つために何らかの精神的支柱を必要とする。その支柱が皇国史観だった。

純粋にして金甌無欠、神聖にして不可侵、ただ無私無償の献身を捧げることのみ許されるという天皇像が純化された内的自己の理想像となる。

ペリー・ショックで外的自己（開国派）と内的自己（尊皇攘夷派）が分裂してからの日本の歴史は、四囲の情勢を認識して、それに適応する外的自己が主流を占める。

しかし、外的自己から切り離され、現実感覚を失って、ひたすら幻想の純粋さを追求する内的自己も決して消えることなく続く。そして神風連の乱、西南の役、二・二六事件という、比較的小さな爆発を続

けた後、太平洋戦争で大爆発する。

対米英宣戦布告はまさしく精神分裂病の発病だが、敗戦によって外的自己が強くなり、病状は鎮静するものの、底流では依然として続き、浅沼委員長の暗殺、三島由紀夫の割腹自殺、連合赤軍事件などが発生する。内的自己の代表者はまず吉田松陰。「身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留め置かまし大和魂」とうたったが、松陰の望み通り、大和魂は日本的風土の中で連綿と受け継がれ、今日もなお「留め置」かれている。彼らを時代錯誤的と決めつけても問題は解決しない。彼らは抑圧されている日本人の人格の半面を純粋な形で表現したのである。

と、まあ、これが外的自己、内的自己についての岸田理論の枠組みなのだが、これをブラジルの臣道聯盟事件に当てはめると実によくわかる。さしずめ吉井碧水などは吉田松陰であり、『獄中回顧録』は『留魂録』（松陰の遺書）ということになるかも知れぬ。とにかく岸田理論で臣道聯盟事件を検証してみよう。

勝つことが自己の存在証明

岸田理論をブラジルの事件に当てはめると、内的自己は信念派の勝ち組、外的自己は認識派の負け組となる。臣道聯盟が実質的に組織として機能したのは二年しかないが、会員数は十二万と称しているし、吉井碧水もそう書いている。

この当時の在伯日系人総数は二十三万人程度だから、十二万人は過

半数になる。臣聯側の水増し数字という人もいるが、会員を信念派と解釈すればこの数字は結構いい線ではないかと思う。

臣道聯盟の活動家たちは一九三二年（昭和七年）から一九四〇年（昭和十五年）にブラジルに渡った新移民が多い。この人達は次第に軍国化する日本に再登場した皇国思想に大きく影響されて「諸事神武天皇創業の古（いにしへ）に復する」王政復古論で、この尊皇思想がブラジルに持ち込まれ、旧移民層まで浸透する。浸透するのは日本移民を締めつける外圧が次第に強くなってくるためである。一九二四年、アメリカの排日思想の影響を受けて最初に提出された排日法案は否決されたが、一九三三年には十歳以下の年少者への日本語教育が禁止され、翌一九三四年には日本移民を規制する、外国移民二分制限法が公布される。

一九三七年、議会を閉鎖し、新国家体制（エスクード・ノーボ）を確立したゼツリオ・バルガス独裁政権は、ナショナリズムの立場から外国人にもブラジル化を強制、日本語教育の全面禁止、一九四一年半ばには一世移民の命綱的な日本語新聞もすべて廃刊を余儀なくされる。

太平洋戦争勃発後は、もちろん日本人移民に対する弾圧や迫害が日を追って激しくなる。日本語会話の禁止、旅行の制限、強制立退き、理由なき逮捕、暴行など屈辱の日々が続く。移民史はじまって以来の受難だ。

実は前にも触れたように、ブラジルの日本人が受けた弾圧、迫害は、他の国の日本人が受けた災難に比較するともっとも軽微だったの

だが、そんなことが当時のブラジル日本移民にわかるわけがない。こうした状況の中で、外圧に耐えるには「必ず日本は勝つ」との信念を精神的支柱として持たねばならない。外圧がきびしければきびしいほど、神州不滅、大和魂の純粋信仰も高まり、天皇絶対の尊皇思想が強まる。

臣道聯盟十二万会員というのは、臣聯が獲得した会員の数ではない。実際に臣聯があろうがなかろうが、純粋信仰としての必勝信念は移民社会一般に拡がっていたのだ。むしろこうした状況を背景として、臣道聯盟が出来たと言ってよい。この時、ブラジルの日本人はほとんどすべてが内的自己だった。仮に外的自己を志向して、ブラジル側に立とうとする日本人がいても、顔や形が日本人である以上、ブラジル側が受け入れない。

さて、以下の文章は岸田秀の「近代日本を精神分析する」からの引用である。まず読んでいただきたい。

「開戦とそれにつづく緒戦の勝利は日本国民の大半を高揚感と興奮のうずに巻きこんだ。ついに百年来の恥をそそぐ日がきたのだった。それは抑えに抑えていた真の自己をついに実現した歓びの興奮だった。外的自己は排除され、徹底的に非自己化された。集団のレベルで言えば、非国民化された。実際、戦争に賛成しない者、日本の勝利を疑う者、軍部を批判する者は、まさにその言葉通りに非国民と呼ばれた。そして非国民はすなわち敵の協力者であり、スパイであった。これは分裂病者がその外的自己を自己の一部とは認めず、自分に敵対す

る他人の味方であると感じるのと同じ心理機制である。外的自己の排除によって内的葛藤は一応解消され、内的自己を唯一の自己とする人格の統一が一応達成された。(『一応』とわざわざつけ加えたのは、外的自己と内的自己をともに包括する、健全な意味での人格統一ではないからである)。ペリー・ショック以来引き裂かれていた日本国民の人格は対米開戦によってはじめて一応の統一を見たのであった。長期にわたる葛藤と自己疑惑の果てにやっと手に入れたこの統一を守り抜くためには、日米戦争に勝たねばならなかった。負ければもとの恐るべき葛藤と自己同一性喪失の状態に逆戻りするという恐れが、日本のような小国の実力からすれば不相応に大きなエネルギーを戦争に結集させた動機の一つであろう」　おわかりだろうか。負ければ自分を支えている精神的支柱が崩れて自分がなくなるということなのだ。この自己喪失は恐怖以外の何ものでもない。

日本の日本人は、いかに内的自己型の人でも、連日空襲を受け、完膚なきまでに国土が破壊されるのを見ているのだから、現実の敗北を認めざるを得ない。認めた時点で内的自己は萎んでしまう。

ところが現実が見えないブラジルの日本人は、移民心理や外圧などの要因も重なって、高揚した内的自己をそのまま持ち続けた純粋信仰のグループがいた。これが同胞争う抗争事件につながる。

認識派は不倶戴天の仇敵

岸田理論に従えば、外的自己と内的自己の分裂は個人でも起きる

し、集団でも起きる。個人でも集団でも分裂すれば精神分裂症の症状を呈することに変りない。分裂して内的自己が表面に出た時が発病期、外的自己を表面に出している時が病前期または寛解期である。

日本は終戦によって、それまでの内的自己が急速に意識下に追いやられ、代って外的自己が主流になる。分裂病の寛解期に入るわけだ。これ以外選択の余地がないのだからこれは当然。

しかし、ブラジルの日系社会では、逆に終戦によって内的自己と外的自己の分裂が起きる。敵、味方という分類をするなら、信念派の本当の敵はブラジルであった。なにしろ連合軍側に立って日本移民を弾圧し、戦争末期の一九四五年六月六日には日本に対して宣戦布告をしているのだ。

だが信念派の増悪の対象はブラジル国家には向けられず、敗戦を認めた同胞である外的自己の認識派に向けられる。これは皇国史観の存否が判断の基準になっているから。

開国を拒む尊皇攘夷派の本当の敵は、アメリカをはじめとする外国であるにもかかわらず、生麦事件のような小事件を除けば、攘夷派の攻撃の対象は同胞である開国派に向けられたのと同じ。

もっともブラジルの場合、信念派によるテロ事件は終戦直後に起こったわけではない。テロ第一号の溝部幾多バストス産業組合専務理事の殺害は一九四六年三月七日で、終戦から七カ月も経っている。この期間が分裂の進行期間であり、内的自己の信念派が理論武装し、認識派である敗亡一派を攻撃する大儀名分を明らかにする準備期間でも

あったのだ。信念派は終戦によってあらわれてきた外的自己の認識派を許せなかった。信念派にとって「敗亡恩想」は、自らの精神の支えである皇国史観、尊皇思想を脅かす重大な裏切りで、断固排除しなければならぬ存在だった。

吉井碧水は『獄中回顧録』の序で、いかに認識派が非国民であり、奸計を用いて自分たち正義の士を鉄窓に繋ぎ、あらゆる迫害を加えたかを述べている。短いので全文引用してみる。

「民族の痛恨事邦人疑獄、終戦を契機として混沌たる煙幕時代を展開する。世紀改変の過渡期に於て世界は挙って道義愛好の新秩序を樹立する政治に移行しつつある。而もかつての弱小国家も独立自存の再建途上にある。斯の変遷期に必然的に展開する思想戦に、奇現象にも同族の同胞が吾れらの敵である。何を感じたか彼等敗亡思想を抱く一派は、速やかに転向して、歴史も伝統も大和魂も抛棄して、祖国を誹謗し軍部を罵倒する。遂には恐れ気もなく皇室の尊厳を冒涜する。

実に由々敷き逆臣不逞の跋扈である。この人面獣心の徒は悪辣なる手段の限りを盡し、同胞間に捲き起したる臣聯疑獄こそは皇国の不祥事である。彼等の毒牙にかかって善良なる同胞が、生業を根底から覆され、家族を破壊されて鉄窓の辛酸を舐めし者幾何なるか。就中臣道聯盟の人々は彼らに呪はれ、あらゆる迫害を蒙り、苦闘の果ては流島の辛酸を二ヶ年半の長期に亘り敢て凌いだのである。思想戦は現在も尚終熄してゐないのである。

如何に悲惨であり、凄愴であったか。この現実を記録して歴史の頁に綴らんとの念願で獄中に於てこの稿を起す。構想も思索も意に任せ

ず、不備は勿論のこと文章も亦拙劣である。

併し乍ら天地に恥ぢざる正義派の受難である。邪の粛正される時が必ず来る事を信ずる。然うした時に此の記述が何程かの参考になるなれば、私の望外の喜びである。

昭和二拾三年一月六日獄中に於て碧水識」

同じ同胞なのだから、お互い話し合って和解すれば良いではないかというのは内的自己を知らぬ人の言うこと。信念派にとって認識派の負け組は倶に天を戴かざる仇敵と化すのだ。だからこそ破邪の剣を揮って敗盲一派を膺懲しなければならないことにもなるのだ。

いわゆる天誅で、天に代りて不義を討つことが正義なのである。自分が天になってしまう天誅思想は便利な言葉だが、これは皇国史観と結びついた、もっぱら内的自己側の専門用語。

何故これほどまでに相手を排除しようとするのか。岸田秀はこう言っている。

「つまり内的自己から見れば、外的自己はむしろ敵の同盟者のようにうつる。他人が自分の内奥まで踏みこんでくるという被迫害感の起源はここにある。これがもっと極端になれば、他人が電波を発信して自分の思考の内容を操作し、決定しているとか、スパイが自分の一挙一投足を監視しているとか、悪魔が自分に取り憑いて自分の意志に関係のない勝手なことを自分に言わせたり、やらせたりするという分裂病者の被害妄想となる」

実際こうした被害妄想を持った人はかなりいた。

〝疑獄〟に残る信念派の怨念

しばらく岸田理論から離れる。前回引用した吉井碧水の『獄中回顧録』の序文をもう一度読み返して頂きたい。人面獣心というような激烈な表現で認識派を攻撃しているのだが、同時にこの敗亡一派のためにいかに自分達信念派が苦しめられたかを悲痛なまでに強調している。

碧水は信念派こそ被害者で、無実の罪で多くの人間を獄に入れて苦しめた認識派は、悪辣きわまりない加害者だと言っているのだ。これは常に一貫している碧水の基本的主張。認識派の主張とまるで反対。

認識派は「日本の敗戦を認めない頑迷固陋な臣道聯盟のような団体があって、認識派要人の説得にも一切耳を藉さず、遂に特攻隊のようなテロ団をつくって次々に暗殺をしたため、ブラジルの官憲がテロ団のみならず、その母体となった臣道聯盟会員も検挙した」とこの事件を定義する。

ここでは当然ながら、テロを行う特攻隊や臣道聯盟が加害者、狙われる認識派が被害者という構図になっており、一般にもそれが信じられていく。

抗争事件を記述した資料は、認識派の書いたものが圧倒的に多い。たしかにテロ事件に関しては襲うものが加害者であることは間違いない。しかし、認識派もテロを手を拱いて傍観していたのではなく、一九四六年三月七日の溝部幾太殺害、四月一日の元文協普及会長野村忠

三郎殺害を契機に大規模なカウンターアタック（反攻）に転じ、信念派に対する大弾圧を開始する。

ただこのカウンターアタック、認識派が自分の手でやったのではなく、ブラジル官憲とマスコミを動かして〝合法的〟にやった。四月二日にはじまる臣道聯盟会員の一斉検挙がそれである。

ここのところを碧水は「臣聯の団結力を怖れてゐた敗戦派では（註テロ事件を）好機とばかり、臣道聯盟は秘密結社である。テロリスタの団体であると誣告して官憲を動かすことに成功したのである。その間、聖州一円の臣聯員を一網打盡検挙するには、彼敗戦派では莫大な金を投じたであろうことは想像に難くない」

と述べている。いいところを突いている。だいたいブラジルの警察にとって日本人の精神構造など、どうでもよいので、臣道聯盟とは何か、誰が臣聯員なのかも認識派に教えてもらわなかったらわかるはずがないのだ。

信念派への弾圧は徹底しており、規模も大きかった。サンパウロの政治社会警察で取調べを受けた者二千三百人と言われるが、地方の警察に召換された日本人を加えると五千人以上が取調べを受け、四百人～五百人が拘置されている。もっとも警察の取調べもいい加減なもので、「日本が勝ったか負けたか」を聞き、「負けた」と答えれば即時赦免、「勝った」と答えれば拘置された。サンパウロの政治社会警察では日の丸の国旗や天皇の肖像による「踏み絵」も行われた。

「踏み絵」は警察に協力した偏執狂的な日本人の入れ知恵なのだが、いかにも日本人的発想。偶像崇拝をもたぬブラジル人ではこういう考

えは出てこない。

四月二目の弾圧と一斉検挙で主だった臣聯員はほとんど拘置されたが、皮肉なことにテロ事件はそれからが本格化する。四月は二件、五月、六月一件ずつだが、七月には十七件のテロが発生する。弾圧がかえってテロの跳梁を促進する結果になったのだ。

こうなれば認識派の行動隊も警察も面目上、一層弾圧を強化し、検挙者を出さねばならない。かくて一九四六年中に三回に分けて島送りにした収監者の数は百七十七名に達した。（この数字、多少の出入りがあり、必ずしも正確ではない）

碧水はこの事件を「邦人疑獄」と命名している。疑獄とは「事情が入り組んで真相がはっきりしない裁判事件」のこと。たしかにテロ実行犯や明らかにテロを教唆した者以外に、皇国思想を信奉するだけの無実の人もいるのだから疑獄というのは正しい。ろくに裁判すらないのだ。

抗争事件を記述したものは多いが、不思議なことに、認識派の一部が相つぐテロに対抗するため官憲を動かし、カウンターアタックに出、臣道聯盟など信念派の多くを検挙したと書いてあるのを見たことがない。あまり自慢できることではないから、すべて警察のやったことにしたのかも知れぬが、それでは片手落ちなんてものではなく、事実の隠蔽であり、歴史の歪曲ではないか。

とくに終戦を契機に負け組に転向した一部の日本人は、わざと皇室の尊厳を汚す言辞を弄して信念派を挑発したり、信念派への弾圧がはじまるや直ちにブラジル官憲の手先となって信念派を告発したり、脅

したりしたため、信念派から〝警察の犬〟と憎悪の対象になったほどである。

この事実を書かないから信念派にいつまでも〝怨念〟が残るのだ。碧水の『獄中回顧録』はまさに怨念の書でもある。一方的に信念派が悪いでは、碧水の霊もなかなか浮かばれまい。

両派の尖鋭分子は同じ性格

臣道聯盟の基本思想が神州不滅、大和魂の皇国史観であったことは間違いないが、いろいろな人間の寄り合い世帯だから、実際には人によって信念の程度や行動のしかたも違っている。

臣聯がテロ実行の特攻隊をつくって認識派要人を襲ったというのが、事件当時の定説だが、臣道聯盟が特攻隊を組織したわけでも命令したわけでもない。

たしかに積極的に煽動した臣聯員もいたし、天誅やむなしの立場でテロを容認するものもいた。

その一方で、臣聯活動は精神運動なのだから、心情は掬すべきもテロのような直接行動は認めないとする会員もいた。当時の混乱した情勢の中では、テロ実行犯から精神運動主義者まで、一視同仁とみられたのはやむを得ないところがあるにせよ、結果として実行犯を除いた信念派は、テロ教唆者も精神運動家も同罪になってしまった。乱暴なはなしで、これが怨念のもとになる。

さて、ここに大変興味深い現象がある。テロ実行の特攻隊青年を巧

みに煽動したり、隠れ家や具体的な襲撃方法を教えた、勝ち組のテロ教唆者と、先に述べた〝警察の犬〟的負け組日本人の精神構造が同じ基盤に立っていることである。

どうも日本では歴史的にこういう、キリシタンを摘発する転びキリシタン的人間があらわれ、これが一番残酷なことをすると相場がきまっている。どことなくうさん臭く、どうも人間として信用ならないタイプだ。どちらも良識のある人間からは敬遠され、最後には自分の所属する陣営からも嫌われて排除される。こういうタイプの人間が暗躍したため、事態は一層混乱、紛糾するのだが、実はこの二者は表裏一体なのである。再び岸田教授に登場してもらおう。

「人格の統一性の裏づけを欠いた精神分裂症的なある傾向は、つねにそれと正反対の傾向と背中合わせになっている。泥水すすり、草をはみ、死ぬまで戦う日本兵の盲目的勇敢さと、なかには頼まれもしないのに自分から申出てアメリカ空軍の爆撃機に乗り込み、ここが日本軍守備隊の司令部、あそこが砲兵陣地だと教えた者もいた日本兵の捕虜の卑屈さとは、表裏一体のものであって、前者を賛美して後者を非難するのは筋が通らない。この両傾向はガラスの固さと脆さと同じように、同じ一つの性質の二つの側面なのである。」（中略）

「日本兵の捕虜の一部に見られた態度の逆転が国民的規模で見られたのが、敗戦のときであった。

本土決戦、一億玉砕を叫んでいた日本人は一夜にして従順でお人好しの平和主義者になった。世界の歴史上、アメリカの占領軍ほど、被占領国民の抵抗を受けず、進駐がスムースに行われた例はない。（中略）

降るアメリカに柚は濡らさじと、サイパンでは米兵を姿を認めると呼びとめられるのも聞かずに海に身を躍らせた大和撫子が、陸続と慰安婦に応募した。それは米軍当局すら驚いたほどの卑屈さだった。連合軍の日本占領が平和裡に成功したのは、マッカーサーの占領政策がうまかったためでも、戦争をはじめるときと同じく戦争をやめるときも日本国民が天皇の命令に忠実だったためでもない。分裂病質者に特有の態度の逆転が起こっただけのことである。

大日本帝国は崩壊した。大東亜共栄圏は幻想に終わった。狂気の発作からさめた分裂病質者と同じように、日本人はついさっきまでの自分の行動をえらく恥じ入り、後悔する態度を示し、もう二度とこのようなことはしないと誓うのだった」。

こうはっきり言われては身も蓋もないのだが、まあそういうことになるだろう。ただブラジルの日系社会の場合、尊皇思想の内的自己が終戦によっても意識下に抑制されず、敗戦を認めて分裂した外的自己と争ったのである。

信念派の信じる尊皇思想は、彼らにとっては万古不易の普遍的心理なのだから、別の共同幻想に基づく他の集団の存在は認められない。かくて同胞社会は分裂する。

こういう対立は根が深く、容易に解決できるものではない。直接の抗争こそ数年で収まったものの、各地の日本人会も二派に分裂、永いこと冷戦が続いた。現在は当時の一世がほとんど物故したので、表面的な対立は解消しているが、まだ本当に融合したとは言えないのである。

この抗争、ブラジルの日系社会だけに起こったのではない。ペルー、ハワイ、アメリカ本土の日系社会でも発生している。ペルーでは一部逮捕者も出たが、いずれも大きな問題にはならなかった。条件が違うのである。

ブラジルは日本移民の数が多かったし、しかもイキの良い皇国史観に影響された新移民が、開戦の年まで（一九四一年八月入港のぶえのすあいれす丸が最後）続いたのだ。

それにしてもこの事件、ブラジルだからこそこの程度で収まったので、これがアメリカだったら死者が出、大量の国外追放者が出て大問題に発展していたことは間違いない。

魅力ある純粋信仰と〝天誅〟

これで一応、勝ち負け抗争問題に関する筆者の試論を終える。これによって吉井碧水の『獄中回顧録』のような、この世にたった一冊の「本」を入手した者の責務を果たしたと思っているわけではないが、あとは後進の研究者に任せたい。

実はこの試論、かなり中途半端だったと反省している。岸田秀の精神分析の手法をあてはめたり、著述を引用したのは間違いとは思わぬが、精緻でユニークな岸田理論を読者にわかりやすく説明するのがむずかしい。少しやってみようか。

岸田理論は、まず人間は本能のこわれた動物であると規定する。人

間以外の動物はすべて本能に従って行動して、現実に密着して現実の中に生きているから安定している。

例えば二匹の狼が闘って、一方が負けたと思えばひっくり返って急所であるノド元をさらす。すると勝った方はそれ以上攻撃はせず、戦いは終了し、強弱、優劣の序列が出来、以後それに従う。言うならば、自然の秩序、社会の秩序、自分の秩序が一体化され、いささかの乱れもない。

ところが人間の場合、本能がこわれているから攻撃を中止するブレーキが利かず、降伏してきた敵でも殺すようなことをしてしまう。本能のこわれている人間は、他の動物のように本能に従っては生きていけない。そこで人間は本能に代る行動規範が必要になる。これでブレーキをかけようというのだ。神とか論理とか道徳、法律などという、人為的な秩序である。しかし人為的につくったものである以上、どんな秩序も動物の本能のように自然に統一されたものではなく、きわめて不完全で、いわば大いなる幻想になってしまう。

現実に密着して生きている動物の状態から遊離して、人類が幻想の世界に生きねばならぬようになった時が人類の歴史のはじまりとなる。人類は動物の本能の代りに幻想を選んだのだ。

人間は一人では生きられないから集団をつくる。この集団は家族であれ、部族であれ、国家であれ、はたまた学校であれ、会社であれ、そのメンバーの私的幻想を共同化して共同幻想によって支えられている。共同幻想が崩壊すればその集団は崩壊する。終戦で日本人社会が分裂したのは、まさにそれまでの共同幻想が壊れて分裂してしまった

からなのだ。

このほかに岸田理論では、私的幻想で他者と共同化できなかった非自我のエスがさまざまに絡み合っていろいろな現象を呈するのだが、これは混乱するから省略する。

とにかく岸田理論は岸田自身が言っているように「人間に関する問題ならどのような問題もすべてつながっており、ある問題を説明できて、別の問題を説明できないような理論は理論名に値しない。理論の名に値する理論ならば、たとえば天皇制と性倒錯を、革命と精神病を、戦争と恋愛を、宗教と貨幣を同じ統一的体系によって説明できるのでなければならない」のだそうだ。

これはまた大変な大見得を切ったもので、おそるべき自信であるが、たしかに岸田は国家も恋愛もエロスも精神病も同じ手法で説き明かしているのだから、文句のつけようがない。

外的自己と内的自己は集団でも個人でも、程度の差こそあれ、二つながら内在しているもの。外的自己の立場をとりながら、内的自己に魅力を感じたり、惹かれたりするのはむしろ当然。なんと言っても内的自己は自分の本心なのだ。

だから暗殺にしても、日本人的感覚からすると「天誅―」と叫んで腰間の秋水を抜いて斬りつけると、なんだか殺された方が悪の巨魁というイメージになりやすい。

この場合、暗殺者が長身白皙の美男子で、殺された方がハゲでデブで金持ちで、妾でも持っていると都合が良い。純粋無垢の正義の士が

やむにやまれぬ破邪の剣を揮ったようで効果が上がる。

もっと念入りにやるなら、清浄な滝に打たれて斎戒沐浴し、真っ新の晒を切ってきりりと褌を締め、神仏も照覧あれと祈り、私心を去ってことに当たれば更に効果的。一〇〇パーセントに近い世間の同情が暗殺者に寄せられることは間違いない。

褌なんかどうでも良いじゃないかと思うかも知れぬが、これがさにあらずで、大切なポイントになる。俯仰天地に愧じざる天誅を決行するには穢れなき真新しい褌（三尺では短いからやはり六尺か）が必要なので、車夫、馬丁の汚れた褌ではさまにならない。

日本人はことのほか純粋信仰が好きで、動機が純粋ならば人を殺しても許されると考える傾向があるが、その純粋さのシンボルを真新しい褌に見出すから、大向こうが喝采するのだ。

五・一五事件の青年将校がそうだった。まあ、これが江戸末期に確立された尊皇イデオロギーに伴って出てくる日本人の美的感覚というか、精神美学なのである。ブラジルで起きた抗争事件、日本人の心性がわからぬブラジル人に理解しろという方が無理なのである。

根強い風潮アジア再移住

勝ち組、負け組の対立抗争にはもう触れぬが、戦前から戦中にかけてブラジルの日系社会に支配的だった「日の丸の下で暮らしたい」という、大東亜共栄圏再移住論は一応概観しておく必要がある。なにしろ特に強硬派でもない、聖州新報社主の香山六郎までが、一九四一年

七月、廃刊させられる時に「アジア人はアジアに帰ろう」と廃刊の辞で述べているほどなのである。日本と言わず、アジアに帰ろうと言ったところに、この時代の南進論の影響がうかがえる。

敵性国民として弾圧が強まる中で、こんな無法のブラジルに住めるか、戦争が終わったら（勝ったら）直ちに日本政府に請願して東亜に再移住しようと考えたのはむしろ当然の成り行き。

この移民の心情を、具体的にわかりやすく理論づけたのが、一九四四年十月に発表された、臣道聯盟理事長吉川順治元騎兵中佐の文章。この文、理論的と言えるかどうかは疑問だが、単純明快な論旨だったため、多くの信奉者が出て「吉川精神」が急速に拡まる。

吉川文書は十二項目から成っている。まず最初に「判決」在伯邦人ハ戦後本国又ハ大東亜共栄圏二移レルヲ勝レリトス。と結論を出し（判決の用語はおかしいが）、以下十二項目の理由を並べている。主張は単純であり、以下のように要約できる。

「ブラジルの日本移民は一時的方策であったので、決して日本の根本的な国策ではない。今や情勢が変化し、大東亜共栄圏樹立が根本国策になったのだから、我々もこれに従うべきである。これは子孫の教育のためにも望ましいことで、ブラジル生れの子弟の日本語劣等なこと周知の通りである。ブラジルが日本語教育を忌避するのは、現在の情勢としてやむを得ないが、我々血族のためにはならない。かつて太閤時代、南洋に出た日本人十数万が、本国の鎖国で土民と混血、消えてしまった。本国の支援を失った海外の日本人がどういう結果になる

のか明白ではないか。故に「吾人ハ一族ヲ率ヒ日ノ丸旅下ニ復帰」しなければならないのである。」

まことにごもっともなのだが、驚くのは十番目の項目。全文を引用してみよう。

十、植物殊ニ野菜ヲ日本ヨリ当国ニ移入シタル場合、数年ナラズシテ変質退化スルヲ見ル。在伯同胞モ亦同様此ノ傾向顕著ナルヲ見ル。伯国ハ一般ニ文化ノ程度未ダ極メテ低ク殊ニ気候温暖ニシテ生活容易、刺激比較的少ナク、加フルニ風紀、綱紀極度ニ紊乱シァル現状ニ於テハ退化セザラントシテモ豊失シ得ベケンヤデアル。

余渡伯当初農村ノ子弟ヲ集メテ教育スルコト約一ヶ年ノ実験ニヨリ、

①日本ニ於テ多少ノ教育ヲ受ケ来リタルモノ　②日本ニ生マレ当国ニ於テ成人シタルモノ

③伯国生レノモノ

右ノ順序ニヨリ数量的頭脳ニ著ルシク優劣アルコトヲ実験シ驚キタリ、爾後実験者ノ所見ヲ徴シ、益々コレヲ確ムルヲ得タリ。

なに、本当は自分の属する日本文化こそ唯一、絶対、最高とする異文化受容能力皆無の一世老人の拒絶反応にすぎないのだが、他の多くの一世移民も同じ精神構造をしているから、たちまちのうちに賛同者がふえ、吉川精神が絶対視されるようになっていく。もし吉川老人があの世から一時里帰りして、現在の日系社会の状況、即ち非日系との通婚の多さ、日系子弟の日本語離れ、日系子弟が展開する公然たるラブシーンを見たら何と言うだろうか。筆者が代ってやってみよう。

「嗚呼、吾ガ邦人子弟土民ニ堕セリ。伝統アル大和民族ノ衿恃何処

ヘ抛棄シツルヤ。日本語更ニ話サズ而モソレヲ括トシテ恥ジル色ナシ。剰ヘ公衆ノ面前ニテ若キ男女相擁シテ不埒ノ儀ニ及ブ、将ニ禽獣ノ振舞ヒニ変ラジ。風紀ノ紊乱、道義ノ頽廃ココニ極マレリ。余曩ノ大戦中、大日本帝国ヘノ帰国又ハ大東亜共栄圏ヘノ再移住ヲ主張セシハ、邦人子弟ノ斯カル土民化ヲ防ガントスレバナリ。嗚呼、神州ノ美風地ニ堕ツルカ、余慙愧ニ堪ヘズ、唯落涙ノミ。」　閑話休題―とにかくこの当時の日系社会の多くのメンバーがいかに大東亜共栄圏の成立を待ち望み、そこへの再移住に大きな期待をかけていたか、まったく切なくなるほどである。

もともと大東亜共栄圏といい、南進政策と言っても、イギリスのブロック経済に対抗する、日本を盟主とする東アジア経済ブロック構想に過ぎず、とくに南進論はオランダ領インドシナの石油を確保するのが狙い。日本政府はブラジル日本移民の再移住など毛頭考えていなかった。

職業外交官の石射大使はさすがによく見ている。「この時居留民の一部からこんな圧制なブラジルにおるよりは、早く大東亜共栄圏に移って、自由の天地を開拓したいとの声が聞こえてきた。祖国の宣伝に浮かされて、天国のような共栄圏がもう出来ているものと早合点しているのだ。居留民は祖国を万能の国と信じていた。」

〃えげつなさ〃残る移民社会

戦後の勝ち負け対立事件を調べていてつくづく関心するのは、サギ

師たちの騙しのテクニックの巧妙さである。移民心理を知り尽しているから、いかようにもダマせるのだろうが、南洋の土地売りから円売り、帰国乗船券売り、日本からの使節団歓迎費集めのサギ、その他特務やら偽宮様やら、まさに百花繚乱、サギのオンパレードである。

この一連のサギ、日本人が日本人を騙したところに特徴がある。サギのネタが勝ち負けがらみなのだからこれは当然なのだが、なによりその方が手っ取り早い。それにこの当時の日本人はブラジル人を騙せるほどブラジル語がうまくなかった。

筆者は思うのだが、日本にいる平均的な日本人と、移民してきた日本人を公平に比較すると、移民の日本人の方がはるかに山っ気が多い、というか金銭欲が強い。

これはむしろ当然のことなので、移民の大半は金儲けを目的として移住するのだ。中には個人の趣味や興味で移住する人もないではないが、こういう人は例外的存在。

もともと移民は徴兵や懲役のように強制によるものではない。いかに日本の経済状況が悪く、貧困に喘ごうと、喰いつめようと、最終的に移民を決意するのは個人、あるいは家族の意志である。

移民は誰にしろ、移住先の事情が分かっているわけではない。西も東もわからず、言葉はむろんのこと風俗習慣も知らず、どんな事態が待ちうけているかも計り知れず、不安の種は尽きないもの。

それを承知で移住するのが移民なのだ。

これは室町時代の倭冠や山田長政時代から続いている、移民の共通パターン。したがって日本から海外に出た移民(呼称はどうあれ)は、

ある程度、山っ気も度胸も、自分の運命を自分で伐り拓く気概を持っている。金儲けにも貪欲で、関西風に言えばえげつなさがある。

しかし、そうは言っても、移民がすべて金儲け出来るとは限らない。むしろ率から言えば出来ない方が多いのが現実だが、これは結果論。

戦後、勝ち負けのドサクサに乗じて騙したサギ漢の心情はあさましいが、何か金儲けの口はないかというあせりの状態の時にチャンスが到来すると、恥も外見も見栄もなく、もちろん倫理や道徳は棚に上げてそれに飛びつく人間が出てくるのも、残念ながら移民社会の特徴。

先年からの日本への出稼ぎブームで、爆発的にあっせん業者が増え、中にはかなりあくどく、いかがわしい手口で金儲けをする連中もいるようだが、これも同じく移民社会の現象。

サギ犯罪を英語でコンゲームということがある。コンはコンフィデンスで、信用、信頼のこと。

最初言葉巧みにもちかけて信用させておいて、後で徹底的に騙すやり方。

こういうサギの常習者をコンアーチストと言うのだそうだ。アーチスト（芸術家）とはおそれ入った名称だが、思わず唸りたくなるようなサギの天才もいるから、あながちこの名称も不当ではないのかも知れぬ。終戦直後ブラジルの日系社会にあらわれた偽宮様の加藤拓治や川崎三造などまさにコンアーチスト。わかっていてもころりと騙される。

こういう手合は現在もいて、筆者も二人はど知っている。一人はリ

オで床屋をしていた一世で、後に旅行ガイドのようなことをしていたが、これは天才だった。なにしろ日本人だけでなくブラジル人まで騙すのだ。パンタナールに家を一軒借り、これをホテル代りにしたのだが、家賃はもちろん、買い付けた備品や食糧、借りたボート、掃除の女中を含めた使用人の給料、近くの町での飲食代、タクシー代、とにかく一切払わず踏み倒してしまった。

家を貸した農場主などは家賃を踏み倒された上、この男の日本行き往復航空券購入の裏書き保証までさせられ、支払いを余儀なくされた。実に見事なものである。

しかもこの男、これだけのことをやりながら、平気で町に現れるのだ。借金とりに詰め寄られてもにこやかに笑って「もうちょっと待ってくれ、必ず払うから」とまったく悪びれない。しかし、いつまでも続くわけがないから、適当なところで姿を消した。今でも町の語り草になっている。

もう一人はこれほど大物ではないが、サンパウロで旅行サギをやる男。その道では有名だ。団体ツアーを企画し、日本からの駐在員を対象に売ってツアー代金を集め、ツアーは実行しない手口。

この男も逃げない。怒って詰め寄る客に〝誠心誠意〟謝り、手違いがあってツアーが実現出来ず、金も返せない事情にあることを説明する。これがなんとも堂に入っている。

客の中には「だます気じゃなかったんだよ。運が悪かったんだよ」とこの男の肩を持つ者もあらわれる始末。この男、頭が良いから続けてはやらない。三、四年の間隔をおく。このぐらい時間をおくと駐在

員はすべて交替するから、安心して次の仕事にかかれる。

無駄ない野生動物の世界

そろそろパンタナール通いをやめようと思うのだが、なかなかやめられぬ。薬草の調査のはかに自然の営みの霊妙さに惹かれるからだ。何ら人工的な管理のなされていない自然界では、生と死をめぐる摩訶不思議なドラマが展開される。これが良い。

このごろは動物行動学（エソロジー）に興味を持っている。野生動物の行動には人間と違って一切の無駄がない。一見どんなに奇妙に見えようと、必ず意味があり、それは種の保存と繁殖につながっている。例えばスズメ目ムクドリモドキ科にジャプイーラというトリがいる。日本名はオオツリスドリ（大釣巣鳥）。このトリ、夜になると巨大なねぐらをつくる。少々の数ではない。まず万を超す。筆者の泊まるホテルの中庭にこれがある。

このトリ、もともと小集団で営巣したり、採餌する習性をもっているが、せいぜい五十から百羽程度で、大群で行動しているわけではない。それが夕陽が沈みかけると四方八方から次から次に小グループが集まってくる。夜になって辺りがすっかり暗くなると、トリたちは沈黙し「チッ」とも言わなくなるが、それまでの小一時間、実にやかましくさえずりあい、枝から枝へ飛び交うのだ。

そして朝になると、またひとしきりさえずってから、小グループで思い思いの方向へ飛び立つ。

筆者はエソロジーの専門家ではないから、ジャプイーラがどうしてこういう行動をとるのか、いくら観察してもわからない。たしかに大群が固まって夜を過ごせば、数羽、数十羽でいるよりはオポッサムやイタチのような外敵から襲われる率が少なくなるからその点では有利であるのはわかる。

また人家の中庭で、外灯があって真っ暗にならないことも、襲撃者を接近させない一つの要素かも知れぬ。だが、それだけでは大群が一カ所に集中する説明にはならない。だいいちパンタナールに電気が入ったのはごくごく最近で、それまで明りなどはないのだ。

これは筆者にとって永い間の疑問だったが、さきごろP・J・B・スレーターの『動物行動学入門』を読んでいたら、ツリスドリ（ジャプイーラ）が巨大なねぐらで夜を過ごすのは、このねぐらがコミュニケーションの場、つまり情報センターとして機能しているからだと書いてあったのにはびっくりした。

このトリ、昆虫や果物を餌にしているのだが、スズメ目のトリとしては柄が大きいから、かなりの量が必要。何千ものトリが同じ場所に行ったのでは、個体維持に必要な餌がとれない。

そこで小グループに分かれ、広い地域を分散して採取することになる。しかし、各グループによる運、不運があるから、充分餌にありつけたのと、そうでないグループが出るのはやむを得ない。

この差をなくすには、全群が夕方集合し、その日の情報を交換、次の日の各グループの行動予定を決めねばならない。小一時間はどやかましくさえずるのも、枝から枝へ移るのもそのための行動なのだそう

だ。

そう言われてみれば、あれはコミュニケーションなのだと納得できる。さすがに小鳥の行動とさえずりの研究で学位をとったスレークー博士はエソロジー（動物行動学）の専門家だ。

ところで、筆者が精神分析学者の岸田秀の理論に感心するのは、野生動物が本能の命ずるそのままに行動する生態を、筆者が永年フィールドで観察しているからなので、たしかに野生動物の行動は迷いがなく、安定しており、人格？　の分裂などは起きない。

そこへいくと人間は厄介だ。勝ち組、負け組の例に見たように、人間はいつ、何がきっかけで分裂を起こすかわからない。同じ開祖を奉ずる宗教でも一旦内部分裂すると、かっての仲間がそれこそ殺し合わんばかりに憎悪をむき出しにして敵対し、ののしり合う。

日蓮正宗にしても世界救世教にしても、その他の宗教にしても、こうした内訌は日常茶飯事。これがまた海外の、ブラジルの日系社会にそのまま持ち込まれ、同じ信徒同士が抗争し合う。

ブラジル日系社会の県人会だって同じこと。ただ、母県の県庁が補助金支給の都合上、一つの県人会しか認めないから、まだ収っているが、そのタガが外れればいくつかの分派に分かれてしまうのは、これ迄のお家騒動を見ても明らかではないか。傑作なのは趣味や同好の会にすぎぬ囲碁、民謡、歌謡などの世界もそれぞれに分裂して、お互い対抗意識をむき出しに張り合っていること。まあ、こんなのは大して実害はないから大いにおやりになったら良い。

岸田理論ではないが、結局なにかの共同体が成立するためには、そ

の共同体の成員が暗黙のうちに認める共同体幻想で統一される必要があるのだ。違う共同体幻想を持っている人間は、その異質さゆえに排除され、分裂せざるを得ない。

人間の進化が良かったのか悪かったのか、これはそうかんたんには決められぬ問題である。

V　伝統と包容力の間で

ブラジル赴任を渋った澤田大使

リオ在住の日本人長老から『澤田節蔵回想録』のうち、ブラジル時代を書いた「夜明け前の国ブラジル」のコピーが送られてきた。編者は澤田節蔵の五男澤田尋夫となっている。

なにしろコピーだけなのだから、この本の体裁がどんなのだか、出版社がどこなのか、どういう経緯で書かれたのか、今の段階ではわからない。澤田節蔵といえば戦前、一九三五年から一九三八年までブラジル大使をつとめた人。

戦後はサンパウロ市四百年祭やブラジル日本移民五十年祭式典に慶祝使節として来訪している。更に日伯中央協会や海外日系人連絡協会会長を永年つとめ、ブラジルとはきわめて縁が深かった。

一九七六年、九十二歳で亡くなる。節蔵、廉三、退蔵の有名な澤田三兄弟の長兄。国連大使をした澤田廉三夫人がエリザベス・サンダースホームの澤田美喜さん。

さて回想録だが、この三十五ページにわたるブラジル大使時代の記述は実に興味深く、おもしろい。あとでとり上げる、第二次世界大戦

開戦時のブラジル大使だった石射猪太郎の『外交官の一生』や『石射猪太郎日記』も資料的価値は高いが、澤田節蔵の回想録もすばらしく、甲乙つけがた。

こういう第一級の資料に出会うのはうれしいもので、それこそ欣喜雀躍という言葉を使いたくなる。すべてを紹介するわけにはいかぬが、興味のある部分やこれまで一般に知られなかった事柄なまず冒頭からしておもしろい。後には大のブラジルびいきになった澤田だが、最初ブラジル大使の話があった時は大いに不満で、大むくれにむくれるのである。ちょっと引用してみる。

「当時私は公使中の古参であり、日印交渉にあたっては大使待遇であったため、そろそろ本任大使としてどこかに派遣されるであろうと思っていたがまさかブラジルとは全く夢想だにしていなかった。当時わが外交は英米を中心として支那問題を主役に進められており、海外移住が国策だったとはいえ、その重要性は二次的であった。朝野の認識も頗る浅薄なブラジルはわが大使館所在地としては最も遠隔の地であり、そこに在勤することは配所に追放されて前途を塞がれるように思え、日印会商でも相当な成果を挙げたと自負していた私に対して何たる仕打ちかと憤慨した。行くとすれば四人の男の子の教育の都合もあって単身赴任のほかなく、この点からもおいそれと引き受ける気分にはなれなかった」

なかなか正直な感想である。エリート中のエリート外交官である澤田さんにしてみれば、ブラジル大使など左遷以外の何ものでもなく、鬼界島で配所の月を眺めた俊寛の心境になるのもやむを得ない。

それが、である。四年の任期を終えて帰朝するときは「一九三八年十一月下旬、去り難くもなっていたリオを離れ、北米経由日本に向かった」と本人が書いているように百八十度変化するのだからわからぬもの。実はこれが今も昔も変わらぬブラジルの良さというか魅力なので、出先公館の役人だろうが、進出企業の駐在員だろうが、はたまた一般の旅行者だろうが、最初はさっぱり乗り気でないくせに、一度くるとブラジルの魅力にとりつかれてしまうのである。

結局澤田さんは外務大臣広田弘毅の説得を容れ移民二分制限法など、日本移民排斥問題が起き、悪化を辿る日伯関係を修復のため、ブラジル大使就任を承諾するが、

「妻の覚悟もあり、ブラジルの仕事は気永に取り組んでうまくゆけばわが国民多数を救い、国益を増進させるのであるから、大臣その他の嘱望に応じることにした。インド行きのときほどではなかったが、相当悲壮な決意だった」と述べている。決して喜び勇んでの承諾ではなかった。澤田回想録にはところどころに（編注）があって、解説がついている。貴重な解説なのでこれも引用する。

「大村立三　日本の外交官三百人の人脈（一九七四年）　に次のような記述がある。『昭和になってからのブラジル大使を列挙すると、有吉明、林久治郎、澤田節蔵、桑島主計、石射猪太郎となる。

このうち有吉はその後初代中国大使になったが、現地軍の〝華北〟分離工作に反対して辞任。

林は〝柳条溝事件〟の際、奉天総領事として関東軍に対立。澤田は

国際連盟帝国事務局長として、これも軍を代弁した松岡首席全権の〝脱退論〟に最後まで反対した。石射は〝蘆溝橋事件〟に際会して広田外相の対中政策に反対。たしかにブラジルは南米の大国である。ゆるがせにできない相手国だった。だからこれら各氏のブラジル行きは、建前としては〝左遷〟ではなかった。だが、このような軍と対立した外交官たちの連続ブラジル大使を、単なる偶然とばかりみるわけにはいかない。』（一四四ページ）」

歴史のおもしろさはこういうところにもある。

つきに恵まれていた大使

現在、日本国政府は国連加盟の一八四カ国のうち一八一カ国に大使館を置き、大使を派遣している。（一九九三年十一月現在）ずいぶん大使の数も増えたものだが、これは独立国が急速に増加したことと、公使館制度をやめ、すべて大使館に昇格させたからである。澤田節蔵大使がブラジルに赴任した一九三五年当時、在外日本大使館はたった九カ国しかなかった。即ちイギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、ベルギー、トルコ、ブラジルである。

当然、大使も九人しかいないわけだが、大使にも暗黙の序列があって、だいたいこの順番になっていた。インド問題で実績を挙げた澤田さんがブラジル大使赴任を渋ったのも無理はない。

しかし、そうは言っても、この当時の特命全権大使はとんでもなく偉い人で、日本政府の代表であると同時に元首、つまり天皇の代理な

のである。

だからゼッツリオ・バルガス大統領に対する親任状奉呈式には、澤田大使は黒い毛織地に金糸の刺繍がやたらについた、重い大礼服に威儀を正して出席した。冷房設備のない時代、あの暑いリオ、それも一月に大礼服でカテテ宮に参内とは大変だと同情したくなる。記念写真を見ると、中央に金モールごてごての大礼服着用の澤田大使が坐り、右隣りに内山岩太郎参事官（前のサンパウロ総領事、後の神奈川県知事）、左隣りが後の三浦文夫書記官で、小峰俊一通訳官と田村景一官補も前列に坐っている。全員大礼服なのだが、身分、階等が下がるにつれて金モールが少なくなる。後列に立っている斎藤芳造書記生（後のレシフェ総領事）ら四人は金モールなし。

一九三五年一月から一九三八年十一月まで約四年在任した澤田大使は、結果的にはずいぶん多くの仕事をした。この点、二年後に赴任した石射大使が太平洋戦争開戦で何も出来なかったのと対照的。外交官にも運、不運がつきまとうのはやむを得ないが、澤田大使はついていた。

項目的に並べれば①日本経済使節団（平生釟三郎団長）の来訪。②答礼経済使節団（サルガード・フィーリョ団長）訪日。③日伯文化交流使節団の交換。④日伯間の電話開通。⑤日本の新聞社、通信社員の南米常駐。⑥対日感情好転への努力。などというところが主なもの。

澤田大使はエピソードや話題の豊富な人で、ブラジル在住中にもいろいろあるが、一般にあまり知られていないエピソードをいくつか紹介する。

実は昭和天皇は澤田節蔵をずっと以前から知っておられ、澤田自身の言葉を借りれば「陛下の皇太子時代から御懇情を忝うしていた」のである。これは大正十年（一九二一年）、昭和天皇が皇太子の時に欧州巡訪の際、澤田も随行の一員として供奉したことを指している。

さて、昭和九年十二月、澤田大使がブラジルに出発する数日前、陛下侍従甘露寺受長から澤田のもとに、陛下のところにお伺いできないかとの電話が入る。澤田は大使としての公式拝謁は既に済ませているのに何ごとならんと、宮中に参内する。

「陛下は極めて打ちとけられた御様子でまず私のブラジル赴任の心構えなどお尋ねになり、いろいろブラジルについてのお話があったが、そのとき、世界に約四百種の蜂雀（フランス語ではオワゾー・ムッシュというと附加えられた）がいるが、その一割はどの種類がブラジルにいる。極めて繊弱な小鳥なので、日本まで送り届けることは無理だが、せめて写真でも入手できたら送ってもらいたいというご注文があった。また皇后陛下からはアマゾンの熱帯魚エンジェル・フィッシュ数匹でも送るようにとのことであった。私は蜂雀やエンジェル・フィッシュのことなど何も知らなかったが、両陛下折角の思召なので、赴任のうえはブラジル人や在留日本人に相談して御用命を果たしたいと申上げておいた」

エンジェル・フィッシュはリオで容易に入手出来たので船便で送ったが、ハチドリ（現在蜂雀の語は使用しない）の方はそうはいかなかった。いや、写真だけならかんたんだが、サンパウロを公式訪問中、博物館で三十九種の見事なハチドリの剥製を見てしまった。

「たしかに陛下は写真でもとはいわれたが、現に蒐集されている剥製を見てしまっては、是非実物を集めて陛下に献上したいという希望が湧いてくるのだった」

もっともな心情である。その後、澤田大使はこの件をカンピーナス東山農場の山本喜誉司農場長に依頼する。山本は一年の時間をかけ、遂に三十六種のハチドリの剥製をつくり、澤田大使に届ける。「陛下のお喜びは格別で、その後私がお送りしたコーヒーの枯木に蜂雀を止まらせて、皇居内の陛下の御研究所入口にガラスケースに納めて置かれたということである」

この写真がバルガス大統領に渡るのだが、ハチドリのエピソード、意外に知られていない。山本さんが言わなかったのかも知れない。

植物標本喜ばれた昭和天皇

澤田節蔵は一九五一年から一九七五年まで、第四代の日伯中央協会（一九七二年から日本ブラジル中央協会と改称）の会長をつとめている。なんと在任二十四年で、歴代の会長では一番長い。

この間、サンパウロ市四百年祭や日本移民五十年祭などがあって、澤田と日系社会のリーダー、東山グループの山本喜誉司の関係は一層緊密化する。一九五三年、山本と南米銀行の宮坂国人は日伯中央協会の理事になってもいる。

したがって、ブラジルのハチドリの献上を受けた陛下がどれほど喜

ばれたかとか、ハチドリの写真をバルガス大統領に進呈して、リオの新聞で話題になったとかも、山本は澤田から聞いていたであろうし、別に澤田が陛下に献上したこけの話も聞いていたに違いない。

こけのエピソードというのはこうだ。澤田大使は在任中から、帰朝して陛下に献上するお土産の選定に心を配っていた。そこへ文化交流でブラジルに招いたカトリック教会の先覚者海軍少将山本信次郎や植物に詳しいベルギー人神父のすすめもあって、こけを献上することにきめる。

澤田はこれを元アルゼンチン公使で、当時海外興業の支店長をしていたサンパウロの宮腰千葉太に相談する。宮腰はこの蒐集をサンパウロで小さな研究所をもつ日本人に依頼する。蒐集は一年以上かかり、督促されてやっと澤田大使のリオ出発直前に届く。

「私はたかがこけのことだから小箱数個に包んでくれるのかと思っていたのだが、手許に届いた現物は三、四尺四方の大きさの木箱十五個もある大荷物である。いろいろの種類のこけをいったん乾燥し、順序よく整理、箱詰めしたものだそうで、この整備のために一年以上の日数を要したという。とにかくちょっとの思いつきから研究所の要員には大いに迷惑をかけることになったが、その労苦は多とせざるを得なかった」澤田は船ではるばる十五個の木箱を運ぶのだが、なんと横浜の税関でひっかかってしまう。こけ類は一切輸入禁止になっているので、いかに大使の携行荷物とはいえ、渡すわけにはいかないというのである。

澤田は、じつはあのこけは陛下に献上するつもりで遠路態々持ち

帰ったものだから、専門家に危険物質の有無を検査してもらい、問題がなければ通して欲しいと、外務省から大蔵省にかけ合い、その通りの検査をして無事宮中に運びこむ。

「その後陛下に拝謁御陪食頂戴の際、陛下から実に珍しい面白いものを遠路はるばる持ち帰ってくれて喜んでいるとの有難いお言葉があった。気温や湿度の関係上東京より那須のはうがいいので、少し隙はかかるが那須に持っていって調べたいと思っていると附け加えられた」長くなるので引用は省略するが、結局昭和天皇はこの時の植物標本を一つ残らず調べられたのである。最後にこれだけ引用しておく。

「御所を退出しようとしていたところ、たぶん入江侍従だったと思うが、陛下からねんきんをいただくからちょっと待ってくれという。どうして陛下から年金をいただくのだろうと思っていると、同侍従は小さいノートブックを持ってきた。私が陛下に献上したブラジルの粘菌を全部お調べになり、その結果を御研究所をして記録させられたノートの写しだった。これをあなたに渡してくれとの陛下の思召によりお渡ししますということだった。

ほとんど十年前に献上したささやかなものを陛下はお忘れにならず、一つも無駄にせず、凡て調べて喜んだよといわんばかりの忝ない思召と信じ、ご下賜下さったノートは今なお大切に保存している」

なかなか心あたたまるエピソード。ところが澤田回想録には蒐集を依頼した研究所の名前も、実際の蒐集に当たった研究所要員の名前もない。しかしこれは見当がつく。神屋信一の栗原自然科学研究所と若き日の植物学者、橋本梧郎。

橋本先生は健在でおられる。筆者は直ちに電話して確かめた。やはり間違いなかった。

「そう、たしかに僕だよ。栗原研究所は社団法人の形になっていてね。名前だけだけど宮腰さんが理事長になっていたんだ。それで僕に話があって、植物採取をして標本をつくったんだ。苔だけじゃないよ。シダなどの蘇類もあるし、地衣類、粘菌（変形菌）類やふつうの植物もあったね。ハチドリの巣と一匹だけだけど剥製もつけたな。粘菌採取はパラナのウライ迄行ったね。ずいぶん時間も手間もかかったよ。陛下に差し上げたのと同じ標本と献上品目録は今でも残っている。しかし知らなかったなあ、陛下がそれほど喜ばれたとはね。」

もっと早い時期に橋本先生に知らせれば良いのにとは思う。でもまあ良かった。澤田回想録が世に出たお陰で橋本作成の経緯も、昭和天皇が喜ばれたことも明らかにされたのだから。

戦後に生きた友好促進策

前回の連載を書いたあと、山縣建設の山縣富士男さんから『澤田節蔵回想録』をお借りした。筆者がこの本のうち、ブラジル大使時代のコピーしか持っていないことを知って貸して下さったのである。山縣三兄弟については回想録にも出ており、澤田さんとは旧知の間柄。この本は編者で澤田節蔵の五男尋夫氏から山縣さんに寄贈されたもの。

さて回想録だが、意外に古い発行で、一九八五年三月に出されてい

る。出版社は有斐閣。赤い外箱つきでハードカバーにグラシン紙がかかっている立派な装丁の本。価格は三八〇〇円とかなり高い。

筆者は改めて最初から読んだが、なるほどこういう回想録は、最初からきちんと読まないと、途中の部分読みではわからないことがいろいろ出てくることが良くわかった。

たしかに外交官は身分と任地と任期がはっきりしているから、あとでものを書く場合、時代区分がしやすい。とは言え、人間の生涯は連続しているのだし、思想やものの考え方もそれ迄の経験が影響している。従って前の部分を読まないと現在につながらない。

実はコピーで澤田節蔵のブラジル時代を読んだ時、ほんの僅かだが（あれっ……）という異和感を覚えたのだ。当然書くべき人名がなかったり、年月の記載が抜けていたり、それにこれは橋本先生に聞いてわかったことだが、例の陛下に献上した植物標本も、記述と事実が少し喰い違うのである。

この疑問、編者澤田尋夫の「はしがき」を読んだらたちどころに氷解した。こう書いてある。

「……父がいずれは回想録を書こうとして保存していた資料は、東京空襲時に焼失した。六十歳のときのことである。その後鎌倉に移り、昔のことは主として記憶に頼り、戦後のことについては手もとの記録を参照しながら書きためた手記がこの本に収められている……」

そういう事情なら細部が多少くい違うのはやむを得ない。公的な記録は外務省にも残っているだろうが、エピソードのようなものは、日記でも残っていない限り、正確を期すことがむずかしい。

ところで、澤田大使の外交目的はアメリカの影響で悪貨の一途を辿る日伯関係を修復し、両国の緊密化を促進することだった。澤田はこの目的達成のため、積極的、精力的に動く。

前にも少し触れたが、日伯相互の経済使節団、文化使節団の交流、両国への駐在武官の派遣、電話開設、日本の新聞社、通信社社員の南米常駐など、すべて日伯関係緊密化の方策なのである。

考古学者鳥居龍蔵、作家島崎藤村、画家有島生馬、オペラ歌手藤原義江らも招いた。藤原義江はリオのオペラハウスで公演、好評を博した。また澤田自身はプロテスタントだったが、美代子夫人が熱心なカトリック信者だった関係上、カトリックへの関心も深く、ニテロイのサレジオ学園を訪問して友好関係を深めたり、海軍少将でカトリック信者の山本信次郎を招き、各地で講演を行っている。

ブラジル側が答礼で派遣する経済使節団、文化使節団と言っても、ブラジルは今も昔も予算がないのだから、経費はすべて日本側が持つのだ。予算的にもかなりの金額になるのだが、澤田は迷いもためらいもなく日本負担をきめている。

これがあとで効いてくる。経済使節団長のサルガード・フィーリョ、文化使節団長リマ・シルバ夫妻、駐在武官リマ・フィゲレード、リオ医大教授グルノ・ローボ、コレイオ・ダ・マニャン新聞社主コンタ・レーゴなどの有力者が日本シンパになるのだ。

シンパといえばゼツリオ・バルガス大統領をはじめ、マセド・ソアレス外務大臣、ヅトラ陸軍大臣、ゴエス・モンテーロ参謀総長らもそう言えぬことはないが、この人たちは立場上、日本支持を表明するこ

とは出来なかった。それでも移民二分制限法の定員を超えて日本移民が入国できたのはこの人たちの暗黙の諒解と支持があったからなのである。澤田外交は派手さばないが、要所要所をきっちり抑えて徐々に成果を挙げるやり方で、地道だが無駄がない。残念ながら帰国後三年で日本開戦となったため、この時には澤田の努力は実らなかった。

澤田の播いた種が芽を出し、成長し実ってくるのはむしろ戦後で、戦後の日伯友好関係緊密化には澤田が大使時代に打った手が大きく貢献している。では澤田は排日機運の強いこの時代、どうしてこれだけ適確な手を打てたのだろうか。

それは澤田が一九二五年から二九年まで、ワシントンの大使館で参事官や代理大使を勤めたり、一九二九年から一年間、ニューヨーク総領事として、計五年アメリカに在任した結果なのである。

この時に澤田はアメリカの日本移民に対する差別や排日の実情を身をもって知り、対策を考えたが、アメリカではやれなかった。これをブラジルで応用したのである。

名文、石射大使のリオ描写

リオの景観の美しいことは誰でも知っているが、この美を称えた日本語の名文に出会ったことがないと思っていたら、これがあった。一九四〇年十一月、日米開戦の直前に駐ブラジル日本大使として赴任してきた石射猪太郎氏の文章である。

この人はやたらに詳しく日記をつける趣味があり、戦後の一九五〇

年、この日記をもとに『外交官の一生』という、すぐれた回顧録を出版した。これに出ている。少し長いが引用してみよう。

「千尺、二千尺と地を抜き海を抜いて、リオ湾を圧する雄渾怪異な大磐石の山々。それを背景にし、あるいは前景にして曲々湾々する長汀曲浦。そしてこれに沿って走る大路と高楼の櫛比するリオ、人口二百万の市街美。亭々たる椰子樹、鬱蒼たるマンゴーの並木。観点をかえるごとに、眼前のパノラマは刻々変転する。背後の群山の間からは、清例な渓流が潺湲と走り、遡れば直ちに深山幽谷の気が迫る。朝々暮々、雨によく晴れによく、もしそれ月明の下にひろがる一湾の風光に至っては恍として人を酔わしめねばやまない。

誰かリオの真面目を描き得る。美港メルボルンは未だ識らず、私の知る限り、サンフランシスコの市街美、ナポリの海岸美、ヨセミテの渓谷を総合して配するに、水明の海湾をもってしたのがリオだというの他ない。如此山水如此景観、君一遊看之。私は友人達への通信にそう書くのであった。

官邸は前面ボタフォゴ湾頭に聳える一千二百尺のポンデアスーカルと、これに林立する大山塊をいながらに展望し、裏側のベランダに座せば、キリストの巨像を二千四百尺の山頂に支えるコルコバドの絶壁が眉に迫る。時あってか雲霧が疾風のごとく襲い来たって、コルコバドとこれに続く山塊を埋め、またたちまちにして駆け去って行く。その刻々の変化は見れども飽かぬ眺めであった」

さすが東亜同文書院出身だけあって、漢文調の名調子は大したもの。どことなく尾崎紅葉の漢文体をほうふつさせる。

ところで、この石射猪太郎という外交官、東亜同文書院という、キャリア外交官になるには不利な学校を卒業しながら一念発起して、高文／外交官試験に合格した変り種。

吉林総領事、上海総領事、シャム公使、外務省東亜局長、オランダ公使を歴任、ブラジル大使で日米開戦を迎え、交換船で帰国後ビルマ大使となり、現地で敗戦を迎えたという経歴の持主。一九五四年に六十七歳で死去。詳細な日記に基づいて書かれた回想録『外交官の一生』は、資料としても一級なため、早くから関係者にはよく読まれたが、最近、中央公論社から『石射猪太郎日記』という豪華本も出版されている。

この日記の方はいたるところに伏字があり、読みづらいのだが、個人の意見や感想がストレートに出ていておもしろい。もちろんブラジル大使時代の詳細な日記も収録されている。

石射大使は歴代のブラジル大使の中で、唯一人、公式にも非公式にもサンパウロ州を訪問しなかった大使である。実は回想録によると、一九四一年三、四月ごろ、サンパウロ州公式訪問を計画していたのだが、既に日米間の雲行きが怪しくなっており、ブラジル外務省から公式訪問は控えて欲しいとの要請があったため中止を余儀なくされた。

石射大使の着任は一九四〇年十一月で、一九四二年七月、戦時国際法による交換船で帰国するまで一年九カ月の在任期間だったが、一九四二年一月二十八日に国交断絶の通告を受け、ブラジル政府の監視下におかれるのだから、事実上、日本大使としての仕事は何も出来なかった。こういう情勢では暇をもて余すらしく、日記ではひんぱんに

ガベアのゴルフ場通いで、憂さを晴らしている。

交換船グリップ・ホルム号は、アメリカから野村、来栖、若杉の大公使、中南米公使、公館館員、家族をのせて七月三日、リオに入港、リオから更に大使館、領事館員、家族及び民間人三百人が乗船した。回想録には「民間の帰国者を詮衡して、ブラジル政府との間に名簿を確定した。民間人といっても一般居留民は日本政府の命令で詮衡外に置かれた」と書いてある。

結局、石射大使も原サンパウロ総領事も、在留民には何のあいさつもなく帰ったが、これには残された移民もカチンときた。香山六郎は自分の回想録の中で次のように大いに皮肉っている。

「外交官連も大使も参事官も総領事も在伯日本移植民には一言のサヨナラも言わずに帰ってしまった。それを告げる機関がないのであったろうか。敵性国の新聞（伯字紙）にでも『在伯日本人よサラバ。平和の日まですこやかに暮らせよ』と別れの挨拶の広告位は外交的相談がつかなんだであろうか。（中略）我々は平素一面には天皇陛下の赤子だと認識を強いられながら、一面はいざとならばサヨナラも告げられずに棄民扱いをされたのだ」

まあ、正直言って、これが残された移民の偽らざる感情だろう。

大使の拒否で下船の移民

石射猪太郎大使は在任中サンパウロには来なかったから、リオ在住以外の日本人にはほとんどなじみがなかったが、一部の日本人移民に

は恨み骨髄というか、それこそ怨嗟の的になった人である。

しかし、石射氏本人はおそらく死ぬまでそれに気づかなかったと思われる。実は交換船グリップス・ホルム号で日本人移民四十人が帰国することになり、一旦は船に乗船しながら石射大使の峻拒にあい、遂に下船を余儀なくされた事件があったのだ。この話、詳しく書くと長くなるから要約する。一九四二年一月二十八日、ブラジルが日本に対して国交断絶の通告を発し、敵味方に分かれるようになると、いろいろな理由をデッチ上げられて検挙、拘束される日本人が多くなった。

検束された日本人はサンパウロのＤＯＰＳ（政治警察）に収容され、人数が多くなってからは移民収容所に移された。ただ、検束する理由らしい理由はないのだから、取調べはほとんどなかった。

この辺りはたいへんブラジル的である。ところが、一九四二年六月三十日にこの収容所に日本移民救済会の石原桂造が訪れ、まさに破天荒とも言うべきニュースを伝えたのだ。

それは日伯国交断絶後、日本移民の権益擁護の任に当たっているスペイン領事館がブラジル外務省と交渉し、四、五十名程度の枠で、日本移民を交換船にのせて帰国させるというのである。

夢寐にも日本を忘れられぬ日本人移民が狂喜したのは言うまでもない。ところが現実にはリオ出港迄に三日の余裕しかないのだから、多くの収容者は準備が間に合わず、諦めざるを得なかった。

結局、収容所組十七名、自由な一般移民二十三名、計四十名が家や家財を叩き売り、とるものもとりあえず、リオに駆けつけた。ブラジル側が用意した書類は「国外追放」で全員がこれに署名させられた。

日本移民がリオに駆けつけた時、交換船グリップス・ホルム号は既に接岸していた。以下の記述はパウリスタ新聞発行『コロニア五〇年の歩み』所収の「うらみの外交官交換船」「無残石射大使の乗船拒否にあう」からの抜すい。

「ところが、こうした喜びも束の間、みな下船を命じられたのである。命令したのは大使石射猪太郎だった。大使は帰国希望者の書類を調べさせた。するとそれは当局が各人の署名をとったのも道理、みな国外追放者となっていたのである。これを知った石射大使は『善良な日本人が国外追放される理由はない』と言い出したのである。そして帰国希望者に向い『君達も君達だ。なんぼブラジル語がわからないからといって、言われるままに国外追放の命令書に署名するとは何事か』と言葉も強く叱りつけた。国交断絶となって、大使としての権限はないとは言え、不法な国外追放は面目上認められないというのが大使の理由だった。

早尾は（註、早尾季鷹二等書記官、ブラジルに残留して日本移民の権益擁護の任に当たった）立場に窮したものの『みな帰国を望んで、家まで売払って来ている。たとえ名目は国外追放となっていても、本人の希望を叶えさせてやるべきではないか』と意見を出したが、大使はぜんぜん容れなかった。早尾ははかりかね『それでは四十数人の今後について責任を負いますか』と詰め寄ったが、石射大使はどうしても首をたてにふらなかった。こうなっては四十余人は下船する以外になかった」さて、この事件に関する石射猪太郎側の資料だが、『外交官の一生』ではまったく触れていない。しかし、日記の方には載って

いる。関連項目だけ抜き出してみよう。

七月二日　木

○伯側は罪もないのに捕らえた日本人四十名を今度の交換船で日本に送り帰へそうとしつつある。

何等の没常識ぞや、やる事なす事成って居ない。

七月三日　金

○午後三時半頃イクマラテーからの西大使（註、スペイン大使）の電話に接す、日く伯側はリスト以外の日本人四十人の乗船送還を主張して居るが如何にすべきやと、ＮＯと答える。

○夜カステロブランコ君来訪（註、ブラジル外務省日本担当官）、日本人四十人の収容方につき　再考して呉れと云ふ。之を拒絶す。船は其為めに本日は出帆せず。

七月四日　土

○正午頃船は沖繋りとなる。午後トパール西（註スペイン）参事官及カステロブランコ氏来船、　四十人の日本人は乗船せしめぬ事と決定し、船を出すと云ふ。

ということで、遂に日本移民の帰国はならなかった。早尾書記官の懇請、スペイン大使館、ブラジル外務省の要請をすべて拒否した大使の立場もわかるのだが、心情的にはひっかかる。

乗船を拒否された日本移民はリオの警察に留置され、ついで、イーリャ・フローレス島の抑留所に流され、中には二年近くも獄囚の憂き目を見た人もいたのである。

なかなかわからぬ事件の真相

歴史というものは厄介なもので、一方的立場でものごとを論じても、それが本当の事実かどうかの証明がむずかしい。

石射大使の日本移民乗船拒否の事件も、日系社会側にはいくつもの資料がある。特に既述したパウリスタ新聞の『コロニア五〇年の歩み』の記述は詳細にわたっており、資料価値は高い。

しかし、日系社会、つまり移民側の立場でこの事件をとり上げると、アンチ公館の〝恨み節〟になってしまう。これでは公正は期しがたい。だからこそ『石射猪太郎日記』の存在が貴重なのだ。

もちろん、日記を読んだからといって、石射大使の真意が直ちにわかるわけではない。が、少なくとも推理、推測する手がかりにはなる。

石射猪太郎が日記に書いているように、この事件のため、二千人を乗せたグリップス・ホルム号の出帆が一日遅れる。考えてみると、これは大変なことなのだ。この船は普通の船ではない。戦時国際法に基づく交換船であり、アフリカのロレンソマルケスで、英米の外交団と入れ替わるという、重大な任務を帯びた船で、タイムスケジュールはきっちり決まっているのである。

四十人の日本移民を乗せるか乗せないかは、まったく石射大使の一存にかかっていたわけだが、大使の態度は終始一貫〝ノー〟なのだ。迷いやためらいは微塵もなく、明快そのもの。乗せる気は毛頭ないのである。石射大使だってタテマエとホンネの使い分けは出来たはず。

「自分は断固反対した。しかしブラジル政府が勝手に乗せた。自分が気がついた時は、リオ出港後十時間をすぎていた」とでもすれば、日本政府に対する言い訳は立つ。

今となっては解明のしようもないのだが、「四、五十人の枠で日本移民を交換船で帰す」という、発想というか、案を誰が出したのか、非常に気になるところである。筆者の推理では、これは早尾書記官だと思う。実はサンパウロの移民収容所に検束されていた日本移民の多くは「大政翼賛会」のメンバーで、そのうちの十七名がリオに駆けつけている。石射大使はこの大政翼賛会の存在を知っており、かねてから苦々しく思っていたのだ。日記にそれが出ている。

六月二日（一九四二年）

○聖市発ニュースは日本人間に大政翼賛同志会なるものの存在が発見された。日本大使の黙認を得て成立した結社だと報じて居る、昨年の十、十一月頃我輩に趣旨書を送って来た会であろう

と思われる。そんな馬鹿なことはよせと早尾君をして戒告せしめた筈であったが、自ら自己破壊をやる日本人よ。

醒めた感想で、同情はまったくない。なるほどこれでは乗せてもらえないが、早尾書記官が既に半年以上も前から、大政翼賛会のメンバーとコンタクトをとっていたことがわかる。

おそらく早尾書記官が同情し、日本移民保護の任に当たるスペイン大使館、ブラジル外務省を動かして、国外追放という名目で帰国させようとしたのではあるまいか。そうでないと『コロニアの歩み』に出ている、早尾書記官の石射大使に対する懸命な懇請ぶりが理解できな

い。それに早尾書記官自体、石射大使から好感を持たれていなかった。これも日記に出ている。

六月二十三日

○夕方、白土、大谷両君の来訪を受く、早尾君残留に対する不安の為である。之を慰撫して帰す。

居留民との呼吸があふまいとは承知の上である。やむを得ない。自己修正にまかせる外無し。

（註）白土貫治は宝石商リオ日本人会のリーダー、大谷晃は横浜正金銀行リオ駐在員。

具体的な人の名を日記から引用するのはこわい。人の名誉を傷けるおそれがあるからだ。この場合日記が公刊されており、また関係者もすべて故人だからそのまま出した。

ところで、外交団の交換船による引き揚げがあった中で、現地採用でもない、本官の早尾季鷹二等書記官がどうしてブラジルに残留したのだろうか。これは永い間気にかかっていた。

そこで筆者は秋山桃水氏に聞いてみた。高等拓殖学校第一回生の秋山氏は、戦前現地採用でリオ大使館に勤務、交換船で日本に帰り、戦後は日伯中央協会に働いたのち、再渡伯、永らく東京銀行につとめた人。交換船で引き揚げた成人の中で、唯一人、ブラジルにいる人である。

秋山氏は「そりゃあ、奥さんがブラジル人だからね。テレゾポリスに家があったんだよ。自分から希望して残ったんじゃないかな」と答えた。なるほどものは聞いてみるものだ。

ついでに言うと、戦後日伯国交回復がない時代、サンパウロの在外事務所長として駐在した野崎正勝氏もこの当時、やはりリオ大使館に働き、石射大使の秘書官になった。石射大使に気に入られた人で、交換船で帰国後、ビルマ大使となった石射に同行、ビルマで敗戦を迎えている。

伝統文化に固執の客家人

サンパウロ市の東洋人街として知られるガルボンブエノに、小さな中国人経営のホテルがあって、この玄関の脇にホテルの看板とは違う「巴西客属崇正総会」の金看板がかかっている。

この看板がかかって、もう五、六年になるだろうか。巴西は中国語でブラジル、客属は客家（ハッカ）系中国人のこと。つまり、ブラジル客家人会の意味となる。

客家人というのは中国の一つのエスニック集団のこと。現在は四川、福建、広東などに多く住んでいるが、もともとこの地方にいた人間でないことは、よそ者を意味する客の字を使うことからも推察できる。かつては中原にいた漢民族なのだ。

客家人の人口は四千五百万人、うち五百万人が海外に居住している。海外華僑の総数は現在約三千万人と見積もられているから、客家人は華僑の六分の一を占めることになる。大きな数字だ。

昔から決して纏足をせず、女性もよく働き、自衛のために一族による集団住宅を築き、風俗、習慣に独自の文化を持ち、金銭感覚の鋭さ、

同族間の相互扶助精神の旺盛さで〝東洋のユダヤ〟と呼ばれる人達である。ブラジルの客属総会は会員も五千人と少なく、設立された歴史もごく新しいが、世界各地、とくに東南アジア地域の客属総会は規模も大きく、一大勢力を誇っている。一九七一年に香港で行われた第一回世界客属懇親大会には四九カ国から三千人が出席した。

サンパウロには客属総会のはかにも「巴西広東同郷総会会址」などというのもある。この看板を見た日系人は、日系社会における県人会のようなものだと解釈する人もいるが、沖縄県人会にはやや類似の性格が見られるものの、他の県人会には全くあてはまらない。

日系社会の県人会は、まあ、一世のためのサロンのようなもの。少なくとも戦前までは、同じ出身県の仲間が故郷を偲んで集まり、仲間だけに通じる方言でしゃべって郷愁をいやす懇親会にすぎなかった。ところが第二次世界大戦後、移住促進の必要に迫られた日本政府や各県の県庁は、移住先国に県人会のような組織があると何かと便利だということで、出先公館の肝入りもあって組織された会なのである。

県からの補助金で小さな県人会館をつくったり、県の補助金で運営しているところがほとんど。

いわば日本の県庁によってつくられた、官製の県人会で、大した仕事はないにしても、県との結びつきが強いのが特徴。

ここが客属総会をはじめとする華僑の組織と根本的に違うところ。華僑は故国中国の中央政府や地方政府の腐敗、堕落、苛政に耐えかねて、海外に新天地を求めたので、日本移民のように渡航費を支払ってもらったわけでも、会館建設に補助金をもらったわけでもないのであ

る。

だから初期の華僑の苦労は並大抵ではなかった。末期の清朝政府などは、ほとんど政府の体をなしていなかったから、本国政府の保護も、移住先国の保護も受けられなかった。

いくら中国人の数が多いと言っても、外国に行けば少数のエスニック集団でしかない。経済的に貧しく、身分的には最下層、しかも異文化の外国で華僑が暮らしていくためには仲間同士の団結と相互扶助という、伝統方式に頼らざるを得ず、またそれがもっとも有効な方法だった。

高木桂蔵著『客家中国の内なる異邦人』（講談社現代親書）は、客家についていろいろ興味のあることが書いてある。

「世界各地に散らばったとはいえ、客家人はどこにいようと、故郷がある中国大陸のことを忘れない」「何世になっても客家語を子に伝え、必要ならば、本国に帰して中国人としての教育を受けさせる。二世、三世になると日本語を話せなくなる日本移民とは対照的である。ペナンには明代に移住してから三百五十年を経ても今なお、中国語しか話さない人々がいるくらいである」

客家人が三百年以上外国にいても、自分達の言葉を忘れない、客家人としてのアイデンティティを失わないというのが、どの程度真実かは、正直言ってよくわからぬ。が、少なくとも日本人子弟より、はるかに伝統文化に固執し、言葉を守ろうと努力していることは疑いをいれない。

筆者は海外の日系人がどうしてあんなに早く、移住先の社会に埋没

するのかわからなかった。埋没で悪ければ同化（アシミレーション）と言いかえてもよい。

例えば十七世紀のはじめ、東南アジアには約二万人日本人が進出し、日本人町などつくって勢力を誇っていた。寛永の鎖国令で帰れなくなったのはやむを得ないのだが、一世の死後は急速に現地社会に埋没し、日本文化が消えてしまうのだ。

現在でもブラジルを含め、日本移民の子弟に急速な日本語離れの現象が起きている。日系子弟独特の現象らしいが、この原因は何なんだろうか。

原理、原則に欠ける日本人

日系人は容易に同化するなどと言えば「そんなバカな……」との反論がすぐ出るだろう。なにしろ一九二四年四月、ブラジル医学士院（ミゲール・コウト院長）は「日本人は絶対に同化しないので、ブラジルの構成分子として適当でない」と、結論を出したほどなのである。

〝硫黄のように溶けない〟というのが、この当時の日本人に対する評価だったのだ。実はこの評価、まったく正しい。一九二四年といえば、笠戸丸がブラジル移民第一陣を乗せてサントスに入港した一九〇八年から僅か十六年しか経っていないのだ。当然一世がほとんどだったし、二世はいても最年長が十六歳なのだから、発言力も影響力もあるわけがない。

日系移民社会ではなく、日本社会そのものだったのだ。ブラジル文化に対する理解も尊重もあったものではない。ただひたすら日本文化の中に生きようとし、まさにそのために同胞がエスニック，グループ（同族集団）を形成していた時代なのである。

ブラジル文化に同化しようなどとはユメ思っておらず、自分達の子弟がガイジンと結婚するというような驚天動地の出来事など起こり得ないと信じていた。別にエスノセントリズム（自民族中心主義）だったわけではない。単に異文化受容能力が皆無だっただけのこと。

しかし、年月が経てば一世と言えども、自分自身受容はしないにしても、異文化の価値や行動は認めるようになってくる。まして二世、三世、四世ともなれば、何の抵抗もなくホスト国、ブラジルの文化を身につけるのは当り前。この段階で非日系との通婚は珍しくなくなる。どうも日系人はひとたびエスニック・グループの紐帯というか、枠から外れると、急速にホスト文化に同化して非日系との通婚も増え、それが更に日系離れを加速するという、パターンを辿る傾向があるようだ。

客家人の例のように、三百年はどうか知らぬが、移住先で子弟が何代にもわたって客家語を語り継いでいるということは、とりも直さず、客家人は自分の属するエスニック・グループ内の族内婚が原則で、他民族、他国民とは通婚しないことを意味している。

そうでなければ、いくら客家人でも、言葉を含めた客家文化を何世代もにわたって継承するのはむずかしいし、客家人としてのアイデンティティも保てない。

とすると、一つのエスニック・グループと、他の異文化グループ間の通婚を抑止する、なんらかの要因があるはずである。まず考えられるのは宗教だろう。宗教の壁は相当なものだ。

日本人のように宗教的タブーを持たない国民にはわかりにくいかも知れぬが、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教にあっては、結婚は契約であり、契約は同一教徒以外には出来ないのである。改宗すればいいじゃないか、というのは宗教心を持たぬ日本人の言い分だが、そんな簡単なものではまた客家のように、集合住宅内に祖先の廟が祀ってあり、一族の参拝が義務づけられている場合も、よそものとの結婚はむずかしい。一族の長老の許可が出ない。

韓国、朝鮮の〝同姓は娶らず〟という、本質(本籍)内結婚のタブーも裏を返せば、自分の所属する民族が繁栄するための知恵で、異文化民族との結婚を奨励するものでは毛頭ない。

更に身分制度や人種差別が法的にはもちろん、社会的に確立しているところでは、身分を超えた結婚など出来ない。かつてドイツのヒットラーは、ユダヤ人との結婚を血の比率によってこと細かく法律で規制した。

とにかく、どこの国でも民族でも、結婚は「血縁」「地縁」の要素が大きいだけに、ルールやタブーがきちんときまっていて、そこからむやみに外れられない仕組みができている。いくら当人同士が好きだからと言っても、敵対するグループに娘を嫁にやることはあり得ないのだ。

こういう抑止力としての原理、原則やタブーが日本人にはほとんど

ないから、最初こそ異文化に
猛烈に抵抗するが、一旦異文化への異和感が消えると、たちまちホスト文化（ブラジルの場合はブラジル文化）への同化が生じ、非日系との通婚（インターマリッジ）も日常的になってしまう。
とまあ、以上は日本人の特性から見た展望だが、実は受け入れるホスト側のブラジルもまた、日本人に負けず劣らずの無原理、無原則なのだ。
アメリカにはＷＡＳＰ文化があって、底流では他民族との混血を頑として拒んでいるし、旧イギリス、オランダの植民地も人種差別が根強い。旧スペインの植民地は人種差別は稀薄だが、カトリックが強く、教徒同士でないと教会での結婚はできない。
そこへ行くとブラジルは融通無碍だから、いかようにもとりはからえる。なるほどこう見ると、日本人とブラジルは相性がよいのかも知れぬ。

〝父祖の地〟ではない新大陸

ブラジルに滞在した企業の駐在員やその家族で、ブラジルが好きになり、日本に帰国後も二年に一度ブラジルを訪れて永住権の切れないようにしている人を何人も知っている。
この人達、将来ブラジルに住みつくことはあるまいと自分で承知している。承知はしているが、なんとなく永住権を手放すのが惜しいのだそうだ。いや実は、駐在員に限らず、ブラジルに永く住んでいる、

一世を含めた日系人だって日本よりブラジルが住みやすいと思っている。

どんなにインフレがひどかろうと、あらゆる不正や汚職が横行しようと、治安が悪かろうと、そういうマイナス要因を差し引いてなおかつ魅力のある国がブラジルなのである。これはブラジルを知らない日本人に理解してもらうのがむずかしい。

日本とブラジルの比較で一番わかりやすい例はオリンピックの入場行進かも知れぬ。日本とかドイツの選手団はタテ、ヨコ一糸乱れず、幾何学模様で整然と行進する。見事なものだ。

その対極がブラジル選手団。幾何学模様どころか団子状で行進する。大きく手を振る選手、帽子を高々とかざす選手、列から勝手に飛び出して写真を撮る選手、とにかく行儀が悪い。しかしどちらがたのしそうかと言えば、これは断然ブラジルだろう。

このメタファー（隠喩）おわかりだろうか。日本には日常生活の隅々までいろいろな約束ごとやきまりがあって、これに従わなければならない。皆と同じようにすれば良いのだから楽といえば楽だが、これは日本人が同質だから出来ること。雑多な人種、民族、文化の寄り集まりのブラジルでできるはずがない。

筆者は一世だから、日本に行けば一応この場合はこうと、マニュアル通りに動くことはできる。

出来はするが、なんとも窮屈で、だんだん肩が凝ってくる。

日本の風習、慣例、しきたりにも良いところは沢山ある。繊細な心遣いはさすがに大したものと感心もする。が、永くいるといけない。

ひどく疲れてくるのだ。

これが二世以下の日系人となるとカルチュアー・ショックに陥る。ショックを緩和するためには仲間が集まった方がよい。というわけで出稼ぎ日系人が固まるのはある種自衛のためである。

その点、ブラジルで何年かを過ごした企業の駐在員や出先公館その他の役人及びその家族は、日本に帰っても空白期間が短いから、すんなり日本の生活に溶けこむことが出来る。それでもあの明るくて、開放的で、デタラメと言えるほど自由だったブラジルが懐かしく、忘れられないのだ。

現在、日本とブラジルの関係は良好である。だが、かつて日本が移住先国としてブラジルを選んだのは別に今日を見越したからではない。まったくの偶然で、排日機運の高まったアメリカが日本移民を受け入れなくなったから、受け入れてくれるブラジルを選んだだけのこと。結果においてはこれが良かった。

少しでもブラジルに住んだことのある日本人にとって、ブラジルは不思議に魅力のある国である。

一体なにが日本人を惹きつけるのだろうか。これはブラジルと日本の双方に理由があると思われる。

けっこう大事な問題なので、以下まじめに検討してみよう。

現在世界には民族対立が主要軸となる紛争、内戦、暴動、運動のたぐいは五十を超す。多いのは中東、アフリカ、旧ソ連、東欧、アジアで、少ないのは西欧、北米、ラテンアメリカ。ブラジルなどは後で述べるインジオ問題を除外すればまったくない。約六十カ国から種々雑

多な人種や民族が入りながら、何故民族紛争が起きないのだろうか。それは一言で言ってしまえばブラジルを含めた新大陸は、移民にとって〝父祖伝来の地〟ではないからである。

エスニック（民族）紛争には部族、宗教、言語、その他文化、人種の対立などがあるが、結局は分離独立を目指すにせよ、文化的自治を要求するにせよ、自分達だけのエスニシティ領域をつくりたいという、強烈な衝動に端を発している。言いかえれば「父祖伝来の地」「民族ゆかりの地」「民族発祥の地」などに対する愛着、執着なのである。ところが、十五世紀の終りから十六世紀のはじめにかけて「発見」された新大陸は、ネイティブ（土着）のインジオ以外のいかなる民族にとっても、はじめて見る文字通りの〝新天地〟だった。

この新天地に入ったヨーロッパの人間が土着民を追い払い、あるいは奴隷にして植民地をつくっていく。ポルトガルはブラジルを、スペインはブラジル以外のラテンアメリカ、イギリスはアメリカ、フランスは現カナダのケベックである。

いずれの植民地も一七七六年のアメリカを皮切りに次々と独立するが、アングロサクソン、プロテスタントのアメリカとラテン、カトリックの中南米諸国とでは、はじめから性格が違っていた。

杞憂だった日本人不同化論

いまでもブラジルの日系人は自分たち以外の非日系人をガイジン（外人）とかケトウ（毛唐）とか称する。さすがにケトウは少数派に

なり、年寄りの日本人ぐらいしか使わなくなった。

蔑称かどうかは別にして毛唐の本義はトウモロコシの褐色の毛（生薬名ではこれを南蛮毛という）で、十六世紀に日本に来ていたポルトガル人のことなのである。ガイジンの言葉も最初は抵抗があった。（自分の方がガイジンではないか）と思うからである。だが、大分あとになってからだが、この用法、考えかたによってはこれで間違っていないことに気がついた。

つまりこうだ。かつての日本移民の社会は、それこそサザエの殻の中に入ったような閉鎖的なエスニック（民族）社会だった。もちろん殻の中では日本の文化や精神や価値感のみが通用すること言うまでもない。そしてこの閉鎖社会を形成している日本人にとっては、この同胞社会、コロニア社会の仲間だけが内なる人、つまりナイジンなので、サザエの殻の外はすべてガイジンということになる。こう解釈すればガイジンという呼称は間違っていない。

それではブラジル以外に住んでいる日系人は自分達以外の非日系人をなんと呼んでいるのだろうか。南北アメリカだけの例だが、おもしろいことにはっきり二つの系列に分かれている。

ラテンアメリカはメキシコ、ペルー、ボリビア、パラグァイ、アルゼンチンにしろガイジンを用いる。一方、アメリカ、カナダの北アメリカ組は相手が白ければハクジン（白人）、黒ければコクジン（黒人）が断然主流。

ガイジンは自分達の仲間、つまりナイジンと区別する言葉で、個々の人種を言っているわけではない。しかし白人、黒人は明らかに人種

用語となる。北米はそれだけ人種を意識させられる国ということだろう。

新大陸の諸国家は、旧大陸の国家と異なり、人工的につくられた国である。いずれもヨーロッパから生まれた国家であることは共通しているが、アメリカとラテンアメリカではまったく事情が違うのだ。一番の違いはアメリカはヨーロッパの封建体制と見事に縁を切ったことである。神の前には万民が平等で法王も司教も神父も不要、国王、君主、領主、貴族とも無縁、ただひたすら自由、平等民主主義の理想を高く掲げた国なのである。一種の実験国家だ。

そしてこの理想の担い手が一六二〇年、メイフラワー号でアメリカに渡ったピルグリム・ファーザースを祖とする、ホワイト、アングロサクソン、プロテスタントのワスプだった。アメリカは良きにしろ悪しきにしろ、白人の国で、とくにワスプは「われこそはアメリカン」の意識を強烈に持っている。労働力の不足するアメリカでは黒人奴隷も大量に入ったし、後には各国移民も入ってくる。しかし、自由、平等、民主義の理想はワスプとせいぜいアングロサクソン系の人間のものであり、黒人系はもとより、アジア系、ラテン系の人間にはなかなか適用されない。

アメリカは皆でアメリカン・ドリームの実現を目指せる長所もあるが、一方ではピューリタリズムの潔癖性、狂信性、暴力性、残酷性も併せ持っている。何でも世界一でなければ承知できない国で、自分の覇権をおびやかされると徹底的に攻撃してくる。

戦前の日本も徹底的にやられた。一九〇五年のサンフランシスコで

の日本人学童の通学禁止にはじまり一九〇六年日本移民制限法、一九〇九年カリフォルニアでの排日法案の可決、一九二四年日本移民排斥法案成立と狙い射ちにやられた。

生地法を採用するアメリカでは日系二世はアメリカ人なのに、日系人であるというだけで土地の取得も認めなかった。こういう激しい人種差別はラテンアメリカ、とくにブラジルにはない。

だいいち旧宗主国のポルトガルがかつての栄光はどこへやら、没落の一途を辿って、ヨーロッパ辺境の一小国になってしまったし、もともとポルトガル人は雑種の国民で出自や毛並の良さを誇るわけにはいかないのだ。それに人口の少ないポルトガルは海外植民地の人口増加政策として、インジオや黒人女性にじゃんじゃん子供を生ませたから、基本的に人種差別が出来ないのである。

更にポルトガル人は十六世紀の時代から日本や中国と交渉があり、日本人女性の奴隷も相当数ポルトガル人に買われている。当然混血児が出てくることになるわけだが、このようにアジア人に対する異和感が歴史的にうすいのである。

第二次大戦前、ブラジルもアメリカの圧力で排日法案を可決する。アメリカと同じ「日本人不同化論」が唯一の論拠。たしかにこの時代まで、日本人は容易にサザエの殻から外に出ようとはしなかった。異文化の受容には多少の時間がかかるのはやむを得ない。今日の非日系との結婚の多さを見ればよく分かるが、不同化論は杞憂に終わったではないか。

あり得る日系社会の消滅

神戸の大地震はブラジルでも大々的にテレビや新聞で報道された。出稼ぎブラジル人にも死亡者が出たため、ブラジルにいる遺族や、神戸から帰ってきたブラジル人を詳しく取材し報道した。

ところがテレビで見ていると、死亡者の遺族も帰ってきた出稼者も、日系人と配偶関係にあるのだろうが、半分以上が非日系なのである。これには（日系社会もここまで来たか……）と、驚きを禁じ得なかった。まさに今昔の感である。

人種同化論に「坩堝論」というのがある。古めかしい言葉なのだが今もって使われている。当用漢字にあるわけじゃなし、坩堝の字が読める日本人がどのくらいいるのか知らぬ。だが原語がメルティング・ポットだから、坩堝以外に訳せないのだ。ブラジル語ならカジンニョ。

坩堝は溶解する磁器製（アルミナ、石英もある）の溶融器のこと。なんで坩堝などという大時代的な言葉が使われるのだろうと不思議だったが、調べたらこれがなかなか由緒ある言葉だった。

つまり一九〇八年、ザングビルというアメリカ人が「メルティング・ポット」というドラマを書き、人種の同化、融合をとり上げたのがはじまりなのである。

一九〇八年といえば笠戸丸移民がブラジルに着いた年。この時代からメルティング・ポットの言葉が使われているならやむを得ない。ミ

キサーの方がわかりやすいと思うが、この時代にミキサーはまだなかった。この坩堝論、主としてアメリカで流行した論で、「すべからく、後から来た各国移民は既にわが国に確立しているホスト文化に溶け込まねばならぬ」という人種同化論。ホスト文化は言わずと知れた、ワスプのアングルサクソン文化。

日本移民はこのメルティング・ポットをしても溶けないと、日本移民不同化論、黄禍論で徹底的にいじめられ、差別され、排斥されたことは歴史の事実が証明するところ。

坩堝論の次に出てくるのが第二次大戦後のサラダボウル論。これは多文化並存主義で、一つのボウル（鉢）の中にトマトもキュウリもレタスもジャガイモも卵もハムもあっていいではないか。それぞれの材料の持ち味を活かしながら全体として一つのサラダボウル（つまり国家）にして何が悪いという論。

これは説得力があるから、現在ではアメリカでもこの方が主流。学者によっては多文化主義を更に細分する人もいるが、ややこしくてかえって混乱する。

この二つの論、多民族国家融合のあり方を示す説としておもしろい。しかし、筆者は現在のブラジルはもう坩堝論もサラダボウル論も超え、新しい展開に入っていると考える。

人種、民族、エスニシティについては各国の社会学者がさまざまに論じている。それだけこの問題は大きくてむずかしいのだが、ことブラジルに関しては学者の理論より事実の方が先行している気がしてならない。日系社会における急速な混血化の進行などはその良い例であ

る。

非日系との通婚の多さは、異文化への相互受容、理解が進んだからである。だがこれにより日系社会は大きく変化する。日系人としてのエスニシティ（民族意識）がまったくなくなることはあるまいが、日系社会という現在の形でのエスニック社会の消滅は大いにあり得る。極論だと怒られるかも知れぬ。暴論だと謗られるかも知れぬ。異論、反論のあることも充分承知している。

しかし論より証拠、ブラジル日系社会のエスニック・バウンダリー（民族境界）はもうぼけて、境界不明なのである。不明になる強力な要因が非日系との通婚にあることは言うをまたない。

ブラジルはアメリカと違って強烈なホスト文化もないし、人種偏見や差別もないとは言えぬがアメリカと較べれば微弱、異分子に対する狂信的な弾圧もない。すべてナァナァで適当なのである。

だからと言ってエスニック社会が勝手なことをして良いわけではむろんない。法律やその他の規制に従うのは当然だし、公用語はポルトガル語で、これを学習するのは国民の義務。多くの民族がいるからと言って、独立運動や民族自治までは認められない。

だが、こういう基本的ルールを守っていれば、私的空間や領域で何語を話そうと、何語で考えようと勝手なのだ。宗教も自由、日系人が仏教や神道系宗教ばかりでなく、ユダヤ教やイスラム教を信じて一向に差し支えない。

自分のアイデンティティだって、かつての二世のように日系人で生きるべきかブラジル人として生きるべきかなどと、ハムレットばりに

思い悩む必要は毛頭ない。自分の思う通りでよいのだ。

他人種、他民族との恋愛も結婚も自由、食べものの好みやタブーも個人の問題で国が関知するわけではない。こんな国に住んでいれば、エスニック社会への帰属意識がなくなるのも無理からぬところである。

世界に冠たる差別国日本

第二次世界大戦中、アメリカ政府は多数の日系人を敵性国民としてキャンプ（強制収容所）に収容した。アメリカの日系人だけではなく、ペルーの日系有力者も家族ぐるみアメリカに連行され、キャンプに入れられた。国籍がアメリカ人だろうとペルー人だろうとおかまいなしである。むろんこの扱いは不当である。戦後永い間経ってから、日系人によって戦時中のキャンプ収容は違法であると政府の補償を求めて裁判が起こされた。

永い審理だったが、裁判所は訴えを正当と認め、一人当たり二万ドルの補償金支払いを命じた。

粘り強い運動が効を奏したわけだが、実はこの成果、日系人だけでは勝ちとれなかった。同じマイノリティ（少数民族集団）の黒人人権団体と共闘した結果なのである。

何度も言うようだが、アメリカは白人の国である。マジョリティ（多数勢力）は白人が握っている。人口の数だけではない。政治、経済、社会、文化のあらゆる面でマジョリティなのである。

アメリカではマイノリティ（少数民族）という言葉をよく使う。インディアン、アフリカ系、アジア系、ヒスパニック系、中東系、東欧系などのエスニック社会はすべてマイノリティだ。日系社会は優秀だから、とくにモデル・マイノリティなどと言ったりする。

これはブラジルでは考えられない。だいいち、マイノリティの言葉がない。いや言葉だけならメノリダーデがあるのだが、通常少数民族、人種の意味には用いない。アメリカ的なマイノリティの観念がないのだ。

アメリカ政府を訴えて補償を勝ちとった運動の推進団体は「日系市民協会」という日系アメリカ人の人権保護団体である。これもブラジルにはない。そんな団体をつくる必要がないのである。

ブラジルだって人種差別がまったくないわけではない。とくに黒人はその歴史的事情からしても差別の対象になりやすい。そのために人種差別に抗議する協会を持っている。しかし、ブラジルの差別は人種によるよりも経済格差に基づく階層差別の方が一般的である。

以上、アメリカとブラジルの比較を述べたが、実はアメリカより更に差別がひどいのが日本なのである。おそらく世界一だろう。そして困ったことに多くの日本人は差別していることを意識していない。

現在の日本は差別用語の規制があって、テレビや新聞はもとより、学校でも神経を尖らせて差別用語を使わないようにしている。メクラ、メッカチ、ツンボ、ビッコ、デブ、チビすべてだめ。この連載で用いた「やぶにらみ」もだめ。やぶにらみは斜視と言いかえるのかと聞いたら「うーん、斜視もちょっとね……」とのこと。それならいっ

そのこと「ロンドンとパリを同時に眺められる人」にしたらよい。女中、移民も「お手伝いさん」「移住者」と言いかえる。そんなに気を遣ってくれなくても移民は移民で結構ですよと言ってもだめなのだ。

まったくバカバカしいほどの〝言葉狩り〟である。いかにも日本が差別を廃し、平等、公正を期す努力をしているかに聞こえるが、とんでもない大ウソで事実はまったく逆なのである。そんなことはアイヌ民族差別、部落民差別、在日韓国、朝鮮人への差別の現在までの歴史を見れば一目瞭然ではないか。第二次大戦から既に五十年、日本で生れ、育ち、日本語を話し、日本文化を理解している何十万の在日韓国、朝鮮人をいまだに外国人としか認めないのだから、おそれ入った国である。

最近は外国からの労働者が入っているが、この出稼ぎも差別される。ブラジルをはじめとする南米各国の日系人はかなりの数になる。二世以下の日系人はもとよりだが、日本国籍を持つ日本人一世だってすんなりとは受け入れてくれない。一世移民も日本を離れて何十年も外国に暮らせば、かりに本人がいかに純粋に日本人であるとのアイデンティティを持っていても、永い間には移住先国の文化が身につくのはむしろ当然。それに何十年かのタイム・ラグ（時間の落差）もそうかんたんに埋められるものではあるまい。

出稼ぎ帰りの一世が憤慨していた。「どんなに気をつけていても、日本人との会話につい片言のブラジル語が入ってしまうんだ。すぐ訂正して言い直すのだが、『ふん、ブラ公が……』と軽蔑するんだよ」。「ブラ公」とはひどい言い方だが、案外言った本人はそれほど人を傷

つけたとは思っていないのに違いない。とにかく日本という国は、全部が全部とは言わぬが、総理大臣まで「アメリカは黒人とかヒスパニックがいるから……」などと神経を逆撫でにする発言を平気でする国なのである。だが、白人優先のアメリカ、オーストラリア、カナダでさえ、従来の同化強制主義から多文化並立主義に転換している。この国際化社会の時代に日本流の純血至上主義、異文化排斥主義、同質社会論などが、いつ迄も通用する道理がない。

氏神の守備範囲は日本だけ

一世移民が里帰りし、生れ故郷を訪れる場合、どういう立場、身分で行くかによって受け入れ方がまったく違う。一番良いのは金をしこたま持って故郷に錦を飾ること。これなら親戚にもよろこんで受け入れてもらえる。

しこたま持たなくても何十年ぶりかに日本に遊びに行き、故郷の親戚、旧友、知己に土産を配り、一席設けて懐旧談に花を咲かせるというのでもよい。逆にいけないのは出稼ぎに日本に行って、郷里を訪れること。

来られた親戚は恥ずかしくて隣り近所に合わす顔がない。餞別もらってブラジルに渡って何十年、偉くもならず、ゼニも儲けず、小遣い稼ぎに日本に出稼ぎに来るような人間に来られてはとんだ物わらいのタネ、迷惑この上ないということだ。

出稼ぎの一世も、この辺の呼吸は心得ているから郷里には帰らない

人が多い。が、中には懐かしさの余り郷里の親戚を訪ねて冷たく扱われ、もう二度と行くものかと憤慨する人もいるし、金をやるから二度と来てくれるなと言われた人もいる。

こういうところは昔も今もまったく変りない。室生犀星の詩「小景異情」「その二」に有名な一節がある。

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食になるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ
そのこころもて

遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや

この詩、大正二年（一九一三年）の発表だから今から八十年以上前の作品なのだが、現在でも移民の心には痛烈に身に染む。たとえ異土の乞食になっても帰ってはいけないんだという言葉の裏には、あのふるさとへ帰りたいという望郷の念が哀しいまでに籠められているからだ。

帰りたいのに帰れない。どうやらここらにも日本を解く鍵はありそうだ。犀星の言う異土は別に外国のことではなく、故郷以外の土地ということだ。日本人は明治になるまで、その土地に生れ、育ち、死ぬのが当然だった。代々の一所定住で、通婚圏もせいぜい歩いて行ける近隣の村ぐらいである。こういう環境では自分のムラに住む人達の仲間意識は非常に強くなり、ヨソモノは排除される。日本の田舎では小学校にしても青年団にしても、隣り村の学校や青年団とは仲が悪いのが一般的だった。

ムラにはムラの住民を守ってくれる氏神がおり、住民はひとしく同じ氏神の子なのである。氏子になりたくないとか、この氏神さんは嫌いだとかは認められない。そこで生れれば自動的に氏子になるのである。選択肢はない。

ところが、この氏神様は守備範囲がきまっていて、そのムラの住民しか守ってくれない。隣りムラはまた別の氏神様の勢力圏なのだ。かくて氏神、氏子を一つの単位とする地縁集団が出来上がる。

氏神はその土地の神だから、いくら氏子でもムラを出ていった人間までは面倒みきれない。というより、もともとムラに生涯定住するのが本来の姿なので、ムラを出るということは氏子をやめてヨソモノになることなのである。ヨソモノに氏神の恩恵が得られるわけがない。

従って一旦ムラを出たらなまなかのことで帰ってはいけないのである。帰るのが許されるのは錦衣帰郷で、金を儲けて帰り、留守をして氏子の義理を欠いたお詫びに氏神様や学校に大枚の寄進をするか、世

に知られた有名人になって、郷党の名声を高めた場合だろう。

この氏神、氏子の関係がムラの段階でなく、日本という国のレベルでも当てはまる。村々の氏神を束ねる氏神の大親分がいて、この大氏神が日本という国の面倒をみていると考えた方がわかりやすいかも知れぬ。大氏神も日本という土地の神様で、日本の外には恩恵は及ばない。

十六世紀に倭寇や傭兵でアジアに進出した日本人は寛永の鎖国令で帰れなくなったし、じゃがたらお春などの混血児は日本人の母親ともど海外追放される。難破してロシア領に漂着した大黒屋光太夫は十一年後に帰国は出来たが、江戸の薬草園に軟禁され、郷里に帰れなかった。

明治以後のからゆきさん、移民、出稼ぎで本人の意思であろうとなかろうと、日本から海外に出た人間は日本の氏子ではなくなり、ヨソモノになってしまうのだ。

日本人ではないとまでは言わないが、カッコ付きの「日本人」で、どちらかと言うとガイジンに近い存在。もう日本に帰ってもそうかんたんに同じ氏神を奉ずる氏子仲間には戻れないのである。

さすがに進出企業の駐在員や在外公館員にはそういう扱いではないが、これもきわどいところで、余り海外勤務が永いと帰国後よほどリハビリに励み、身についた異文化を洗いおとさないと、純然たる日本人には戻れない。こういう日本で難民の受け入れなど、ユメのまたユメ。実現するわけがない。

包容力の大きいブラジル

この前日本に行って、大阪で知人と一杯やった折、この知人が何故日本は外国人に門戸を開かないかを滔々とまくしたてた。アルコールが入っていたのでよく舌が回るという感じだったが、日本人の本音が出ているようでおもしろかった。もちろんこの知人が言っていることが日本の代表意見だなどと言うつもりはないが、少なくとも日本の平均的国民が持っている有力な意見というか、心情であることはたしか。実感が出ていたので彼の意見を大阪弁で紹介する。

「わしらな、なんでもかんでも外人に来てもろたら困るというとるんやないで。必要な人には来てもろて結構、観光にもどうぞお出でなさいと言うとるんや。せやけどな、外人がようけ移民やら難民やらでごちゃごちゃ入ってくるのはどう考えても困るんや。日本という国は伝統的に民族、言語、風俗、習慣、生活様式が同じの同質社会なんですわ。まあわしら日本人同士は同じ価値感を持つ親戚みたいなもんや。特殊社会言われればそやけどこれが日本社会の特徴やおまへんか。この特殊性、外人さんにはよう理解でけまへんで。こういう人に来てもろてもこっちも迷惑やし、日本文化のわからん外人さんかて住みにくいやろ。

それにあんた考えてみなはれ、こんな狭うて人口の多い日本に外人を受けいれる余地がありますかいな。そら難民は気の毒や思いまっせ。しかし日本へは無理でんな。そや、それこそ移民を受け入れてい

るアメリカとかブラジルに受け入れてもろたらええんや。カナダ、オーストラリアもありまっせ。こういう国は多民族国家で外人の受け入れに慣れてるし、それに国が広いがな。ま、日本も国際協力で応分の経済援助は必要と思いますがな」

この人の話を聞いているうちに、この考え方はかつての日本移民の考えと同じであることに気がついた。日本文化は特殊で外人にはわからないだろうし、こっちもブラジル文化などまっぴらだから日本人移民だけの社会をつくって固まろうという発想だ。日本に限らず、どこの国の移民も最初は事情がわからないから、エスニック社会を形成するものなのだが、日本移民の場合は度がすぎていて、やはり特殊な社会になった。日本人会をつくり、子弟に日本精神教育をし、自分達の農業協同組合を設立し、銀行や病院までつくって日本人が利用するのである。ブラジル側にすれば可愛気のない、異様な存在と映ったのも無理からぬところ。これでよく排斥されなかったものだ。

移民だけでなく、日本政府の機関もブラジルの法律を無視、日本流のやり方を採用した。現在の国際協力事業団の前身、移住事業団のそのまた前身の移住振興会社がブラジルに設立した二法人の不法行為がそれ。ただ悪意があったわけではない。日本政府一〇〇パーセント出資の移住振興会社は一九五五年、ブラジルにジャミック移植民有限会社とジェミス信用金融株式会社の二つの法人を設立する。

ジャミックは土地を買って移住地を造成し、日本移民に土地を分譲する不動産会社。ジェミスはその分譲地を購入する資金や営農資金を貸付ける金融会社である。この二つの会社、実はブラジル民法に抵触

する違法会社なのである。

それはそうだろう。銀行でもない、日本政府全額出資の会社がブラジルの銀行法や金融法規に関係なく、日本移民及びその子弟のみを対象に融資して、独自の返済方法や金利をきめるのだ。まさに逆差別である。またジャミックの土地購入と移住地造成も、ブラジル民法第十一条第二項に完全にひっかかる。

「外国政府及び外国政府が設立して運営したり、外国政府の公約性格を帯びた機関がブラジルに　おいて不動産取得およびブラジル政府が公的に収用する可能性のあるもの（註、設備、施設）を取得することはできない」

ジャミック、ジェミス二法人の違法性は日本とブラジルの関係者はどちらも最初から承知していた。さすがにブラジル側もこの問題を放置しておくことが出来ず、一九七九年十二月の第十三回日伯移住混合委員会で、二法人の活動停止と解散を要求、翌年正式に二法人は解散となる。

それにしても二十五年間、違法を承知で二法人の存在を黙認し続けたブラジルの対応ぶりには驚くほかない。これをブラジルの大らかさ、度量の広さと見るか、デタラメさのあらわれと見るかは　各人の自由だが、まず日本では絶対に考えられないことである。

筆者はこれをブラジルの包容力、受容力の大きさと見る。要するに懐が深いのである。違法といえば違法だが、別段悪いことじゃなし、まあいいではないかという感覚だ。

「でも法は法でっせ」大阪のおじさんならそう言うだろう。だが、こ

ういう融通無碍がなんとも言えぬブラジルの魅力なのだ。過去の日系社会、あまりにも日本感覚でありすぎた。ブラジルはもっと大雑把な国、そしてそれが良く似合っている。

解決策ないインジオ問題

これまで人種、民族、エスニシティ問題でアメリカや日本と比較していかにブラジルが大らかで、自由で、差別がないかを述べた。この大らかさが一度でもブラジルに住んだ日本人を惹きつけるのである。

しかし、ブラジルにも実は頭の痛い民族問題が存在するのだ。そう、先住民族のインジオ問題でこれはどうやって解決するかの基本的方針すらできていない。

インジオ問題がむずかしいのは、もともと新大陸はインジオ固有の土地であり、新大陸を「発見」したコロンブス以下の探検者や植民者は、インジオを征服、追放あるいは殺戮して土地を奪った侵略者であるという歴史的事実に由来する。これは実際その通りで隠すことも正当化することもできない。

北米のインディアンについては触れないが、中南米のインジオのうち、一番ひどい目に遭ったのはカリブ海諸島で環カリブ海地域の大陸沿岸に住んでいたインジオだろう。早い時期にスペインからの植民者が入ったため、苛酷な使役と疫病で十六世紀末にはもう絶滅してしまった。

同じくひどい目に遭っても、マヤ、アステカ、インカ系の高地イン

ジオは文明度も高く、人口も多く、国家的組織も持っていた。このためスペインに征服されても、植民地社会の底辺労働者に組み込まれ、結果としてインジオの命脈を保つことが出来た。

変ったところでは、パラグァイ国民の主流を形成するグワラニー族も生き延びる。百五十年にわたるイエズス会教化集落での共同生活と、後年はパラグァイ政府の採用した鎖国政策で外部の人間が入らず、離散が防げたからである。それにグワラニー族は低地インジオであっても、インカ系インジオの影響を受けており、文明度は高かった。

さて、グワラニー系以外のブラジルのインジオである。基本的にはカリブ系と同じ文化だが、労働の習慣はカリブ系より更になかった。豊かな食糧資源が労働を必要としないのである。当然奴隷には向かない。カリブ海諸島やブラジルは労働力をインジオからアフリカ黒人に切り替える。

ブラジルに現在まで曲りなりにもインジオが残ったのは、カリブの島と違いブラジルは土地が広大で、植民者も奥地に住むインジオの土地まで必要としなかったこと、及び現実にそんな奥地に入れなかった事情による。ただ、近くのインジオ、交通路にいるインジオはすべて消される。

カブラルがブラジルを発見した当時、ブラジルのインジオ人口は約二百万人と推定されている。

現在、一九九〇年の数字でブラジルのインジオは五百二十六地域、七九万三〇〇〇平方キロの広さに二十三万五千人が住んでいる。約二百

の部族に分かれ、百七十の異なった言語を持っている。

一口にインジオと言っても、文明人とまったく接触したことのない未開のインジオ（これは数としてはごく少ないが）から法的に認められた居住区域で、文明人同様に機械を用いて農業、林業を営むインジオまで、さまざまな段階がある。

ブラジル政府のインジオ保護財団（ＦＵＮＡＩ）は、①未開で全く保護されていない集団②言語系や人口推定がわかっているだけの集団③国民としての権利を有しない集団④限定された権利を持つ集団⑤公認された権利を持つ集団⑥ブラジル国民と全く変らぬ権利を持つ集団に分類している。

ブラジルのインジオ問題の調査はＣＥＤＩ（カトリック資料、情報センター）の報告が一番すぐれている。筆者が用いた数字や資料もＣＥＤＩが一九九一年に発行した『ブラジルのインジオ、一九八七年から九〇年までの出来ごと』からの引用である。

この本、五百九十二頁の大作で、四年間に発生した千百四十二件の事件、問題を、新聞報道や公的機関の発表、関係者へのインタビューをもとに、現在のインジオ問題を各地域、各部族ごとに取り上げた労作。二十五枚の地図と二百七十五枚の写真入り。インジオ問題に関心のある人には不可欠の資料。

だが、最初に述べたように、インジオ問題にはこれと言った解決策がない。不法なガリンペイロ（金密採鉱人）の保護地域侵入だけなら、軍隊を使って排除すればよいが、道路、鉄道、ダム、鉱山、農牧場開発によるインジオ居住地域への侵害は、国の開発だけにむずかしい問

題。

それに外的環境だけでなく、インジオ社会内部の進歩や変革の問題があるのだ。インジオは森の中に隔離しておけば良いという時代ではない。資本主義経済の波は確実にインジオ社会にも波及している。更にインジオ社会間の未開、文明の格差も大きい。

残念ながら未開部族は消滅する可能性が大きい。ＦＵＮＡＩ分類の⑤、⑥のインジオ集団は、ブラジルを構成する少数民族としては生き残れるだろうが、どこまで彼らの固有の文化を活かしていけるかば疑問。インジオ問題は差別のないブラジルのアキレス腱のようなものだ。

文化で異なる裸への評価

永年ブラジルに住んで、カッコ付きの「日本人」になった筆者は時折り日本に〝帰る〟が、逆カルチャーショックでどきっとさせられることがある。

ある時なにげなくテレビを見ていたら、温泉の場面が出てきた。なんでも過疎の村がムラ起こしのため、廃校になった小学校の分校を温泉宿にするという番組だった。話題そのものは別にどうってことはない。

（ありゃあー）と思ったのは男性が四、五人温泉に浸っているところに女性のインタビュアーが入って行ってマイクを突きつけ、裸の男に堂々と感想を聞いていたからだ。日本の銭湯や温泉に水着で入る人

間はいない。素っ裸にきまっている。こういう状況のところに女性が入って取材し、テレビで放映するのだからさすが日本である。

もう一つ例をあげる。場所は東京駅の公衆便所。筆者が用を足しに入ったら女の掃除婦が二人、モップの棒にもたれて大声で世間話をしていた。一瞬、女便所と間違えたのかなと思ったが、用を足しているのは男ばかり。(ああここは日本だったな)と妙なところで安心した。

この二つの例、日本の日本人には「それがどうした……」とけげんな顔をされる。別にどうもしないけれど、日本以外の外国、とりわけカトリックやイスラム教国ではまず起こり得ない。むろん文化の違いで、良い悪いの問題ではない。

『フロイスの日本覚書』松田毅一、E・ヨリッセン(中公新書)にも「ヨーロッパの女性はその(衣服の)袖が手首まで達する。日本の女性の場合、それが腕の半ばにしか達しない。そして腕や胸を露わにすることを不面目とはみなさない」とある。まったく、フロイス神父をリオの海岸に連れていってやりたいが、たしかにかつての日本人にとって、裸は恥の対象にはならなかった。

江戸時代の初期に活躍した久隅守景という絵かきがいて「夕顔棚納涼図」という、有名な二曲一双の屏風絵をかいた。吹けば飛びそうな茅屋のひさしから夕顔棚が張り出され、夕顔の実がいくつかなっている。その棚の下に一枚のムシロを敷いて中年の夫婦と男の子が夕涼みをしている絵。

左手の空には満月がかかっている。男はすけすけの短い嬬絆、女は二布(腰巻き)だけで上半身は裸。男の子が父親の尻あたりにちょこ

んと座っている。なんとも平和な風景。

この絵についてある日本の文学者がおもしろいことを書いていた。この絵の複製を日本の税関の入国審査所の壁にかけておくのだそうだ。そして絵を見て賛嘆の声をあげた人、はっとした表情を見せた人は、たとえ入国ビザを必要とする人でも無条件に入国を許可する。

もちろん冗談である。が、この絵はそのくらい日本人好みの、しっとりとした清涼感と安らぎ、清貧とつつましさがよくあらわれている。女房が裸でいることへの抵抗感、異和感はまったくない。この絵でもかちかちのカトリックやイスラム教の信者にはおそらく受け入れられまい。あるモロッコ人は日本の銭湯についてこういう発言をしている。

「離婚の原因は銭湯です。男女関係の乱れ、浮気にとてもよくない。人に裸をみせる。人間の恥ずかしさなくなる。とくに女性はよくありません。浴槽をつぶして、そのスペースにシャワーをつければよいのです」

こういう人に江戸の町では珍しくなかった入込み（混浴）湯の話を聞かせたら卒倒するかも知れない。なにしろ混浴の銭湯で見合いまでさせてしまうのだからすごい。

念のため湯屋で仲人見合させ

大丈夫入込みの湯でした見合

なるほどお互い素っ裸で見合いというのはしゃれている。仲人が保証するように案外うまく行くのかも知れぬ。それにしてもこの仲人、なかなかの苦労人、おそらく堅気ではあるまい。

裸といえばリオのカーニバルも裸で有名だが、敬虔なカトリック信者の中には苦々しく思っている人もいる。石黒マリーローズという、レバノン生まれで日本人と結婚している女性が書いている。

「……ところでカーニバルというとリオ・デ・ジャネイロのカーニバルを日本人は思い浮かべるのではないでしょうか。しかし、これは宗教的意味合いとは関係のない大げさなお祭騒ぎです。一九九二年のリオのカーニバルの際、教会は川に流すのに使われる五つの聖像の使用に反対しました。

裸とみだらで知られるリオのカーニバルをやめさせようとしています」『キリスト教文化の常識』

（講談社現代新書）

みだらと見るか女体美の躍動と見るかは、おのおの属する文化の価値感によって異なるからいちがいには言えない。カトリックを国教とするブラジルで、ああいう裸の大パレードがあるのはおかしいと言えばおかしいが、そこがブラジルのブラジルたるゆえん。

サッカーは自己存在の確認

この前、アメリカでサッカーのワールドカップが行われている間、日本にいたことがある。昨今の日本のサッカー熱も大変なもの。時差の関係で明け方という具合の悪い時間帯にも拘らず、ＮＨＫの衛星放送は生中継を続けたし、ブラジル、イタリアの決勝戦は総合テレビでも中継した。

筆者は別にサッカーファンではない。試合を見に競技場に行ったことは皆無、もっぱらテレビによる観戦だけなのだが、それでも永らくブラジルに住んでいるとなんとなくサッカーの見方がわかってくる。

ゴールのコの字形のネット近くのゴールエリアやペナルティエリアをコジンニャ（台所）と呼ぶことやゴールに近付いて理想的な態勢になり、今まさにシュートとなる状況を「ピンタンド、ピンタンド」（出るよ、出るよ）と呼ぶことも知るようになる。また相手のディフェンスを右に左にフェイント（幻惑）しながらドリブルで躱していくことをオーレと言い、これは闘牛士が牛の突進を赤いムレクで左右に巧みに捌く時の観衆のかけ声からきていることもわかるようになる。

さて、日本でサッカーの生中継を見ていてどうにも異和感を覚えてやり切れないないのが、日本語の実況アナウンスで、これは正直がっかりする。「シュートお……！」「入ったア……！」と興奮したアナウンサーが絶叫すると途端に興醒めする。

筆者の場合、たかがシロウトのテレビ観戦にすぎないが、どうもブラジルと日本では違う。いや、技術を論ずるほど当方に専門知識はない。そうではなくて、なんと言うか雰囲気が違うのだ。

ブラジルから日本のJリーグに行っているブラジルの選手は多いが、その一人が言っていた。

「日本はいいよ、勝っても負けても声援してくれるのだから」。なかなか含みのある言い方である。

まず、日本では一般観客の批評眼のレベルが低いから、少々手抜きをしても非難されない安心感がある。ブラジルではそうはいかない。

テレビで観戦している老若男女の一人ひとりが的確に批評する目を持っている。手抜きでごまかされるほど観客は甘くない。試合の評は翌日の新聞に各選手別に十点満点の採点がコメント付きで発表される。「選手A、二点、最悪、いない方がまし」という具合だ。過去にどんな実績があろうが、大スターだろうが悪いものは悪いと遠慮会釈ない。応援団だって黙っちゃいない。ブーイングで済めばいい方、グランドにぽんぽん物が投げつけられる。

また、日本の場合、応援はひとつのファッションで、タレント選手の一挙手、一投足に狂喜するだけで、勝ち負けは二の次なのだが、ブラジルのファンにとってはサッカーは自分のアイデンティティ(自己存在証明）を確立、確認するためのものなのである。

コリンチアーノはコリンチャンスの、パルメレンセはパルメイラスのファンとしてのアイデンティティを確認するのがサッカーの試合なのである。これが国を代表するワールドカップともなれば、ブラジル人としての自己確認の試合になってくる。

だから優勝でもしようものなら国を挙げて狂喜乱舞の大騒ぎ、死人や怪我人も出るし、何日かは国全体が休日、というよりこの場合は祭日がふさわしい、になってしまう。

経済大国で文化先進国の日本は、世界に誇れるものをいくつも持っているから、サッカーの試合に自分や自国の存在証明を賭ける必要はない。しかしラテンアメリカのように貧しく、政情不安で、大多数の国民が富の偏在に苦しめられているところでは、サッカーの試合こそが、自己の存在を証明する唯一のチャンスなのである。

あの「ゴォォォォ……ル！」の叫びは自己のアイデンティティを証明し得た歓喜の絶叫でもあるのだ。もちろんワールドカップで勝つことは自国の存在証明が確認されたことなのだから、これにまさるよろこびはない。

ブラジルが優勝した時、群馬県や愛知県など、比較的日系ブラジル人が集団で出稼ぎに行っている地方で、日系ブラジル人が狂喜し、サンバを踊って大騒ぎした。

ブラジル人の感覚からしたら当然で、しかもふだんは弱者に属し、抑圧されている出稼ぎ者にとっては、自分達がブラジル人であることを確認する最高、最大のチャンスだったのである。

だが、周囲の日本人の反響は冷たかった。付近の住民は日系人の騒ぎを「非常識な」「不謹慎な」「近所迷惑な」と非難したのである。これは筆者が日本に滞在中に新聞に載っていたことである。

まあ、日本の日本人にはわからないかも知れぬ。

終戦後間もなく、ブラジルに古橋、橋爪らの水泳使節団が来て、この〝フジヤマのトビウオ〟達が外国選手を片っ端から打ち破り、勝利を収めた時、一世移民が涙を流して狂喜した心情と同じだが……。特別のはからいで掲揚を許された日の丸に感動して泣いたのも同じ日本人なのだが……。

歴史の皮肉、日系人の同化

いろいろブラジルについて書いてみたが、どうもブラジルはとらえどころのない国である。まるで雲だ。外から見ると形はあるのだが、中に入ると漠として実体がつかめない。まあ、こういう国なのだから仕方がない。

日伯修好百周年記念祭のタイムスケジュールが迫ってきたのにブラジル政府側が一向に腰をあげず、有力誌『ページャ』が「なにをしている」と噛みついていたが、いつものことなのだからそうカリカリしなくてもよい。

時がくればそれこそケブラガーリョ（間に合わせ）でなんとか格好をつけるにきまっている。もともとブラジル人は一年先のスケジュールに合わせて準備するような器用さは持ち合わせていない。

しかしユニークな国であることはたしかだ。良いにしろ悪いにしろ、現在こういうブラジルが存在しているということは過去の歴史と風土の産物であることは間違いない。インジオだけしかいないこの広大な土地にポルトガル人が入り、黒人奴隷を入れ、一八二一年の独立以降は各国からの移民も入り、人種や民族が混じり合い、文化も複雑にからみ合って現在のブラジルが出来たのである。

ブラジルは移民でつくられた国である。移民は本質的に金儲けを志向する。とすると三段論法ではないがブラジルという国はカネ万能の金権体質の国ということになる。事実その通りで、ブラジルに清貧などという言葉はない。すべての道は金儲けにつながらなくてはならない。

ブラジルで金儲けをする近道は政治家になることかも知れぬ。日本だってほかの国だって結果においては収賄したり、あらゆる不正で蓄財する政治家がいるのだから同じようなものだが、はじめから金儲けを目的に政治家になるわけではない。筆者はかねがね思っているのだが、ブラジルの政治家に西郷隆盛の『西郷南洲遺訓』をほん訳して見せたらどういう反応を示すだろうか。

「廟堂に立ちて大政をなすは天道を行うものなれば、いささかなりとも私をはさみては済まぬものなり」「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、しまつに困るものなり。このしまつに困る人ならでは艱難を共にして国家の大業を成し得られぬなり」「万民の上に位する者、己れを慎み、品行を正しくし、驕奢をいさめ、節倹をつとめ、職事に勤労して人民の標準となり、下民その勤労を気の毒に思うようならでは政令は行われがたし」

おそらくびっくりするか、笑い出すかのどちらかだろう。そして「これパロディ（もじり）だろ、だって政治家になるのは金を儲けて栄耀栄華をしたいからなんだから」と言うかも知れぬ。

発想がちがうのだからやむを得ない。役人だって〝貪官汚吏〟の言葉はない。役得は不正のうちに入らぬからだ。ただ、ほどほどにうまくやらねばならない。露骨にやればコーロル元大統領やＰＣファリアスのように追放されたり逮捕されたりする。

ブラジルの日本人あるいは日系人は日本的な倫理観、道徳観をもっているからそんなことはない、という論はもはや通用しない。そういう倫理、道徳観があればコチア産業組合が最後に露呈した金銭がらみ

のスキャンダルなど起きはしない。コチア産組のような日本的な組合でさえ、容易にブラジル化してしまうのだ。

ブラジルは人種や民族を差別しないし、各民族の固有文化を排除したり拒否することがない。かんたんに言えばなんでもいいよということで、差別にもとづくテンション（緊張）がない。

例えばウンドーカイ（運動会）もハナマツリ（花祭り）もタナバタ（七夕）も年末のモチツキ（餅搗き）も、いつの間にかちゃんとブラジルの市民権を得て、非日系人がよろこんで参加している。モチツキなどはサンパウロ州知事や市長がハッピを着て餅を搗く。

おそらくブラジルは世界でもっとも異文化や多様性にたいする包容力のある国だろう。一般的に言えばこれは良いことにきまっている。ところがエスニック（民族）社会を維持してゆく上には困ったことなのである。

重大事件を担当しただけで日系判事がいやがらせを受けるアメリカでは、人種差別にもとづくテンションがあるから、マイノリティー（少数集団）としてのエスニック社会は団結せざるを得ない。

まったく皮肉なことである。上から強圧的に同化を強制したアメリカでエスニック社会が残り、どうでもいいよと放任のブラジルでかえって同化が進むのである。「北風と太陽」のはなしではないが、ほんわかと暖かい太陽の下では重い民族衣装を無理に身にまとう必要がないのだ。

これから先の日系社会がどうなるか。確実に言えるのはブラジルへの同化が一層進むことと、日本語を母語とする一世がいなくなった時

点、日本語新聞がなくなった時点で、従来の形の日系社会は終わりをつげるだろうということである。その日は目前に迫っている。

あとがき

ほんとうはもっと書くつもりだったが、日伯修好百周年記念事業の一つとして人文科学研究所がつくる論文集の一部が筆者に割り当てられており、これをこなさなくてはならない。両方やれば良いじゃないかと言われたが、両方一度にやるだけの知力も体力もない。それにメシの食い上げになる。日系社会で新聞、雑誌の記者は別にして、モノを書いてメシを食える道理がない。論文を書き終えてまだ余力が残っていたら続きを書いてよいと思っている。

今回、筆者ははじめて終戦をめぐる日系社会の勝ち負け抗争に触れてみた。ある程度反響が予測できるだけに書くのは気が重かった。しかし、そうやっていつ迄も逃げ腰になってばかりはいられない。もう日本語で残す資料はタイムリミットが迫っており、今書かねば機を逸してしまうのである。

そう思って書いたのだが、予想通り反応があった。筆者に会いに来たり、電話をかけてきた人はちょうど二十人あった。十五人がいわゆ

る勝ち組、五人が負け組である。やはりこの事件は日系社会の歴史上最大の事件で、その影響はいまだに尾をひいている。決して過去の忘れられた事件では反論の出ることは当然予想していたが、筆者にコンタクトしてきた二十人の中には論と呼べるようなものを持っている人はいなかった。筆者はこの事件、こういう見方も出来るのだ、こういう解釈も成り立つのだということを示したかったのである。この問題、もっと多くの解釈が出されてもよいと思う。

またこの連載（「サンパウロ新聞」）では澤田節蔵、石射猪太郎二人の元ブラジル大使の回想録も資料に使った。本文中にも書いたことだが、ブラジルの出来事、日系社会で起きた事件だからと言って、ブラジル側、日系社会側の資料に頼っていると、どうしても偏見に陥りやすいのである。

悲憤慷慨調の〝アンチ公館恨み節〟は、一世移民の心情には受けるかも知れぬが、問題の本質を知るには役立たないし、だいいち公正でない。

澤田大使も石射大使もそう古い時代の人ではないから、個人的に面識があったり、知己だったりした人が日系社会に現存している。こういう人達に資料を見せてもらったり、わからなかったことをご教示願ったり、誤りを訂正していただいた。

『澤田節蔵回想録』のコピーを送って下さったリオの小野秀夫氏、回想録の本を貸して下さった山県富士男氏、昭和天皇に献上する植物標本をつくった橋本梧郎氏、石射大使や当時の大使館について教えていただいた秋山桃水氏、野崎正勝と尾崎龍夫を混同した誤りを指摘し

ていただいた秋山氏とベレン在住の大嶽一氏などに感謝したい。

こういう資料や情報の提供、誤りの指摘が直ちになされるところが、同じブラジルの日系社会という〝場〟を共有している強味で、これはまったく書き手の冥利につきる。

一つだけ具体的な例をあげよう。澤田大使はカトリック信者の山本信次郎海軍少将を招いて、各地で講演してもらっている。澤田さんと山本さんがどういう関係なのかもわからぬし、各地で講演と言っても山本さんがブラジル語で話したとも思えないし、さりとてむずかしい宗教用語を通訳できる通訳官がいたとも思えぬ。どうしたんだろうと疑問だった。

この疑問、旧知の清本徹己氏がいとも明快に解いてくれた。澤田さんと山本さんが親しいのは、大正十年（一九二一年）、皇太子時代の昭和天皇がヨーロッパ巡訪した際、二人とも一緒に随行した仲なのである。また山本さんはフランス系の暁星中学出身で、フランス語の達人、ブラジルでの講演はフランス語で行われた。当時ブラジル上流階層の第一外国語はフランス語だった。

清本氏は暁星と同系統の長崎海星中学二年の時に学校で、欧州巡訪に随行した山本信次郎大佐（当時）の講演会を聞いている。日系社会にも探すといろいろな人がいるもの。ただ今は少なくなった。

ところで本書のような表現形式はどういうジャンルに属すのだろうか。論文でも紀行文でもエッセイでもルポルタージェンでもない。まあ数回ずつ独立しているからそれだけ取り上げればエッセイもルポもあるし、手を加えれば論文にも紀行文にもなる部分はある。

これは前作の「ブラジル学への挑戦」(『ブラジル学入門』と改題して無明舎出版より刊行)も同様なのだが、筆者としてはあくまでブラジルを解説、説明、報告しているつもりなのである。これを英語でブリーフィングというから、ちょっと気取って「ブラジル・ブリーフィング」と言ってよいかも知れぬ。

「動物や植物の記述などは余計なことではないか」との指摘を受けたこともある。だが、ブラジルの風土に存在している生きものはなにも人間だけではない。あらゆる生物が自然の条件に適応して生活しており、それが相互に複雑に関係し合っている。もちろん人間とも密接に繋っているのだから、ブラジルの風土に視点をおいた場合、人間以外の生物も無視するわけにはいかない。

個人的な関心や趣味だといわれればそれまでだが、生物がいかに外的環境に適応して種の保存をはかっているか、実際フィールドで観察するとその霊妙さにつくづく関心するばかり。

ともあれ、この連載がブラジルを理解するために少しでもお役に立つのであればこれに過ぎたるよろこびはない。

出版はまたまた無明舎出版の安倍甲氏にお願いした。記して感謝する次第。

著者略歴

中隅　哲郎（なかすみ　てつお）

１９３６（昭和１１）年東京都に生まれる。明治大学政経学部卒業。１９５９（昭和３４）年渡伯。以来、新聞記者、商事会社勤務を経て、現在は㈱ウニベルツール顧問、ブラジル生薬研究所代表。

著作に「ブラジルの経済生薬」「ブラジルの民間薬」「アマゾン学のすゝめ」「ブラジルのたべもの考」（以上「サンパウロ新聞」掲載）。研究論文に「パンタナールの動物分類」「ブラジルの民族構成とその文化的影響」「イスラムとブラジル」などがある。著書に『パンタナール』『ブラジル学入門』（共に無明舎出版）。

ブラジル観察学

定価二八〇〇円

一九九五年九月三十日　初版発行

著　者　中　隅　哲　郎

発行者　安　倍　甲

発行所　㈲無明舎出版

秋田市広面字川崎一一二一一

振　替／〇二五七〇―五―四四八七

電　話／（〇一八八）三二―五六八〇

ＦＡＸ／（〇一八八）三二―五一三七

印刷　株式会社熊谷印刷

製本　時田製本株式会社

◎Ｔｅｔｓｕｏ　Ｎａｋａｓｕｍｉ

（検印廃止）落丁・乱丁本はお取り替えいたします。